

2022（令和4）年度

2022（令和4）年4月1日から2023（令和5）年3月31日まで

知識集約型社会を支える人材育成事業

—新時代の地域のあり方を構想する
地域戦略人材育成事業—

成果報告書



大正大学

スガモで育む日本の未来。

目次

巻頭序言	1
1. 基本情報	
(1) 申請の概要	3
(2) 事業の概要	17
(3) 事業の成果	27
2. 事業の報告	
(1) 新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業	36
(2) データサイエンス教育	74
(3) クロスディシプリン（学融合）教育	165
(4) アントレプレナーシップ育成教育	177
(5) 学修支援・学びのコミュニティ	206
(6) 日経地方創生フォーラム	210
終わりに	215

巻頭序言



大正大学 学長
高橋 秀裕

平素より本学の教育、研究に対してご理解とご支援をいただき、誠にありがとうございます。心から感謝申し上げます。令和4年度の教育活動については、新型コロナウイルス感染防止対策を徹底した上で、原則、対面授業を実施しています。その際、授業内容により高い教育効果があると判断される一部の科目、あるいは履修者数の多い科目についてはオンデマンド配信を活用しています。

さて、知識集約型社会を支える人材育成事業の本学のテーマである「新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業」については、採択されてから3年目を迎えています。全学的に本事業に対する教職員の共通認識も、初年度に比べより深まってきたという実感があります。まだまだ達成あるいは遂行すべき課題はたくさんありますが、コロナ禍の影響を受けながらもほぼ順調に進んでいます。

本学は、Society5.0の到来とともに変動の激しい社会に向けて、コミュニケーションを基盤とした交渉力、数理教育の充実により実践的な学びの環境を整えてきました。しかし、育成すべき人材像に焦点を当てた、フィールドワークや実習等も含めたカリキュラム構築と、それを推進あるいはサポートするための組織・人材の担保が課題となっておりました。それらを背景として、本学の目指すべき新時代の人材像を「地域戦略人材」と呼び、これを「多面的な性質を持つ地域の課題達成、あるいは問題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダー」と定義しました。

この地域戦略人材の育成のために、教育課程の改編（第Ⅰ類共通教育科目、第Ⅱ類専門科目、第Ⅲ類アントレプレナーシップ育成科目）及び、側面的な支援（IRやFD）、そして各組織の改革や人材の育成・確保等を推進する本事業の取組みが始まったわけです。2026年に迎える創立100周年に向けて、本事業をいわば羅針盤として大学教育改革をさらに推進していく考えです。

事業の取組みとして、初年度は、学融合を意識しながら、統合型の教養教育である共通教育科目、チュートリアル教育、そしてデータサイエンス教育を導入しました。本学特有のチュートリアル教育を基にして、人間、社会、自然をテーマとした探究科目やデータサイエンスを学ぶ中で、生涯、学び続けるための「学びの仕方」を学びます。2年次以降は専門教育科目のほかに、クロスディシプリンと呼んでいる学融合教育を実施し、最終的にはアントレプレナーシップ育成プログラムの履修につなげ、その流れで学生が地域戦略人材に成長して欲しいと考えています。

データサイエンスの学びにおいては、データを基に考え行動する力を育むことで、今まで気付かなかった社会の姿が見えてきたり、新時代を支える自らの役割を自覚したりすることにもつながります。本学のデータサイエンス教育プログラムは、先導的で独自の工夫、特色を有するものとして、令和4年度文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）プラス」に認定されました。

そして、地域貢献・社会連携として、すがも街なかキャンパスも本格的に展開しています。アントレプレナ

ーシップ育成教育については、基礎科目である講義科目とプレプログラムとして学生を主体にした取組みが展開され、マスコミや様々なメディアでも取り上げられており、教育・社会連携活動が有効に機能しています。

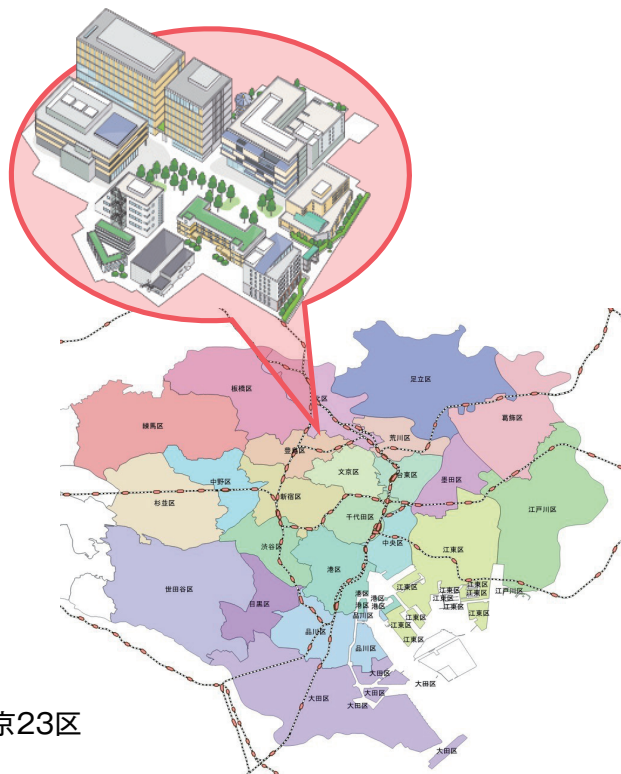
近年、学修成果、教育成果の把握、あるいは可視化が叫ばれています。学修者本位の教育を実現する観点から、一人一人の学生が自らの学びの成果、いわゆる学修成果として身に付けた資質・能力を自覚できるようにすることが重要です。また、卒業認定や学位授与の方針に定められた学修目標の達成状況を、可視化されたエビデンスとともに自らが説明できるようにすること、さらに、多角的な形でそれが行われることが求められています。そして大学側も、学位プログラムを通じてそうした資質・能力を備えた学生が果たして育成できているのかを、いわゆる教育成果として学修成果と同様に説明できることが重要です。

こうした問題を含めて大学教育に関して議論をするとき、学修者本位の教育を強く意識し、大学が「学生を教育する」という視点から、「学修を促進させる」という視点への転換を図る必要があります。あくまで主役は学生です。そのためにも、学生がどんな風に学んでよいかわからないという点があればそれを改善することが求められます。そして、学修者本位の学びと教育プログラムについて、教育環境をどのように提供できるかが課題です。このことをしっかりと念頭において、私達は教育・研究に取り組んでいく必要があります。

最後になりますが、本学は教育 DX を推進しています。次年度から、いわゆるデジタルライゼーションの段階として、現在利用している学内の学務システムなど各種システムを更新します。また、教職員と十分に議論を重ねながら、LMS といったシステムの導入を推進し、まさに学生が自らの学びを可視化でき、達成感が得られるような支援システムの仕組みを確立しなければなりません。そして、大正大学 DX の実現をめざし、すべての教職員が一体感をもって、一緒に気持ちよく働ける環境の中で、学生の学びを促進させるとともに自らも成長していくという素晴らしい仕事に、今後もさらに取り組んでいきたいと考えています。

1. 基本情報

(1) 申請の概要



大正大学

学生数：4,919名

男子：2,411名

女子：2,508名

専任教員数：156名

専任職員数：166名

※令和4年5月1日現在

大正大学の6学部・3研究科



仏教学研究科

人間学研究科

文学研究科



理念・目的



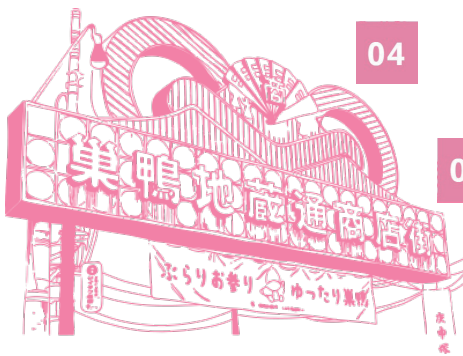
01 「新共生主義」の確立

02 「地域人スピリット」の醸成

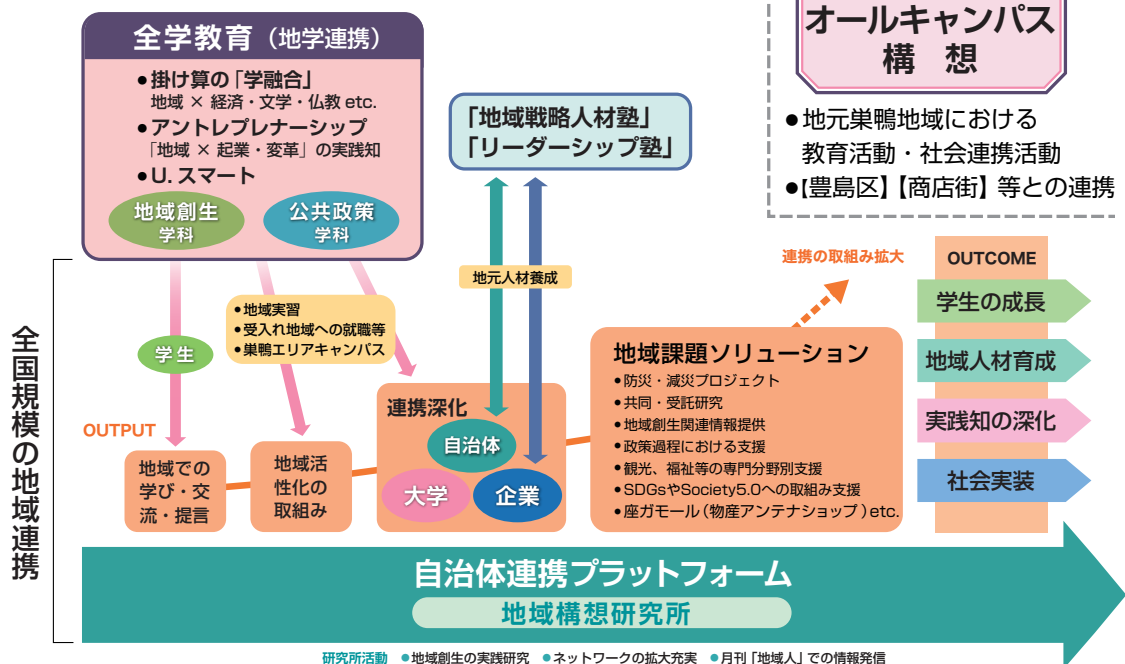
03アントレプレナーシップの養成

04 「DAC」による総合学修支援

05 「すがもオールキャンパス」構想



地方自治体と大正大学の連携の有機的展開



すがも オールキャンパス 構想

- 地元巣鴨地域における教育活動・社会連携活動
- 【豊島区】【商店街】等との連携

大学教育再生戦略推進費 「知識集約型社会を支える人材育成事業」 計画調書

[基本情報]

1. 大学名	大正大学							
2. 機関番号	32635							
3. 事業者 (大学などの設置者)	ふりがな (氏名)	おかもと 岡本	せんじょう 宣丈	(職名) 理事長				
4. 申請者 (大学の学長)	ふりがな (氏名)	たかはし 高橋	しゅうゆう 秀裕	(職名) 学長				
5. 事業計画責任者	ふりがな (氏名)	かんだつ 神達	ちじゆん 知純	(所属・職名) 副学長・総合学修支援機構 DAC 機構長				
6. メニュー	メニュー I 文理横断・学修の幅を広げる教育プログラム							
事業計画名	新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業							
7. 事業プログラム に参加する学生の 所属学部等名	社会共生物学部、地域創生物学部、表現学部、心理社会学部、文学部、仏教学部							
8. 事業計画の ポイント (400文字以内)	幅広い学融合の知識や創造力、変化に対応する力、異なる分野のネットワーク結節点となるためのコミュニケーション力を本学で学ぶ全学生に身に付けさせることにより、我が国において新時代の地域を牽引するアントレプレナーシップを身に付けた「地域戦略人材」(多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダー)を育成するもの。実施にあたっては、本学の特色である地学連携体制・産学協創体制を生かして学融合・学際・課題解決型の教育プログラムを構築する。また、教育組織と事務組織を統合する学内第三の組織である総合学修支援機構DACをハブとして学内の各組織を有機的に連携させ、教育及び学生支援体制の基盤を確立すると共に社会とのインタラクションを活発化させる。また、リカレント教育の提供等による生涯を通じた教育サポートの構築や、独自メディアを活用した成果の発信も予定している。							
9. 学生・教職員数		学生数				教職員数 (R2.5.1)		
		入学定員 (令和2年度)	全学生数 (R2.5.1)	収容定員 (令和2年度)	定員充足率 (R2.5.1)	教員数	職員数	合計
	学部	1,125 人	4,774 人	4,590 人	104.0%	156 人	165 人	321 人
	大学院	95 人	137 人	208 人	65.9%			
合計	1,220 人	4,911 人	4,798 人	102.4%				
10. 連携先機関名 (他の大学、民間企業等 と連携した取組の場合 の機関名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ソフトバンク株式会社 ・全国商工会連合会 ・株式会社フジテレビジョン 							

11.	学校教育法施行規則第 172 条の 2 第 3 項において「公表するものとする」とされた教育研究活動の状況について、公表している HP の URL
	https://www.tais.ac.jp/guide/info/

12. 事業計画経費（単位：千円） ※千円未満は切り捨て							
年度（令和）	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	合計	
事業規模	51,927	65,395	67,660	61,640	68,190	314,812	
内訳	補助金申請額	50,000	50,000	50,000	33,333	15,000	198,333
	大学負担額	1,927	15,395	17,660	28,307	53,190	116,479

※1. 文部科学省や他省庁が実施する他の補助金は「大学負担額」に計上しないこと。

※2. 国立大学における運営費交付金、公立大学における運営費交付金、私立大学の私立大学経常費補助金等は「大学負担額」に計上しないこと

13. 事業プログラムの受入学生定員（1学年あたり、事業最終年度）	
1,125名	

<メニュー1のみ記入>

	大分類	中分類	小分類
14. 専門分野 (主たる分野の順に記載してください(最大5つ以内))	社会科学	C3_ 社会学関係	A8_ 公共社会学
	社会科学	D9_ その他	E3_ 地域創生学
	人文科学	B9_ その他	J2_ 表現文化学
15. 授与する学位 分野・名称	学士（公共政策学、社会福祉学、経済学、表現文化学、人間科学、臨床心理学、日本文学、人文学、歴史学、仏教学）付記する名称：地域戦略人材育成課程の修了		

(大学名：大正大学)

(事業名：新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業)

新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業

地域戦略人材とは

- 多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダー
- ・幅広い文理横断の知識や創造力
 - ・変化に対応する力
 - ・異なる分野のネットワーク結節点となるためのコミュニケーション力等

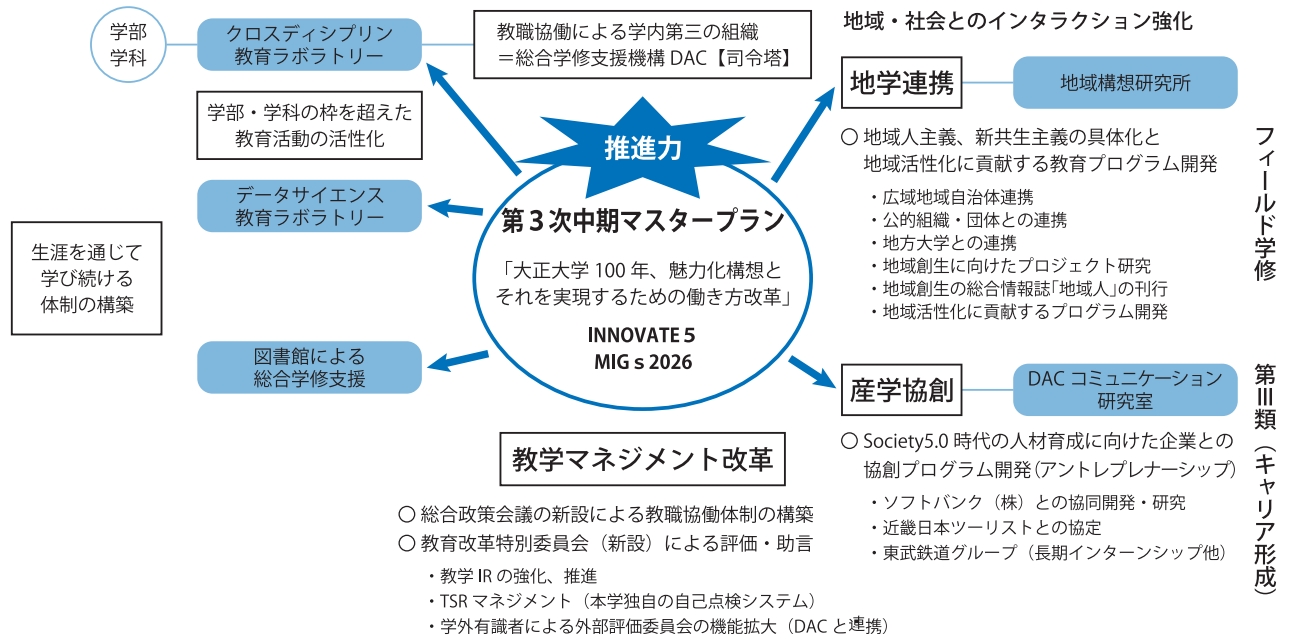
必要となる改革の方向性

- ✓ 本学第3次中期マスタープラン・INNOVATE 5・MIG s 2026 を踏まえた人材育成
- ✓ 超スマート社会の中で地域を支え、活躍する人材を育成する教育プログラム構築
- ✓ 全学横断的な教育改革の実現に向けた組織改革、教職協働体制の確立
- ✓ 目指す人材像の育成に向けた地域・社会とのインタラクション強化

【事業方針】 ● 地学連携・産学協創による新しい教育プログラムの実現

- 学内第3のマネジメント組織＝総合学修支援機構 DAC を司令塔とする全学横断的な教育改革の実現、ガバナンス強化
- 生涯を通じた学びの体制構築による人材の好循環促進、社会とのインタラクション強化

事業概要



令和2年度までに取り組んでいる事項(今後も拡大・充実)

- ・ DAC(機構長:学長)の司令塔機能強化、学長補佐の協働による学内組織(教育・研究・地域連携)の連携強化
- ・ 大学のビジョン達成に向けたFD・SDの徹底(FD・SD手当の支給)
- ・ 教学IR体制の組織・運営強化(エビデンスに基づくプログラム開発)
- ・ DACポータルサイトの開発と活用(学修成果の可視化による育成強化)
- ・ 専属チューターによる共通教育の目標達成サポート体制構築
- ・ 新教育分野開発のためのラボラトリーの設置
 - ① クロスディシプリン教育ラボ(学融合)
 - ② データサイエンス教育ラボ(文理融合)

本補助金の目的・趣旨

The screenshot shows the official website of the Ministry of Education, Science and Culture (MEXT). The page title is 「知識集約型社会を支える人材育成事業」 (Project for Supporting Human Resource Development in a Knowledge-based Society). The navigation menu includes categories like 「教育」 (Education), 「科学技術・学術」 (Science and Technology/Academy), and 「スポーツ」 (Sports). The main content area features a heading for the project and a list of links for public notices and application status for the fiscal year 2022 (令和2年度).

文部科学省>トップ>教育>大学・大学院、専門教育>国公立大学を通じた大学教育再生の戦略的推進>知識集約型社会を支える人材育成事業

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/intelligence.htm

「知識集約型社会を支える人材育成事業」は、Society5.0 時代等に向け、全学横断的な改善の循環を生み出すシステム（全学的な教学マネジメントの確立、管理運営体制の強化や社会とのインタラクションの強化等）の学内における形成を実現しつつ、今後の社会や学術の新たな変化や展開に対して柔軟に対応しうる能力を有する幅広い教養と深い専門性を両立した人材を育成することを目的とした事業です。

The screenshot shows the website of the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS). The page title is 「知識集約型社会を支える人材育成事業」. The navigation menu includes 「事業のご案内」 (Project Information), 「事業の成果」 (Project Results), and 「調査情報」 (Survey Information). The main content area features a heading for the project and a list of news items regarding the project's progress and committee meetings.

日本学術振興会> TOP > 事業のご案内>知識集約型社会を支える人材育成事業

<https://www.jps.go.jp/j-chishiki/index.html>

【事業の趣旨】

我が国では、経済的な価値が資源や物から知識や情報へとシフトし、知識を共有・集約することで、様々な社会課題を解決し新たな価値が生み出される、まさに知識集約型社会の到来が予想されている。

このため、大学においては、この知識集約型社会を支える人材育成に対する社会の要請に応えるため、専門教育においても、知識の水準の高度化だけでなく、分野を超えた専門知の組み合わせが必要とされる。

このたび大正大学は、文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業」に、「新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業」として採択され、五年間この事業を推進する。

本事業における教育プログラム内容／体系

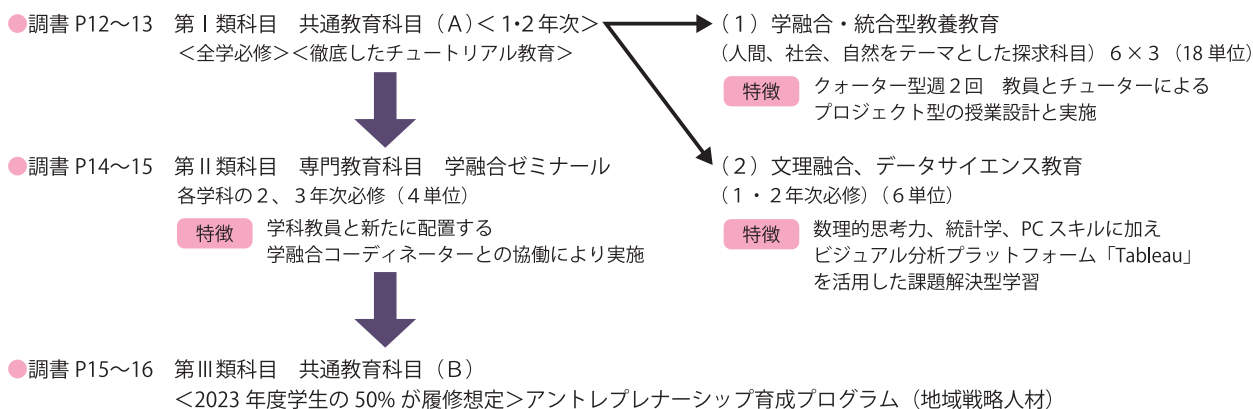
「本事業の実施にあたって「地域戦略人材」の育成に必要な能力を育成する観点から、本学の科目区分を活用してそれぞれの分野に必要な科目を配当する。」

- 第Ⅰ類科目（共通教育科目（A））
- 第Ⅱ類科目（専門教育科目）
- 第Ⅲ類科目（共通教育科目（B）アントレプレナーシップ育成プログラム）

＜1＞養成する人材像（ビジョン）・・・・・・・・

「地域戦略人材」
多面的な性質を持つ異なる専門分野の多様な人材を
統合し調整する課題解決型リーダー

＜2＞人材育成のための教育体系



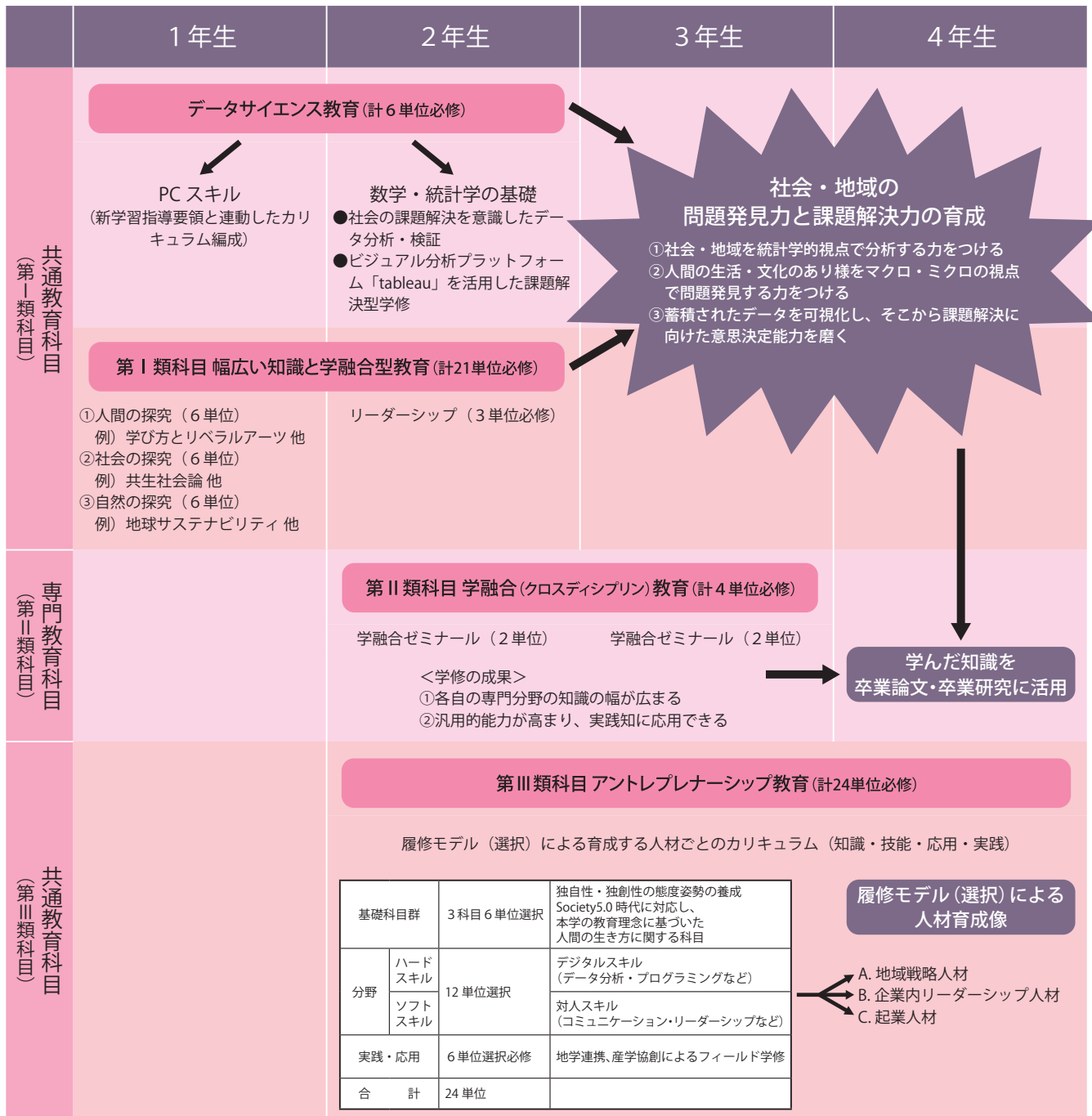
養成人材別履修モデル

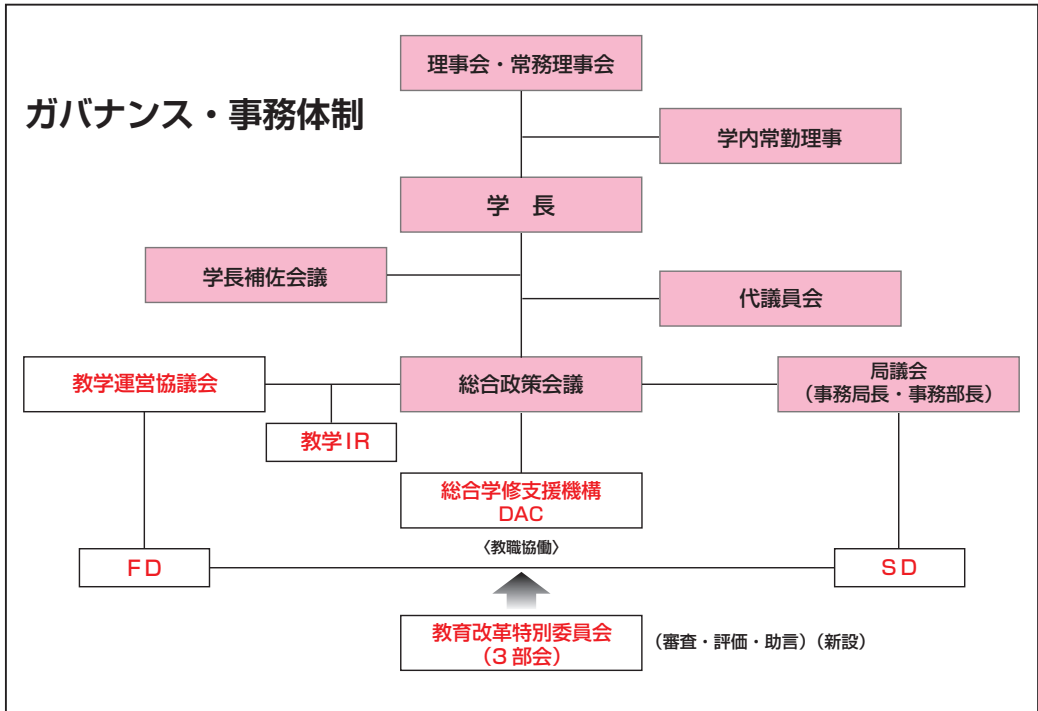
- ①新共生主義：地域人イズム、超スマート社会、アントレプレナーシップ等
- ②ハードスキル：論理的思考、データ分析、プログラミング、ファイナンス等
- ③ソフトスキル：コミュニケーション・リーダーシップ、ビジネス関係等
- ④実践応用：ワークショップ、インターンシップ、フィールドワーク、海外研修等（地学連携、産学協創によるプログラム等）



- A. 地域戦略人材
- B. 企業内リーダーシップ人材
- C. 起業人材

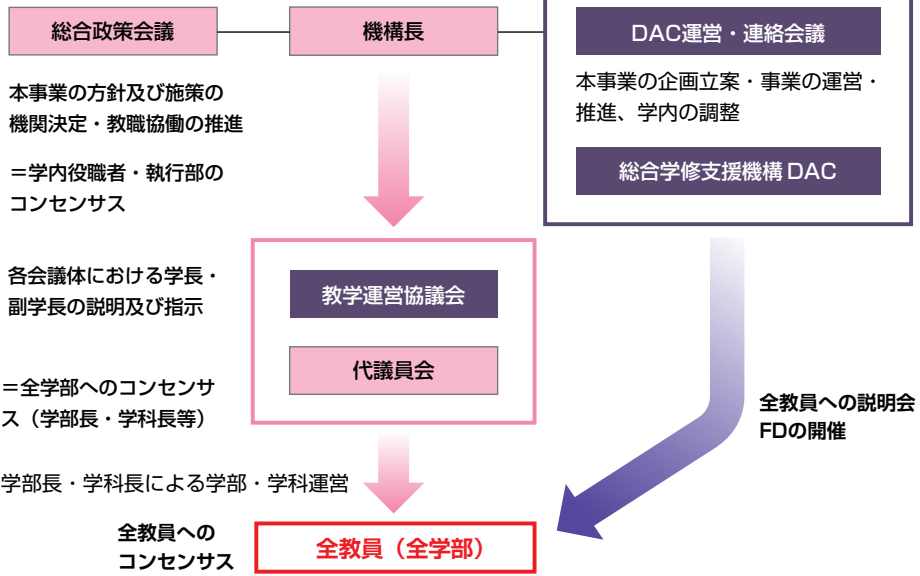
本事業により育成する人材像・教育体系（イメージ図）





会議体	構成員	役割・審議内容	備考
常務理事会	理事長、常務理事、専務理事、学長、副学長、事務局長	経営、人事、事業計画、教学運営大綱、予算編成案・決算案等の審議・決定	
総合政策会議	専務理事、学長、副学長、事務局長、副事務局長、学長補佐 1 名、事務部長	戦略的経営及び教学運営の方針並びに当該方針に基づく具体的施策の決定機関、教職協働により推進	学長補佐 5 名、事務部長補佐陪席
学長補佐会議	学長、副学長、学長補佐	学長の諮問機関 意見交換・情報共有	
教学運営協議会	学長、副学長、学部長、研究科長、図書館長、事務局長、副事務局長、学長補佐、内部監査室長、教務部長、総合学修支援部長、学生支援部長	全学の意見調整・諮問 (1) 教育課程の調査・研究に関する事項 (2) 教育課程の編成及び運営に関する事項 (3) 学生の教育・指導に関する事項	
代議員会	学長、副学長、学部長及び教授会連合会を代表する代議員	教授会連合会から委ねられた教育研究・学生に関する事項を審議・決定する。	学校教育法施行規則第百四十三条に定める教授会代表者からなる教授会委任機関の位置付け。
DAC 運営・連絡 会議	専務理事、総合学修支援機構DAC機構長、総合学修支援機構DAC副機構長、チーム長、副学長、事務局長、副事務局長、総合政策部長、魅力化推進部長、教務部長、総合学修支援部長	「知識集約型社会を支える人材育成事業」の全学横断的なサポート機関として、総合政策会議の方針に基づき、学内各組織を有機的に連携させ、事業を推進する。	チュートリアル教育、データサイエンス教育、クロスディシプリン教育、アントレプレナーシップ教育について各チーム長を選出。

本事業のコンセンサスについて



令和2年度 知識集約型社会を支える人材育成事業審査結果

大学等名	大正大学	整理番号	4
メニュー	メニュー I 文理横断・学修の幅を広げる教育プログラム		
事業計画名	新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業		

[採択理由]

本事業計画は、新時代の地域を牽引するアントレプレナーシップを身に付けた「地域戦略人材」（多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダー）を育成するため、当該大学の特色である地域連携体制・産学協創体制を生かして学融合・学際・課題解決型の教育プログラムを構築するものである。

本事業計画は、社会が直面する課題を踏まえ、大学が社会・地域に果たすべき役割や人材育成を明確に設定しながら当該大学が進められてきた「地域人材育成」を柱とする取組を基に、これまでの地方自治体や企業等との社会連携の実績を生かした地域連携型教育に加え、アントレプレナーシップ、データサイエンス教育などを全学へと展開するものとなっている。また、教育組織と事務組織を統合する学内第三の組織である「総合学修支援機構 DAC」をハブとして既存の学内の各組織を有機的に連携させ、教育及び学生支援体制の基盤を確立するとともに社会とのインタラクションを活性化することとしている。大学を挙げて構築する実施体制により、全学生を対象とする教育プログラム構築を目指す本事業計画の着実な実施が期待できる。

また、全学展開を行う上で課題となる入学目的の異なる学修者への動機付けや伴走体制、文系学生を念頭に学修者の苦手意識の克服・リテラシー向上を重視したデータサイエンス・理数系教育の工夫は、本教育プログラムにおける学修目標を達成するための方策として評価できるものであり、将来的にそのノウハウは中小規模大学の取組として共有すべきモデルともなりうるものと考えられる。

さらに、学生の学修支援・メンタリングに従事するチューターについて独自の養成プログラムを開発し、約 100 名を養成・配置する体制づくり、チューターと教員の協働による学修支援、教員の資質・能力の開発・向上と評価に関する指標・プログラムの作成など、教育プログラムに関わる人材の資質・能力を継続的に養成・開発、向上していく視点は、本教育プログラム全体の持続可能性につながるものである。チューター養成システムの公表等も企図されており、取組成果の他大学への波及が期待できる。

以上のことから、当該大学の事業計画は「幅広い教養と深い専門性を両立した人材の育成」と「全学の教学マネジメント改革」という今回の事業趣旨に沿った、普及性・実現可能性・継続性が高い提案となっていると評価でき、着実な計画の実施が望まれる。

知識集約型社会を支える人材育成事業 令和3年度現地視察報告書

知識集約型社会を支える人材育成事業委員会

大学等名	大正大学	整理番号	4
メニュー	メニューⅠ 文理横断・学修の幅を広げる教育プログラム		
事業計画名	新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業		

1. 進捗状況の概要

- ・ 本事業計画の目的に照らし合わせた申請時の理念や内容が確実に実現化しつつある。
- ・ 学融合の考え方が、第Ⅰ類科目、第Ⅱ類科目及び第Ⅲ類科目の各対象教育プログラムに反映されており、計画どおりに着実に実行されている。
- ・ 「チューター」を含む学生の教育に関わる者の間で、情報共有や取組検討の機会がしっかりと準備されており、教員間での円滑なコミュニケーションが実現している。
- ・ 「データサイエンス科目」を含む第Ⅰ類科目の活動は、他の人文社会科学系大学のモデルにもなるべき取組である。具体的には「チューター」を入れたチームティーチングを実現化し、細やかなフォローで大学での学びのスタートを支援しているほか、ICT活用によってコロナ禍においても学びを止めないシステムを構築している。
- ・ 「データサイエンス科目」必修化について、学生自身がその有益さを理解し、将来、自分自身のキャリアに役に立つことを認識しているプログラムとなっている。
- ・ 第3の職種と呼ばれる「チューター」を自学で育成し雇用するという、持続性が高いシステムを構築している。
- ・ 人生100年時代に学生の成長に寄り添うことをやりがいとする第3の職種「チューター」を設定し、セカンドキャリア、デュアルキャリア、パラレルキャリア等の多様な働き方を可能にする場を作り、学生教育の質向上に役立っている。
- ・ 全教室Webカメラ設置やBYODなどDX化を進めており、ハイフレックス授業等、個別最適な学びを支援している。

2. 課題・意見(改善を要する点、指導・助言内容)

- ・ ガバナンス体制については、いまだその意思決定のプロセスが不明瞭との印象を受けた。学長を中心とした何事にも迅速に対応できるマネジメント体制の構築を検討いただきたい。
- ・ 本事業計画と学士課程教育との関係性を整理いただきたい。特に付与される学位の根拠である専門教育との関係性をディプロマ・ポリシーも含めて明らかにする必要がある。
- ・ 第Ⅱ類科目、第Ⅲ類科目の取組は年次進行で進んで行くことに加え、第Ⅲ類科目については選択科目にもなることもあり、学生との意見交換においても第Ⅱ類科目及び第Ⅲ類科目に対する認識が浸透していなかったことから、今後はさらに学内広報にも力を入れていただきたい。
- ・ 第Ⅰ類科目、第Ⅱ類科目を必修で学修した後、本事業計画に係る授業を選択する学生、そうでない学生と様々なカリキュラムのバリエーションが生まれることになる。それらの学びの特性について、学修成果を可視化することによって明らかにしていただきたい。

知識集約型社会を支える人材育成事業(メニューⅠ・Ⅱ) 中間評価結果

大学名	大正大学	整理番号	4
メニュー	メニューⅠ. 文理横断・学習の幅を広げる教育プログラム		
事業計画名	新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業		

(「知識集約型社会を支える人材育成事業委員会」による評価)

【総括評価】

A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。

【コメント】

事業の実施体制については、本事業を運営していくための組織として、教育組織と事務組織を統合し教職協働を具現化する「学内第三の組織」とされる総合学修支援機構DACを設置しており、学部学科での専門教育とのハブとなって連携・協働を行っている点が評価できる。また副学長をその長である機構長に任命することにより、持続可能な組織化に取り組んでいる。

事業の具体的な取組の進捗状況について、まずはディプロマ・ポリシーの改正・増補により「三つの方針」を通じた学修目標の具体化が、事業目的に沿う形で適切に設定されたことを評価する。また学修成果の可視化についても、IRを中心に多様なデータを収集できている。今後はこれらアセスメントツールを本事業を俯瞰するアセスメントプランとして取りまとめていただき、本事業全体の評価精度を高めていくことを期待する。事業の内容としては、第Ⅰ類で展開しているデータサイエンス教育は、企業との連携により、文系学生であっても将来に必要なスキルと認識しやすい仕組みを取り入れていること、また苦手な学生にはチューターやスチューデント・アシスタントがサポートする学修支援システムを組み合わせることで、全国の文系大学におけるモデルとなる活動であると高く評価する。その一方で、第Ⅱ類の学融合ゼミナールについては知識提供に止まっているのではないかなどの懸念もあり、内容と授業方法には改善の余地が大きい。また令和4年度は試行とした第Ⅲ類アントレプレナーシップ養成教育プログラムは全学の半数の学生が受講することを想定する本事業の目玉プログラムであることから、事業後半に向けて質の高い取り組みを期待する。

事業の実施計画・継続性については、本事業が大学の第3次中期マスタープランに位置付けられていることから、理事会において資金面を含めた経営資源を投入し、さらに充実・発展する環境が整っている。各会議体のそれぞれの役割、機能が本事業の運営を行うにあたり構造的・合理的なものであり、特に第Ⅰ類科目におけるチューターの養成と配置は斬新なアイデアで効果が期待できる。

事業成果の普及については、チューター養成のための「総合的学修支援者育成プログラム」や文系学生のためのデータサイエンス教育は他大学のモデルとなりえる取り

組みである。

採択時に付された留意事項及び現地視察報告書への対応については、適切に対応している。

経費執行の適切性については、適切と認められる。

(2) 事業の概要

①補助金の意図、採択の意図

*「知識集約型社会を支える人材育成事業」の意図

文部科学省：「知識集約型社会を支える人材育成事業」は、Society5.0時代に向け、全学横断的な改革の循環を生み出すシステム—全学的な教学マネジメント体制の確立、管理運営体制の強化や社会とのインタラクションの強化など—の学内における形成を実現しつつ、今後の社会や学術の新たな変化や展開に対して柔軟に対応する能力を有する幅広い教養と深い専門性を両立した人材を育成することを目的とした事業である。

*採択のポイント

今回の事業趣旨は「幅広い教養と深い専門性を両立した人材の育成」と「全学の教学マネジメント改革」であった。本学の事業計画がこの趣旨に沿ったものであると評価され、その普及性・実現可能性・継続性に期待がされている。第Ⅰ～Ⅲ類科目の教育の再編と総合学修支援機構D A Cを司令塔とした教職協働体制が評価されたものと思われる。

②目的・目標

本学では大学100周年に向けてその使命と存在意義を再確認しつつ、社会や時代の急激な変化をふまえて学生への教育価値を高めるため、2018年に発表した第3次中期マスタープラン「大正大学100年、魅力化構想とそれを実現するための働き方改革」及び第3次中期マスタープラン増補・改訂をふまえて大学教育の抜本的改革を推進しているところである。本事業は、このような本学の方向性に正しく合致するところである。

社会が直面している諸課題に向き合いながら、大学が社会・地域に果たすべき役割や人材育成についての将来像を明らかにする指針であるが、これに基づき行う総合的な教育改革構想の中核が本事業計画で実施する「地域戦略人材の育成」である。よって本事業計画を「新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業」と名づけた。

本学は、特にここ10年、地域と共に歩む大学として、これまでに企業や90をこえる地方自治体と連携協定を結び、産学官協働により新時代の社会・地域を創造する人材育成に取り組んできた。その経験をもとに本学では地域戦略人材を「多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダー」と定義してきた。

*社会のニーズ分析と養成を目指す人材像

これからの日本では少子高齢化の加速や技術革新など、人の生き方・働き方が大きく変わる可能性がある。とくに情報を基盤とした超スマート社会の到来は、これまでの教育のありかたに変更を求めてくることが予想される。データサイエンスを基礎的な素養とした上で、ビッグデータをどのように活用するか、AIの導き出した集合知からどのような価値を創造していくかなど、変化が激しく予測が難しい時代にあって、従来の枠組みを超えた学融合的な視点を身につけ、時代の変化に合わせて社会を支えていく人材の育成が求められよう。

社会的ニーズに応えるために、本学では建学の理念「智慧と慈悲の実践」にのっとり、地域において課題を解決するリーダーの育成を目指す。具体的には、地域における課題の解決に向けて、幅広い学融合の知識や創造力、変化に対応する力、コミュニケーション力を全学生に身につけさせようとするものである。

また本事業は実社会に適用できる能力を育成することを目標とするため、社会・地域とのインタラクションの形成が必要となる。地学連携・産学協創による教育展開を予定している。

*第3次中期マスタープラン改訂・増補

新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業

(A) 地域戦略人材育成の目的は、多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダーの育成と位置付け、以下の能力、資質を育成し、社会に輩出する。

- ①幅広い文理横断の知識や技能を身に付け、活用できる能力を育成
 - ②社会の変化に対応する力を育成
 - ③異なる分野のネットワーク結節点となるためのコミュニケーション力等を養成
- (B) 必要となる教育改革の方向性は以下のとおりである。

- ①本学第3次中期マスタープラン・INNOVATE 5・MIGs2026を踏まえた人材育成
- ②超スマート社会の中で地域を支え、活躍する人材を育成する教育プログラム構築
- ③全学横断的な教育改革の実現に向けた組織改革、教職協働体制の確立
- ④目指す人材像の育成に向けた地域・社会とのインタラクション強化

(C) 本事業の基本方針の方向性は以下のとおりである。

- ①地学連携・産学協創による新しい教育プログラムの実現
- ②学内「第3のマネジメント組織」＝総合学修支援機構D A Cを司令塔とする全学横断的な教育改革の実現とガバナンス強化
- ③生涯を通じた学びの体制構築による人材の好循環促進、社会とのインタラクション強化

*第3次中期マスタープラン改訂・増補に関する補助資料

令和2年度に文部科学省に採択された“大学教育再生戦略推進費”「知識集約型社会を支える人材育成事業」(令和2年～6年度までの助成事業)を一過性なものではなく、

- (1) 本学教育改革の中長期的な指針として位置づける。
- (2) 理事会が、本教育を推進する上での“最高意思決定機関”の役割を果たし、「ヒト・モノ・カネ・情報」を集中させ、責任を持って確実に実行を継続するものであることを確認する。

本学は、令和2年文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業」採択を受けて、Society 5.0時代(デジタル化社会)を支える人材育成事業を実施(2020年12月～2025年3月)している。本事業による教育改革の概要は、以下のとおりである。

- ①学科の専門知を基盤に異なる分野の専門知を融合することで、新しい発想を生み出す能力の養成【学融合】
- ②集積されたデータを分析し、活用するための基礎スキルを必修化することで分散している大量のデータが利用可能となり、新しい価値を生むための教育を実施【文理融合】
- ③3・4年次を対象とした後期共通教育科目(社会や地域の課題を解決し、新しい価値を創造する人材育成教育)を実施し、社会や企業とインクルーシブな関係を構築する。
- ④第Ⅲ類科目(24単位)
 - A. 地域戦略人材 公務員コース
 - B. 企業内リーダーシップ人材 イントレプレナーコース
 - C. 起業人材 アントレプレナーコース

③実施計画

*授業科目・教育課程の編成・実施

本学の現状の教育課程にはいくつかの課題があり、第Ⅰ類科目(共通教育科目)と第Ⅱ類科目(専門科目)の

接続及び第Ⅲ類科目（地域連携、キャリア教育、資格科目）の位置付けには検討の余地があると考えられてきた。今回の事業を推進するにあたって、この問題に積極的にアプローチする。

まず第Ⅰ類科目については令和3年度より全学共通の第Ⅰ類教育をスタートさせた。その第Ⅰ類の特色を3つ挙げたい。

- 学融合・統合型教養教育
- 文理融合・データサイエンス教育 反復学修によって文系学生の苦手意識を克服した上で、課題解決をはかるための論理的思考力を育むことをめざす。
- 徹底したチュートリアル教育

次に第Ⅱ類は本学の教育課程において中心に位置するものであるが、第Ⅰ類・第Ⅲ類との整合性・有機的接続を進めていきたい。そして、本事業実施のため第Ⅱ類を改編し、2・3年次に学融合ゼミナール（必修）を設置することとする。地域戦略人材について各学科で検討し、令和4年度より開講となる学融合ゼミの内容については、クロスディシプリン教育ラボラトリー・チームが各学科の第Ⅱ類科目コーディネーターと協議し、推進した。

次に第Ⅲ類の再編については、元来、第Ⅲ類は卒業後のキャリア形成にかかわるものであり、教職・諸資格等の授業科目は従来通りとなる。本事業実施にあたって育成人材モデルをA地域戦略人材、B企業内リーダーシップ人材、C起業人材と想定し、それぞれに応じたアントレプレナーシップ育成プログラムの授業科目群を用意する。

学生の目線から見れば、1年次は共通教育である第Ⅰ類の学修が中心となる。2年次より第Ⅱ類が中心となることはこれまで通りだが、並行して第Ⅲ類が履修できるような機会を拡充する。学生の特質を見て、適宜、第Ⅲ類のアントレプレナーシップ育成プログラムの履修を薦めるなど、細やかな履修指導を行う。

④内容

上記の第Ⅰ～第Ⅲ類の改編をふまえて卒業要件にも変更を加える。令和2年度において、社会創造系学部群では改革された第Ⅰ類が実施された。令和3年度からは全学的な施行とした。また第Ⅱ類においては令和2年度にコロナ禍の臨時的取り組みではあったが専門総合の開講を行った。令和4年度からは、第Ⅱ類科目「学融合ゼミナール」、第Ⅰ類科目「リーダーシップ」を実施した。第Ⅲ類科目については、令和3年度にアントレプレナーシップ育成教育プログラムを一部実施し、基礎科目を令和4年度に実施する。そして、令和5年度より、スキル科目群と実践科目群を開始する。

⑤実施体制・組織

*事業計画実施体制

本事業を全学的に組織的に実施するために総合学修支援機構D A Cを司令塔とする。総合学修支援機構D A Cは本来、教育組織と事務組織を統合し教職協働を具現化する「学内第三の組織」である。総合学修支援機構D A Cは副学長が機構長であり、本事業の継続的推進を担保する体制である。また、総合政策会議を新設し、意思決定を明確にし、学長のリーダーシップによって総合学修支援機構D A Cを動かしていく。そのため、D A C運営・連絡会議を設置し、総合政策会議と総合学修支援機構D A Cの意思疎通を円滑にしている。

また、本事業を側面的に支えるのはF DとI Rである。F Dについては、F D委員会を設置し、カリキュラムのアセスメントや編成についての研修会を実施し、本事業について全教員が共通理解・コンセンサスを取れるように、F D活動等を推進していく。I Rについては、教学I R推進部会を設置し、学長のガバナンスと教学による教育改善を進めるマネジメントを連動させ、教育の質保証を実質化する体制を推進していく。

⑥令和4年度までの事業概要

- 第Ⅰ類科目において全学統一カリキュラムを導入、チュートリアル教育の推進
-

-
- Tableau を活用したデータサイエンス授業を実施
 - 令和4年度からのカリキュラム改革を学内の合意形成を経て再編
 - S D ・ F D の推進
 - 第Ⅲ類科目においてアントレプレナーシップ育成教育を導入
 - アントレプレナーシッププログラムの実施、すかもオールキャンパス構想の推進
 - 第Ⅱ類科目「学融合ゼミナール」の全学的導入とクロスディシプリン教育の実証研究
 - 教学 I R 推進部会による I R 活動の推進、教員評価部会の整備・推進
 - チューター養成講座の開催とチューターの育成採用
 - 学びのコミュニティと学修支援の推進
 - 情報公開・社会とのインタラクションの推進（日経地方創生フォーラムの参画、文部科学省、マスメディア等からの取材・ヒアリング等）

⑦令和4年度までの事業内容

本事業は、多面的な性質を持つ地域の課題解決に向けて、異なる専門分野の多様な人材を統合して、調整する新しいリーダー（地域戦略人材）の育成を行う取組みであり、幅広い文理横断の知識や創造力、変化に対応する力、異なる分野のネットワーク結節点となるためのコミュニケーション力等を養成することを目標としている。教育課程として、第Ⅰ類科目におけるチュートリアル教育やデータサイエンス教育、第Ⅱ類科目におけるクロスディシプリン（学融合）教育、第Ⅲ類科目におけるアントレプレナーシップ育成教育を展開し、これらの相乗効果により地域戦略人材の育成を実現するものである。

令和2年度については、総合政策会議等の会議体の設置によるガバナンス体制の強化を行い、学長のリーダーシップの下、事業の推進と確認、規程・組織の整理・改編、各組織の役割の明確化・連携等を推進した上で、S D ・ F D ・ 情報公開・フォーラムへの参画等を実施した。そして、第Ⅰ類科目における探究科目やデータサイエンス科目については、先行実施・F D として一部実施した。データサイエンス教育については、授業設計と運営における強化ポイント等の設定により、学生の「数学」への必要性の意識が高まり、主体的に学ぶ体制やサイクルを構築することができた。また、授業前後の学修支援体制を構築し、欠席した学生や課題に取り組めていない学生への授業前後のサポートの日常化を担当教員チーム間で構築し、次年度に向けて教育のP D C A サイクルを推進した。

チュートリアル教育については、次年度以降の全学的な導入に向けた準備を進めるとともに、きめ細かな学生への学修支援を実施した。そして、チューターの採用については、チューター養成講座を通して育成採用するとともに、採用後にも研修を実施し、チューターとしての資質・技能の向上を図った。

学修支援については、学生の視野を広げるとともに、主体的な学びを支援することを目的として、独自講座「学びのコミュニティ」において、チュートリアル教育を推進する総合学修支援機構D A C と図書館が連携しながら、対面とオンラインを併用して、学びに生きる読書生活の創造、新しい学びのための図書館活用（著作権等の知識・理解）、A I 社会、メディア社会、文学、哲学等の様々な講座の企画・運営にあたり、学部を超えた学生の参加があった。

令和3年度については、第Ⅰ類科目の統合型教養教育において、「人間の探究」・「社会の探究」・「自然の探究」を学生の必修科目として全学的に展開した。「人間の探究」は対自己力、「社会の探究」は対人力、「自然の探究」は対課題力をテーマとして共通のパートを構成している。これらの科目では、汎用的なスキルの取得を目指しており、具体的には、主体的学修態度、知識理解・活用力、表現力、課題探究・解決力、情報データ活用力、対人力、セルフマネジメント、チャレンジ精神、地域密着力等の育成を目指している。加えて、「データサイエンス」についても必修科目とし、社会に出た際の欠かせないスキルとして、データに強い学生を育成することを目標として教育活動を推進している。これらの科目により、学生は、社会や地域の問題発見力や課題解決力を身につけ

ることを目標としている。

そして、本事業での学びは、学生が社会に必要な汎用的スキルを第Ⅰ類科目（学修基礎）で身につけ、第Ⅱ類科目（専門科目）でそれぞれの専門分野を学修し、この段階で他分野の学びを統合・関連付け、思考する学融合の視点を会得しながら、社会で活躍できる知識と実践力を身につけるための第Ⅲ類科目を履修することで、アントレプレナーシップの養成を行うことを目指している。

指標とプログラム、評価法の確立については、教学ⅠR推進部会及び外部評価委員会を設置・開催し、情報交換・意見聴取等を実施した。今後の事業の課題や意見を聴取することができ、取組みの参考意見・改善課題とすることができた。

データサイエンス教育については、データサイエンス授業設計と運営における強化ポイントを貫いたことで、学生の「数学」の必要性の意識が高まり、主体的に学ぶ体制やサイクルが構築できた。また、授業前後のオンラインでの学修支援体制を構築し、休んだ学生や課題に取り組めていない学生への授業前後のサポートの日常化を教員間（担当教員チーム）で構築し、教育のPDCAサイクルを推進した。

第Ⅲ類科目アントレプレナーシップ育成教育については、試行（プレ）プログラムとして、希望する学生を対象に、活動テーマを示し、正課外のプログラム（非単位プログラム）として展開し、意欲のある学生がそれぞれのテーマに参加した。全てのプログラムで、企業や自治体との協働も試み、学生はチームでの動き方、学外の社会人への接し方、積極性、組織内での合意形成力や調整力、発想力等を実践的に学ぶことができた。

その他、学生調査・企業調査・卒業生調査等を行い、学生の能力・資質等の現状分析、社会が求めている学生の能力・資質や教育活動等の情報を収集・分析し、学生への教育内容や学修支援に活かせるように学内で共有・検証を行った。

教育課程については、本事業の授業科目の再編により、卒業要件を変更した。このことにより、第Ⅰ類科目・第Ⅱ類科目・第Ⅲ類科目の接続がより有意義なものとなり、全学において育成する人材像のイメージがより明確になることを目的としている。卒業要件については、社会福祉学科を除く全学科において第Ⅱ類科目の履修単位を70単位以上に改正した。そのため、一定数の学生が単位以上を履修する可能性があるため、第Ⅱ類科目である各学科の専門科目が70単位で完結するように、各学科において、コアカリキュラムの見直しを、カリキュラムマップ等を用いて設定をした。なお、第Ⅲ類科目は卒業要件24単位以上とし、選択必修4単位を除く、残りの20単位を履修モデルに沿って選択履修していくようにしている。

3つのポリシーについては、全学科のDPについて「知識集約型社会を見すえて、自らの専門分野の学問領域と他の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑で多様な現代社会の課題に応えることができる」という文言を増補した。また、学則・履修規程などを改正し、卒業要件・制限単位（緩和の方向）、第Ⅲ類科目に関しての規程を改正した。さらに、全学のDPにおいて、Society 5.0で実現する変化の激しい知識集約型社会を生き抜くための新たな目標として、「新共生主義」及び「地域人スピリット」を養成する等の文言を明記した。

情報公開については、福祉系大学経営者協議会、Tableau大学ユーザー会、採択大学合同シンポジウム等において、本事業の紹介を行った。

令和4年度については、第Ⅰ類科目「リーダーシップ」、第Ⅱ類科目「学融合ゼミナール」を全学的に実施した。「リーダーシップ」は、課題と向かい合う上に必要なリーダーシップについて、ワークを交えながら経験的に学び、学生が自身のリーダーシップ観を知り、またそれを再構成する教育内容としている。「学融合ゼミナール」は、所属学科の専門領域を中心としつつ他領域の知識・技能の修得を意識させる教育内容としている。ゼミナールにおいて、学生は、学融合的な学びの基本的方法を学び、幅広い学融合の知識や創造力、従来の枠組みを超えた学融合的・学際的な視点を身につけ、時代の変化に合わせて社会を牽引し、あるいは支えていく人材の育成、学融合・学際的な知を養成することができる。

第Ⅲ類科目については、資格課程・キャリア形成・アントレプレナーシップ人材養成に資する科目群の位置付けとして改正し、アントレプレナーシップ育成教育プログラムを設けた。基礎科目として、「超スマート社会論」、「新共生社会論」、「地域人イズム論」、「アントレプレナーシップ論」を設けた。全学生は、2科目4単位を選択必修とし、アントレプレナーシップ育成教育プログラム修了を目指す場合、3科目6単位を選択必修とした。

また、令和5年度から始まる履修モデルに基づく3つのコース（A. 地域戦略人材：公務員コース、B. 企業内リーダーシップ人材：イントレプレナーコース、C. 起業人材：アントレプレナーコース）についての説明会等を学生に実施した。

これらのコースには、新ビジネス開拓、既存の仕事や事業の改革、人やコミュニティづくりなど新しいことに一歩を踏み出し、社会に貢献できる能力を「知識」と「実践」の融合により修得する科目を設けている。講義では、様々な分野で活躍する方々から話を聞き、地域を題材とした学びと活動を一体化したワークショップやインターンシップなどの実践的な学びを通して、新しいことにチャレンジするアントレプレナーシップの修得を目指す。プログラムは、基礎科目・スキル科目・実践科目から構成され、これらの科目を24単位以上修得することにより、修了証を授与する。

情報公開については、文部科学省中央教育審議会大学分科会大学振興部会、私立大学退職金財団広報誌BILANC、文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度説明会」等において、本事業の紹介を行った。

また、日経地方創生フォーラムに参画し、セッション1「デジタル時代における実践的アントレプレナーシップ教育の成果と課題」というテーマで、学生の発表と有識者による講演及びディスカッションを行った。

3つのポリシーについて

本事業において育成する「地域戦略人材」とは、「多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダー」をいい、具体的には、以下のような力をもった人材の育成が求められます。

- ✓学融合からの視点、多様な視点からの課題アプローチ
- ✓具体的課題に対して的確な事実認識を行い、解決のための知恵を生み出す知識・技能
- ✓主体的に解決策を提起する態度・意識
- ✓複数分野のネットワークの結節点となるためのコミュニケーション能力

そのため、「大正大学3つのポリシー」における「ディプロマ・ポリシー」及び「カリキュラム・ポリシー」を次のとおり改正し、各学科における「ディプロマ・ポリシー」についても増補しました。

【大学】

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

大正大学（以下「本学」という。）の建学の理念は「智慧と慈悲の実践」です。仏教では自らのためだけでなく、他者の幸せを願って修行する人を菩薩といいます。本学で学ぶすべての人が菩薩のように物事を正しく認識・判断し、実践・行動する人間となることを本学は求めています。

また、本学は、Society 5.0 で実現する変化の激しい知識集約型社会を生き抜くための新たな目標として、「新共生主義」及び「地域人スピリット」を掲げ、学際的な研究・学融合型の教育を目指します。この「新共生主義」及び「地域人スピリット」を実現するために、教育ビジョン「4つの人となる—慈悲・自灯明・中道・共生」を規範として示します。

「慈悲」の人となるとは——、

「生きとし生けるものに親愛のこころを持てる人となる」こと。

生きとし生けるものに親愛のこころを保ち続け、心を開き、よりよいコミュニケーションができる。

「自灯明」の人となるとは——、

「真実を探究し、自らを頼りとして生きられる人となる」こと。

自ら「問い」を立て、社会・地域の問題解決のために、さまざまな知識を得て、学融合的な考察ができる。

「中道」の人となるとは——、

「とらわれない心を育て、正しい生き方ができる人となる」こと。

社会・地域に貢献する人材となるために人柄を磨き、かたよりやこだわりから自由になり、さまざまな意見に耳を傾けて行動ができる。

「共生」の人となるとは——、

「共に生き、ともに目標達成の努力ができる人となる」こと。

目標を実現するために挑戦を繰り返す態度と姿勢を育み、自ら「学び」と実践・行動に信念を持ち、ふりかえりを通して行動の改善ができる。

そして、本学は地域主義の立場に立ち、どの学部、学科で学んでいても地域を愛し、生活の基礎となる地域の活性化のためにアントレプレナーシップを発揮し、貢献する「地域人スピリット」を養成します。これらの教育ビジョンに基づき本学では、以下の各資質・能力を総合的に身につけた学生に対して学位を授与するものとします。

知識・技能

- ③社会においてよりよく生きるための力となる知識や技能を、専門的な知識と実践的な経験の統合によって身につけている。〈自灯明・中道〉
- ④自らの専門分野とする学問領域の学修内容と研究方法を理解し、現実社会の中で活用できる。〈自灯明・中道〉

思考・判断・表現

- ③自ら問いを立て、多面的かつ重層的に思考することによって、課題解決への道筋を論理的に探究することができる。〈自灯明・中道〉
- ④己の立場にとらわれず、意見や価値観の異なる人々の考えを傾聴した上で、自らのそれを再構築し、論理的・創造的に表現することができる。〈中道・自灯明〉

関心・意欲・態度

- ⑤自立的・自律的な生き方を志向する中で、地域・社会・世界における課題の当事者としての自己を再発見することができる。〈自灯明〉
- ⑥より良い地域や社会の形成と発展に寄与していくために、利他の精神をもって主体的かつ実践的に学習成果を活かそうとする姿勢を身につけている。〈共生・慈悲〉
- ⑦他者に対して親愛の情を抱き、互いを尊重しながら、ともに目標を達成しようとする協働性を身につけている。〈慈悲・共生〉

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

本学では、教育ビジョン「4つの人となる」及び本学が目指す新時代の人材像の礎を築くために必要な資質・能力を育成するために、共通教育科目である「第Ⅰ類科目」、学科の専門教育科目である「第Ⅱ類科目」、資格取得とキャリア形成及びアントレプレナーシップ養成に関する「第Ⅲ類科目」を設置し、初年次から卒業までに学ぶ諸科目を有機的に連携・接続させた教育課程を編成しています。

また、知識を習得するだけでなく、思考力・判断力を育むために、アクティブ・ラーニングやフィールドワーク等を積極的に取り入れ、双方向で実践的な学びを重視した教育方法を採用しています。評価については、4年間の学習成果を測定する総括的評価だけではなく、教育活動の過程で学習成果を測定する形成的評価を行っています。

教育内容

①第Ⅰ類科目：共通教育においては、旧来型の知識習得中心の教育システムを改め、学融合・統合型教育として、社会の課題と向き合い、変化に対応できる能力を養い、未来を生き抜くために必要な知識と技能を獲得するための教育と位置付けています。そして、主体的学修態度の涵養、知識理解・活用力、表現力、課題探究・解決力、情報・データ活用力、対人力、セルフマネジメント、チャレンジ精神、地域密着力などの習得とキャリア意識の醸成を目標とし、人間の探究、社会の探究、自然の探究、総合英語、データサイエンス、リーダーシップという科目を設けています。

「探究」は、主体的学習態度、知識理解・活用力、表現力、課題探究・解決力、情報・データ活用力、対人力、セルフマネジメント、チャレンジ精神、地域密着力を、人間・社会・自然というテーマに即して統合的に育成す

るための科目です。

「データサイエンス」は、データを活用して課題を解決するための論理的思考力とデータリテラシーを修得する科目です。

「リーダーシップ」は、思考力や交渉力を磨き、社会人として活躍できるコミュニケーション力やチャレンジ精神の育成を目指す科目です。

「総合英語」は、異文化間でのコミュニケーションに欠かせない英語の4技能を身につけるほか、グローバルな意識をもって進んでコミュニケーションができる力の育成や異文化理解の態度を養成する科目です。

②第Ⅱ類科目：専門教育においては、各専門分野における知識・技能を体系的に修得するとともに研究方法の理解と実践を進めるため、学部共通科目、専門ゼミナールのほか、選択科目として方法研究科目、応用科目などを系統的に配置します。

また、「学融合ゼミナール」を配置し、自らの専門分野の学問領域と他の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑で多様な現代社会の課題に応えることができることを目指します。

③第Ⅲ類科目：第Ⅰ類科目、第Ⅱ類科目をベースに、社会との接続を実践しながら、学生のキャリア志向によって、国家資格・認定資格取得のための科目、企業研究や地域との協働による科目、専門性をより高めるための科目、新しい価値創造を企画・実現し、組織内においてもリーダーシップを発揮できる人材を育成するアントレプレナーシップ養成科目を設置します。

教育方法

共通教育・専門教育のいずれにおいても、双方向的で実践的な学びを重視したアクティブ・ラーニングを実施しています。そのなかで、地域・社会・世界におけるさまざまな課題に対して、他者との協働を通じて課題の解決や探究に取り組む機会、また地域・社会の教育資源を活用した「フィールドワーク／サービスラーニング」等の機会を提供しています。

これらの学びを機能させるために講義のみならず、グループワークにおいて学生が相互に学び合うピアインストラクションやディスカッションなど、さまざまなアクティブ・ラーニングの手法を取り入れます。また、特にⅠ類においては、専任教員と複数のチューターやティーチング・アシスタント等が授業及び事前・事後の授業外学修をサポートするチュートリアル教育・チームティーチングを実施します。

専門教育においては少人数からなるゼミナールやワークショップを通じて専門的な知識や技能を身につけます。また、卒業論文・卒業研究を全学生に課すことにより、学修成果を理論的・創造的に発表する機会を設けます。

また、授業の進捗状況において形成的評価を採用し、到達目標に対する学生の達成度をはかり、柔軟な姿勢で教育に取り組んでいます。

評価

①共通教育においては、教育目標の到達度を確認するために、小テスト、プレゼンテーション、課題レポート、エッセイ等を課し、学修成果を総括的に評価します。

② 4年間の総括的な学習成果については、全学生に課される卒業論文あるいは卒業研究・卒業制作とその発表に対して、担当教員による評価と口述試験を行い、ディプロマ・ポリシーで示された資質・能力の達成状況の評価します。

③また、卒業時には、カリキュラム改善の指標とするため、質問紙法や面接調査法を用いて学生生活全般に対する総括的評価を行い、カリキュラムのPDCAサイクルを推進します。

④学部教育の改善については、各学部の学びの特徴に応じたカリキュラムアセスメントを実施し、教育課程を随時見直します。

【学科】

ディプロマ・ポリシー (DP)

思考・判断・表現

知識集約型社会を見据えて、自らの専門分野の学問領域と他の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑で多様な現代社会の課題に応えることができる。

(3) 事業の成果

情報公開

- ①文部科学省中央教育審議会大学分科会大学振興部会において、本学の共通教育（探究科目、データサイエンス教育）の取組みを神達副学長、前田教授より報告しました。
- ②私立大学退職金財団広報誌BILANC(ピランク)に本事業が取り上げられました。
- ③文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）プラス」に認定されました。また、文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム説明会」において、前田教授より報告がありました。
- ④アントレプレナーシップ育成教育プレプログラム「AI謎解きイベント」が産経新聞、東京新聞に掲載されました。

学生の活躍

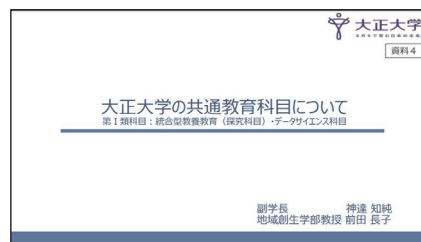
- ①大正大学 日経地方創生フォーラムセッション1「デジタル時代における実践的アントレプレナーシップ教育の成果と課題」に参画し、学生のプレゼンテーションを実施しました。
- ②公共政策学科・表現文化学科3年生のチームが「企業分析AWARD2022」にて優勝を果たしました。
- ③公共政策学科2年生のチームが「学生によるミタカ・ミライ研究アワード2022」で優秀賞を受賞しました。
- ④『Tableau学生ユーザー会 新春！「うちの大学のTableau学習」自慢』において地域創生学科・公共政策学科3年生の学生が発表を行いました。

■文部科学省中央教育審議会大学分科会大学振興部会において、共通教育の取組みを神達知純副学長、前田長子教授が報告しました。

7月11日（月）に文部科学省中央教育審議会大学分科会大学振興部会（第2回）において、「知識集約型社会を支える人材育成事業」の取組みを中心として、本学の共通教育（探究科目、データサイエンス教育）の取組みを神達知純副学長、前田長子教授が報告しました。同部会では以下のような事項が検討されています。

- 総合知の創出・活用を目指した文理横断・文理融合教育、ダブルメジャー、メジャー・マイナー等による学修の幅を広げる教育の推進、初等中等教育における学びの変化や文理分断の改善に対応した大学の在り方
- 各大学において、密度の濃い主体的な学修を可能とする学修者本位の教育の実現、ディプロマ・ポリシーに定める卒業生の資質・能力を保証する「出口の質保証」が徹底され、社会との「信頼と支援の好循環」を形成する仕組みづくり
- 大学の「強み」と「特色」を生かした連携・統合、再編等による地域における学修者のアクセス機会の確保や学生保護の仕組みの整備、高等教育の規模の在り方等

中央教育審議会大学分科会 大学振興部会（第2回） 議事次第	
1 日時	令和4年7月11日（月）16:00～18:00
2 場所	WEB会議
3 議題	(1) 大学等からのヒアリング (2) 意見交換
4 配付資料	
資料1	九州大学説明資料
資料2	金沢大学説明資料
資料3	東洋大学説明資料
資料4	大正大学説明資料
参考資料1	今後の大学振興部会における参考資料集
参考資料2-1	大学振興部会における論点例
参考資料2-2	論点例に関する参考資料
参考資料3	大学振興部会委員名簿



■文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベルプラス）」に認定されました

本学が実施する「データサイエンス教育プログラム」が、文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）プラス」に認定されました。

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度は、学生の数理・データサイエンス・AIへの関心を高め、それを適切に理解し活用する基礎的な能力（リテラシーレベル）や、課題を解決するための実践的な能力（応用基礎レベル）を育成するため、数理・データサイエンス・AIに関する知識及び技術について体系的な教育を行う大学等の正規の課程（教育プログラム）を文部科学大臣が認定及び選定して奨励するものです。

本学が実施する「データサイエンス教育プログラム」は、令和4年度に「リテラシーレベル」と認定された139校の教育プログラムの中でも、先導的で独自の工夫・特色を有する「認定教育プログラム（リテラシーレベル）プラス」として、**私立大学で唯一認定**されました。



■本学学生が「企業分析AWARD2022」にて優勝を果たしました

「企業分析AWARD2022」は、次世代の若きデータ人材を育てるために開催されているコンテストで、「企業」という軸で現在の日本を学生の視点で分析します。当日は、企業に関連するオープンデータを対象に学生ならではの視点でTableau Desktopを駆使して分析を行い、そこから得られたインサイトをプレゼンテーション形式で発表しました。審査ポイントは、①データ収集力、②分析力、③ストーリー設計力、④Tableau技術力、⑤プレゼンテーション力の5つです。

「就活生・地方出身者の立場から日本を元気にしたい」をテーマとして「社会生活基本調査」のデータを分析・発表し、本学でのデータサイエンス教育プログラムと各学科での学びが形になり、見事優勝を勝ち取りました。

◆優勝メンバー

公共政策学科3年 蟻坂 泰心さん

公共政策学科3年 橘 俊幸さん

表現文化学科3年 長岡 未紗さん

■「学生によるミタカ・ミライ研究アワード2022」で本学学生が優秀賞に輝きました

2022年12月17日（土）に開催された「学生によるミタカ・ミライ研究アワード2022」で公共政策学科の学生が上位3チームの一つに選ばれ、優秀賞を獲得しました。

この上位3チームが2023年2月2日（木）に三鷹市長を訪問し、プレゼンテーションと意見交換を行いました。惜しくも三鷹市長賞は逃しましたが、優秀賞受賞という結果となりました。

*「学生によるミタカ・ミライ研究アワード」とは？

三鷹ネットワーク大学の会員大学の学生たちが、三鷹のまちづくりや未来の地域社会について提案。プレゼンテーションやポスターで発表を行います。

【優秀賞】三鷹市の情報発信、強化計画—高齢者が取り残されないために

提案者：大正大学 社会共生学部公共政策学科 2年生

チーム名：たいしょうかもかも

学生：今浦良映 高橋大智 高橋凜 松本大輝



【申請時の課題等について】

【学外】

Society 5.0社会に向けた社会の変動

急速な技術革新と継続的な変化、ICTの発展など取り巻く環境の目まぐるしい変容、グローバル化の進展、多文化・多様性を背景とした「共存」「共生」など、かつて経験したことのない大変革時代の到来。

【学内】

申請時の教育改革の課題と現状

本学は、コミュニケーションを基盤とした交渉力や数理教育の充実によって実践的な学びの環境を整えてきたが、育成すべき人材像に焦点を当てたカリキュラム構築（フィールドワークや長期実習等を含む）、それを推進・サポートするための組織・人材の確保が課題である。

【申請内容】

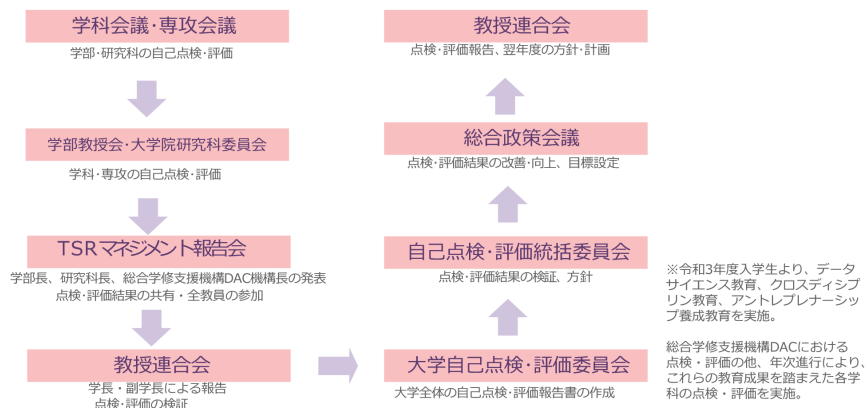
本学の目指す新時代の人材像を「地域戦略人材」＝「多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダー」と定義し、地域戦略人材の育成のために教育課程の改編（第Ⅰ類共通教育科目、第Ⅱ類専門科目、第Ⅲ類アントレプレナーシップ養成科目）及び側面的な支援（IR・FD）、各組織の改革、人材の育成・確保等を推進する。

【これまでの改革について】

教育課程の編成 教育方法の改善	組織の再編	社会連携	人材の確保 人材育成 情報公開	「三つの方針」を 通じた学修目標の 具体化
<ul style="list-style-type: none"> ・第Ⅰ類科目「共通教育科目」の全学的導入 ・データサイエンス教育、リーダーシップ教育の実施 ・チュートリアル教育、チームティーチングの実践 ・第Ⅱ類科目（専門教育）に「学融合ゼミナール」を全学的に導入 ・第Ⅲ類科目（キャリア教育、資格科目等）を改編し、後期共通教育として、「アントレプレナーシップ養成教育」を導入 	<ul style="list-style-type: none"> ・「学長室会議」を「総合政策会議」とし、学長、副学長、専務理事、事務局長、副専務局長だけでなく、全事務部長、全学長補佐も出席する会議とした。 ・学内第3の組織「総合学修支援機構DAC」を設置し、共通教育の実施や教職協働・学修支援を推進した。 ・「教学IR推進部会」を学長の下に設置し、学修成果の可視化に向けた全学的な企画・調査・報告等を実施し、データに基づく教育改善について共有・改善を行うこととした。 ・「FD委員会」を設置し、教職協働において、FD計画を充実させ、教育の質の向上を目指すようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「すがも街なかキャンパス」を本格的に展開し、令和3年4月に巣鴨地蔵通り商店街内にアントレプレナーシップ養成教育を推進するオフィスを開設した。また、6月には「街なか教室」を設置し、同時に地域の特産品を販売するアンテナショップ「カモールマルシェ」、落語を楽しむことができるカフェ「カモール志学亭」をグランドオープンした。 ・データサイエンス教育における産官学連携（株式会社サイゼリア、三鷹市、ニューラルポケット株式会社） ・アントレプレナーシップ養成教育における産学連携（株式会社ソフバンク、株式会社フジテレビジョン、商店街等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・チューター養成講座（高等教育における総合的学修支援者育成プログラム）の実施による、チューターの育成採用だけでなく、高等教育業界における学び直しや情報提供等に貢献した。 ・学生によるミタカ・ミライ研究アワードにおいて、本学学生（データサイエンス授業履修者有志チーム）が市長賞受賞 ・実務家教員等の登用（データサイエンス、アントレプレナーシップ等） ・FD・SDの全学的な実施（職員については、SD研究費・手当の支給も実施） ・「日経地方創生フォーラム」において、本学、企業（ソフバンク等）、学生による報告・意見交換等を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「大正大学3つのポリシー」を改正し、Society 5.0で実現する変化の激しい知識集約型社会を生き抜くための新たな目標である「新共生主義」及び「地域人スピリット」を明記した。 ・各学科における学修目標に、「知識集約型社会を見据えて、自らの専門分野の学問領域と他の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑で多様な現代社会の課題に応えることができる能力・資質」を増補した。 ・カリキュラム・アセスメント・チェックリスト（各学科の学修成果の可視化）、TSRマネジメントシート（学部学科自己点検・評価）において、IR（学生調査等）を活用した点検・評価を推進した。

【大正大学における自己点検・評価の仕組み】

(学部・学科、研究科・専攻の自己点検・評価：TSRマネジメントシートの作成)

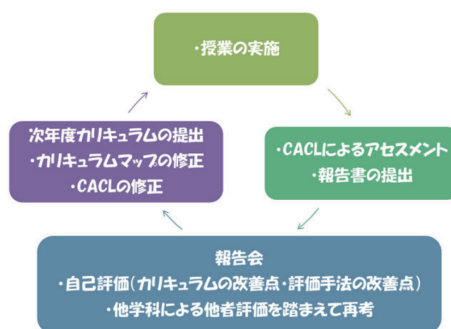


【大正大学における自己点検・評価の仕組み（2）】

評価・改善のためのアセスメント体制の構築

- 前年の3つのポリシー策定を受けて、平成29年度より『カリキュラム・アセスメント・チェックリストを活用した「自己評価報告会」』を開催している。「観点別到達目標と評価基準」「CACL(カリキュラム・アセスメント・チェックリスト)」をもとに専門科目を運用した成果を自己評価し、カリキュラムとアセスメントの改善点を検討している。

- 自己評価の手順は以下の通り。
 - 各学科・コースにおけるCACLによるアセスメントの実施。
 - FD委員会・EM研究所による調査分析協力。
 - 教務担当教員による自己評価報告書の提出。
 - 「CACLを活用した自己評価報告会」において自学科・コースの自己評価報告と他学科・コースによる他者評価のフィードバック。
 - 他者評価をふまえた自己評価報告の修正。
 - 次年度カリキュラムの策定。CACLの修正。



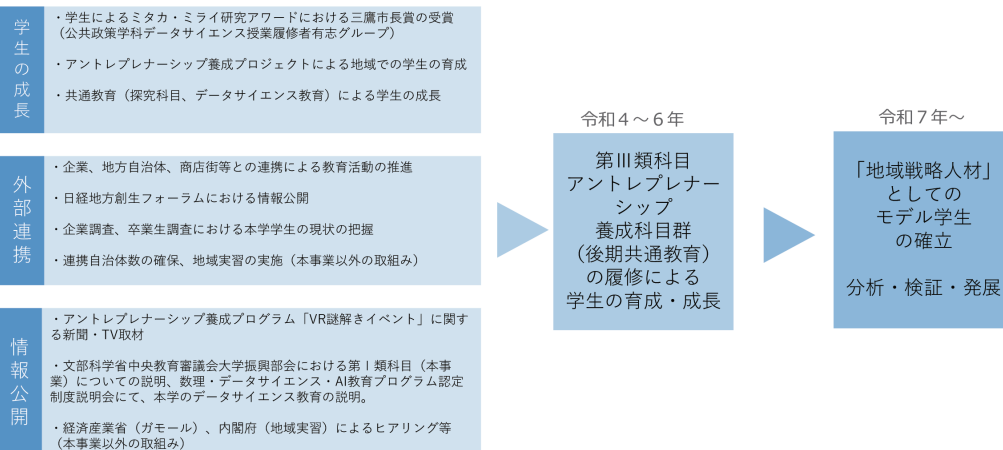
【これまでの取組みの成果について】

1. 文理融合においては、データサイエンス教育（1・2年必修）の成果が、文系大学の取組みとして社会的に高い評価を獲得。学融合のプログラムにおいては全学の学部・学科の連携によって「クロスディシプリン」の基礎的な理解が浸透し、学生の複眼的な思考が涵養されつつあること。
2. この全学共通教育を支えるチュートリアルシステムが確立し、効果をあげていること。
3. 来年度から始まる後期共通教育科目である「アントレプレナーシップ養成教育プログラム」は、すでに本年度からプレオープンにしており、来年度に向けて本格開講の準備が整っていること。
4. 本事業によって、社会とのインタラクティブの構築を加速、このことによって社会課題解決のための学修機会が大きく前進していること。
5. 本事業（主軸である全学共通教育科目）の実施について、大学全体がこの2年間様々な試行錯誤を繰り返す中で、その教育的価値に対して共感性が向上している。このことを受けて、次年度から始まる後期共通教育科目によって学生の就労意識を飛躍的に向上させる取組みとなること。

などが挙げられることから、今後、学長のリーダーシップのもと、本事業に掲げる教育ビジョン・目標を正しく評価し、変化の時代に対応しながら本取組みを推進していくことが求められる。

一方、理事会においても、資金面を含めた経営資源（ヒト・モノ・情報）を投入し、教育内容を充実させるためのFD活動を活発にし、加えて、組織的な総合学修支援体制をさらに強化する予定である。

【現状の成果と今後の寄与について】

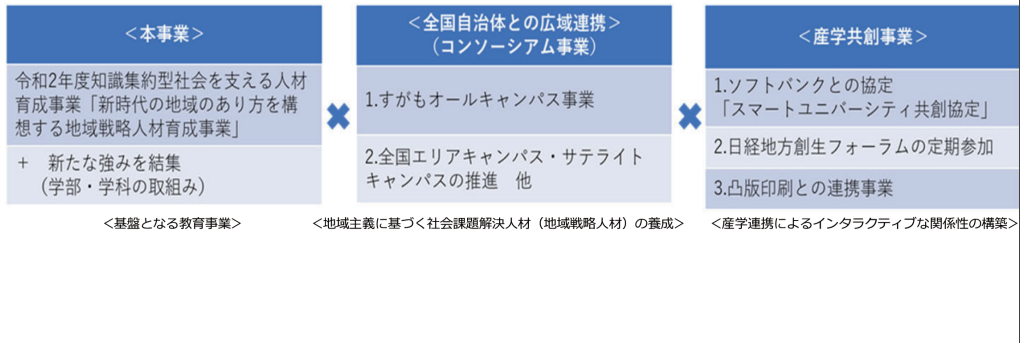


【本事業の継続的・発展的実施について】

①本学の創立100周年（2026年）記念事業である大正大学ブランディング活動の中核事業として当該教育活動を発展的・継続的に実行する（第3次中期マスタープラン改訂版 R4.5）。

②この取組みを通じて、大正大学が掲げる地域主義教育による社会貢献活動、産学連携によるインタラクティブ性を強化し、理論と実践について、フィールドでの学修を通じて、具体的な教育成果を示し、「社会課題」解決能力を養成するオンリーワンの大学としての存在感を確立する（R4.10.31 理事会・評議員会）。

③本事業を基盤とした大学ブランディング事業を展開する（2026年大正大学創立100周年記念事業）。



【参考】

✓ 本事業採択により、令和3年度学校法人大正大学事業計画に本事業の推進を位置付けただけでなく、学長のガバナンスのもとに教育活動を推進するために、学長重点領域として本事業を含めた活動の進捗管理を行い、令和4年度事業計画にも学長重点領域を含めた計画を策定した。

✓ 令和3年10月12日理事会において、第3次中期マスタープラン（中長期計画）を改訂・増補し、中期マスタープランにおいて、本事業を次のように位置づけた。URL: https://www.teis.ac.jp/common/doc/guide/outline/management_vision/master-plan-03-supplement.pdf

令和2年度に文部科学省に採択された“大学教育再生戦略推進費”「知識集約型社会を支える人材育成事業」（令和2年～6年度までの助成事業）を一過性なものではなく、

(1)本学教育改革の中長期的な指針として位置づける。

(2)理事会が、本教育を推進する上での“最高意思決定機関”の役割を果たし、「ヒト・モノ・カネ・情報」を集中させ、責任を持って確実に実行を継続するものであることを確認する。

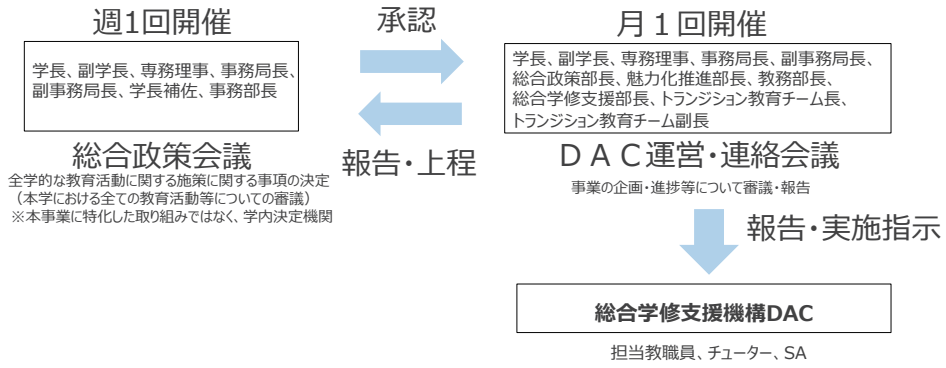
✓ 令和4年10月31日理事会において、現状認識を下記とし、100周年（令和8年）に向けてさらに取組みを深化させることとしている。

(1)文部科学省に採択された「知識集約型社会を支える人材育成事業」が、令和6年度までの採択終了まで約2年間を残しているが、文理融合・学融合、特にデータサイエンス教育において、数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）において、プラスで選定される等、文部科学省をはじめとする教育関係者から高い評価を得ています。

(2)「知識集約型社会を支える人材育成事業」の助成期間終了までの約2年間は、卒業後の就職のキャリアパスとして、有効な教育活動(理論と実践によるアントレプレナーシップ養成教育等)の実施に向けた準備が進んでおり、さらなる成果が期待できます。

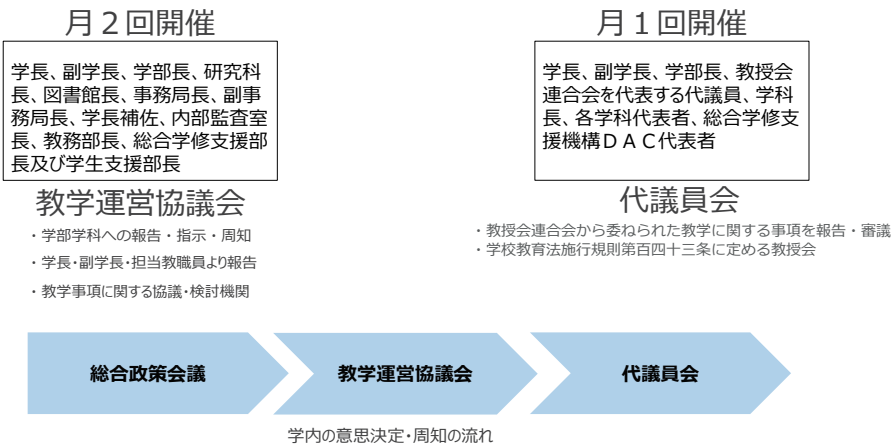
(3)本学の活動においては、産官学連携が整っており、全学一体となったブランディングに向けて、一元化した運営体制を整えることが可能です。

【本事業の企画立案・決定について】



【本事業についての学内の周知、学部学科への指示について】

※本事業に特化した取り組みではなく、学内決定機関



【評価・検証・分析等について】

D A C 運営協議会・連絡会議
構成員等の報告

外部評価委員会

- ・本事業に関して外部有識者からの助言・評価
- ・客観性、教育の質の担保

学長、副学長、学部長代表者、学
長補佐代表者、EM研究所教職員、
総合政策部課長

教学IR推進部会

- ・全学学生調査の実施、分析、報告
- ・数値による教育成果についての検証・報告

常任監事、学部長、D A C 運営協
議会・連絡会議構成員

教育改革特別委員会

- ・本事業に関する助言・審査・評価（学内）
- ・学部教育と本事業の接続・検証

副学長、学長補佐、担当学長補佐、
教務部長、総合学修支援部長

FD委員会

- ・教育活動の改善、質の向上
- ・FDの企画・実施・分析・連絡調整等

【SD・FD計画の目的と実施内容】

- ・本学の目指す「地域戦略人材」の育成に向けて各学部・学科のカリキュラムポリシーについても大きな変革を求めていくにあたっては、学融合を実装化する責任ある指導とサポート体制を時間をかけて構築すると共に、各教育プログラムを連携して成果を可視化していく組織的な取り組み（教職協働、教学IRの強化と活用、FD・SDの強化等）が求められる。
- ・SDについては、働き方改革の観点からも個人の能力・資質に対応した研修が求められていることから、新設する人事・働き方改革課において多様なプログラムを編成する。
- ・FDについては、学修者の学びを支える教員の資質・能力の開発・向上・評価する仕組みを構築し、今までのFD活動から一歩踏み出した「教育力向上プログラム」を開発し、本事業を推進・継続するための人的リソースの向上・拡充を進める。



【令和2年度】

- ・教職員向け特別プログラムを令和2年度に実施し、3月10日から3月31日にかけて実施した。内容については、全7講座とし、DX推進の現状把握と理解を目的とした講座や、Excelをデータベースとして活用する際の機能やテクニックを習得する講座、BIツール「Tableau」を使ったデータの可視化力向上のための講座、そして情報の効率的な伝達のための図式化スキルを習得するワークショップを開講した。
- ・FD計画に位置付けられている新任教員FDについて、3月22日・23日において、本事業をベースとした本学の地域連携活動や共通教育カリキュラムの改革の研修を実施した。
- ・FD規程の整備として、現行のFD活動を規程化した。その他にFDに関わる教員の採用計画、FDマップ等の策定は、次年度以降に順次行っていく予定である。また、SD計画を改正し、データサイエンス関連のSDの位置づけを明確化した。

【SD・FD計画の目的と実施内容】

【令和3年度】

・「知識集約型社会を支える人材育成事業」の共通理解・コンセンサスを得るため、全職員を対象として、研修会を実施した。職員においても知識集約型社会に向けた学生の育成について、目的・趣旨・方針等を理解・共有することができ、学生への教育力・教育支援力を適切に実施するよう取り組むことができた。

・FDについては、FD活動を規程化し、令和3年4月1日にFD委員会を設置した。そして、全職員を対象とした全学FDとして、Ⅰ類、Ⅲ類の構成や各科目の内容、Ⅱ類との運動性についてのカリキュラムの研修会を実施した。教育活動を推進する全職員に対して、本事業の取り組みである教育課程の構成（第Ⅰ類、第Ⅱ類、第Ⅲ類）等を理解することにより、学生への教育活動の効果的な推進や、学生の学修成果の質の向上のための教育活動・教育方法等を検討することができた。

・第Ⅰ類科目において、教職員・チューター等がFD・SDとして研修会やミーティング等を実施した。第Ⅰ類科目の研修会等については、チームティーチングを行うにあたり、学生への効果的な教育活動や学修支援へ役立つことができた。また、チューターへの研修により学生への教育支援力等を向上させることができた。

【SD・FD計画の目的と実施内容】

【令和4年度】

・「日経 地方創生フォーラム アフターコロナの地方創生」に参画し、セッション1「デジタル時代における実践的アントレプレナーシップ教育の成果と課題」において、本事業等の紹介を行い、教職員・学生が聴講した。

・FDについては、全学FDとして、「理論×実践のハイブリッド教育とは」、「進路を見据えた学生記録の蓄積と支援」というテーマの研修を行った。学科の「理論」と「実践」における特色を言語化することや、卒業後の進路情報や実際の卒業生の進路状況について共通認識を持ち、進路を実現するための支援方法、および学生がLMSにどのような記録や情報を蓄積すれば効果的な支援を行うことができるのか等についてのワーク等を行った。

・第Ⅰ類科目において、教職員・チューター・SAがFD・SDとして研修会やミーティング等を継続して実施した。データサイエンス教育におけるtableauの活用方法や学修支援についての研修も実施した。加えて、「リフレクション活用の可能性と課題」と題して、チュートリアル教育において活用しているリフレクションについて理解を深めことを目的としたFD研修会を総合学修支援機構DAC内で実施した。

2. 事業の報告

(1) 新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業



副学長
総合学修支援機構 DAC
機構長

神達 知純

事業全般について

「新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業」を推進する総合学修支援機構 DAC の機構長を令和 4 年度より務めております。

近年、本学は「地域主義」を掲げて、自治体との連携体制を築きながら、日本各所の地域課題に向き合ってきました。本事業の推進にあたっては、データサイエンス教育、アントレプレナーシップ育成教育など、課題解決を目的とした教育プログラムを導入して、全学的な教育改革を進めてきました。

その中でとくに大きく改編したのは、前期共通教育である第Ⅰ類教育と、後期共通教育である第Ⅲ類教育です。詳細については後述しますが、本学では学部を超えた全学共通科目を開講し、1・2年次の必修としていますが、これを第Ⅰ類教育といいます。現在、大正大学には 6 学部（社会共生学部・地域創生学部・表現学部・心理社会学部・文学部・仏教学部）があり、学問領域も拡大しています。そのなかで全学共通教育を実施することは実は難しいタスクとなりますが、まずはここに改編の手を加えました。2 年次以降は各学科の専門教育（第Ⅱ類）が中心となりますが、並行して、後期共通教育（第Ⅲ類）科目が開講されています。これまでも本学では第Ⅲ類というカテゴリーが存在し、たとえば教職課程の諸科目などがそこに含まれていました。本事業を推進するにあたり第Ⅲ類にアントレプレナーシップ育成教育を加え、後期共通教育という位置付けを明確にしました。卒業後のキャリア形成を見すえて、全学の学生が共通で選択できるコースをそなえたことが、本事業の大きな目玉となっています。

令和 3 年度は第Ⅰ類教育の全面的なリニューアルの初年度にあたり、チュートリアル教育を特徴とする各「探究」、課題解決型の手法を採り入れた「データサイエンス」が全学で実施されました。令和 4 年度からは、第Ⅰ類教育において「リーダーシップ」という新たな授業が始まりました。また第Ⅱ類では「学融合ゼミナール」が、第Ⅲ類ではアントレプレナーシップ育成教育の基礎科目である「超スマート社会論」、「アントレプレナーシップ論」等の授業が実施されています。次年度（令和 5 年度）から第Ⅲ類教育として、スキル科目と実践科目の授業科目群が本格的に展開します。よって、現時点で実施されている本事業関連の授業は、第Ⅰ類全般、第Ⅱ類における「学融合ゼミナール」、第Ⅲ類におけるアントレプレナーシップ育成教育の基礎科目ということになり、その成果を確認・検証しています。

第Ⅰ類教育について

第Ⅰ類教育は、「人間の探究」、「社会の探究」、「自然の探究」、「総合英語」、「データサイエンス」、「リーダーシップ」という授業科目から構成されており、30単位が必修となっています。これらの授業で育成する資質・能力については、互いの関係性を図で示して、教職員・学生に周知しています。全ての授業科目では主体的学修態度を涵養することが主眼に置かれています。これは「生涯を通じて学び続ける」、「自律的な学修者を育てる」という現在の日本全体の方針に、本学が答えたものごと理解いただいて結構です。

また、第Ⅰ類教育は、複数教員とチューターによるチームティーチング、教員とチューターによる総合的な学修支援（チュートリアル教育）を特徴としています。各授業ではリフレクションを毎回の課題とし、学生が学びと経験を統合し、自らの成長につなげることをめざしているという点も一つの特徴です。その際には、本学が独自に開発したDAC eポートフォリオにリフレクションを記入することになっています。教員やチューターは、そのリフレクションの記述を分析することで、学修成果を把握し、授業改善や学修支援のあり方を図っています。たとえば「社会の探究」で実施されたリフレクションの分析を見ると、学生の記述内容が深まりを見せているという特徴がみられました。ただ字数が多くなっているわけではなく、最初の授業では感想程度しか書けなかった学生が、授業を受ける中で、その授業での気づき、自分の経験などを交えてリフレクションの内容を深めていくという様子が見て取れます。このようなことに学生自身が気づき、より学びを深めていければと考えています。さらに、eポートフォリオでは「学びと成長の記録」というフォーマットがあり、1年次の学生が、自らの目標・計画・行動・ふりかえりを記入することができるようになっています。これは、学生のキャリア形成に資することを目的に作られたものです。総合学修支援機構DACでは、各学生の「学びと成長の記録」を用いながら、1年生対象の全員面談を実施しています。

さて、令和4年度から第Ⅰ類科目では「リーダーシップ」という授業が始まりました。その授業名からは、社会で自らがリーダーになって、他者を引っ張っていくというリーダー像を連想しがちですが、そのようなことを目的とはしていません。「一人ひとりにリーダーシップがある」、つまり「リーダーシップに多様性がある」ということがリーダーシップの現代的な理解とされています。授業では、学生が「リーダーシップの多様性を理解する」、そして「他者評価をふまえてリーダーシップ像を再構築する」、「自らの目指すリーダーシップを考え言語化する」ということを目標にしています。学生にアンケートも実施しており、アンケートでは1回目に「リーダーシップがあると思うか」、また「リーダーシップが必要だと思うか」という問いをし、最終回の授業でも同じように質問しました。その結果、第1クオーターの7回の授業を受けて、「リーダーシップがない」と答えていた学生が、「ある」という回答に変化する例が多く見られました。また、リーダーシップが「必要ではない」と回答した学生でも、授業が終わる頃にはリーダーシップが「必要である」と回答する例も見受けられました。この授業がリーダーシップの多様性を主眼に置いたことで、学生の認識に変化が見られます。本学の学生はどちらかというと真面目で、割とおとなしいタイプの学生も多く、自己肯定感が低い学生も見られました。この「リーダーシップ」という授業で、自己肯定感を少しでも高め、アントレプレナーシップ育成教育へ背中を押してあげることができればと考えています。

学修成果の可視化について

次に、学修成果の把握・可視化について説明します。これらについては教学マネジメントの根幹だと考えています。学修成果の可視化は、一人ひとりの学生が自らの学びの成果や身に付けた資質・能力を自覚し、活用することが本質だと考えています。そして、「大学が教育成果を把握し、可視化することも必要である」と文部科学省の教学マネジメント指針にも出ています。本学の取組みについては、教育成果の可視化を中心に推進しています。現在はLMSを部分的に導入していますが、令和5年度からは本格的にLMSを導入し、その中で学生が自らの学びの成果をより活用できるようにしたいと考えています。よって現時点では学修成果の可視化のため

の指標を作成しているという過渡的な段階になります。

現状の課題については、次の通りです。一つ目は、3つのポリシーに基づく学生の学びと成長という視点に立つこと。つまりは学生が身に付ける資質・能力を精査して、より3つのポリシーをブラッシュアップする必要があると考えています。二つ目は、教員が何をどう教えるかということではなくて、学生が何をどのように学んでいくかという視点から、カリキュラムや授業の改善を図って行く必要があります。最後に、LMSを授業運営や学修支援に役立てるだけではなく、学生が自らの学びを蓄積し、活用できるような仕組みとして整えることが求められていると考えています。

さらに、学修成果の可視化については、本事業の申請時に設定していた成果指標が現在どれだけ達成されているかが課題と言えます。学修時間や成長実感、目標到達度などを当初の成果指標にしており、授業評価アンケート、大学 IR コンソーシアム学生調査、コンピテンシーを測る PROG、企業調査、各種検定等のスコアが目標値として設定されています。本学では教学 IR 推進部会等において、各データを分析・検証しています。これから第Ⅲ類教育が本格的に展開されるにあたり、全体的にどのような教育上の効果や実績があったかを測り、それを説明することが必要となってきます。

今回は学生のコンピテンシーを測定する PROG、企業を対象にした調査、第Ⅰ類教育で行っている定期面談について説明します。

本学の教育ビジョンは「4つの人となる」といい、仏教の精神から慈悲・自灯明・中道・共生を掲げており、PROGで測定した指標との関連を検討しています。PROGについては、数年前から実施しており、全1・2年生に実施しています。そして、学生のPROGのスコアがどのように伸長したのかも把握しています。入学してから学生たちのコンピテンシーがどのように伸長しているかという点、1年次と比べ、2年次の計画立案力、感情制御力、親和力などのスコアが上がっていることが分かります。そして、対課題基礎力が伸長していることも分かります。これについては第Ⅰ類教育だけではなく、第Ⅱ類教育の効果もあると考えています。これが教育の成果であるならば、さらにこれを伸長できるように努力していきたいと考えています。

毎年行っている企業調査については、本学の学生が就職した企業に調査を行い、その企業に対してアンケート調査とヒアリングを実施しています。本学の学生は、人柄や仕事に対する積極性などで企業には評価されている部分がありますが、反対に独創性やITスキル、国際的なコミュニケーション能力などに関しては少し評価が低く出ています。このように企業の声を聞くことで、これから本事業の成果を検証することができるのではないかと考えます。調査結果については、学内で共有しており、全教職員を対象とした報告会も実施しました。今後も有効活用していきたいと考えています。

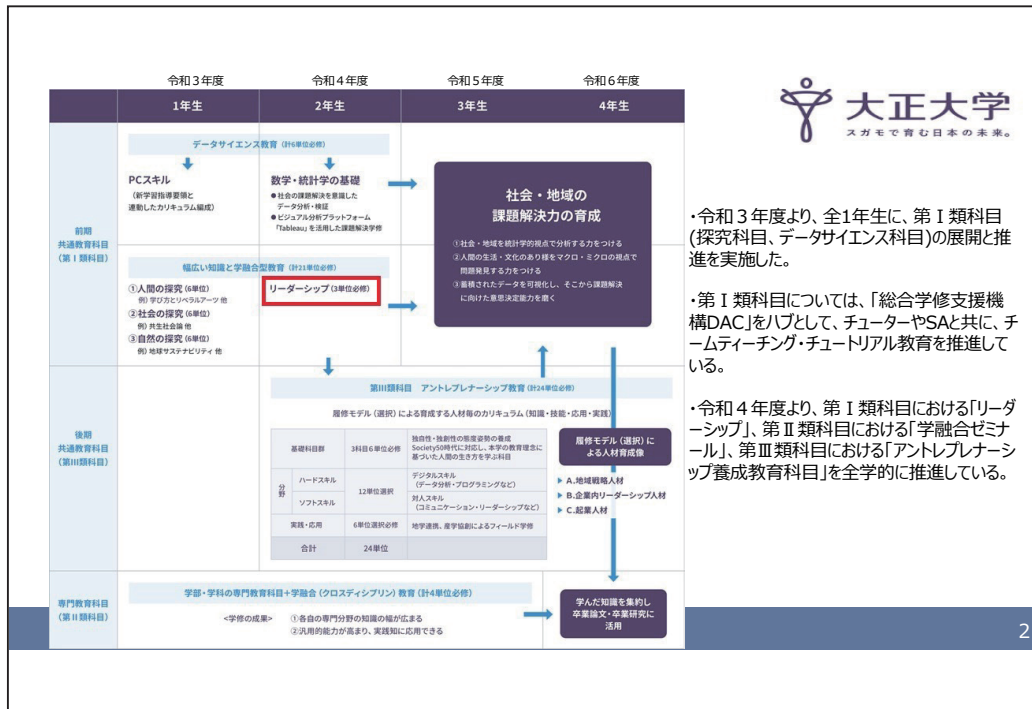
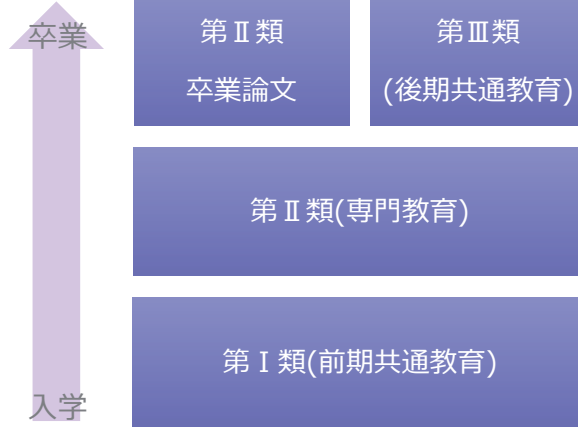
チュートリアル教育における定期面談の話については、総合学修支援機構 DACの教員とチューターが1年生全員に面談をしています。年2回、夏期と冬期に実施しています。面談だけをして終わりではなく、面談の結果をふまえて学生の主体的学修態度の総合的印象度をスコアにし、さまざまな課題を浮き彫りにしています。さらに授業の出席、あるいはeポートフォリオに記入したリフレクションなどを含めて、総合的に主体的学修態度を5段階評価し、その結果を分析しました。前述したように、第Ⅰ類教育では主体的学修態度の涵養を何よりの課題としています。主体的学修態度が低い学生にはどのような課題があるかという点、そうした学生にはさまざまな身の回りの学修環境に問題があることがわかってきました。さらに、学修態度のスコアが高い学生においても、授業内で、たとえばグループワークにさまざまな悩みを抱えているなどの課題も明らかになりました。私たちが普段、授業を行うにあたって、これからより参考にしていかなければいけません。また、チュートリアル教育では総合的に学修支援をすることとしていますが、一律に学修支援をしてもなかなかうまくいきません。そのため、今後は学生にグラデーションをつけた学修支援をしていくこととしています。1年生の主体的学修態度に関する分析結果は今後も活用していきたいと考えています。

おわりに

最後に、建学の理念について説明します。これは目指すべき人材像であって、大学卒業時に達成できるような目標ではないと考えています。本学の場合、大乘仏教の菩薩のような生き方として、「智慧と慈悲の実践」を体現することは決して容易ではありません。一生かけてもできないかもしれません。建学の理念とは、その大学に入学して卒業する者が一生をかけて目指すべき目標といえるのではないかと考えています。そのような願いが建学の理念には込められているのではないかと私は思います。その意味で、生涯にかけて自律的に学び続けるという学修者本位の教育は、本学というよりも、仏教系大学の建学の理念によく呼応するものだと考えています。

また、そう考えると、高大接続の視点というのも重要になってきます。学修者本位の教育への転換は、高等学校でも行われています。新しい学習指導要領に沿った教育が始まっています。一人の若者が高校から大学へ、大学から社会へと進む過程を、彼らの学びと成長を信じて支援していくことが私たちには求められています。

大正大学の教育課程



■ 第 I 類科目で育成する資質・能力

主体的学修態度	自ら進んで学修し、さまざまな学びや経験を統合して、自らの学びを深めることができる
知識理解・活用力	知識・情報を的確に収集・活用して、事象を複眼的に考察し、創造的な発想をすることができる
表現力	読者や聴衆、状況や場面に即して適切な手段を用いて、分かりやすくかつ説得力のある表現をすることができる
課題探究・解決力	自ら「問い」を発して探究するとともに、解決策を重層的に構想し、現実的に解決することができる
情報・データ活用力	情報リテラシー、データリテラシーを身につけ、課題解決に役立てることができる
対人力	他者と協働して活動するとともに、リーダーシップを発揮して、他者との共生を目指すことができる
セルフマネジメント	自らの価値観を大切に、将来を見定め、力強く生きていくことができる
チャレンジ精神	新しいこと、困難なことに挑戦し、新しい価値創造を目指すことができる
地域密着力	地域の人々と交流し、地域の実情を理解して、地域の人々と協力して、地域の課題を発見し、解決できる（地域×学）

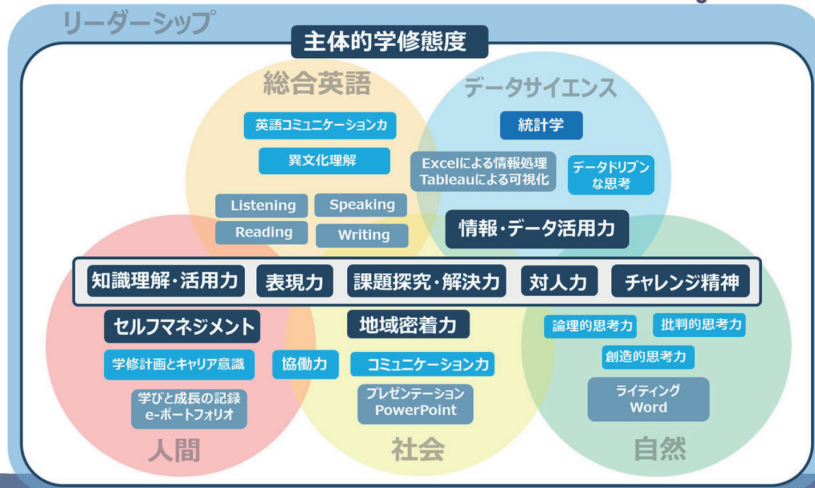
3

■ 第 I 類科目群の概要

科目群	概要
探究科目 (1年次)	「人間の探究」「社会の探究」「自然の探究」のそれぞれに設定されている「テーマ」について学ぶと同時に、資質・能力を統合的に育成する。学年末には自らの問いと学びを統合したアカデミック・エッセイを作成する。
データサイエンス (1・2年次)	情報リテラシーと統計の基礎を学びながら、論理的思考力を高め、データを用いて社会の課題を解決する力を育成する。
総合英語 (1年次)	国内外で多様な文化および価値観をもった人々とのコミュニケーションに対応できる力を涵養する。
リーダーシップ (2年次)	社会人として必要なコミュニケーションスキルを修得し、チームで互いに励まし合い成長するリーダーシップを身につけ、同時に自らのキャリア形成を考え、力強く社会参加するための準備を行う。

4

第 I 類科目と育成する資質・能力との関係

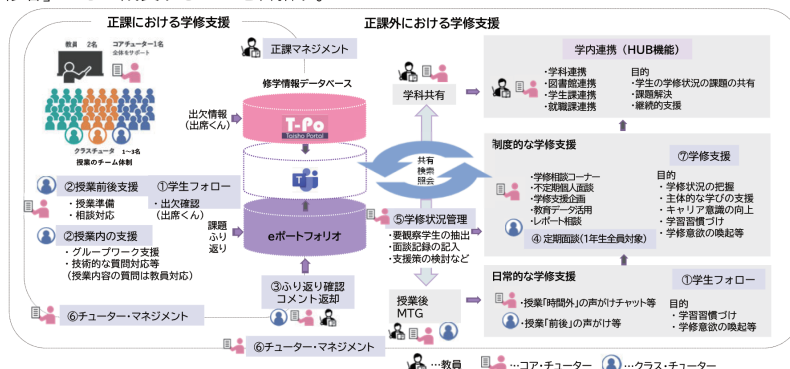


5

大正大学のチュートリアル教育—全体像—



総合学修支援機構DACでは学修者の自律的・主体的な学びと成長を総合的に支援するための教育体制としてチュートリアル教育をおこなっている。「一人ひとりの学生」の学びの支援をおこなうことで、「自律した学修者」として成長することを目指す。

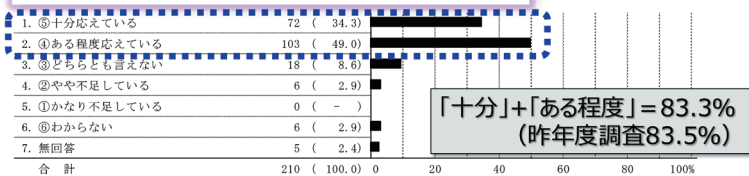


6

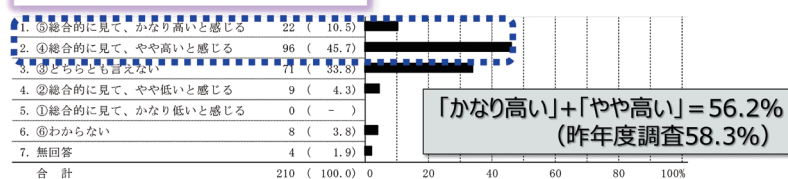
TSR総合調査(企業対象アンケート調査)について



本学卒業生は人材ニーズや期待に答えているか



本学卒業生の能力の評価

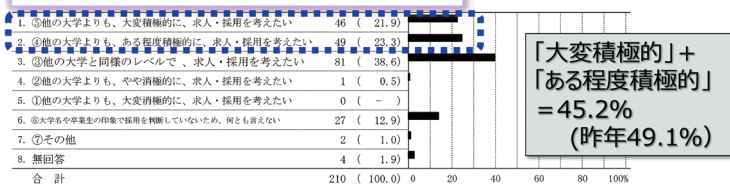


7

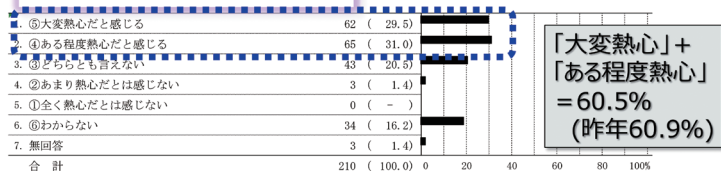
TSR総合調査(企業対象アンケート調査)について



今後の本学卒業生の採用に関する所感



本学就職支援活動への所感



8

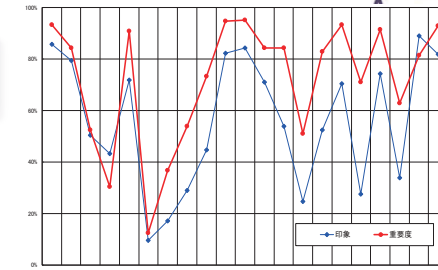
TSR総合調査(企業対象アンケート調査)について



本学卒業生の印象×御社にとっての重要度

21項目について、概ね企業等にとって重要と考えられる項目について、本学卒業生の印象もよいことがわかる。

本学卒業生の印象がネガティブ(40%未満)は、「外国語能力」「ITスキル」「データを活かした問題解決」「独創的なアイデア」「リーダーシップ」「中長期的なビジョン」。



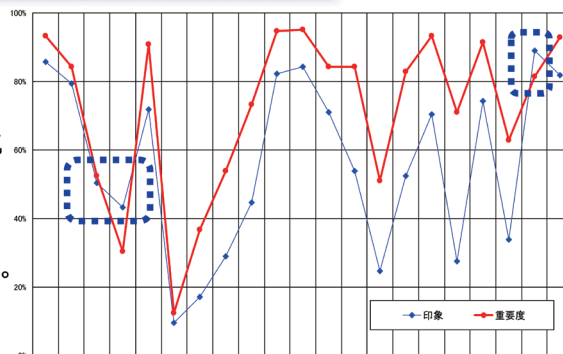
項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
印象	88.7	78.5	80.5	42.3	71.9	9.5	17.1	29.0	44.8	82.4	84.3	71.0	53.8	24.8	52.4	76.5	27.6	74.3	23.8	88.0	81.9
重要度	83.3	84.3	52.4	10.5	81.0	12.4	36.7	53.9	73.3	88.8	85.2	84.3	84.3	53.0	82.9	83.3	71.0	81.4	82.9	81.4	82.9

TSR総合調査(企業対象アンケート調査)について



本学卒業生の印象×御社にとっての重要度

重要度より本学卒業生の印象が高い、あるいは、拮抗しているのは、「幅広い教養」「専門知識」「人柄が温厚」。これらは強みと言えるか。

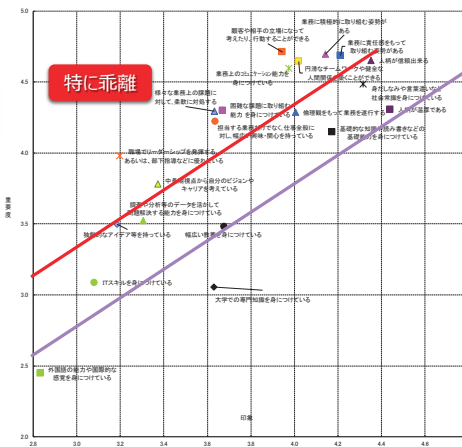


TSR総合調査(企業対象アンケート調査)について



本学卒業生の印象×御社にとっての重要度

重要度と本学卒業生の印象のスコアの差が比較的乖離しているのは、「**リーダーシップ**」「**コミュニケーション**」「**円滑なチームワーク**」「**顧客の立場で行動**」「**柔軟な対応**」「**担当業務以外への幅広い関心**」「**積極性**」「**困難な課題に取り組む**」等。これらが課題か。



「チュートリアル教育」における定期面談の位置づけ



総合学修支援機構 DAC トランジション教育チームでは、大正大学が掲げた「地域戦略人材」→変化の激しい社会において主体的に学び、当事者意識をもって社会課題を多面的に捉え、解決に取り組み、地域に貢献する人材→を育成するという目標を卒業までの4年間で達成するにあたり、初年次共通教育において「チュートリアル教育」を導入している。

DAC「チュートリアル教育」は、一般的に別々に扱われる教員を主体とする初年次共通教育とチューター・SAIによる学修支援を融合した教職協働に特色がある。

実際、トランジション教育チームでは、初年次共通の必修科目の探究・DS・リーダーシップにおいて複数の教員とチューターによるチームティーチングを実施し、学生個別の学修状況を把握し、個別のアプローチを主眼とした学修支援を展開している。

また、「**自律的な学修者の育成**」という目的表現のために、「一人ひとりの学生の」**主体的学修態度の涵養**」を企図するとともに**学生の成長を確認するために、教員・チューターが協働して年間の学修支援計画のもと1年生全員との定期面談**（年2回）を企画・実施している。

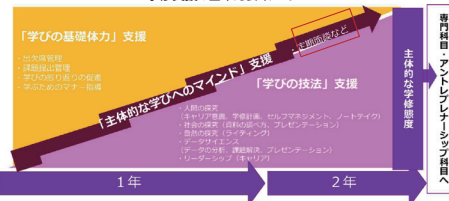
大正大学第1類科目におけるチュートリアル教育のねらい (令和4年6月22日教学運営協議会配布資料より)

授業と学修支援を通して、以下を育成する。

- 1. 主体的な学びへのマインド(心)**
 - ・自分が大学で学ぶ意味を見出す
 - ・社会課題に対する当事者意識を持つ
- 2. 学びの基礎体力(体)**
 - ・ルールを理解し、学修を習慣化できる
 - （一休まず出席する、課題を必ず提出する）
 - ・自分の学びを振り返る
- 3. 学びの技法(技)**
 - ・課題抽出ができる
 - ・基本的な分析ができる
 - ・解決策を見出せる
 - ・他者に説明できる



学修支援の基本方針イメージ



定期面談の概要



概要	対象者：1年生全員（約1300名） 全体計画：夏期（2QT終了後）と冬期（4QT終了後）の年2回 実施者：クラスチューター、コアチューター、DAC専任教員
目的	「自律的学修者の育成」 ・学生がチューター面談を通じて、自図からの現状を把握し、目標・課題を再設定し、行動を計画できることを目的とする ・夏期面談では、第1・2QTの学びの振り返り、第3・4QTの目標・課題を再設定し、学年後半の学びに向けた学修態度を醸成する ・冬期面談では、第3・4QTと年度を通じた学びの振り返り、4月にeポートフォリオ「学びと成長の記録」に記載した『4年後のイメージ』「大学で学ぶ理由」を再確認し、2年次以降の学修につなげる
目標	「主体的学修態度の涵養」 1) 第1・2QTの学びの振り返り、第3・4QTの目標・課題をみずから言語化する 2) I 類科目の意味と大学で学ぶ理由について理解する 3) 計画を行動・実践できるモチベーションをあげる（具体的目標）

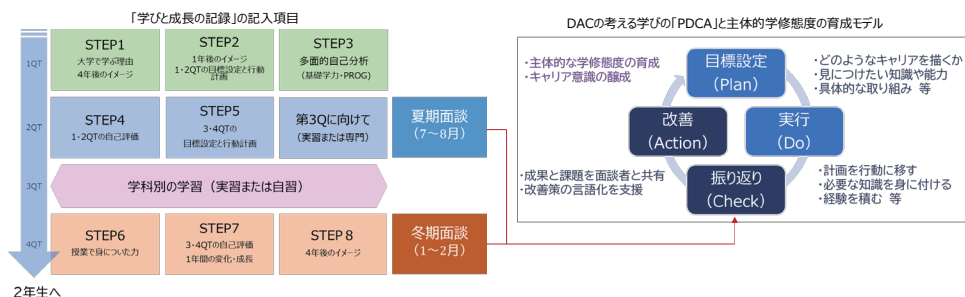
面談者の姿勢（研修時に説明） 面談では、まず、信頼できる存在と思ってもらうことを重視している。そこで、マニュアル的に進めるのではなく、学生とのラポール形成（**尊重・類似性・ベネフィング**）を意識し、学生のペースや状況に合わせて進めている。

13

【参考資料】定期面談の仕組み



1年生は、将来を見すえた学びの「PDCA」をまわし、自ら考えて行動する主体的学修態度を身につけるために、「人間の探究」（必修科目）のなかでe-ポートフォリオ上の「学びと成長の記録」を1年間かけて記入。



定期面談では、【1】大学では主体的学修態度が必要なことを理解している（状況確認）、【2】大学およびI 類科目を学ぶ意味を理解している（学修へのモチベーション確認）、【3】自分の現在の課題を理解し、言語化できる、【4】どうなることが自分にとって望ましいかを言語化できる、【5】今後のアクションを言語化できているかを確認・誘導して、学生が面談以降の自身の成長のためのアクションを起こすモチベーションが上がった状態になることを具体的な目標としている。

14

「主体的学修態度」に関する総合的印象の調査

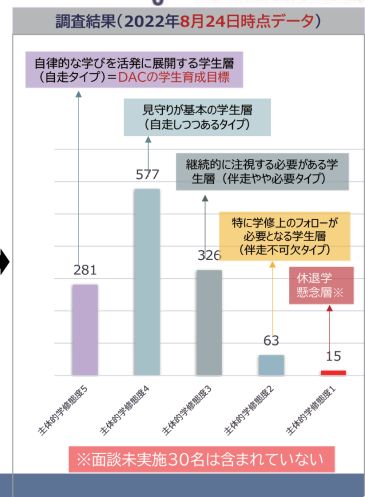


調査の目的と方法

DACのチュートリアル教育では、「**生涯主体的に学び続けるため自律的に学ぶ姿勢**」を身につけることを目標に、統合型教養教育プログラムを作成して初年次共通の必修科目（探究・DS・リーダーシップ）において、複数教員とチューターによるチームティーチングを実施している。同時に、学生個別の学修状況を把握し、個別のアプローチを主眼とした学修支援を展開している。そこで、今回は、以下の統一の尺度を設けて、面談時の「対話」を通じた学生の総合的印象を面談者（教員・チューター）に面談終了後に評定してもらうことで、1年生全体の学修状況と課題の把握を試みた。

観点	尺度				
	非常に優れている 5★★★★★	優れている 4★★★★	充分できている 3★★★	もう少し 2★★	改善が必要 1★
①出席課題	完璧にできている (青)	できている (ほぼ青)	大体できている (青が多い)	欠席や未提出が目立つ (青と赤が半々)	ほぼ欠席と未提出 (ほぼ赤)
②学びと成長の記録	しっかりと記入しており内容も充実	しっかりと記入してある	抽象的であるがだいたい記入してある	記入していない箇所がある。あるいは一言のみが目立つ	まったく記入がない。
③リフレクションの姿勢 (※口頭確認)	リフレクションの意義を理解して、質の向上を図ってきた(具体性がある)	リフレクションの意義を理解して、質の向上を図ろうとしている(まだ曖昧)	リフレクションの意義の理解は強いが、とらえず取り繕っている	リフレクションに取り組む意欲が低い(忘れてしまいがち)	リフレクションに取り組む意欲はない
④大学で学ぶ意味 (※口頭確認)	「大学で学ぶ理由」と1科目目の学びがしっかりと結びついている	「大学で学ぶ理由」と1科目目の学びを結びつけようとしている	「大学で学ぶ理由」はあるが、1科目目の学びの結びつきが弱い	「大学で学ぶ理由」はあるが、1科目目の学びの結びつきがない	「大学で学ぶ理由」がない

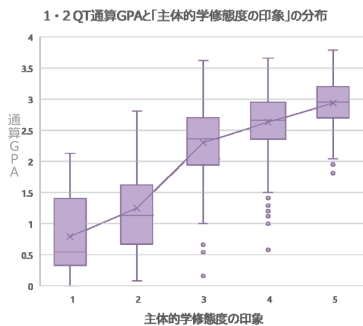
→「★★★」を基準に各項目を総合して判断して印象を選択



【参考】「主体的学修態度の印象」と学業成績の関係性



教員・チューターによる学生の主体的学修態度の印象と学生の学業成績の分布を整理したところ、面談を通して得られた「**主体的学修態度の印象**」と学生の**通算GPA**は、概ね対応している。「主体的学修態度の印象」は、共通尺度を設けているが個々の面談者の主観的な評定にならざるを得ない。しかし、GPAのような客観的指標と対照した結果、今回の尺度と評定に妥当性があると思われる。※1・2QTの学業成績の開示は、夏期面談終了後であり、面談者の判断がGPAデータの影響を受けてはいない。



「主体的学修態度の印象」と学科別通算GPA平均

平均 / GPA	主体的学修態度				
	1	2	3	4	5
公共政策学科	0.94	1.62	2.03	2.58	3.01
社会福祉学科	-	1.11	2.04	2.54	2.91
人間科学科	-	0.92	2.26	2.67	2.80
人文学科	-	0.40	2.28	2.61	2.85
地域創生学科	0.00	1.54	2.34	2.58	2.84
日本文学科	1.24	1.45	2.42	2.78	3.11
表現文化学科	1.13	1.19	2.57	2.73	2.92
仏教学科	0.26	1.35	1.86	2.14	2.85
臨床心理学科	0.52	1.01	2.37	2.62	2.89
歴史学科	1.23	1.22	2.10	2.70	3.05
総平均	0.79	1.25	2.30	2.63	2.93

1年生が抱える学修上の「問題」



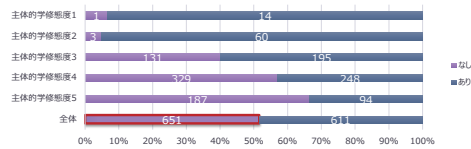
調査方法

面談（約20分）の後、面談者（教員・チューター）に面談を通して感じた「学生が抱えている問題」について以下の選択肢から選択してもらった（※複数項目の選択可。特にない場合は選択不要としている）。なお、面談者は、**学生の申告だけでなく面談時の様子など総合的に判断**している。

〈選択項目〉

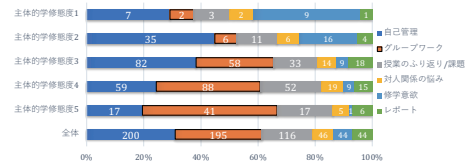
- ・グループワーク（苦手意識、コミュニケーション、ファシリテーション等）
- ・自己管理（朝起きれない、時間管理が苦手など）
- ・授業のふり回り/課題（多すぎる、難しい等）
- ・レポート（書き方がわからない等）
- ・対人関係の悩み（友人がいない、サークルやバイトの問題等）
- ・修学意欲（大学にいる意味がわからない等）
- ・その他（自由記述）

学生が抱える「問題」の有無



半数の学生は特に「問題を抱えていない」との認識をしている。
主体的学修態度のスコアが高いほど「問題」を抱える比率が減少傾向にある。

「問題」の内訳（重複選択あり、自由記述除く）



グループワークに問題を抱える学生の比率は主体的学修態度のスコアが高いほど高い傾向にある。自己管理に問題を抱える学生の比率は主体的学修態度のスコアが低いほど高い傾向にある。

17

主体的学修態度1の学生層の傾向

- ・ほぼ全ての学生は現状に「問題がある」
- ・修学意欲に大きな問題を抱えている。

そもそも大学で学ぼうとする意欲が起きていない、また何のために大学に入学したのか、についても悩んでおり、今後の大学生活を続けるか否かを迷っているものが多数。

学修意欲がわからない要因としては、**学生側が学修以外の問題を抱えているように思われる。**

たとえば、2QTは全欠席であっても「理由について話してくれなかった」、

「メンタル面の問題」、「学校に足が向かない」（本人曰く暑さの為）と

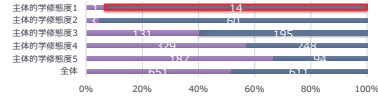
自由記述にあるように**対人コミュニケーションの問題をかかえている者もいるように思われる。**

学修支援上の課題

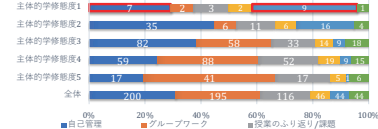
- ・低い修学意欲や自己管理とともに授業の課題やレポートに問題が複合
- 修学意欲（大学にいる意味がわからない等）という問題と自己管理、グループワーク、レポート（書き方がわからない等）、対人関係の悩み、授業のふり回り/課題（多すぎる、難しい等）の問題が複合的に絡み合っている。「今学んでいることがさっぱり理解できないために、動機づけがわからないことがある」ともいわれるが、そもそも学生側に「その時の学習内容を理解するための基礎知識や基礎学力をもっていない」という理由」（北尾,1984）も背景にあるように思われる。



学生が抱える「問題」の有無



「問題」の内訳（重複選択あり、自由記述除く）



北尾倫彦・梶田敏一編「おちこぼれ・おちこぼし〜なぜ学業不振におちいるのか」有斐閣選書、1984

18

主体的学修態度2の学生層の傾向



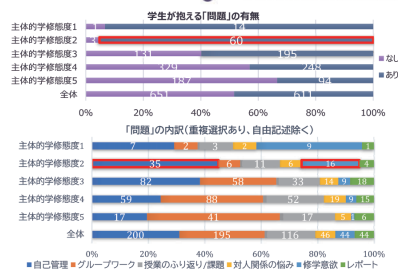
・ほぼすべての学生は現状に「問題がある」

・自己管理とともに修学意欲が低いのが特徴的である。

→修学意欲については、「休学も選択肢」、「3月末で退学する見込み」とあるように、すでに休退学を視野にいれている学生も存在する。修学意欲が低い要因としては、「主体的学修態度1」で書いたように、まず、「学んでいることの重要性、価値づけが不明確であるために動機づけが弱い」学生がいると思われる（「学修内容に興味がない」、「グループワーク時の目的外行動（スマホ視聴）」、「関心がない科目は頭に入っていない」など自由記述に報告あり）。

その理由についても、**学生側の学修以外の問題**があるように思われる。

例えば、「自分自身に向き合えていない」、「本人に危機感がない」、「コミュニケーション上にも問題があると考えられる」、「体調不良（精神的なもの）」などが自由記述に報告されている。



学修支援上の課題

・低い修学意欲や自己管理とともに授業の課題やレポートに問題が複合

→「隨身（お寺での修行）と学業との両立」、「持病」、「自宅から大学が遠い」、「バイト疲れ」といったように**本人の体調を含む学修に向かう環境の改善**が必要な学生が複数存在している。また、「講義に対するプレッシャー」や「不安」を感じているという自由記述ある。「主体的学修態度1」で書いたように、「**学習内容を理解するための基礎知識や基礎学力をもっていない**」ことが修学意欲低下につながっている学生も存在しているように思われる。

主体的学修態度3の学生層の傾向



・半数以上の学生は現状に「問題がある」と考えている。

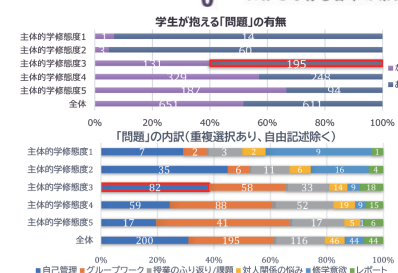
・自己管理面で問題を認識する学生が多いのが特徴的である。

その要因として考えられるのは、大学生活への適応がうまくできていない、ということが考えられる。例えば、「生活が大きく変わったこと」や「今までと異なった環境の変化による体調不良」などが自由記述にみられる。この点に関連するが、**体調そのものの管理ができていない学生も多く存在しているように思われる**。他の学生層と比較すると、**体調を理由とする欠席などをあげている学生が非常に多いのが特徴的**である。また、「体調不良と将来不安からくるストレス」、「季節の変わり目など体調が不安定になる」といったように**体調不良が精神的不安定さと連動している点にも留意する必要がある**。

少ないものの修学意欲に問題を抱える学生も存在している。例えば、「不眠症」、「精神的な落ち込み」といった精神的不安定に起因することから、「I類に興味がわからない」、「隨身と学業との両立」、「不本意入学」という理由が自由記述にて報告されている。とはいえ、主体的学修態度1・2のスコアの学生層との違いは、**修学を継続する意思がある学生が大半**という点にある。

学修支援上の課題

・自己管理や授業のふり返りなど課題に関する問題とグループワークに関する問題が複合している学生が多い。自由記述からは、「考えをまとめた結論を出すことが少し苦手」、「言語化が苦手」といったように自身の考えを掘り下げてアウトプットすることに難しさを感じている学生、「新しいことへのチャレンジ」や「計画立案」が苦手、「e-learningが大変」といったように意欲があっても継続することや実行に踏み出せない学生もいることがみえてくる。**体調管理とともに、こうした「学びの基礎体力」が不足していることがグループワークにおける問題（発言ができない等）に関連しているように考えられる。**



主体的学修態度4の学生層の傾向

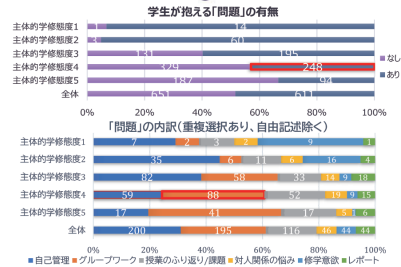
- ・半数以上の学生は現状に「特に問題がない」と考えている。
- ・キャリア意識が醸成しつつあるゆえに問題を示す学生が存在
(自由記述に「明確な将来展望についてはこれからの課題」、
「やりたいことがまだ明確でない」、「やりたかったことと大学の学びのズレ」、
「自分に強みや将来の夢が描けない」といった報告あり)

学修支援上の課題

- ・グループワーク関連が多いのが特徴である。
- 「人前で話すことが少々苦手」といったような対人コミュニケーションの苦手意識から
「メンバーが協力的でない」などファシリテーションが難しいといった「課題」として
認識しているように推察できる。また、主体的学修態度5のスコアの学生層と比較すると

「対人関係の悩み」を抱えている学生がやや増えているものの、多くは学修意欲が高い学生が描く理想的なファシリテーションと現実のグループ活動のギャップ（フリーリーダーや学修意欲の低い学生との関わり）に起因する困難さを問題視しているように考えられる（「フレゼン作成での連携がうまくいかなかった」といった報告あり）。

- ・自己管理、「授業のふり返りや課題」
→レポートやグループワークなどの課題をこなすことにやや追われている（「バイトに引きずられて自分の時間が確保できない」、「昼夜逆転を夏休み中に改善予定」などの声あり）。また、「頭にあることの言語化」、「表現力の改善」などふり返りを向上させていきたいという声もあがっている。このように、問題を抱えながらも、総じて出席や課題提出など学修状況も良好であり、自らの力で「課題」に向き合っていると考えられる。主体的学修態度3のスコアの学生層と比較すると、体調管理など自己管理の問題は少なく、自律的な学びを展開可能な状況にあるという点が大きな違いといえよう。



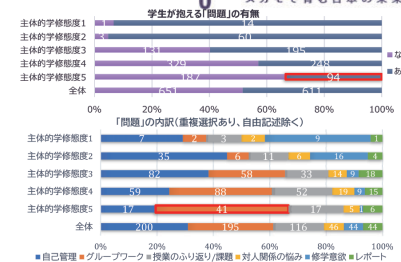
21

主体的学修態度5の学生層の傾向

- ・半数以上の学生が現状に「特に問題がない」と考えている。
- ・キャリア意識が高いゆえに問題を感じている学生も少なからず存在する
(自由記述に「より高い目標に向けての計画立案力をつける」ことや「将来の選択肢を明確にすること」、「ワークキャリア像と現在の学科がマッチしているか不安」など真剣に将来を考えるゆえに問題を感じているという報告あり)。
- ・この学生層は、**将来の見通しのある人は学修意欲が高い**（保田・溝上2014）という見方にあてはまるといえよう。

学修支援上の課題

- ・グループワーク関連が多いのが特徴である。
- グループワークの悩みは、自身の対人力という点を問題視する学生(自由記述には、「対人関係(「少々人見知りな性格」、「感情を表に出せない」という報告があり)もいるが、多くは学修意欲が高い学生が描く理想的なファシリテーションと現実のグループ活動のギャップ(フリーリーダーや学修意欲の低い学生との関わり)に起因する困難さを問題視しているように考えられる(主体的学修態度の低い学生ほどグループワークを問題視していない)。
- ・「自己管理」、「授業のふり返りや課題」
→学習意欲が高いことゆえに自ら高く設定した目標に対しての自己評価を反映しているように思われる。実際、自由記述には「TOEIC小テストの点数が伸び悩んでいる」、「学びや技術を理解はしているが行動にうつせていない」などの声が残されている。自己管理についても上記したキャリア意識などセルフマネージメントへの意識の高さを反映しているように思われる。



22

「自律的な学びを活発に展開する学生」の紹介(教員・チューターによる夏期記録より)



キャリア意識・チャレンジ精神

- ・将来に向けて、しっかり考えて、**自分なりにひとつひとつの授業の意味付け**を行っている。ポテンシャルのある学生。
- ・**将来の目標があるので企業にてインターンシップ**を行っている。
- ・将来のキャリア意識もしっかりとしており、**セルフマネジメント力も非常に高く、主体的学修態度も確立されている**模範的な学生。
- ・公務員試験、図書館司書の資格獲得に向けて、**中長期的目標を日々のスケジュールに落とし込み行動**している。
- ・夏休みに議員の訪問活動に同行するインターンシップに参加して、**ビジネスマナー等を身につけることを目標**としている。
- ・第1志望ではなかったという**悔しさ(後悔)をチャレンジ精神に変換**して全授業に挑んでおり、未経験の弓道部でも主将を目指している。
- ・学生スタッフの仕事をしており、また**マイクロソフト・オフィス・スペシャリスト(MOS)の試験を受けることを希望**している。
- ・**行動力に優れているだけでなく、レジリエンスがある**。秋以降、入試学生スタッフとしての活動に力を入れて取り組む意向。
- ・チャレンジ精神をもって鴨台祭実行委員やマーケティング講座(一般向け)の受講など**関心あることに挑戦と実践**を続けている。

- ・高校時代に全国大会に出場した経験を土台に大学での学び目標を設定し、**強い意志とチャレンジ精神で4年間の学習に挑む姿勢が強く伝わってくる**学生。
- ・意欲と目的意識を持って積極的に行動し、鴨台祭実行委員やアルバイトなど、**すべて将来の目的のために経験を積み重ねている**。学びのモチベーションは非常に高い。

リーダーシップ

- ・高校時代のボランティア活動の部長経験があり、**コミュニケーション力に長けており、周りをサポートに巻き込む力に優れている**。
- ・対人コミュニケーションが得意なため、**グループワークでは率先してファシリテーション**をおこなっている。
- ・自分に遠慮せずにアドバイスをしてくれる友人関係をつくるために、**初対面の人と意欲的なコミュニケーションを試みている**。
- ・高校時代バドミントン部の顧問に代わり、部長として活動計画、練習メニューを考えて部員を指導してきた。**積極的に前が出るタイプではないが、力を持っている**。
- ・高校時代に対人関係が苦手だったにもかかわらず、**グループワークにて消極的な学生を巻き込むために自ら話かけてグループラインを提案した**。
- ・自分の言動が大正大学のイメージとなる**責任感をもってオープンキャンパスのスタッフ**をしている。「他人のために役立つ」ことがモットー。
- ・**縦の繋がりを特に大事にして鴨台祭の実行委員として活動している**。

23

「自律的な学びを活発に展開する学生」の紹介(教員・チューターによる夏期記録より)



リーダーシップ(承前)

- ・とにかく何でも楽しんでしまう**明るさと向きさ、友達作りの圧倒的なスキルの高さ**がある。

学修姿勢/学修態度

- ・提出物などきちんと出していて、学修以外にもサークルを掛け持ちしたり、アルバイトをしたり、**専門科目担当の教員にも話を聞きにくいようなパワフルな学生**。
- ・あえて専門外の難しい分野だと思った授業を受講して、**学んだ内容を自分ごと化して理解することに努めている**。
- ・必修科目に対する**好奇とチャレンジ姿勢は、素晴らしいものがあります**。好みでなくてもチャレンジしてみる。そこから、学びに関して何かを得ようとする姿勢は、**大きな伸びしろを感じる**。
- ・問題や質問事項を後回しにせず、**その場で解決、調べる行動ができる**。専門領域にとらわれない**学びへの意欲**が感じられる。自ら進んで他人と交流する行動力が高い。
- ・学修スタイルを高度化したり学びを深めていくためのPDCAの回し方が**卓越している**。予習復習をしっかりする、リフレクションを先に読んで授業に臨む、レポートを書く前にリフレクションをよみかえてテーマ設定をしたり内容を検討したりするなど。

顕著な課外活動

- ・高校1年生の時から漫画を描いており、すでに担当が付いている(デビューという位置づけの「ジャンプ月例賞」を3回受賞しており、大学在学中にデビューしたいと考えている)。漫画を描きつつも無遅刻無欠席・課題全提出に近い状態をキープ。鴨台祭実行委員も務める。学費のためアルバイト(塾講師、飲食、学スタ)を掛け持ち。この状態をそれほど負担なく続けていけるとのこと。自己管理能力が非常に高い学生。
- ・高校時に立ち上げた**NPO団体の活動を今も全力で継続している**(NPOのジャンルはヤングケアラーや中高生のボランティア関連)。
- ・子どもの頃から福岡で障がい者支援、ホームレス支援のボランティア活動に携わっている(大正大学の入学式で新入生代表としてスピーチした)
- ※ボランティア活動に関しては他にも複数報告あり。
- ・地域のソフトボールチームに所属して他大学のソフトボールサークルで活動。
- ・「AR樂鴨プロジェクト」に参加している。そこで創作物を大会に5つ以上出すという課題が与えられており、オリジナル小説を提出した。今後もエッセイや絵本の大会に提出を考えている。
- ※AR樂鴨謎解きなど魅力化プロジェクト参加学生については、他にも複数報告あり。また、「ガモールマルシェ」のインターンなどへの参加報告もあり。その他にオープンキャンパスのスタッフ、鴨台祭実行委員、体育会での活動など報告あり。

24

今年度の学生の印象(教員・コアチューターの面談後所感)

〈学生像〉

- ・例年のように「まじめで素直な学生が多い」という声が多い。
 - ・家の手伝いをしながら大学に通っていたり奨学金を借りているなど苦学している学生が印象的。
 - ・自分が「できたこと」に対する自覚がない(自信がない印象)
- 実際、全学生の半数には「特に問題はない」と面談者および学生自身が認識をしている(図VI)。主体的学修態度のスコアが3の学生であっても40%近くは「特に問題はない」と認識されているように、前向きに学修に向き合っている学生の印象が強かったものと思われる。

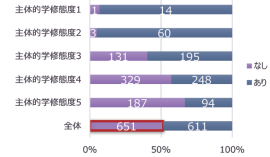
→ただし、全体としてみると面談を予定通り実施できた学生の比率は昨年よりもやや減少している(図VII)。逆に昨年よりも予定通り実施(学生側の無断キャンセルなし)できた学科もある。定期面談の実施状況だけをもって多くを語ることはできないが、昨年度の1年生に対する学科カラーのような印象が異なっている可能性に留意して、「まじめで素直」という印象の内実を冷静に観察する必要がある。

昨年度と今年度の1年生の相違点としては、主に以下があげられた。

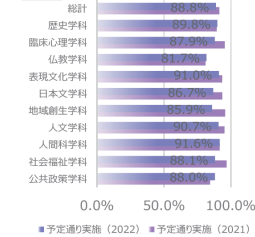
- ・今年度はハイフレックスから全面対面に戻ったが、出席状況や課題提出状況はよい。
- 例) オンライン面談の指定日時の前からしっかりとTeamsにはいる。
- ・昨年と違い人と話をするのが慣れている学生が多い印象。
- ・アルバイトとの掛け持ちや通学・サークルなどで時間に追われている。→コロナ禍が自己管理に影響か



図VI 学生が抱える「問題」の有無



図VII



〈学修状況〉

必修科目である探究科目やデータサイエンスは学びのモチベーションが低い。またグループワーク等への苦手意識が強く残っているように感じていたが、I類の「授業の意味」がつかめないという学生はごく少数という印象。

- ・自分の専門とI類の授業のつながりを理解しようと前向きな学生が多かった。
- ・フォローが必要な学生ばかりを見ていたため、「こんなにできる子がいたのか」と新鮮。
- ・グループワークに関しては、最初は問題だったがだいぶ慣れたという声が多い。

面談を通して特に強く感じた学生の成長(良い点)

自分なりに大学で学ぶ意味を捉えようとしている。

- ・前向きに取り組もうとする姿勢は入学時よりも高まっているように感じる。
- ・学科横断の学生との交流によって「多様性」の実感をみずからの変化としてあげる学生が多い。
- ・忙しいながらもスケジュール管理をしながら乗り切ってきた学生が多い。
- ・グループワークを好意的に捉えている学生が多い。
- ・グループワークの問題は時間が解決してくれている印象。

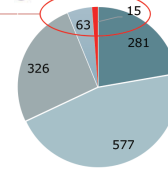
グループワークに関しては、主体的学修態度5・4の学生層(自走タイプ)と3以下の学生(要フォロー)の課題感の違いを踏まえて、支援のあり方を考えることが大事である

面談を通して特に強く感じた学生が抱える問題

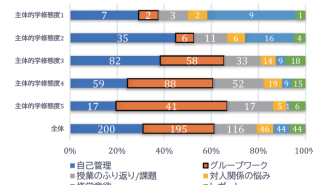
自己管理のレベルに差が大きい。

- ・スケジュール管理ができていない学生が多い印象。
- ・基礎体力はじめ体調管理が苦手な学生が結構いるように思えた。
- ・学修状況(出席や課題)は問題がないものの家庭に問題を抱えている。

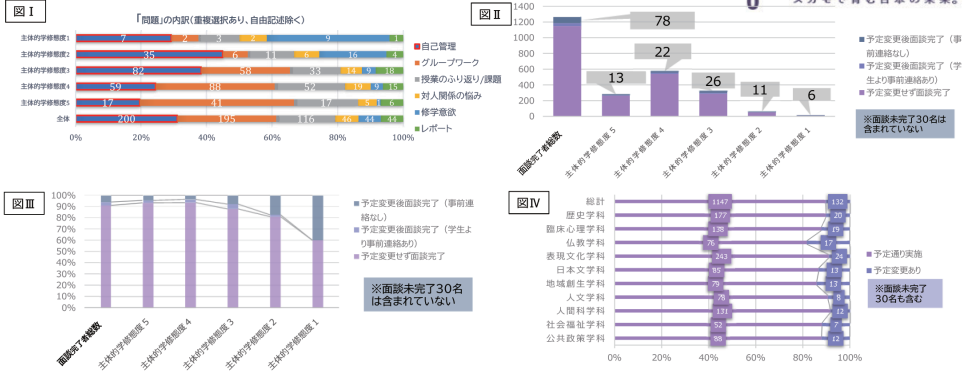
自律的な学修者とするために、1・2QTを踏まえてどのようなフォローのあり方が効果的なのかをあらためて検証することが重要



「問題」の内訳(重複選択あり、自由記述除く)



面談実施状況からみる学生の「自己管理」の全体傾向



「自己管理」に問題があると認識する学生・面談者は一番多い(図Ⅰ)が、予定日時通りに面談を実施できなかった学生は、全体の10%程度である(図Ⅱ)。定期面談の実施状況だけをもって一般化できないが、「自己管理」の問題は、新生活への適応過程にともない学生本人が気づいた苦学意識や課題感と学修面に影響(授業欠席や課題未提出など)が生じているのかという観点から検討する必要がある。前者であれば、学生自身が自律的に解決する過程にあり過度な介入は不要である。一方、後者であれば適切な支援が必要となる。例えば、「事前連絡なし」にキャンセルをしてしまう学生の割合は、主体的学修態度3以下に増加傾向にあり、この層への留意が必要であろう(図Ⅲ)。この点に関して、学科によっても学生の「自己管理」に若干の傾向がみられることも参考になる(図Ⅳ)

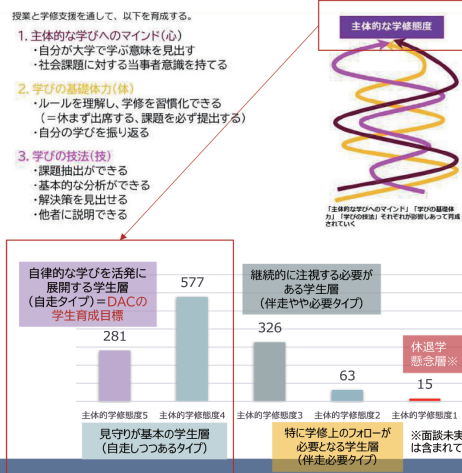
今後の学修支援に向けての課題




DAC定期学生面談は、「自律的学修者の育成」という目的実現のために、一人ひとりの学生の「主体的学修態度の涵養」を企図して、「学びのモチベーション」をあげることを具体的目標として実施した。学生側の自己評価でもあるものの、実感として定期面談が大多数の学生にとって向上の契機になった。

また、DACでは、「自律的学修者の育成」という目的のために、正課(教育)、正課・正課外(学修支援)の教職協働の組織的活動を展開しているが、夏期定期面談を通して、1年生の現状を把握することで現時点での到達度の概観と後期に向けた課題もみえてきた。

「自律的学習者」の基本となる「主体的学修態度」(マインド)については、スコア4以上の学生が1年生の約65%を占めているというのが現状である。主観的な評価にならざるを得ないが、これが1年生の現状把握の起点となる(主体的学修態度のスコアは、前述したとおり、通算GPAとも概ね対応している)。





大正大学
スガモで育む日本の未来。


学修支援は、ひとり一人の学生に向き合いながらケースバイケースであることが基本であるが、冬期定期面談に向けて、今回の見えてきた学生の傾向を参考にしながらアプローチを検討するのがよいと考えられる。

まず、原則として「学修支援の基本方針」(①) にそって進めるものの、「学びのモチベーション」を維持・増大して、「主体的学修態度の涵養」を図るためには、スコア別のアプローチを重層的に展開することが大事となる。

例えば、主体的学修態度のスコア3の学生層を4以上に、つまり「主体的な学びへのマインド」を定着させるための「フォロー」(『学びの基礎体力』支援) は欠かせない。


ただし、問題は、面談者が残した「フォローが必要な学生情報」の大半を学修支援の範疇を超えた項目が多数を占めていることである。面談者が必要と考える「フォロー」と「主体的な学びへのマインド」を定着させるための「フォロー」(『学びの基礎体力』支援) のギャップを解消するために、以下のように、**アプローチの優先順位を具体的に教員・チューター全体の意識を共有しておくことが課題**であろう。

学修支援の基本方針イメージ ①



「フォローが必要な学生情報」(夏期定期面談の面談実施報告書より)

主な内容	件数
持病による体調不良	14
その他(浪人後の入学、コロナによる体調不良、奨学金など)	12
修学意欲(休退学を検討)	11
メンタルの不調	10
修学意欲の低下(希望科目でない、先生との相性)	7
出席・成績など単位取得への不安	6
生活リズムの乱れ	3
コミュニケーション能力に不安	3
グループワークでの不満	3



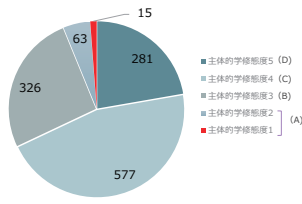
大正大学
スガモで育む日本の未来。

・**スコア1・2の学生層(A)**については、「学修支援の範疇」を超えた問題を抱える学生が多数と考えられる。この層の学生については、**学科・関連部門(学生課)**との連携をより重視して対応することが必要である。

・**スコア3の学生層(B)**についても、「学びの基礎体力」の向上を支援する学生群と、「学びの技法」の支援が必要な学生群に分けられる。前者は、1・2QTに展開した「声かけ」・「不定期面談」などが具体的アプローチになるが、**対応姿勢や内容についてはメリハリをつけて、必要に応じて学科・関連部門(学生課)と連携が必要になる**。後者は、グループワークへの積極的参加を目標として、そのために自らの意見を言語化・外化するための支援(リフレクションの深化と発言力の強化)が肝要になってくると考えられる(例えば、リフレクションへの取り組みがよくない学生への直接的支援など)。

・**スコア4以上の学生層(C)**については、基本的には自走を見守る姿勢でよいが、グループワークに関して抱えている「問題」により扱いながら、**2年次以降の「リーダーシップI」、「DSIV・V」**との接続を見ずして、**ファシリテーションスキルを磨くための知見や機会を提供することで、より多くの「達成経験」を得られる支援のあり方が適切**と考えられる(まず授業内支援を充実できないか)。

・**スコア5の学生層(「問題なし」)**(D)に対しては、大学生活やグループワークにおける活躍が他学生の「代理経験」として機能して、「**まじめで素直な学生が多い**」学生全体の「**学びと成長のモチベーション**」の向上に寄与する**ような支援ができれば理想的**であろう。(支援の糸口としては、本スライド「**『自律的な学びを活発に展開する学生』の紹介**」の頁が参考になると思われる。OC企画を活用するのもあり)



学生が抱える「問題」の有無

主体的学修態度	問題なし	あり
主体的学修態度1	14	15
主体的学修態度2	60	63
主体的学修態度3	131	195
主体的学修態度4	329	248
主体的学修態度5	187	94
全体	651	611



令和4年度 リーダーシップ

- この変化の激しい現代社会において、リーダーシップの重要性が叫ばれている。リーダーシップ I ~ III では、こうしたリーダーシップを学び養うことを目的とする。
- この授業をつうじて、履修者はみずからの「強み」について深く理解するとともに、3年次以降、本格化する就職活動への準備を進める。

履修年次：2年

1QT

リーダーシップ
I

リーダーシップの多様性を
理解する

他者評価を踏まえて、
リーダーシップ像を再構築する

自らの目指すリーダーシップ
を考え、言語化する

2 or 3QT^(※)

リーダーシップ
II

多面的な自己分析から
自分の強みを把握する

職種と業界の理解
を進める

社会への移行準備
を進める

(※) 学部学科によって開講時期が異なる

リーダーシップ
III

自分の強みを言語化し、
伝達する

ガクチカをふり返り、
今後の行動計画を立てる

社会への移行に向けて
行動を開始する

4QT

- ① リーダーシップの多様性を学び、
リーダーシップとは何かを説明することができる。
- ② 他者評価を踏まえて、リーダーシップ像を再構築し、
目指すべきリーダーシップ像を言語化することができる。
- ③ ペアワークやグループワークでのフィードバックを通して、
相互のリーダーシップを高めることができる。
- ④ ファシリテーションやインタビューを通して、
相手の考えを引き出すことができる。
- ⑤ 自分の目指すリーダーシップ像や他者のリーダーシップを
具体的に語り、プレゼンすることができる。

- ・ リーダーシップ I では3つのステージをもうけ、到達目標達成を目指した。
(👉 学生の目標達成に対する自己認識は、第1・7回実施のアンケートで確認)

Part1 : 自身のリーダーシップ像をふり返り、リーダーシップ像の多様性にふれる。
Part2 : 自己分析・他己紹介をつうじて、「自分のリーダーシップ」を知る。
Part3 : Part1・2をふまえて、「自分が目指したい・自分らしい」リーダーシップとは何か
について言語化（プレゼン）し、伝達する（プレゼンPPT=期末課題）。

第1・2回

「リーダーシップ」
について
理解を深める、
視座をあげる

Part I

第3～5回

自己理解・自己分
析を通して「自分の
リーダーシップ」を知
る、深める

Part II

第5～7回

自分が目指したい
(自分らしい) リー
ダーシップタイプを設
定し、めざす姿を言
語化&伝達する

Part III

● **評価できる点**

- 授業開始前の講師会以降は、科目運営はTeamsでのコミュニケーションが中心であったが、比較的スムーズに実施できた。
- 科目のゴールイメージがシンプルであったこともあり、教員間でのベクトル合わせがし易かった。
- 学生にも意図が伝わりやすく、概ね意欲的に取り組んでいる様子が見られた。到達目標と連動した科目設計ができた点は評価できる。

● **次年度への課題**

- 1年次の探究科目からの接続、また2年次2or3QT「リーダーシップⅡ」、4QT「リーダーシップⅢ」への接続については次年度に向けての課題。
- クラス編成は単一学科クラス、学科混成クラスがあったが、リーダーシップの多様性を学ぶ本科目の場合、クラス編成は混成にするなど検討の余地あり。
- 本科目でのチューターによる学修支援のあり方は、検討の余地あり。

● **評価できる点**

- 知識・活動のバランスがよかった。
- 2年生の学修状況を前提として、教材選定やアクティブラーニングを組み立てたこともあり自己理解が進むと同時に、リーダーシップ開発に必要な基本的な質問力・洞察力の向上にもつながった。

次年度への課題

- 講師会が期首・期末の2回だったため、教材の意図など教員間に十分伝達できていないケースもあった。次年度は教員間のコミュニケーション方法について改善の余地あり。
- 上述と連動して成績評価も教員間でバラツキが出てしまった。評価基準に対する、正しい理解浸透と実行は課題である。

学生アンケート (第1・7回実施) の概要確認

6

◇ 第1回 (4月7日、8日) 回答学生 : 1014人

調査項目① ※3件法

1. リーダーシップがあると思うか
👉 何故そう思うか
2. リーダーシップが必要だと思うか?
👉 何故そう思うか

7

◇第7回 (5月26日、27日) 回答学生 : 1052人

調査項目① ※3件法

1. リーダーシップがあると思うか
👉何故そう思うか
2. リーダーシップが必要だと思うか?
👉何故そう思うか

調査項目② 教育目標到達度 自己評価 ※5件法

1. リーダーシップの多様性をふまえ、リーダーシップとは何かを説明することができるようになったか
2. みずからのリーダーシップ像を再構築し、目指すべきリーダーシップ像を言語化することができるようになったか
3. グループワークなどでのフィードバックを通して、グループメンバーとたがいにリーダーシップを高めることができたか
4. ファシリテーションやインタビューを通して、相手の考えを引き出すことができたか
5. 自分の目指すリーダーシップ像や他者のリーダーシップを具体的に語り、プレゼンすることができたか

調査項目③ 教育目標到達度 自己評価 ※定性評価

1. 「リーダーシップ I」の7回の授業をつうじて身に着いたことは何か
2. 「リーダーシップ I」で身に着いたことを今後どう活かしていきたいか

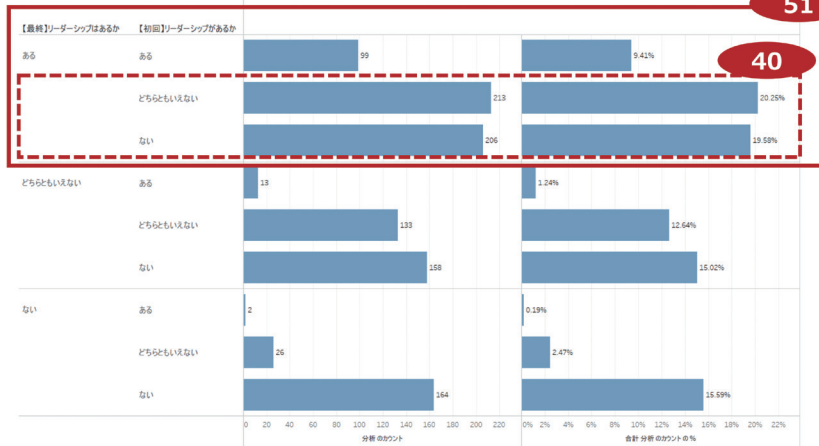
学生アンケートの結果分析

リーダーシップ I

【全体】自らにリーダーシップがあるかないかの変化



- ✓ 授業ではリーダーシップ概念の拡張を進め、学生自身が再構築できることをめざした。
- ✓ その結果、1回目に自分に「リーダーシップがない」、「どちらとも言えない」と回答していた約420名（約40）が最終回には「リーダーシップがある」に変化した。



51

40

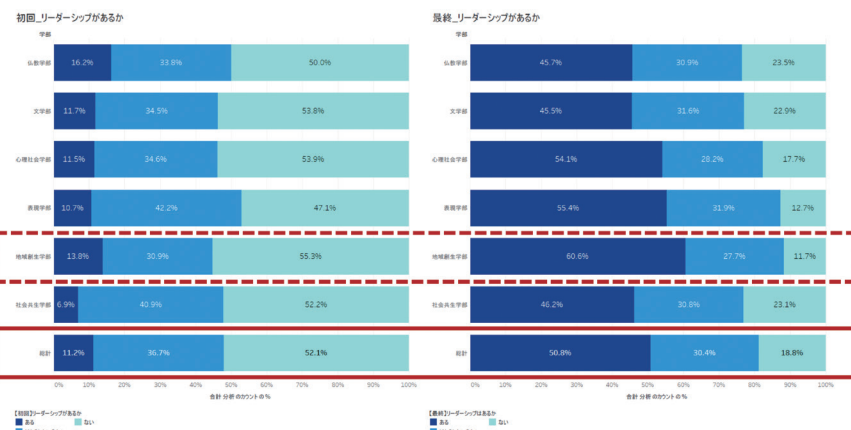
10

リーダーシップ I

【学部別】自らにリーダーシップがあるかないかの変化



- ✓ 初回リーダーシップがあると答えた学生は11だが、最終回では51迄上昇
- ✓ 特に大きな変化が見られた学部は地域創生。「ある」が60を超えた。



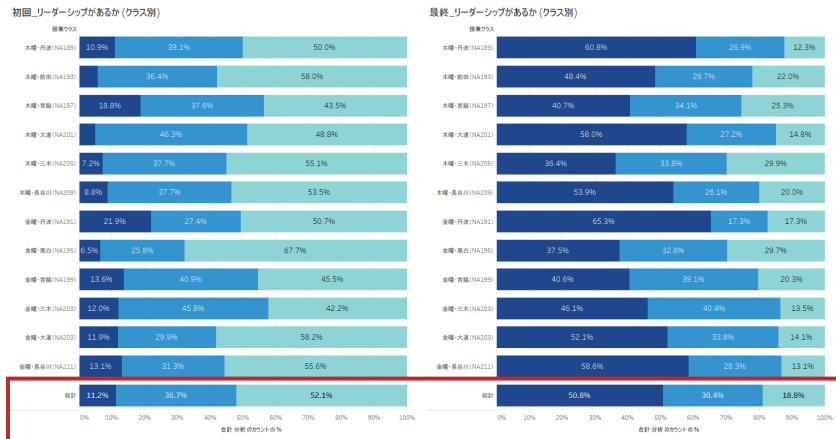
11

リーダーシップ I

【クラス別】自らにリーダーシップがあるかないかの変化



- ✓ クラスのよってリーダーシップがあるかないかの差が激しい。
- ☞ クラス分けについては検討の余地があるかもしれない

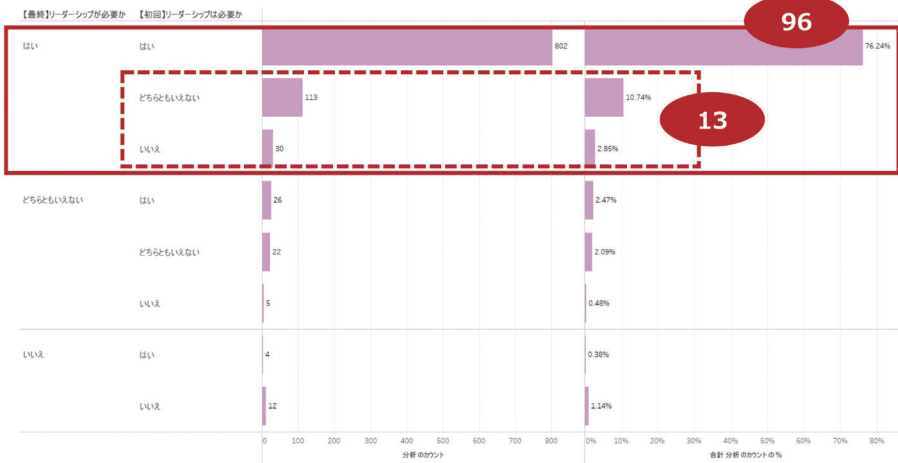


リーダーシップ I

【全体】自らにリーダーシップが必要か否かの変化



- ✓ 1回目に自分に「リーダーシップが必要ない」、「どちらとも言えない」と回答していた約140名（約13）が最終回には「リーダーシップは必要」に変化した。



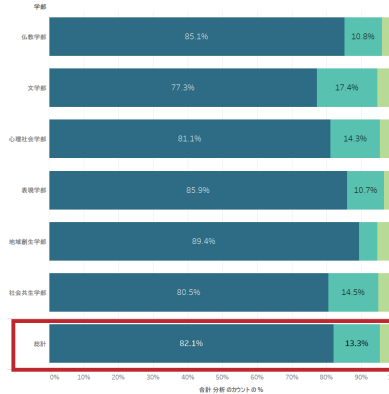
リーダーシップ I

【学部別】自らにリーダーシップが必要か否かの変化

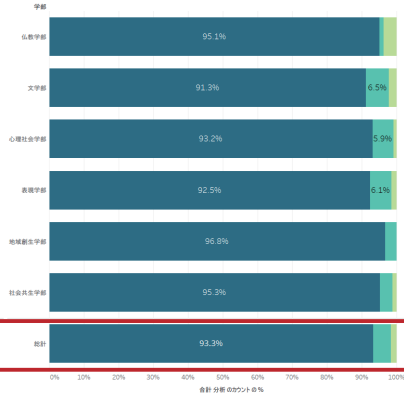


- ✓ 初回リーダーシップが必要と答えた学生は82だが、最終回では93に上昇
- ✓ 必要と答えた学生が10以上伸長したのは表現と地域創生以外4学部

初回_リーダーシップは必要か(学部別)



最終_リーダーシップは必要か(学部別)



【集計】リーダーシップが必要か
 ■ 必要 ■ 不要 ■ 回答なし

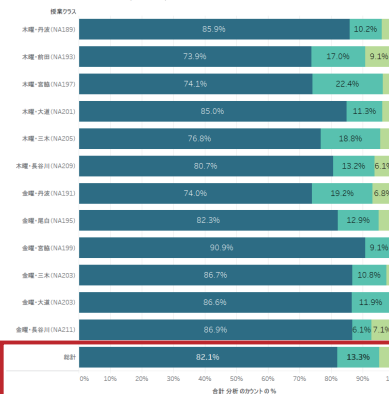
リーダーシップ I

【クラス別】自らにリーダーシップが必要か否かの変化

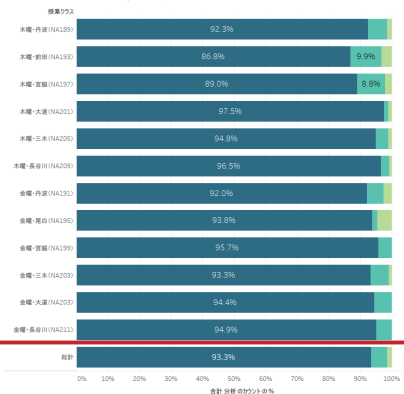


- ✓ リーダーシップが必要か否かについてもクラスによって差（特徴）が出ている。

初回_リーダーシップは必要か(クラス別)



最終_リーダーシップは必要か(クラス別)



【集計】リーダーシップが必要か
 ■ 必要 ■ 不要 ■ 回答なし

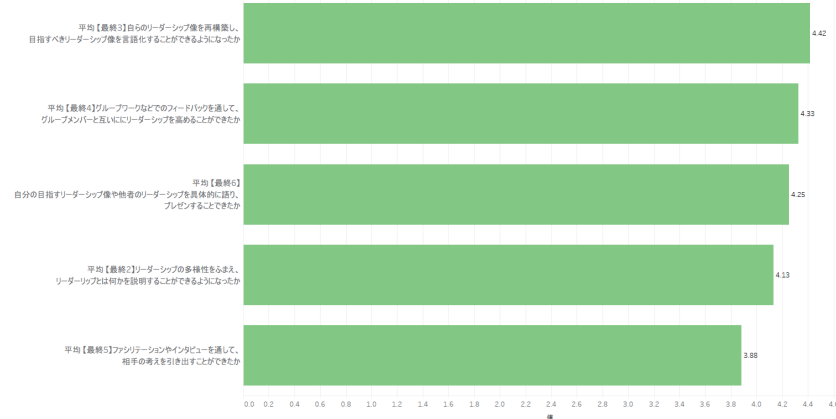
【集計】リーダーシップが必要か
 ■ 必要 ■ 不要 ■ 回答なし

リーダーシップ I

【全体】教育目標到達度 ※学生の主観にもとづく自己評価



- ✓ 教育目標の到達度を学生自身に5段階で評価してもらったところ、最も平均値が高かったのが「自らのリーダーシップの再構築と目指すべきリーダーシップ像を言語化する」で4.42点
- ✓ 一方で最も低かったのが「相手の考えを引き出す力」で3.88点



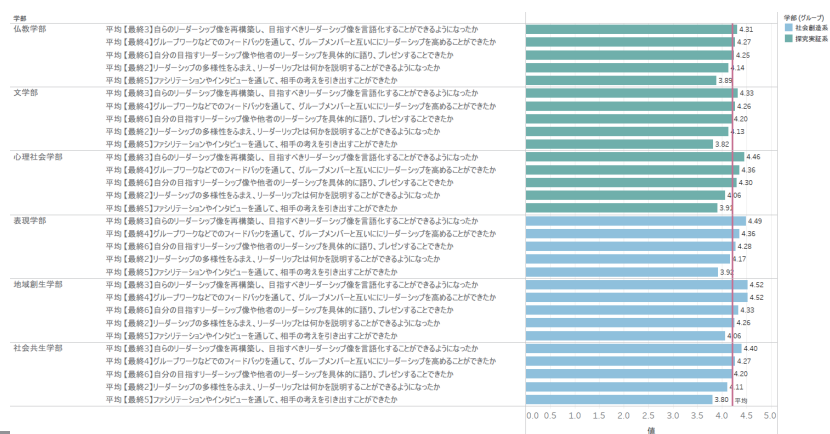
16

リーダーシップ I

【学部別】教育目標到達度 ※学生の主観にもとづく自己評価



- ✓ 全体的に社会創造系の自己評価が高め。「自らのリーダーシップの再構築と目指すべきリーダーシップ像を言語化する」の中でも最も高かったのが地域創生、全体の平均点が最も低い「相手の考えを引き出す力」で最も低いのが社会共生物学部



17

令和5年度に向けて

(検討課題) 教育目標と実現方法について教員間の意識の統一を促進する。

(具体的なアクション)

- ・ 講師会の実施回数を増やし、理解のすり合わせをおこなう。講師会では次週以降の展開やワークの意図や内容、成績評価の仕方についての確認をおこなう。

(検討課題) 多様なメンバーとの「出会い」の機会を増やす。

(具体的なアクション)

- ・ クラスは社会創造系・探究実証系を分けずに混成で編成する。

(検討課題) チューターの役割・位置づけ（学修支援内容）を明確にする。

(具体的なアクション)

- ・ 本科目において、いかなる「学びの技法」の支援がおこなえるのか。
- ・ 履修者数に対して、何人のチューターが必要なのかをあらかじめ定める。

(検討課題) 本科目と探究科目、リーダーシップⅡ・Ⅲ、Ⅲ類科目との連携を強化する。

(具体的なアクション)

- ・ 特に人間の探究からの接続については検討していく必要あり。

令和4年度総合学修支援機構DAC

機構長 神達知純（副学長）

副機構長 —

トランジション教育チーム

高校生から社会人へのトランジションを主眼とし、統合型教養教育による探究力・データドリブンな発信力・キャリアを見据えたセルフマネジメント力を中心に、チュートリアル教育を基盤として育成する。専門教育またsociety5.0の社会への円滑な移行を目指す共通教育を運営する。

チーム長：星野壮（探究・語学）
副チーム長：前田長子（DS・キャリア）
中塚光之介 丹波博紀 尾白克子
大道一弘 長谷川隼人 宮脇敏介
齋藤知明

■第Ⅰ類科目の企画・運用

- 人間の探究（学科専任・大道） キャリア教育（リーダーシップ・コミュニケーション）（丹波）
 社会の探究（学科専任・長谷川） データサイエンス（尾白）
 自然の探究（学科専任・丹波） eポートフォリオ・e-learning（宮脇）

■学修支援・面談・LC運営（大道・長谷川・宮脇）

■入試・高大接続（中塚：S-U.P.P.、尾白：入試戦略PJ）

■チューター養成（佐藤浩章監修）

※探究科目のリーダーは第Ⅰ類・Ⅱ類科目の連続性の観点から、学科専任教員が担当。当該教員は第Ⅰ類コーディネーター会の構成員（コーディネーター）となると同時に、総合学修支援機構DACに所属する。コーディネーターとして、学長の諮問に基づいて次の事項を審議（第Ⅰ類科目の運用、学修・教育目標の検討、科目数の確定、改定、中長期計画・基本方針）した上で、総合学修支援機構DAC所属教員として、DAC専任教員に対し、基本方針に基づく企画や運用案の指示を出すとともに、具体的に運用する。

クロスディシプリン教育チーム

自らの専門分野の学問領域と他の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑で多様な現代社会の課題に応えることができる力を育成する学科横断科目を運営する。

チーム長：小林伸二
副チーム長：村上興匡
※各学科にⅡ類コーディネーターを設置
歴史：三浦龍昭 地域：大橋重子
日文：中川祐治 公共：本田裕子
人文：天木勇樹 社福：松本一郎
仏教：長澤昌幸 表現：ヨシムラヒロム
臨床：石川亮太郎
人科：澤口恵一

アントレプレナーシップ教育チーム

新時代の地域を牽引するアントレプレナーシップを身につけた地域戦略人材を育成することを目標に、異なる専門分野の多様な人材を統合し、文理横断の知識や創造力、変化への対応力、異分野のネットワーク結節点となるコミュニケーション力を活かし、調整する新しいリーダー育成を目指した共通教育を運営する。

チーム長：井原守茂
副チーム長：前田長子

大正大学チュートリアル教育について

1. 大正大学第Ⅰ類科目におけるチュートリアル教育のねらい

総合学修支援機構 DAC トランジション教育チームでは、大正大学が掲げた「地域戦略人材」

「一変化の激しい社会において主体的に学び、当事者意識をもって社会課題を多面的に捉え、解決に取り組み、地域に貢献する人材」

を育成するという目標を卒業までの4年間で達成するにあたり、初年次共通教育においてチュートリアル教育を導入している。

チュートリアル教育では、「生涯主体的に学び続けるため自律的に学ぶ姿勢」を身につけることを目標に、初年次共通の必修科目における、探究・DS・リーダーシップにおいて、複数の教員とチューターによるチームティーチングを実施し、学生個別の学修状況を把握し、個別のアプローチを主眼とした学修支援を展開する。

また、「生涯主体的に学び続けるため自律的に学ぶ姿勢」に必要な要素としては「主体的な学びへのマインド（心）」「学びの基礎体力（体）」「学びの技法（技）」があり、それぞれが影響しあって育成されていくと考える。その点を踏まえ、1年次と2年次で重点を置く要素を移行させながら、学修支援を行っていくこととする。

Ⅰ類で達成すべき「主体的な学修態度」

授業と学修支援を通して、以下を育成する。

1. 主体的な学びへのマインド(心)
 - ・自分が大学で学ぶ意味を見出す
 - ・社会課題に対する当事者意識を持てる
2. 学びの基礎体力(体)
 - ・ルールを理解し、学修を習慣化できる
(=休まず出席する、課題を必ず提出する)
 - ・自分の学びを振り返る
3. 学びの技法(技)
 - ・課題抽出ができる
 - ・基本的な分析ができる
 - ・解決策を見出せる
 - ・他者に説明できる



以上のねらいに基づき、教員、チューター、職員は、自律的学習者としての学生個人の成長を重視し、規程・ルールの範囲内で、学生個々の状況に応じた対応を検討し、支援を実施する。

	1年次	2年次
テーマ	学修の初期段階での躓きの予防を主とした、高校から大学へのトランジションの支援	専門教育、社会へのトランジションを意識した、生涯学び続ける学修者への支援
目標	主体的な学修態度の育成 授業や課外での学修支援を通して、その要素となる「主体的な学びへのマインド」「学びの基礎体力」「学びの技法」の修得をサポートする。	
モットー	時期によって以下に留意しながら支援を行う。 【1QT・2QT】 「学びの基礎体力」作りに重点を置いた学修支援 【4QT】 徐々に「学びの基礎体力」から「学びの技法」に重点を移す学修支援 「主体的な学びへのマインド」の育成は常に意識する。	・専門教育（第Ⅱ類） ・アントレ教育（第Ⅲ類） ・society 5.0社会（就活）へのトランジションの支援 「学びの技法」の修得、「主体的な学びへのマインド」の育成に重点を置いた学修支援
正課関連	・授業内のワークサポート ・毎週の課題のサポート ・出席や課題提出、振り返りに対する督促 ・習熟度に課題のある学生の補講や補習の機会の提供 ・学ぶためのマナー指導	・授業内のワークサポート ・課題の質の向上を意図した支援 ・学生による課題・出席自主管理の支援
正課外	・全員面談（大学生活における学修計画の支援） ・学コミュ（ノートテイク、時間管理など） ・PC支援 ・英語e-learningサポート（取り組み方）	・学修意欲の高い学生向けの新たな学修機会（外部コンテストへの挑戦、資格対策特別プログラム、Ⅲ類科目など）の提供・支援 ・学コミュ ・英語e-learningサポート（TOEIC等の検定対策、留学対策、継続的な学修計画など）



<主な学修支援施策の年間予定>

- 4月～7月 第1QT、第2QT 科目学修支援
- 7月～8月 夏期定期面談（1年全学生対象）
- 9月 DS 特別講座（データサイエンス科目）
- 9月中旬 #1 学科連携定期ミーティング
- 11月～1月 第4QT 科目学修支援
- 1月 「自然の探究」レポート指導（探究科目）
- 1月～2月 冬期定期面談（1年全学生対象）
- 2月 DS 特別講座（データサイエンス科目）
- 3月 #2 学科連携定期ミーティング

※学びのコミュニティイベントなど正課外の学修支援は随時実施

2. 令和4年度1年生（全学部）学生面談実施について

(1) 学生面談のねらい

面談により、学生が学びと成長のPDCAサイクルを学生自身で回し、I類の教育目標である「主体的な学修態度」の養成に資することを主なねらいとする。また、学修に課題を抱える学生に対しては軌道修正を働きかけるなど、個々の状況に応じ、その後の学修状況の改善をねらう。

また、面談で得た意見を今後の学修支援方針・施策の改善につなげていくことも目的とする。

(2) 対象 令和4年度入学1年生（全学部）

(3) 実施時期（年間）・内容・方法・体制等

① 実施時期：夏・冬の年2回

夏期は第2QT終了後（7月下旬～8月）、冬期は第4QT終了後（1月～2月）に実施予定

② 実施内容：

DAC e-ポートフォリオ「学びと成長の記録」で学生自身が記載した学修目標およびアクションプランをもとに、学生と対話し、これまでの状況の振り返り、今後の学修計画の再構築を促す。

夏期は第1・2QTの振り返りと3QT以降の1年次の学修を中心とした短いスパンでのPDCA、冬期

は1年次全体の振り返りと2年次以降の大学生活全体といった長いスパンでのPDCAに焦点を当てて実施する。

※「学びと成長の記録」はI類科目「人間の探究」にて記入する

③ 実施方法：1名あたり20分、オンラインにて実施（学生と個別に日時を調整）

④ 面談実施者：コアチューター8名、DAC専任教員9名、クラスチューター約30名

⑤ 面談内容の記録について：

面談実施後、面談内容をeポートフォリオ「面談」に記録する。（専任教員閲覧可能）

⑥ eポートフォリオアドバイザーについて：

冬の面談実施後に、1年間eポートフォリオ「学びと成長の記録」に記載された内容を受け、eポートフォリオアドバイザー（チューター）がコメントを掲載。学生がアドバイザーのコメントから行動への励ましを得て、行動計画を具体化し、期待される結果をイメージできることをねらいとする。

(4) 夏期面談実施について

① 実施期間（予定）7月26日～8月8日

（一部調整がつかなかった学生、欠席学生は上記以降に実施する可能性あり）

② スケジュール

6月27日（月） （第2QT「人間の探究」の授業にて）面談日時、面談方法を学生に伝達、T-Poにて学生に告知

7月6日～7月15日 実施日程調整

7月18日 「人間の探究」授業にて、「学びと成長の記録」記入

7月26日～8月8日 面談実施（面談と同時進行でeポートフォリオへ面談記録記載）

3. 総合学修支援機構DAC令和4年度DAC・学科連携について

(1) 学科連携実施のねらい

学科とDACにて適切なタイミングで学生情報を共有することにより、大学での学修に課題を抱える学生の状況改善、および休退学を予防し、履修指導や学修指導・支援の質を高めることを目的とする。

(2) 実施方法

以下の2つの方法で実施する。

① teamsによる随時共有

昨年度同様、専用チーム（チーム名「学科-DACトランジション教育チーム連携」）にて、授業履修への不適応など即時対応が必要な学生について共有し、I類・II類共同で学修支援を行う情報交換の場とする。必要に応じて学科からも情報をいただき、学生に対してタイムリーかつ適切な支援をめざす。

<チーム登録者>

学科担当、DAC学科別担当者、コアチューター、総合学修支援部

※コアチューターと学科事務による情報共有を中心として行う

<ご連絡する内容例>

退学・休学を検討している学生、連続欠席等学修態度に問題が見られる学生、その他、双方で伝えておいた方がよいと思われる内容など

② 定期ミーティング（年2回）

年2回程度、REガイダンス実施前を目安に実施を想定。

I類科目の単位修得状況や個人面談の結果を踏まえ、個別の学生の状況（課題を抱える学生、著しい成

長を見せた学生の情報など) について、その後の履修指導や学修指導に資する情報交換を行う。

<実施時期および主な報告内容>

1 9月中旬

第1・2QTの学修状況、夏期面談報告、teamsで共有してきた学生の経過報告など

2 3月上旬

第4QTの学修状況、冬期面談報告、teamsで共有してきた学生の経過報告など

◆チューターの役割と業務内容

名称	業務内容
コア・チューター	<ul style="list-style-type: none"> クラス・チューター業務 チューターのマネジメント 学生カルテの管理と報告書の作成 キャリアカウンセリング・個別面談 etc.
クラス・チューター	<ul style="list-style-type: none"> 授業前: 教員との打合せ、教材準備 授業中: 出欠・学修状況の把握、活動支援 授業後: 授業の振り返り、授業外学修の支援 (グループ学修支援、質問対応、提出物管理・採点) etc.
ポートフォリオ・アドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> 期首: 学生の学習計画へのフィードバック 期中: 学生の振り返りへのフィードバック 期末: 学生の学習改善へのフィードバック etc.

1

I 類の統合型の新教養教育

① 教員2名+チューターによるチーム・ティーチングスタイルでの学修支援

② 育成すべき知識・技能、資質・能力を統合的に獲得できるように、

「タテ串×ヨコ串」の二つの観点でのカリキュラム

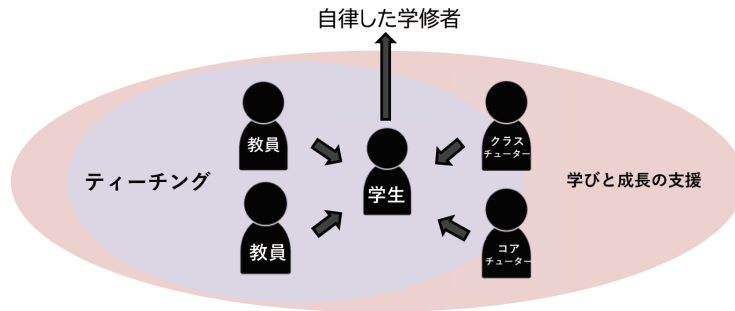
探究科目	専門パート＝タテ串	共通パート＝ヨコ串
人間の探究	自己の学習観・価値観の形成	キャリア意識の形成・学びのPDCA
社会の探究	自己と地域・社会との関わり	対人力・相手を意識した表現力
自然の探究	自然環境の中で生きる自己	課題解決力・レポート作成

③ コアチューターによる年2回の面談で振り返りと今後の学修計画作成支援

④ eポートフォリオによる学びや成長の履歴の可視化

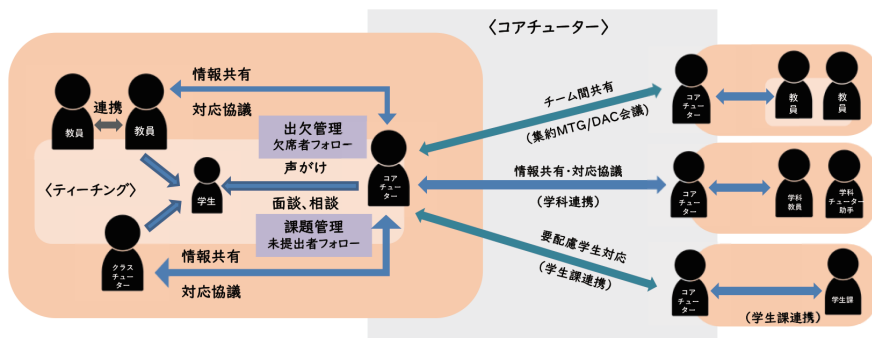
2

DACチュートリアル教育-全体概念図



複数の教員・複数のチューターが学生の学修を支援する
 →DACチューター:一人ひとりの「学びと成長」を支える総合的学修支援者

3

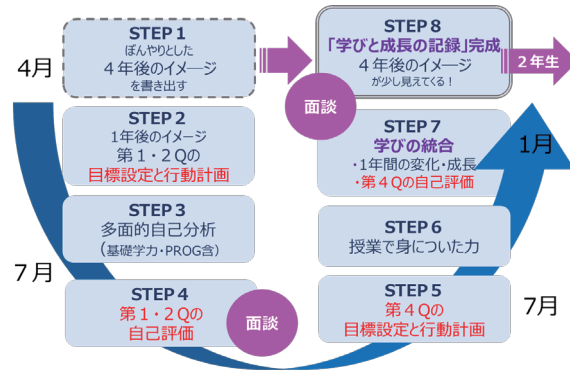


コアカチューター:一人ひとりの学生に対する学修支援の実施主体であり、コーディネーター

4

◆人間の探究科目で「学びと成長の記録」を作成

◆学びのPDCAと年2回の全員面談



5

◆チューターの育成採用=チューター養成講座



6

【チューター養成講座と第Ⅰ類科目「共通教育科目」とのつながり】

ナレッジ・セッション

学修支援のために必要な
基本的な知識

主に、学修支援を行う上での基本的知識
や実践についての理解

ハンズオン・セッション

学修支援の実践スキルおよび
大正大学の学修支援業務

主に、大正大学のチューターとして学修支援
を行うための知識や業務についての理解

インターンシップ

大正大学チューター業務の
実践（授業に参加）

主に前半（ナレッジ・セッション～ハンズオン・セッション）で学修支援者としての基本的知識や実践スキルについて学び、主に後半（ハンズオン・セッション～インターンシップ）で大正大学のチューターとしての知識や業務について学びカリキュラムとなっている。

またプログラムでは、第Ⅰ類の教育目標「主体的学修態度」の育成をねらいとして各科目共通でチューターが行う学修支援（面談、グループワーク支援、リフレクション、教員とのチームティーチングなど）について扱い、第Ⅰ類各科目の授業内容に関連した学修支援については採用後の研修で科目ごとに対応している。

令和4年度「大正大学チューター育成プログラム」について

セッション	講座内容	
ナレッジ・セッション	大正大学の チュートリアル 教育と高等教育 の現状	① 日本の高等教育における大正大学チュートリアル教育について
		② トランジションと高等教育
		③ 大学教育とリーダーシップ
		④ 大学のカリキュラム・マネジメント
		⑤ 学修評価の全体像
	学修支援	⑥ 学生の主体的な学びを促す学修支援
		⑦ 学びを深めるリフレクション
		⑧ 学びを深めるコーチング
		⑨ 学びと成長を支援するキャリアアカウンセリング
		⑩ 中退予防
		⑪ 教育における障がい者支援
		⑫ 知的障がい者への学修支援
		⑬ 大正大学チューター応募要領（資料のみ）
	ワークショップ	⑭ ワークショップ～ナレッジセッションまとめ
ナレッジ・セッション合計時間：21時間		
ハンズオン・セッション	グループ支援	① グループ活動のファシリテーション
	個人支援	② 面談
		③ 学生の個別支援
	大正大学での 授業参加	④ 大正大学の学修支援（インターンシップ事前研修）
	インターンシップ	⑤ インターンシップ（授業参加）(1)
		⑥ インターンシップ（授業参加）(2)
ハンズオン・セッション合計時間：14時間		
育成プログラム合計時間：35時間		

(2) データサイエンス教育



総合学修支援機構 DAC
教授

前田 長子

本学は、令和2年度よりデータサイエンス教育を導入し、地域戦略人材の育成にむけた学生の能力・資質の向上を目指しています。本事業採択にあたり、令和3年度からは全学部への展開を行い、データサイエンス教育における産官学連携も推進しています。加えて、令和4年度には、文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）プラス」に認定されました。本学は、令和4年度に「リテラシーレベル」と認定された139校の教育プログラムの中でも、先導的で独自の工夫・特色を有する「認定教育プログラム（リテラシーレベル）プラス」として、私立大学で唯一認定されました。今後もこの成果を活かしていきたいと考えています。

次に、データサイエンス教育プログラムの概要について、プログラム実施の目的、プログラムの内容について、そして特色ある取組み、マネジメント体制等について説明いたします。最初に、本学は、令和2年度より、超スマート社会の中で、地域を支え活躍する人材を育成する教育プログラムを構築するために、第1類科目である共通教育科目において、全1年生・2年生にデータサイエンス教育を展開しています。全て必修の共通教育科目であり、令和2年度は、先行して3学部のみで実行し、令和3年度入学生から全学部を対象としています。2年間で6単位取得となっており、また、教育プログラムの考え方としては、社会に欠かせないスキルを身に付けた、データに強い文系学生を育てるということと、社会地域の問題発見力と課題解決力の育成を目指しております。本学の学生の状況については、入学時の基礎学力テストやアンケート結果より、数学の成績は低めで、ばらつきも大きいという状況です。入学当初の学生へのアンケートでも数学を苦手だと回答する学生は69パーセントおります。一方で必要性を感じているという学生は73パーセントとなっています。これは本年度の結果ですが、過去(去年、一昨年)においても、ほぼ変わらない結果となっております。

教育プログラムでの教育目標については、次の通りとしています。主観的な判断ではなく、データを基に意思決定を行い、データドリブンな思考を高め、社会の課題を解決し、価値を創造していく人材を育成します。授業については、データサイエンスIからVIまでの授業があり、2年間で6単位の取得となっています。座学や講義では情報リテラシー、データサイエンス基礎、AIの基礎や統計学の基礎等、基本を学びながら、同時にExcelによる情報処理、可視化のツールであるTableauの基礎を学びます。そして、データサイエンスV、VIの授業については、このデータサイエンス科目の集大成として、これまで学修してきた統計や情報処理や可視化のスキルを活かして産官学連携による社会の課題解決に取り組むという内容になっています。

特色ある取組み、授業内容と学修支援については次の通りとしています。本学は共通教育科目として、チュートリアル教育を展開しており、一人も取りこぼさない学修支援の実践をしています。あくまで学修者中心であり、学生の主体的な学びを育てるために、教員、チューター、SAによる学修支援を行っており、チームティーチングを実践しています。1年生のクラスについては、1クラス当たりの人数を、学生が100名で教員2名として

います。令和4年度は学部混成で12クラスとしています。習熟度クラスを導入していますが、どのクラスも教材や教育目標等は同一で、教員・チューターのサポート方法等について、多様な学生に対応できるような支援をしている点が特徴になります。

2年生のクラスについては、学部・学科別で編成しており、令和4年度は11クラスとなっています。2年生においても、チームティーチングを実施しています。関わる人数や役割等が多いために、授業ごとに細かく各役職の支援内容や役割を設定しています。基本的には、専任教員が中心となって運営にあたっていますが、本学のデータサイエンス科目は、一般企業でデータを扱う業務やIT関係に携わる実務家教員が多いため、今現在の社会の中で、どんなことを優先して教えるべきなのか、また、どのような教材がふさわしいのかということの助言を求めながら、専任教員で教材開発、事業運営方法等を検討しています。チューターはコアチューターである専任職員が2名おり、クラスチューターやSAのマネジメントを行っております。

加えて、チュートリアル教育の実践においては、データサイエンスを中心に説明すると、グラデーションを付けた学修支援を展開しています。特に1年次の入学時は、数学が苦手、やりたくないという学生もいますし、また、主体的な学びが難しく、習熟度も十分でないという学生もいます。このような学生を中心に、学びの基礎体力支援を強化しています。具体的には、まずきちんと出席をする。課題を期日どおり出す。そういったことをできるように、サポートしています。プチ面談なども通して徐々に本人たちも自律的な学修に移行してくる状況を見計らって、次に主体的な学びへのマインド支援に移行します。コツコツ頑張っているのだけれど、なかなか成績が伸びない、理解が進まないという学生のブレイクスルーのチャンスを教員とチューターが連携し見出していきます。

そして、データサイエンスV、VIの授業で産官学連携の時期になると、特に意欲の高い学生やチャレンジ精神旺盛な学生については、学びの技法の支援という形で、学生の可能性をさらに高める支援を行っていきます。もちろん、どのタイミングでも多様なすべての学生に対して学修支援を行います。特にI類科目の後半では上位層の学生の育成も意識しながら、取り組んでいます。

授業の教材については、分かりやすさと反復学修に取組みやすいよう配慮しています。特に本学は、数学が苦手な学生も多いので、高校の数学とは異なるということと、これから社会に出て必要なことをしっかり身に付けていこうということを、何度も繰り返し学生に説明しています。そして、できるだけ身近なテーマを教材にして授業を展開しています。工夫している点としては、「頭で理解する」と「手を動かす」ということをセットでの学修の流れです。例えば、分散、標準偏差というテーマの場合、散らばりの指標とは何か、どのような計算方式を用いるのかを説明し、まずは簡単な数値を使って電卓で算出します。その後、この分散、標準偏差をExcelの関数を使って解いたり、またグラフを作成します。さらには作成したグラフからの読み取りと言語化ができる力も付けていきます。各授業は、比較的同様の組み立てになっていて、重ねて学ぶことで理解が深まり修得できるように工夫をしています。

また反復学修が進むようにTableauやExcelなどの復習用の教材を用意しています。授業後も1人で自己学習や復習ができるように、問題のみならず正答や解説の入った教材になっています。

続いて、産官学連携については、実際のデータを活用したリアリティがあり、できるだけ学部、学科の専門の学びと連結するように意識して取り組んでいます。連携先からは、問題や課題のミッションを提示していただき、このミッションに取り組むために、必要なデータの提供を受けています。産官学連携の授業については、データサイエンスVの授業において、個人で分析からプレゼンまで一人で行う形式としており、これまで学んだことを踏まえて受講生全員がアウトプットできるようにしています。データサイエンスVIの授業では、グループワークでプレゼンテーションを行います。複数データから多面的な分析を行い、課題抽出と課題解決力を高めていきます。データサイエンスVもVIも最終回の授業では連携先に代表によるプレゼンテーションを行い、質疑応答やアドバイス、フィードバックを直接もらいます。

Tableauを使った定量分析手法の講義では、連携先のデータに応じた演習を行っています。データ定義書の読

み取りと活用方法であったり、アンケートデータでのシングルアンサー、マルチアンサーの扱い方やクロス分析の仕方など、学生が正しくデータを扱い、分析していただけるようにリーディングしていきます。

なお、連携先の方々には、プレゼン内容で良かった点だけでなく、社内や取引先でプレゼンテーションを行う際、必要となる視点や掘り下げ方や、論理展開の重要な点などについてリアリティーあるフィードバックをいただいています。

教育の質保証と学修支援のための取組みについては、教員・チューター合同の研修会、教員のみ、チューターのみ、SAのみの研修会等、様々な目的に応じて研修を実施しています。教員・チューター合同のFDは年に2回実施し、教育目標の理解等のベクトル合わせやチームビルディングを目的としています。また、教員やチューターへの新任研修やFDは、3月に4週連続で毎週行っています。また、授業のない時期を使って、教員やチューターのTableauのスキルアップのためのハンズオン研修企画や、SAに関しては産官学連携のサポートとして、本人達にまず分析をさせて、学修支援前に準備をする勉強会なども実施しています。

そして、教員は、授業開講期間中においては、毎週月曜日に講師会を行い、その週の木・金曜日の授業に備えます。具体的には授業の内容や演習について確認し、意見交換を行い、授業の改善等を図っています。

さらに、一人も取りこぼさない学修支援については、補習や学修相談を定期的に行っています。補習は、チューターが企画・運営し、教員も支援する形で仕組みを構築しています。令和3年度の実績として、補習については、約100回実施し、参加者は700名でした。teamsを活用して、オンラインでも開催したり、学外からも補習教材等もダウンロードできる形にしています。産官学連携の学修相談については、118名の相談がありました。補習と授業をセットで取り組む学生も増えてきていて、令和4年度については、開催数や参加者数も昨年度を大きく上回る形で推移しているという状況です。

そして、授業の中で見つけた知識やスキルを、しっかり学修成果として明確化する目的として、正課外で年2回資格取得対策講座も実施しています。現在はTableauのデスクトップのスペシャリスト、MOS Excel、統計検定4級の対策講座を実施しており、学生の合格率を上げていきたいと考えています。さらに、学生の学外コンテストの参加も積極的に支援しています。令和4年度は、公共政策学科2年生のチームが、「学生によるミタカ・ミライ研究アワード2022」において、上位3チームの一つに選ばれ、優秀賞を獲得しました。また、公共政策学科・表現文化学科3年生のチームが、「企業分析AWARD2022」にて優勝を果たしました。そして、Tableau学生ユーザー会における「うちの大学のTableau学修自慢」をテーマとして、公共政策学科・地域創生学科の学生が本学のTableauを活用した教育活動のプレゼンテーションを行いました。今後とも学生のこのようなコンテストの参加等について、積極的に支援していきたいと考えております。

データサイエンス教育のマネジメント体制については、データサイエンス教育チーム運営会議を設けており、その会議を中心に二つの軸を展開しています。一つは教材開発やFDを目的にした教員会議です。もう一つは授業運営と学修支援の質を向上するための会議体で教員とチューター合同会議です。定期開催の会議とプラスして期末振り返り会議も実施しています。クォーターごとに学生にアンケートを実施していますので、それを基に専任教員とチューターを中心に振り返り等を実施し、次のクォーターでの改善につなげていきます。

学修支援システムの構築と学修成果の可視化については、eポートフォリオ等を活用して、様々なデータを管理しています。データサイエンス科目全体の状況の把握や個別の学生の状況を把握しています。全体で誰がどんな出席状況で、その原因は何なのかを分析しています。テストに向けての学修時間、プレゼンテーションの準備時間、各授業テーマごとの学生の理解度や習熟度についても学生のアンケートで学部別、クラス別、前年や前期などとの比較を通して状況を把握し、さらに教員の教育目標到達度に対する自己評価と合わせてPDCAサイクルを回しています。特に学生の理解度や習熟度が低いテーマは教材を見直し、その後の学生の変化を確認しています。

次に、現状と今後の課題についてご説明させていただきます。学生の単位取得状況ですが、単位未取得者は3

パーセント未満を目標に、チームで取り組んできています。令和2年度から約3年目になっています。達成できてない期もあるのですが、おおむね達成できています。

今後の課題については、授業内容や教材の改善を図るとともに、学生の理解度と社会のニーズの合致を考慮していく必要があります。また、内容についても確認しながら、検証と見直しを行っていくということが必要になります。実務家である非常勤教員にアドバイスをいただきながら教材開発をしておりますが、実際に世の中で認められる能力・資質と本プログラムで実施する内容が一致するのかどうかを評価しなければいけません。そして、一部の意欲の低い学生への対応については、学修支援から自律学修へ移動できるように支援方法について検討していく必要があります。

そして、補習については、非常に学生にも評価が高く、定着しつつありますが、一方で、授業の中で全て理解をする、習得することも一つの目標であり、そのバランスを見極めながら実施していきたいと考えています。また、全般的な傾向として、入学時の学生のITリテラシーが、令和2年度から令和4年度の入学生において、格差が開いてきています。入学者が新学修指導要領の世代になると、そこを踏まえてのカリキュラムの見直しと水準の見直しをしていかななくてはならないと考えています。さらに、資格取得についての学修支援体制の確立や第Ⅲ類科目への接続についても検討していく必要があります。

最後に、教育の質と学修支援の質、両方を向上していくために、チューターの確保が必要になってきています。教育支援者としてのチューターの存在とチームティーチングが、データサイエンス教育には欠かせないと言えます。



令和4年度データサイエンス 第1QT~4QTの振り返り

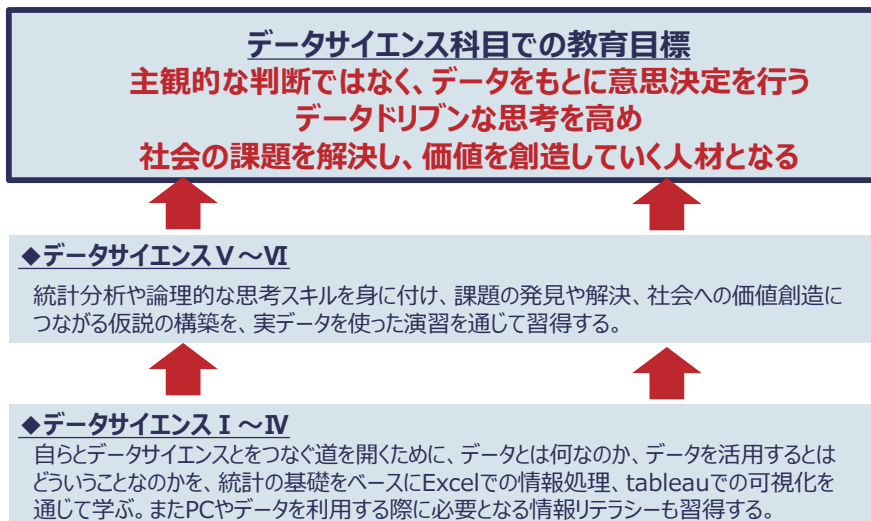
総合学修支援機構DAC
データサイエンス科目チーム

目標確認



データサイエンス科目教育目標の確認

- ① **主体的学修態度**：自ら進んで学修し、さまざまな学びや経験を統合して、自らの学びを深めることができる。
- ② **知識理解・活用力**：知識・情報を的確に収集・活用して、事象を複眼的に考察し、創造的な発想をすることができる。
- ③ **表現力**：読者や聴衆、状況や場面に即して適切な手段を用いて、分かりやすかつ説得力のある表現をすることができる。
- ④ **課題探究・解決力**：自ら「問い」を発して探究するとともに、解決策を重層的に構想し、現実的に解決することができる。
- ⑤ **情報・データ活用力**：情報リテラシー、データリテラシーを身につけ、課題解決に役立てることができる。
- ⑥ **対人力**：他者と協働して活動するとともに、リーダーシップを発揮して、他者との共生を目指すことができる。
- ⑦ **セルフマネジメント**：自らの価値観を大切にし、将来を見定め、力強く生きていくことができる。
- ⑧ **チャレンジ精神**：新しいこと、困難なことに挑戦し、新しい価値創造を目指すことができる。
- ⑨ **地域密着力**：地域の人々と交流し、地域の実情を理解して、地域の人々と協力して、地域の課題を発見し、解決できる（巣鴨学）。



R4_データサイエンス I～Ⅲ振り返り
【履修】学生の履修状況（全体）



【目標】「ひとりもとりこぼさない」 単位未取得者**3%未満**

【結果】 達成👉DS I、DSV **未達👉DS II、DSⅢ、DSⅣ、DSⅥ**

R4 入学生	令和4年度（2022年入学：1年生時）		
	DS I	DS II	DSⅢ
学生数	1,300	1,294	1,279
単位未取得者	20	51	67
単位取得率	98.0%	96.0%	94.8%

R3 入学生	令和3年度（1年次）			令和4年度（2年生次）		
	DS I	DS II	DSⅢ	DSⅣ	DSV	DSⅥ
学生数	1,103	1,103	1,089	1,063	1,058	1,045
単位未取得者	16	33	29	33	30	32
単位取得率	98.5%	97.0%	97.3%	96.8%	97.1%	96.8%

※QT未時点での休退学学生除く

R4_データサイエンス_1QT～4QT振り返り
令和4年度の体制



◆**教員**

専任6名
非常勤11名（新規非常勤5名）

◆**コアチューター**

2名体制

◆**クラスチューター** ※1クラス1～2名

木曜日 9名 → R3は4名 ※チューター1名のみのクラスが3クラス有
金曜日 8名 → R3は6名

◆**SA**

1年生クラス 木曜日 26名 金曜日 25名
2年生クラス 木曜日 14名 金曜日 14名 ※DSⅥ履修済3年生

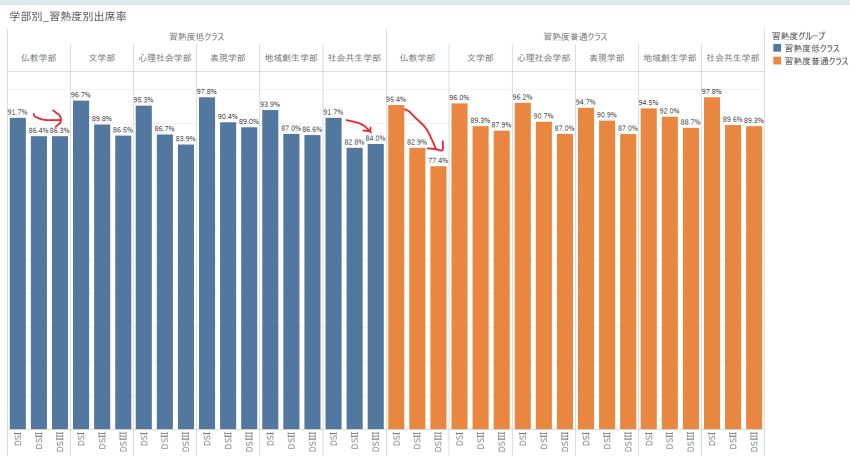
もともとチューターの人数が不足している上、チューターSAともにコロナや体調不良で休む頻度が多く、人数不足のクラスを調整する授業回が多かった



1年生_出席と成績に関する振り返り

R4_データサイエンス I ～Ⅲ振り返り **1年生**
【出席】学部別_QT別_出席状況 ※習熟度別

探究、社会創造とも各2クラスが習熟度が低い学生のクラスだったが、習熟度と出席率は多少関係があるものの、大きな差はない。仏教、社会共生の習熟度の低いクラスの出席率の低さが気になるが、仏教は普通クラスも後半大きく落ち込んでいる状況が気になる点



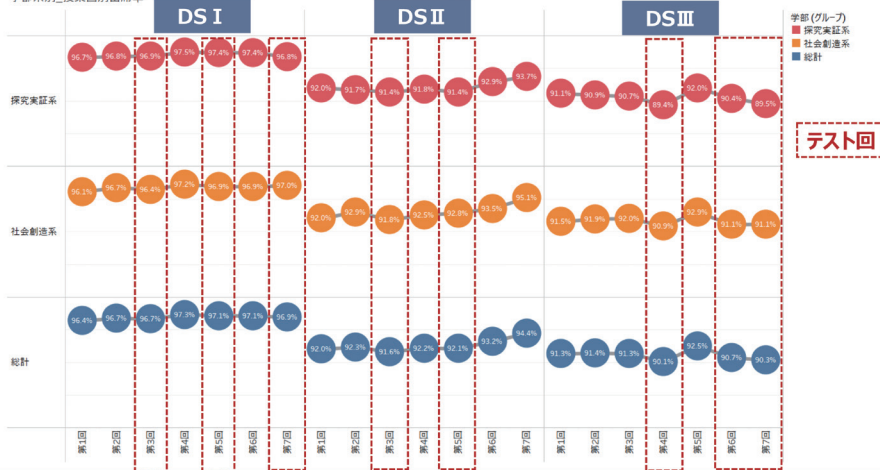
R4_データサイエンス I～Ⅲ振り返り **1年生**

【出席】学部別_授業回別_出席状況 ※遅刻含



1QTは比較的安定したものの、2QTは出席率の水準が全体的にさがっている。1QTはテストの週も出席率を維持していたが、**2QT以降はテストの日の出席率が悪く、改善すべき課題**である

学部系別_授業回別出席率



R4_データサイエンス I～Ⅲ振り返り **1年生**

【履修】1年生_クラスごとの成績評価割合



【DS I】単位未取得者 **2.0%**

行ラベル	前田	尾白&小川	三瓶&松本	宮脇&宇野澤	田島&歌田	星野&服部	佐藤&山川	前田&南條	尾白&歌田	田島&森田	宮脇&多田	星野&石川
AA	11.8%	13.1%	24.6%	18.6%	28.3%	21.7%	13.2%	26.3%	12.9%	27.8%	14.0%	23.4%
A	37.3%	31.8%	36.0%	38.1%	31.9%	27.0%	22.8%	22.2%	34.7%	35.2%	29.0%	32.7%
B	40.2%	39.3%	31.6%	35.4%	32.7%	39.1%	50.0%	37.4%	39.6%	29.6%	48.6%	31.8%
C	8.8%	12.1%	6.1%	6.2%	4.4%	9.6%	13.2%	13.1%	11.9%	6.5%	5.6%	9.3%
D	2.0%	2.8%	0.0%	1.8%	1.8%	1.7%	0.9%	1.0%	0.0%	0.0%	1.9%	1.9%
Z	0.0%	0.9%	1.8%	0.0%	0.9%	0.9%	0.0%	0.0%	1.0%	0.9%	0.9%	0.7%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

【DS II】単位未取得者 **4.0%**

行ラベル	前田	尾白&小川	三瓶&松本	宮脇&宇野澤	田島&歌田	星野&服部	佐藤&山川	前田&南條	尾白&歌田	田島&森田	宮脇&多田	星野&石川
AA	11.8%	9.5%	20.2%	12.5%	16.8%	7.8%	0.9%	12.1%	16.8%	23.4%	7.5%	4.7%
A	27.5%	31.4%	43.9%	37.5%	37.2%	31.3%	21.1%	39.4%	40.6%	52.3%	48.6%	47.7%
B	42.2%	41.9%	24.6%	32.1%	32.7%	49.6%	54.4%	33.3%	29.7%	17.8%	32.7%	34.6%
C	13.7%	15.2%	7.9%	15.2%	7.1%	7.8%	17.5%	11.1%	6.9%	4.7%	5.6%	9.3%
D	2.9%	1.0%	2.6%	0.9%	3.5%	0.9%	4.4%	2.0%	2.0%	0.9%	2.8%	2.2%
Z	2.0%	1.0%	0.9%	1.8%	2.7%	2.6%	1.8%	2.0%	4.0%	0.9%	2.8%	0.9%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

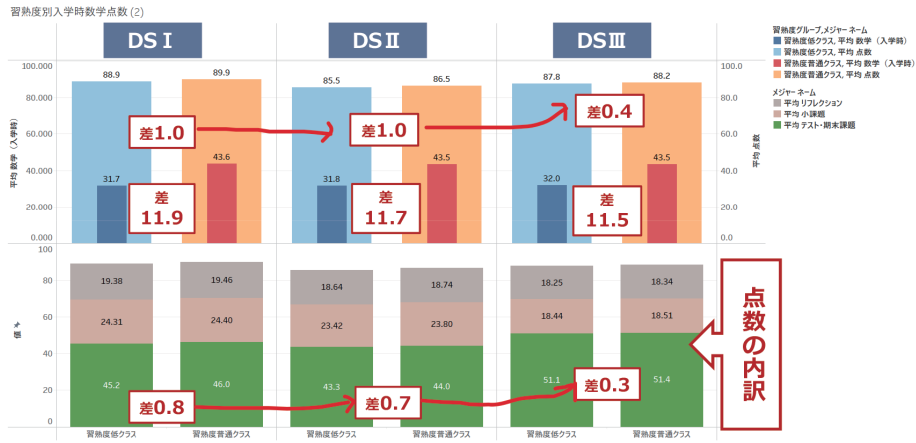
【DS III】単位未取得者 **5.2%** ※クラスによってばらつきが多い

行ラベル	前田	尾白&小川	三瓶&松本	宮脇&宇野澤	田島&歌田	星野&服部	佐藤&山川	前田&南條	尾白&歌田	田島&森田	宮脇&多田	星野&石川
AA	26.7%	17.1%	30.6%	15.3%	22.3%	19.5%	14.9%	31.3%	18.2%	35.5%	19.2%	15.2%
A	20.8%	23.8%	27.9%	26.1%	31.3%	31.9%	22.8%	27.1%	26.3%	20.6%	33.7%	33.3%
B	24.8%	27.6%	19.8%	32.4%	18.8%	31.0%	36.8%	30.2%	34.3%	29.9%	29.8%	33.3%
C	22.8%	26.7%	18.0%	17.1%	19.6%	13.3%	20.2%	9.4%	16.2%	10.3%	10.6%	13.3%
D	1.0%	3.8%	3.6%	7.2%	5.4%	2.7%	4.4%	2.1%	2.0%	3.7%	4.8%	3.8%
Z	4.0%	1.0%	0.0%	1.8%	2.7%	1.8%	0.9%	0.0%	3.0%	0.0%	1.9%	1.0%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

R4_データサイエンス I～Ⅲ振り返り **1年生**
【成績】1年生_クラス別_QT別_成績状況 ※習熟度別



習熟度の低いクラスと普通クラスの差は1点程度（ほとんど差がない）
 DSⅢになるとその差は更に縮まり、0.4点となっている（令和3年度と同様の傾向）
 また点数の内訳をみても、テストの点数の差も同様である。

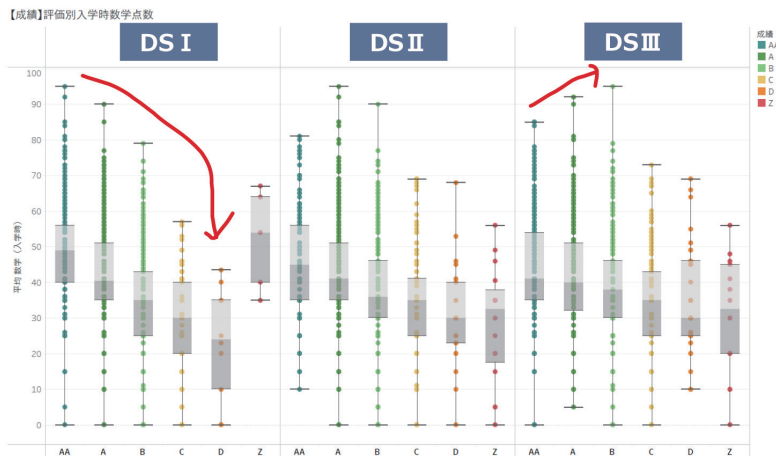


10

R4_データサイエンス I～Ⅲ振り返り **1年生**
【成績】1年生_評価別_QT別_入学時テストとの関係



入学時数学の点数がよかった学生の成績がDS I からⅢにむけて成績が下がっている点は気になるところである。DSⅢの単位未取得者も含めて、成績以外の学修意欲や出席の低下やアルバイトへの注力などが関係している可能性がある。



11

● 評価できる点

- ✓ DS I は単位未取得学生が3%未満となった点
- ✓ DSⅢの平均点では習熟度の低いクラスも普通のクラスと差が0.4点程度まで縮められた点
 - ✦ 成績不振学生の早期発見と対策を講じたこと、Excelなどの補習効果が

● 評価できない点（問題点）

- ✓ 単位未取得学生がDSⅡで4%、DSⅢで5.2%になってしまった点
- ✓ 出席率も2QT、4QTと厳しい状況が続いた。特にテストの日の出席率は下がっている。
 - ✦ 2QT以降の学生のモチベーションの維持が課題だが打開策が現時点では思いつかず
- ✓ 学修意欲格差が開いている印象を受ける。結果として2極化が進んでいるのではないが。
- ✓ クラスによって成績にばらつきが出た点（DSの評価の教員の甘辛は出にくい科目）
- ✓ 令和3年度と比較して入学時格差が開いている。特にITリテラシーの格差が大きい。
 - ✦ 授業レベルをさげず、PCRリテラシーが低い学生は4月のガイダンス週の学修支援を実施
 - ✦ Excelについては応用問題など解ける学生むけのワークシートが必要となる



1年生_育成すべき能力・資質の評価

学生自己評価

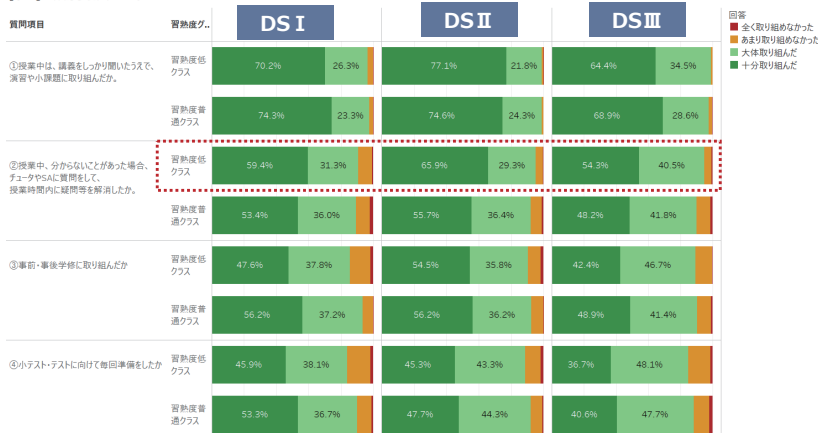
R4_データサイエンス I～Ⅲ振り返り

①主体的学修態度 (全体_習熟度別)



主体的学修態度は年間通して高い水準を維持しているものの、DSⅡをピークにDSⅢは全体的に「十分取り組んだ」が下がり「大体取り組んだ」の割合が上がった。授業中に分からないことの解消への取り組みのみ習熟度が低いクラスの「十分取り組んだ」割合が高めで、チームティーチングが機能していると言える

【学生】主体的な取組について

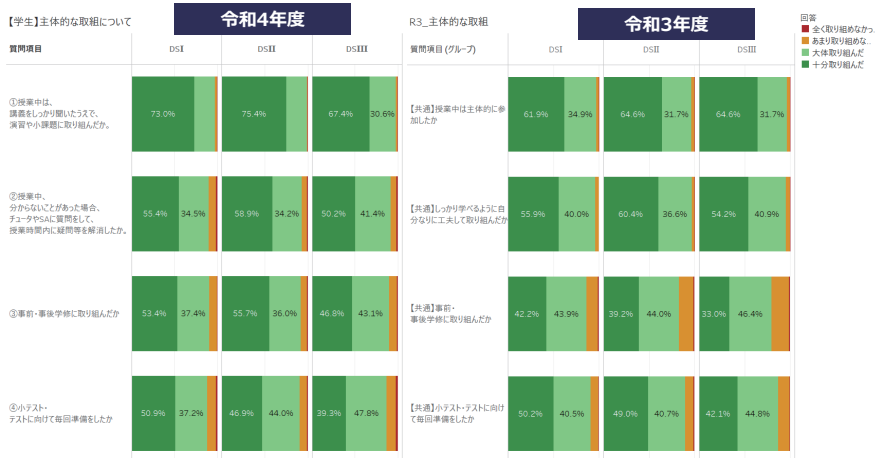


R4_データサイエンス I～Ⅲ振り返り

①主体的学修態度 (令和3年度との比較)



令和4年度と質問項目が一部異なるが、令和3年度と比較すると授業中の主体的取り組みと事前事後の取り組み意識が高くなった一方で授業中の質問やテスト準備などの割合は下がっている。



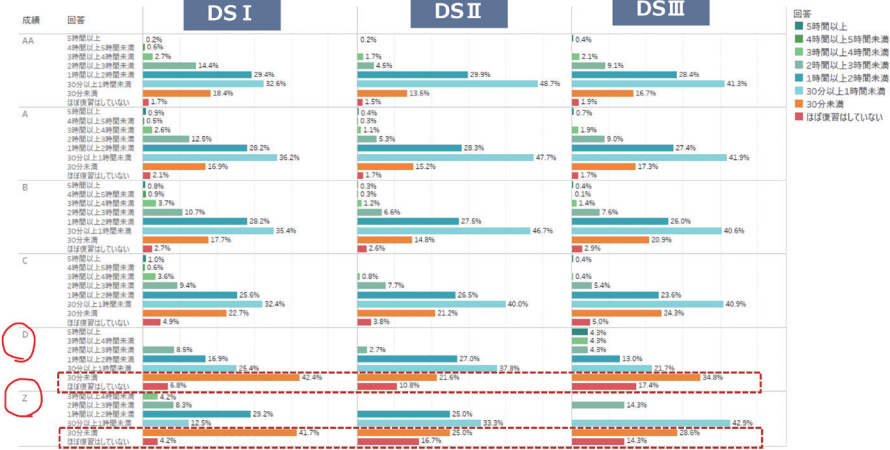
R4_データサイエンス I ～Ⅲ振り返り

①主体的学修態度 (テスト学修時間_成績別)



テストに向けた学修時間と成績は比例している。特にC,Dの学生は学修時間がどのQTも低めでQTを経るにつれてほぼ復習せずにテストに臨んでいる割合がどんどん高くなっている。

【学生】成績別_テスト学修時間割合 (%)



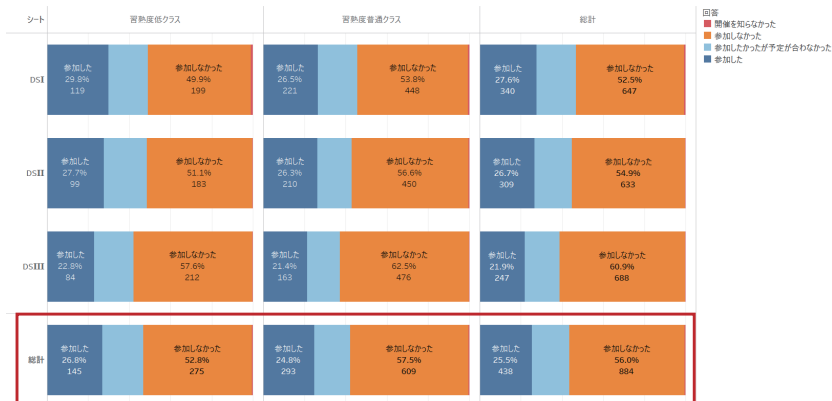
R4_データサイエンス I ～Ⅲ振り返り

①主体的学修態度 (補習参加割合_習熟度別)



習熟度が低いクラスのほうが参加割合がやや高くなっている。令和3年度の参加率はトータル約10%であったことから令和4年度のトータル26%の参加率は増えたことは評価できる一方で、授業内の理解、習得も課題と考える。ただしDS I →Ⅲにかけて参加率は28% →22%へ減少している点は良い点と考える

【学生】補習参加有無

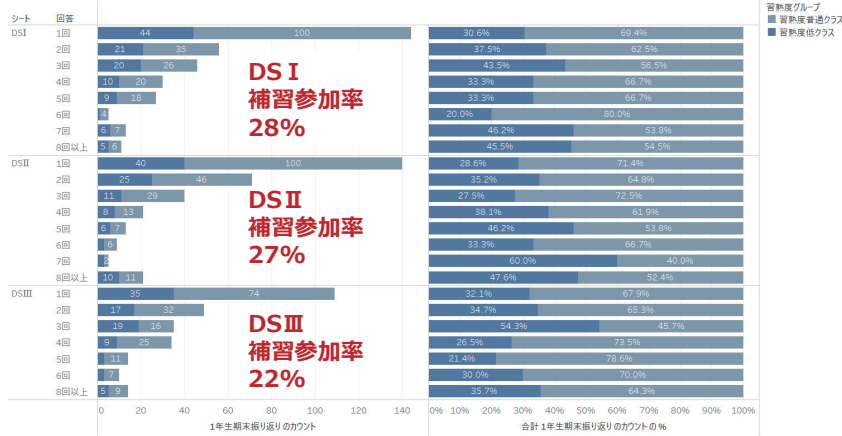


R4_データサイエンス I ～Ⅲ振り返り



①主体的学修態度 (習熟度別補習参加回数)

母数が異なるが、全体的に習熟度が低い学生ほど補習参加回数の割合が高くなる傾向がある。特にDSⅡはその傾向は高まったが、補習参加率はQTごとに少しずつ減っていることから、補習にでなくても対策できるようになってきているとも読み取れる。

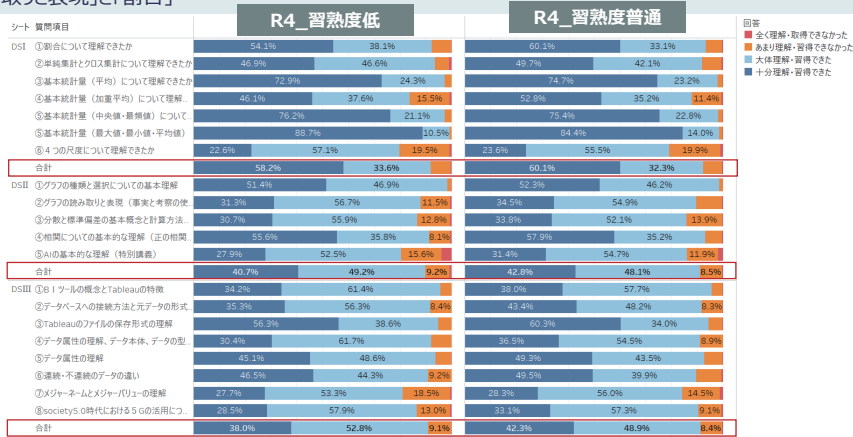


R4_データサイエンス I ～Ⅲ振り返り



②知識理解・活用力 (習熟度別)

全般的には習熟度普通クラスの理解度をやや下回る形で習熟度低クラスが回答しているが大きな差はない。基本統計量に関して習熟度が低いクラスの理解度が高めであるが、これは補習や個別の学修支援によるものであると考えられる。令和5年度の講義内容や小課題の見直し強化テーマは「4つの尺度」「グラフの読み取りと表現」と「割合」

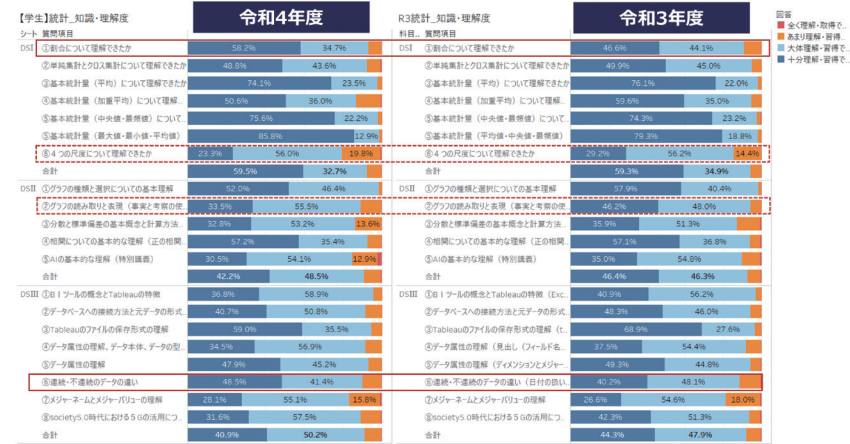


R4_データサイエンス I ～Ⅲ振り返り

②知識理解・活用力 (令和3年度との比較)



令和3年度と比較すると「割合」の理解度が上昇した点は評価できるが、肌感覚としてはまだまだと感じるため次年度の講義内容や小課題の見直し強化は「4つの尺度」グラフの読み取りと表現」と「割合」。連続・不連続の理解度向上は教材見直しと反復回数成果と考えられる

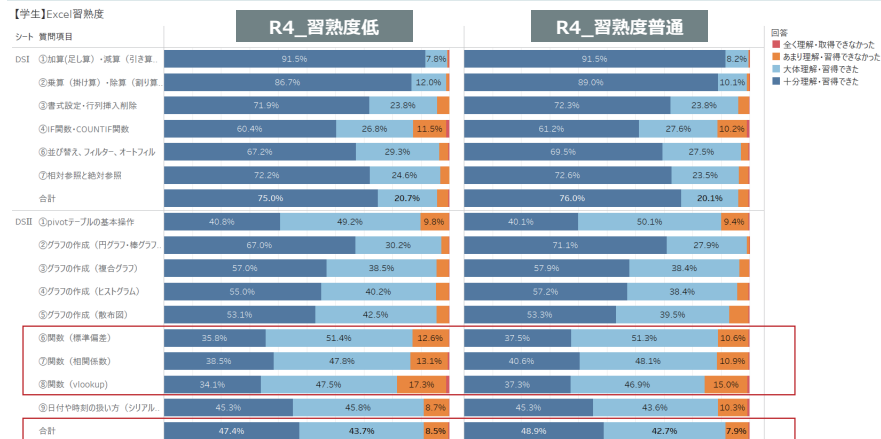


R4_データサイエンス I ～Ⅲ振り返り

⑤情報・データ活用力 (習熟度別)



全般的には習熟度普通クラスの理解度をやや下回る形で習熟度低クラスが回答しているが大きな差はない。あまり理解習得ができなかった割合の高い、VLOOKUP、相関係数、標準偏差などは次年度に向けて教材の工夫を検討する。

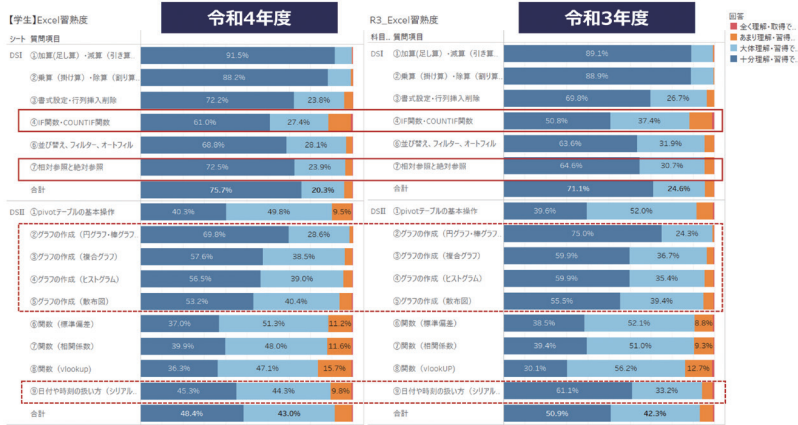


R4_データサイエンス I ～Ⅲ振り返り

⑤情報・データ活用力 (令和3年度との比較)



令和3年度と比較するとDS I は理解度が上昇している。特に課題であったIF・COUNTIF関数と絶対参照の教材や反復方法の見直しに影響しているものと考えられる。一方でDS II で実施するグラフの作成や日付や時刻の扱い方などの学修方法について検討する必要がある。

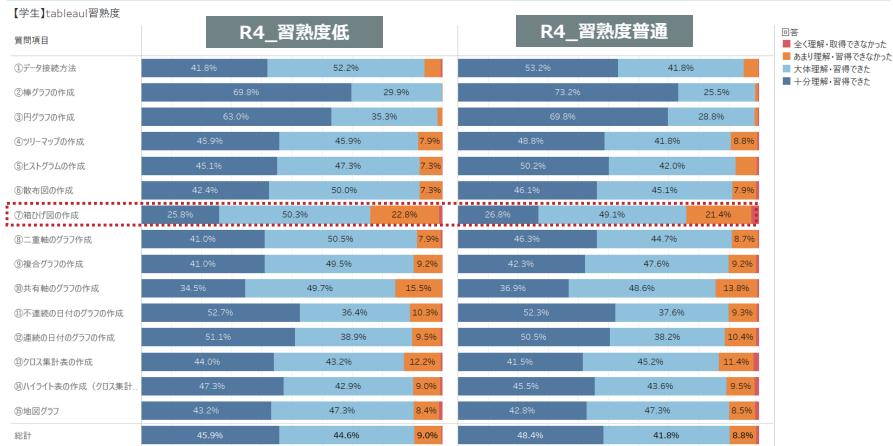


R4_データサイエンス I ～Ⅲ振り返り

⑤情報・データ活用力 (習熟度別)

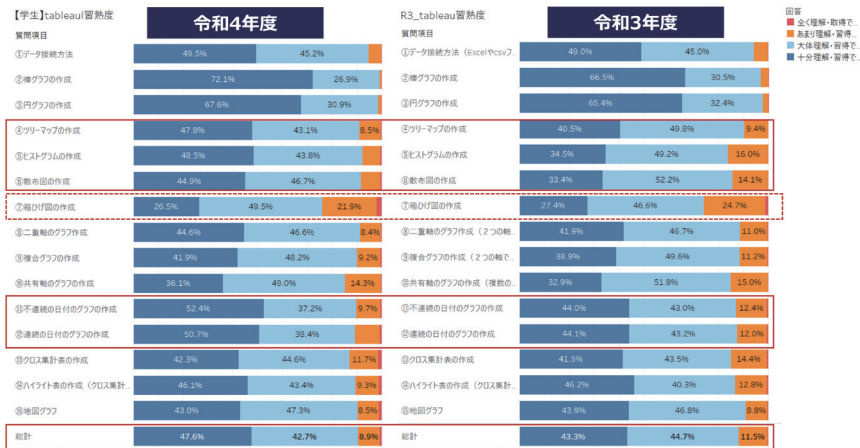


全般的には習熟度普通クラスの理解度をやや下回る形で習熟度低クラスが回答しているが前半(棒グラフや割合に関するグラフ)の理解度の差が影響していると思われる。逆に後半の日付やクロス集計などは習熟度が低いクラスのほうが理解・習得度のレベルが高めである。



⑤情報・データ活用力 (令和3年度との比較) **tableau**

令和3年度と比較するとtableauの習熟度は向上しており、教員の肌感覚とも一致している。苦手箇所に対する説明の工夫や反復が功を奏している。特に日付に関する習熟度の向上は2年生の産官学連携にも活かせるはずである。



1年生_学生の振り返り (定性)

学生自己評価

【学生のコメント】DS I の授業

● 身に付いたスキルや知識

- ✓ 高校の数学で苦手だった割合ができるようになった。
- ✓ 社会にあふれているあらゆる数の見方についてその一部を正しく受け取れるようになったと思う。
- ✓ Excelの作業が身についたと感じる。高校までは簡単な四則計算などのみを行っていたが、絶対参照などそれ以上のことを学んだことで一気に早いスピードで計算できるようになり嬉しかった。
- ✓ 今まで数学的なことに対して苦手意識やパソコンの操作に関してものすごい不安がいっぱいだったが、この授業を経てある程度不安解消され、姿に焦ることなく授業に取り組めるようになった
- ✓ 最初は、IFなどが難しくて何も授業についていけなかったけどチューターさんや、事後学習をしている間に徐々にできるようになった。割合や大なり小なりなどの数学もわからなかったところが理解できるようになった。
- ✓ 心理学研究の授業でもExcelを使うのですがその際に関数などをすでに頭に入れていたためあまり困らずに取り組むことができ他の知らなかったことに集中して取り組みました。

● 向上しなかった点や課題点

- ✓ 向上しなかったのは割合と尺度水準だ。私は数学などの計算が好きなのだが、小学生の頃から割合だけはどうしても苦手で、今でもそれを引きずっているんだと知ることができた。知れただけマシなのかもしれない
- ✓ 絶対参照を使うことには慣れたが、言葉で説明しろと言われたら未だ微妙
- ✓ 割合と消費税率、特に苦手意識が消えないままなので個人的にも学んでいきたい。
- ✓ 加重平均が理解できてなかったの、もう一度やりたいです。

26

【学生のコメント】DS II の授業

● 身に付いたスキルや知識

- ✓ DS I で習ったことがすらすらと使えるようになっていたことが驚きでした。
- ✓ 最後まで諦めず、エラーが出ても何回もやってみようという意識の向上に繋がった。
- ✓ 分散や相関係数などの計算。他の授業でも利用することがあり、その時に有効活用できた。
- ✓ データサイエンスの授業の学びによって、社会の探求での発表で作成したPPTに役立ちました。
- ✓ データの読み取りを以前までは事実と考察をぐちゃぐちゃに考えていたのですが、今回区別することでより客観的にグラフを見ることができるようになりました。
- ✓ グラフの作成が一番身についたと思う。初めはグラフを選ぶだけで精一杯でそこから操作が何も分からなかったが授業や課題を通して段々とその他のオプションの追加の操作ができるようになった。
- ✓ グラフとは、自分以外の人に見てもらい、状況を把握してもらうためのものであり、自分よがりではなく相手の立場に立ち、グラフタイトルなど、情報の重要度が高いものはフォントサイズを他より大きくして強調するなど、シンプルで直感的な、わかりやすいものにする必要があるという、グラフに関する知識が身に付いたと感じます。

● 向上しなかった点や課題点

- ✓ 一番苦労したことは事実と考察の単元である。いまだに自分が書いていることが正しいことなのか信じるができない。特に考察は考えることが人それぞれだから何に関連して書けば良いのか迷うときがある。
- ✓ 標準偏差や相関係数などデータの数値を計算して読み取ることが苦手なままになってしまった。
- ✓ ピボットテーブルの作成がなかなか上達しなかった。

27

【学生のコメント】DSⅢの授業

● 身に付いたスキルや知識

- ✓ 以前より授業のペースについていけるようになりました。DS I・IIでは、授業中に課題が終わらないことが何回もあったのですが、DSⅢではどの課題も授業時間内に提出できていました。
- ✓ Tableauという初めて触ったものを使っていったが、前学期で学習したExcelの雰囲気と同じような雰囲気だったので、春学期学習した内容を生かしたと思う。最後まで諦めず、エラーが出ても何回もやってみようという意識の向上に繋がった。
- ✓ データをグラフ化し読み取るスキルが身についたと感じる。
- ✓ データ分析の種類によってどのグラフを使ったらいいかを瞬時に判断できるようになった。
- ✓ 作業的にデータを分析するのではなく、きちんとこの作成したいグラフの目的を考察し、どのデータを入力すれば求めたいデータを表すことができるのかきちんと意味を理解し問題を解くことができるようになった
- ✓ グラフの読み取りでは、事実と考察について考えることができた。事実では、数値などの客観的な根拠からデータを読み取り、考察では事実から読み取ったことを比較したりしながらデータを分析することができた。

● 向上しなかった点や課題点

- ✓ キャプションをみながらないと作れないグラフがいくつかあった。データ属性への理解が少し不十分だと感じた。
- ✓ 自分で考えてグラフや表を作る力がまだ不十分だと感じます。このデータは棒グラフの方が良いかなどの判断がまだうまくできません。
- ✓ どのようなグラフをどのようなタイミングで使うのかなど活用の仕方があまり理解できていない。元のデータを作りたいグラフに変換するためのプロセスを立てる工程ができていない。

【学生のコメント】DS I ～Ⅲ終えての感想

私はパソコンの操作が苦手で中学や高校のときExcelの授業で取り残されることが多々ありましたが、大学ではとても丁寧に教えていただいたのでExcelができるようになり、さらにtableauのような難しいものも簡単にできるようになりました。これからもこれらのソフトウェアを上手く操れるようになりたいです。

大学入学まで、パソコンを使った経験がほとんどなく、初回の授業ではつなげ方すらわからず、焦ったのを覚えています。しかし、授業で繰り返し取り組んでいく中で、楽しさを感じ、夏季休暇ではMOS検定にも挑戦・満点合格できました。今では苦手意識を持っていたパソコンに興味を持ってました。今後に活かしていきたいです。

データと聞くと、数学のデータを思い出していやな感じがしていたが、授業を重ねるにつれ、楽しさなど、印象が大きく変わっていききました。また野球が好きなのもあって、データを自分でいじってみたりして、新しいことを知ることが出来たのも、授業とはあまり関係ない部分ですが、データを扱うことの楽しさに繋がりました。社会の探究の発表でtableauをつかってグラフを作成したのですが、かなり楽に作成することができ、講義を受けてよかったと思いました。

日によっては講義する内容が多くて、頭がいっぱいになり、ほとんど覚えられていないような日もあったが、テストの前に先生が丁寧に振り返ってくださったので、事前準備のわりにはテストはできていたと思う。始めは簡単に感じて後半に向けてしっかり難易度が上がっていて難しかったが、二年次以降もできるだけ教わったことを忘れずに講義に臨みたいと思う。

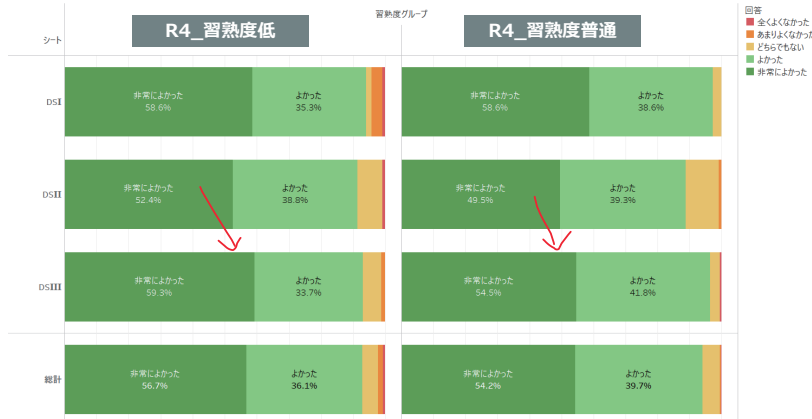
高校の時に大体のExcelに知識や操作方法を学びきったと思っていたが、いざデータサイエンスの授業を受けてみるとまだ知らなかった知識やグラフの作り方のテクニクなど様々なことを学ぶことができた。また、Tableauという新しいツールを学び、より情報の整理がしやすくなったと感じた。2年生では実際のデータを用いて応用を行うようなのでどんな感じの授業になるのか楽しみだ。

失礼な話ではありますが、高校までExcelの事を結構理解していたこともあり、**春学期の授業は正直退屈でした。**ですが秋学期に入ってから今まで使用したことのない、存在すら知らなかったtableauというアプリケーションを用いて授業を受けることがとても楽しく有意義な時間を過ごせたと感じています。

【学生評価】補習満足度

DS Iと比較してDS IIの補習満足度は低下していたが、DSⅢの補習での評価でリカバーできた。DSⅢの1回目のみ、「ゆっくりコース」と「サクサクコース」を試して行ったことも要因と考えられる。補習に対する学生のニーズは様々でどのような形ですすめるのがよいかは再度検討が必要

【学生】補習満足度



30

【学生のコメント】補習に関して

● 評価できる点

- ✓ 時間をかけて丁寧に教えてもらったので理解が深まった点。
- ✓ 授業を欠席してしまい内容がほとんどわからない状態だったけれど、補習をしたおかげでテストに全く不安なく望むことが出来た。
- ✓ 恥ずかしくてわからないことを聞けない人でもわかるまで先生が付き添って教えてくださる所だと思います。「時間は気にしないでいいよ」と言ってくれるのはとても安心しました。
- ✓ 練習問題を模擬試験のように行うことで、時間配分や出題形式を知ることができたこと。また、少人数でわからないところがないか聞きに来てくださるので、不安なことが聞きやすかった。
- ✓ 応用問題があったことで補習を受けてよかった気にならず、自分の力で本当に解けるのか確かめられることが人数が授業より格段に少ないため、一人一人に親身になって教えてくれるので、自分が分からないところも把握でき、不安なところをなくすることができる点

● 改善してもらいたい点

- ✓ 授業でやっている方法と少し違うやり方を教わると困惑してしまう。
- ✓ テンポが速く、追いつくのが大変だった。
- ✓ 補習教材の問題の量をもう少し多くしてほしいです。
- ✓ お昼の時間にやってもらうことが多いので時間が足りないことがあった。
- ✓ 補習の時間の、短さ。40分や45分くらいやってほしい。
- ✓ 午前の開催も検討してほしい。
- ✓ できれば黒板などに補習内容と担当教員の名前を書いておいて下さると助かります。
- ✓ 自分の学部は授業数が他より多く受けられなかったり通学の時間で無理なところがあるので、オンライン授業や授業数を増やしてほしい。
- ✓ 全ての問題を自分から進んで解く、という形式をとっていたが、そもそも自分は自力でできず、やり方を一切知らない前提で参加していたため、最初に説明をし、その後解いてみる。という形式であればもっとありがたかったです。

31



1年生_育成すべき資質と能力振り返り

専任教員・コア評価

32

データサイエンス教育チーム（専任教員&コアチューター）としての自己評価は以下の通り
 昨年に引き続き高いのはチャレンジ精神の90%。全体として苦手なこと、未知なことに取り組む姿勢が評価できる。大きく伸長したのは主体的学修態度の83%。春学期からのプチ面談などの早期の仕掛けが効果的であった一方で、学修態度の格差が開いているのも事実である。

	2022年入学学生 DS I～Ⅲ（1年生）	2021年入学学生 DS I～Ⅲ（1年生）	前年1年生 との差
①主体的学修態度	83%	75%	+8%
②知識理解・活用力	85%	85%	±0%
④課題探究・解決力	77%	80%	△3%
⑤情報・データ活用力	84%	85%	△1%
⑧チャレンジ精神	88%	90%	△2%
トータル	83.25%	83%	+0.25%

33

【R4_DS I ～Ⅲ振り返り】

①主体的学修態度

● 評価できる点

- ✓ 提出物について、一部の学生を除き、特に強い注意喚起をしなくても習慣的に提出できるようになってきた。また、課題やテストで、自分なりに色を工夫する学生が見受けられるなど、自ら考え学ぶ態度が身につけている学生が多い（田島）
- ✓ 入学時点では教員の指示がないと動けない学生が大半だったが、後半はワークブックなど、授業内でどんどん先取りして進めていく学生が増えてきた（佐藤）
- ✓ 最後のテストのDSⅢの期末テストの点数が、DSⅠの当時に点数が悪かった学生も含めて、全般的に大変よかった。点数及び振り返りの内容から、学生の授業中の集中力、補講への参加意識が高かったと考える。（尾白）

● 評価できない点（問題点）

- ✓ ごく一部の学生においては、今だ、出席してただ言われたことをするだけの学生がおり、そうした学生の動機づけに困難を感じる（田島）
- ✓ 基本的な学修態度が身につけていない学生に関しては、全体的に向上の度合いが低いように感じる（田島）
- ✓ 第4QTまで支えざるを得ない学生の存在も等閑視はできないと考えている（星野）
- ✓ DSⅠに取り組み意味がわからない、といったやらされ感、自分事化していない学生も多く見られた。当人の意思を確認する、ということ今年と比較的きちんとやったと思うが、まだ伸ばせる余地はあると思う。（矢野）
- ✓ DSⅠと比較して、自分で考えて行動できるようになった学生が多数いると評価できる一方で、主体性がまだまだ身につけていない学生もいる。2 極化が進んだことが今年度の特徴と言えるし、今後ますます学修支援体制の在り方が難しくなってくると思われる（前田）

【R4_DS I ～Ⅲ振り返り】

②知識理解・活用力

● 評価できる点

- ✓ 各テストの点数が、徐々に上がっていったと感じるため。昨年より、点数が良くなるタイミングが早かった気がする（尾白）
- ✓ 過去の知識を、繰り返し取り上げ、さらに積み上げる方式によって、知識理解の度合いは高まっていると感じられる。特に、知識として取り上げたことが、たとえばクロス集計が、エクセルでの演習、さらにタブローでの演習という、異なるツールでの作成を通じて、深まっていると思う（田島）
- ✓ 講義で学んだ内容をExcelやTableauの演習で活かすことを繰り返すことで、内容の定着を図ることができたと思われる。（佐藤）
- ✓ 昨年は絶対参照をなぜ使うのが理解できていなかった学生が多かったが、補習などを通して結果的には去年より多くの学生が理解できていた印象（酒井）
- ✓ 早期から社会に出たときのことをイメージしながら学修する学生が目立ってきたことが本年度の特徴（前田）

● 評価できない点（問題点）

- ✓ 創造性を発揮することを要求する授業課題は少なかった（佐藤）
- ✓ formsで行った知識評価については思いのほか点数がのびなかった（矢野）
- ✓ グラフの読み取りなどでは、妥当ではない回答をする学生も、それなりに見られた。（星野）

【R4_DS I～Ⅲ振り返り】

④ 課題探究・解決力

● 評価できる点

- ✓ 授業で行ったことを復唱する形ではあるが、データを活用して解を出すことを自力で実践できるようになった（佐藤）
- ✓ 本質的な点については1年次の学修では回りにくいですが、秋学期以降は自らトラブルシューティングに積極的に取り組む姿勢は多くの学生から感じられた。（前田）

● 評価できない点（問題点）

- ✓ 入学時と比べて、グラフの読み取りなど、データから読みとる力はあるが、そこから、考察を深めること、課題を見出すことについては、実感としてまだ十分とはいえない。（田島）
- ✓ 最初からそれなりのスキルを持っている上位層が、課題探究・解決力を十分伸ばすには至っていない（田島）
- ✓ みずから問いを発するという機会に乏しく、「探究活動」ができたとは言いがたい（佐藤）

【R4_DS I～Ⅲ振り返り】

⑤ 情報・データ活用力

● 評価できる点

- ✓ 入学時に比べて、パソコンの基本的扱い、エクセルやタブローでのデータ処理など、情報・データ活用力は、飛躍的に伸びている。特に、苦手、嫌いと言っていた学生でも、できることが増えており、活用力の基盤ができてきている（田島）
- ✓ 情報リテラシーをはかるテストの正答率が高かった。リテラシーの欠如に基づくトラブルの発生はなかった。データの扱いについて、シラバス記載の学修目標は概ね達成できた（佐藤）
- ✓ データを扱うということには場数を踏んで慣れてきた様子が伺える。またトラブルがおきたときにも後半は自分でリカバリーする力もついてきた学生も多くいた。この力を更に高めて、2年次の産官学連携では力を発揮してもらいたいと期待する（前田）
- ✓ 例えばtableauの不具合などで総合学修支援部に来た際、「一応自分でも調べてみたんですけど…」と言いながら来る学生が多かった（酒井）

● 評価できない点（問題点）

- ✓ 作業的にデータを扱っており、グラフのメモリや単位（例：身長3000cmはないよね・・・）まで確認する習慣がっていない学生が散見される。情報処理や可視化を目的をもって行う力は今後さらに強化していかなくてはならない点である（前田）

● **評価できる点**

- ✓ タブローになってから、色を変えたり、グラフのタイプを変えたり、新しいことにチャレンジする学生がみられる (田島)
- ✓ 新しいソフトウェアやツールの使用を積極的に試みた学生が多く、結果として操作の習得はほぼ全員が達成した (佐藤)
- ✓ DSは苦手意識が強い領域だが、時間を使い、意識を保って科目に取り込み、苦手意識から脱却した学生が多数いた (尾白)
- ✓ 苦手なことを克服したいという意欲の高い学生が多くいたと感じた。補習への参加も積極的であったこと。tableauについても前向きに学ぶ姿勢が感じられた。2年次の飛躍に期待したい (前田)
- ✓ 自らネットで調べて、様々なことにチャレンジしようとしている姿勢の学生がいたい (矢野)

● **評価できない点 (問題点)**

- ✓ 単位さえ取ればいい、できるだけ少しの努力で済ませたいという学生もいて、こうした学生は、チャレンジ精神の醸成がすすんでいない (田島)
- ✓ 価値創造については次年度 (2年次) に期待 (佐藤)
- ✓ Tabelauでは、授業中の再三の注意喚起にもかかわらず、キャプションを見てやっている学生がまだまだ多く、85点とした (尾白)

次年度の改善点



1年生_振り返りまとめから次年度に向けて

【R4_DS I ～Ⅲ振り返りと次年度に向けた改善点】

● 評価できる点

- ✓ 計画的に実施したPT面談は主体的学修態度を早期に醸成していききっかけとなったため次年度も計画的に実施していく。
- ✓ 全体的な習熟度は上がっている。昨年度まで苦戦していた散布図やヒストグラムに関してのテストの間違ひも極端に減ってきている。教材の見直しも要因のひとつではあるが高校での数 I での統計の重視や情報教育の浸透も要因と考えらえる。

● 次年度にむけた改善点

- ✓ 主体的学修態度にもつながるが、出席率（特にテストの日）をあげる工夫を仕掛けたいが現時点で得策は思いつかない。
- ✓ 知識理解・活用力については知識問題の学修方法の検討（補習も検討するが、知識問題はLMSを使って100問100答などの練習問題の作成も行っていく
- ✓ 課題探究・解決力探究を高める仕掛けも検討していく（今年度は平均のグループワークなどしかないためグラフの読み取りや表現なども含めて検討していく）
- ✓ 情報・データ活用力の向上ではグラフの作成と同時に事実と考察をしていく流れに変更する。2年生の産官学連携で必要となるスキルのため1年次からアウトプットを沢山だしていくことを強化する
- ✓ 入学時のPC操作の入口のところをどうするか。入学時ガイダンス週の夕方の学修支援会は実施する方向だが、探究科目の先生方とも相談が必要。

【R4_DS I ～Ⅲ振り返りと次年度に向けた改善点】

● 評価できる点

- ✓ 割合の理解度は改善されたものの補習効果も大きいと思われるため令和5年度は抜本的に教材を見直す。
- ✓ グラフの読み取りは回を重ねるほど、質が向上した。次年度は「見本」だけではなく「不十分」な事例を入れる。
- ✓ Excelもtableauも復習シートを充実させたことと、復習時間も必ず確保したことで、習熟度が改善した。教員にも必ず復習時間を取ってように依頼した点もよかった（昨年度は復習ワークに取り組みない教員もいた）

● 次年度にむけた改善点

- ✓ 統計で学ぶ範囲を明確に学生に示すことを検討する（統計検定3級の範囲まで学ぶなど）四分位数とかなぜ学ぶ必要があるのかなど納得させたほうがよい。
- ✓ Excel・tableauともに得意学生向けにワークブックの中に応用問題をいれる（更に増やす）
- ✓ 令和4年度大きく教材を見直さなかったグラフ作成や、VLOOKUPなどの習熟度が下がっている点は課題点として挙げられる。次年度、VLOOKUPは授業の中での反復学習を検討する。
- ✓ Pivotのシートの具体的な指示を行わなかったため採点が煩雑になってしまった。次年度は具体的指示をする。
- ✓ グラフの読み取りに慣れない間は、問題を解く時間をもう少し取るべき。特に1回目テストは12分→15分へ
- ✓ グラフの読み取りは1問1答で1つずつ解説をしていく形式を検討する（3問まとめて解説しない）
- ✓ 特に2QTは欠席した学生の遅れがなかなか改善できなかった。特にグラフの読み取りのレベルが低いままであったため次年度は対策を検討する必要あり。
- ✓ Tableauでも第2回の教材から自身で作成したグラフの読み取りを書かせることを取り込んでいく。

【R4_1QT～4QT振り返り次年度に向けた改善点】

● 評価できる点

- ✓ 補習の年間計画を立て、月～水のみにした点など補習の仕組みが構築されつつある点は評価できる。
- ✓ 補習実施の認知率が94%➡99%へ改善できた点も評価できる。
- ✓ 補習計画も早めに発信できるようになってきたが、教室の確定➡案内方法は改善の余地あり
- ✓ DSⅡでは高圧的と回答している学生が数名いたが、DSⅢでは満足度が改善している。

● 次年度にむけた改善点

- ✓ 時間が合わないと回答する学生はまだまだ多数いる。午前中の開催を検討する。
- ✓ 教員の説明方法に問題あり（独自の方法で説明しているケース有）基本は教材通りを基本とする。また複数の解き方がある場合は最低2つは示せるように工夫する。（授業と違うということが多発しないように）
- ✓ DSⅡの補習教材については見直す必要がある。
- ✓ 申込が多い際の複数クラス開講や支援者要請なども検討していく
- ✓ 入学時PCスキルキャッチアップ補習（超初心者向け）の実施を検討する（できる学生が待たされる傾向が強くなってきた）
- ✓ ひたすら練習問題を解く形式の補習での声掛けの仕方が教員やチューターによって差があった（学生が手をあげないとフォローしない）が補習なのでこまやかに声をかける体制を共通化していく
- ✓ 補習に関してのチューターへの指導要領作成を検討する / 補習以外のe-Learningの作成も進める

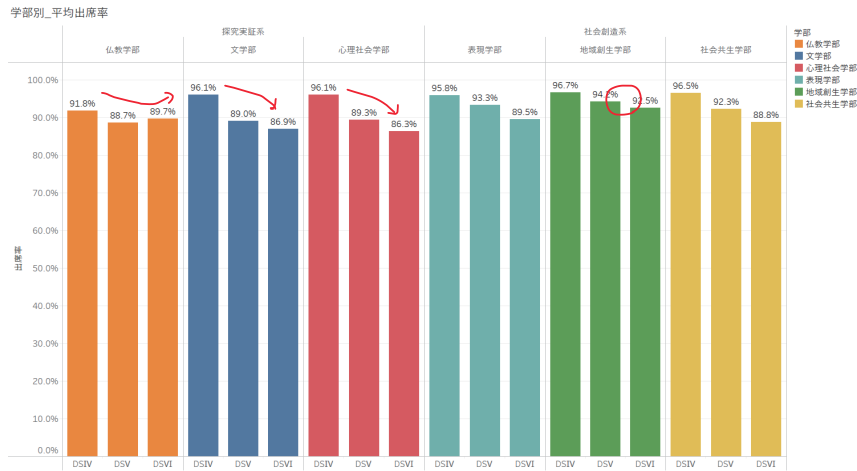


2年生_出席と成績に関する振り返り

R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り **2年生**
【出席】学部別_QT別_出席状況 ※公欠除く



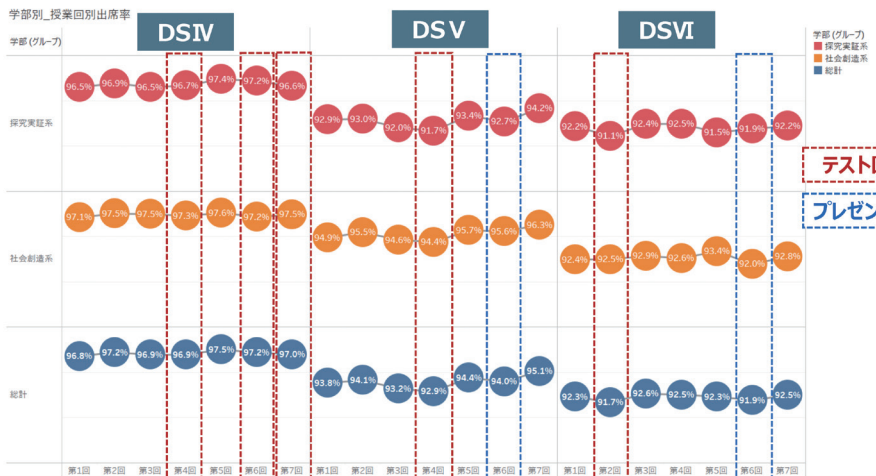
全体的に第2QT→4QTに徐々に出席率が落ち込んでいる。
 社会創造系と比較すると探究実証系のほうがやや落ち込みが大きい



R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り **2年生**
【出席】学部別_授業回別_出席状況 ※遅刻含



1QTは後半に向けて出席率が改善しているが、2QT、4QTは出席の水準が全体的にさがっている。また
 テストやプレゼン時の出席率も低い点は1年生同様で課題



【DSV】単位未取得者 **3.2%**

行レベル	佐藤&歌田	田島&服部	森田&山川	前田&三瓶	尾白&小川	宮脇&宇野澤	田島&森田	佐藤&多田	宮脇&石川	前田&三瓶	尾白&南條
AA	35.7%	24.4%	27.5%	49.2%	24.2%	25.0%	26.0%	39.5%	38.1%	18.1%	35.1%
A	23.3%	20.5%	15.0%	24.6%	29.5%	16.7%	18.8%	22.2%	21.9%	14.9%	17.0%
B	30.2%	41.0%	51.3%	20.3%	37.9%	42.7%	47.9%	27.2%	27.6%	39.4%	29.8%
C	3.1%	10.3%	6.3%	4.2%	7.4%	12.5%	5.2%	11.1%	9.5%	20.2%	16.0%
D	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%	2.1%	0.0%
Z	7.8%	3.8%	0.0%	0.8%	1.1%	3.1%	2.1%	0.0%	1.9%	5.3%	2.1%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

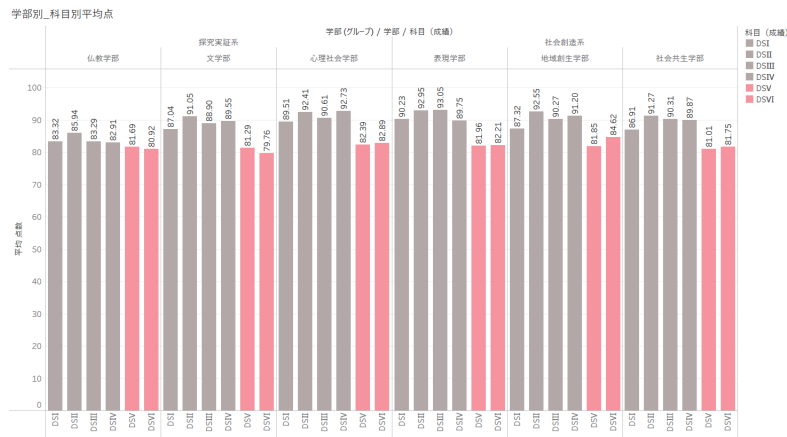
【DSV】単位未取得者 **2.9%**

行レベル	佐藤&歌田	田島&服部	森田&山川	前田&三瓶	尾白&小川	宮脇&宇野澤	田島&森田	佐藤&多田	宮脇&石川	前田&三瓶	尾白&南條
AA	9.4%	9.0%	11.3%	20.5%	11.6%	12.6%	9.5%	4.9%	6.7%	8.7%	14.1%
A	39.1%	32.1%	32.5%	39.3%	32.6%	31.6%	33.7%	34.6%	41.0%	38.0%	33.7%
B	39.8%	33.3%	46.3%	28.2%	30.5%	35.8%	38.9%	39.5%	40.0%	32.6%	25.0%
C	7.8%	21.8%	8.8%	8.5%	21.1%	16.8%	15.8%	19.8%	8.6%	18.5%	26.1%
D	3.1%	3.8%	0.0%	0.0%	2.1%	2.1%	0.0%	1.2%	1.0%	0.0%	0.0%
Z	0.8%	0.0%	1.3%	3.4%	2.1%	1.1%	2.1%	0.0%	2.9%	2.2%	1.1%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【DSVI】単位未取得者 **3.2%**

行レベル	佐藤&歌田	田島&服部	森田&山川	前田&三瓶	尾白&小川	宮脇&宇野澤	田島&森田	佐藤&多田	宮脇&石川	前田&三瓶	尾白&南條
AA	14.1%	17.1%	19.0%	28.4%	23.2%	8.5%	19.6%	13.6%	20.4%	17.8%	15.4%
A	36.7%	32.9%	29.1%	37.1%	23.2%	34.0%	26.1%	23.5%	34.0%	22.2%	33.0%
B	35.2%	34.2%	34.2%	23.3%	35.8%	41.5%	44.6%	42.0%	41.7%	37.8%	29.7%
C	10.2%	14.5%	16.5%	6.0%	11.6%	12.8%	8.7%	17.3%	1.0%	21.1%	18.7%
D	3.9%	1.3%	1.3%	0.9%	3.2%	1.1%	0.0%	3.7%	1.0%	0.0%	1.1%
Z	0.0%	0.0%	0.0%	4.3%	3.2%	2.1%	1.1%	0.0%	1.9%	1.1%	2.2%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

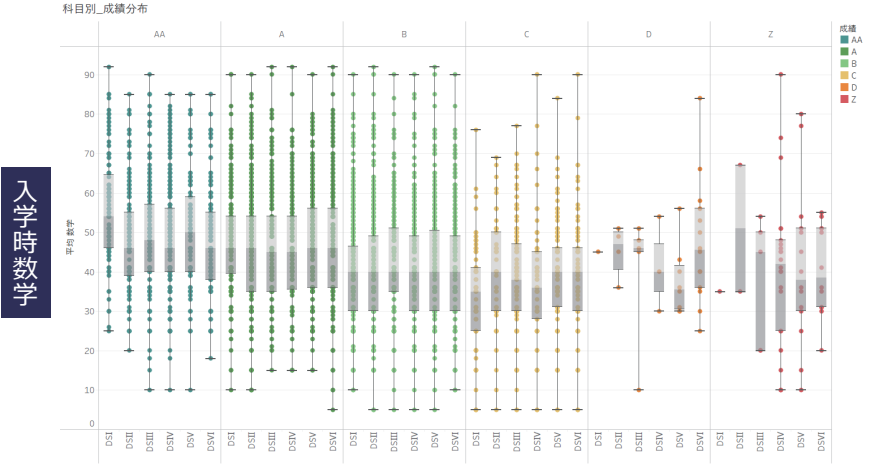
DSV、DSVI(プレゼン) になって学部間の平均値の差がなくなっている。
成績がよい(テストで点数が取れる)がプレゼンの質にダイレクトにつながっていないことが想定される
またDSVIに伸び悩んだ仏教、文学部はいずれもグループワークが苦手な学生の割合が高い可能性がある



R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り **2年生**
【成績】2年生_科目別_入学時数学分布



成績評価が下がるにつれて数学の点数の水準も下がっている傾向がある一方で、特にAとBについては一定のばらつきがあり、入学時の数学の点数に成績に影響を受けていることが分かる。



R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り **2年生**
【成績】2年生_学部別_DSⅣとDSⅤの成績分布



全体的な成績の水準はDSⅤ／Ⅵ（産学連携）になると下がっている。特に文学部、社会共生学部はテストで上位層だった学生が、個人プレゼンやグループプレゼンになると点数が伸び悩んでいる点には気がなるところ。



● 評価できる点

- ✓ DSVは単位未取得学生が3%未満となった点
- ✓ DSⅣではAAの割合が昨年と比較して20%程度増加。
 - ☞ tableauの習熟度が昨年度比較して大きく向上した（教材見直し、補習効果）
- ✓ DSVの産学連携では平均点では学科ごとの差がでない結果となった（仏教学部も健闘）はが一方で、クラス内のばらつきは昨年より大きくなり、伸びる学生を伸ばせた。

● 評価できない点（問題点）

- ✓ DSⅣ・DSⅤは単位未取得学生が3%超えになってしまった点
- ✓ DSⅤのプレゼンでは文学部の点数が伸び悩んだ点（GWが苦手が）
- ✓ 意識的に取り組んだ結果でもあるが、産学連携はクラス内でのばらつきが大きくなり、やる気がある学生とそうでない学生との差は開いた。意図的な欠席の可能性もあり、グループ貢献度の格差が昨年以上に開いた
 - ☞ グループ内の貢献度相互評価の導入を検討（新LMSで実施可能）



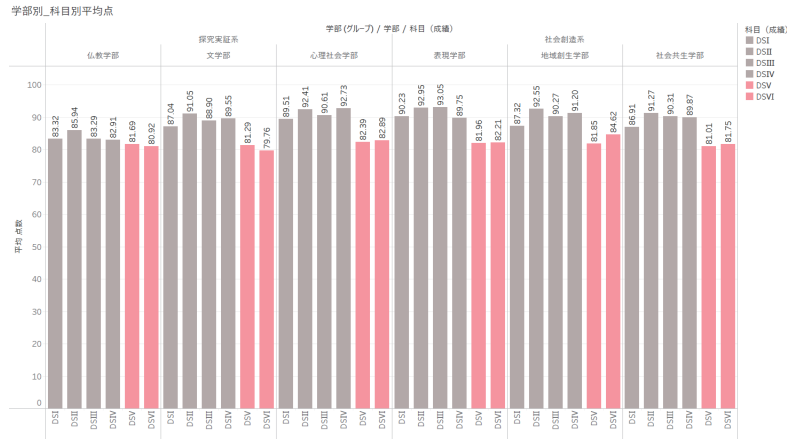
2年生_育成すべき能力・資質の評価

学生自己評価

R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り **2年生**
【成績】2年生_学部別_QT別_成績状況



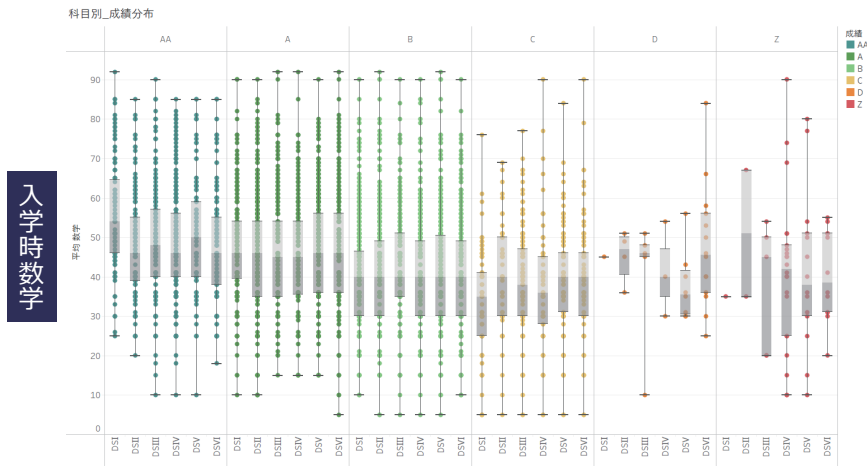
DSV、DSVI(プレゼン) になって学部間の平均値の差がなくなっている。
 成績がよい(テストで点数が取れる)がプレゼンの質にダイレクトにつながっていないことが想定される
 またDSVIに伸び悩んだ仏教、文学部はいずれもグループワークが苦手な学生の割合が高い可能性がある



R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り **2年生**
【成績】2年生_科目別_入学時数学分布

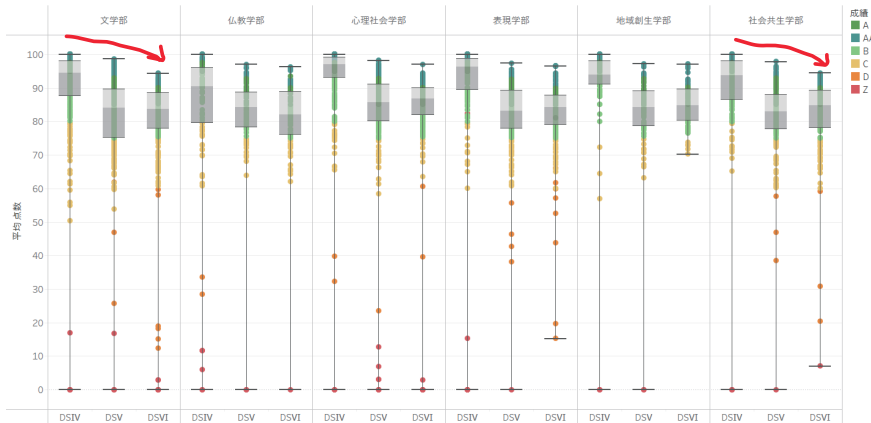


成績評価が下がるにつれて数学の点数の水準も下がっている傾向がある一方で、特にAとBについては一定のばらつきがあり、入学時の数学の点数に成績に影響を受けていることが分かる。



全体的な成績の水準はDSⅤ／Ⅵ（産学連携）になると下がっている。特に文学部、社会共学生部はテストで上位層だった学生が、個人プレゼンやグループプレゼンになると点数が伸び悩んでいる点は気になるところ。

学部別_科目別_成績分布



● 評価できる点

- ✓ DSⅤは単位未取得学生が3%未満となった点
- ✓ DSⅣではAAの割合が昨年と比較して20%程度増加。
 - ☞ tableauの習熟度が昨年度比較して大きく向上した（教材見直し、補習効果）
- ✓ DSⅤの産学連携では平均点では学科ごとの差がでない結果となった（仏教学部も健闘）はが一方で、クラス内のばらつきは昨年より大きくなり、伸びる学生を伸ばせた。

● 評価できない点（問題点）

- ✓ DSⅣ・DSⅥは単位未取得学生が3%超えになってしまった点
- ✓ DSⅥのプレゼンでは文学部の点数が伸び悩んだ点（GWが苦手か）
- ✓ 意識的に取り組んだ結果でもあるが、産学連携はクラス内でのばらつきが大きくなり、やる気がある学生とそうでない学生との差は開いた。意図的な欠席の可能性もあり、グループ貢献度の格差が昨年以上に開いた
 - ☞ グループ内の貢献度相互評価の導入を検討



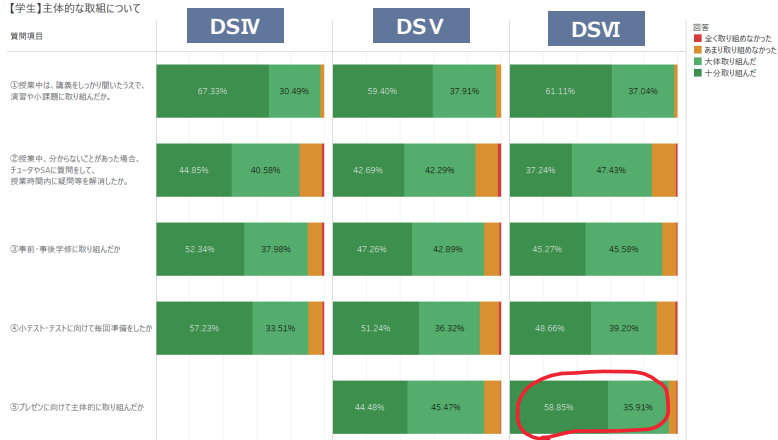
2年生_育成すべき能力・資質の評価

学生自己評価

①主体的学修態度 (全体)

全体的に主体的に取り組んでいたと思われる一方で、DSⅣとⅤ比較すると十分取り組んだ割合が下がっていることが問題点としてあげられる。一方でDSⅤとⅥを比較するとプレゼンへの取り組み度合いが上がっておりグループでの取り組みが多く、多くの学生にとってはモチベーションにつながっていることが想定される

【学生】主体的な取組について

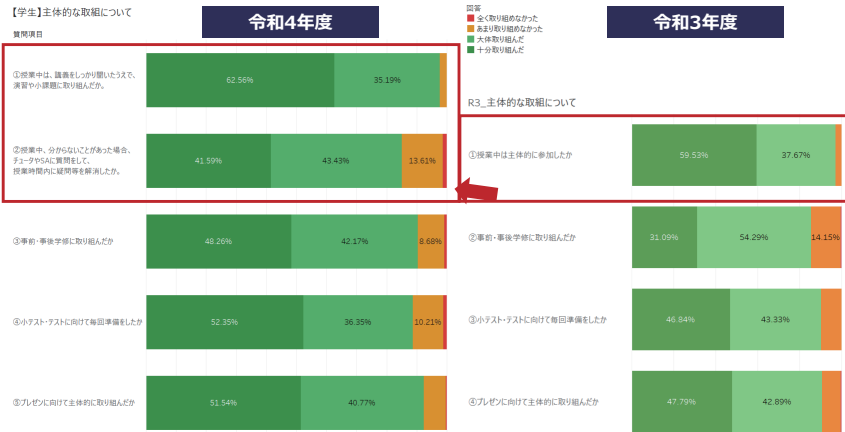


R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り

①主体的学修態度 (令和3年度との比較)



令和4年度と質問項目が一部異なるが、令和3年度と比較して主体的に学修していると回答している学生の割合は全体的に上昇している。特に授業の事前事後学修への取り組み割合が向上した。
 ※令和3年度はQT通しての自己評価しかとっていなかったため双方QTの合算での比較としている

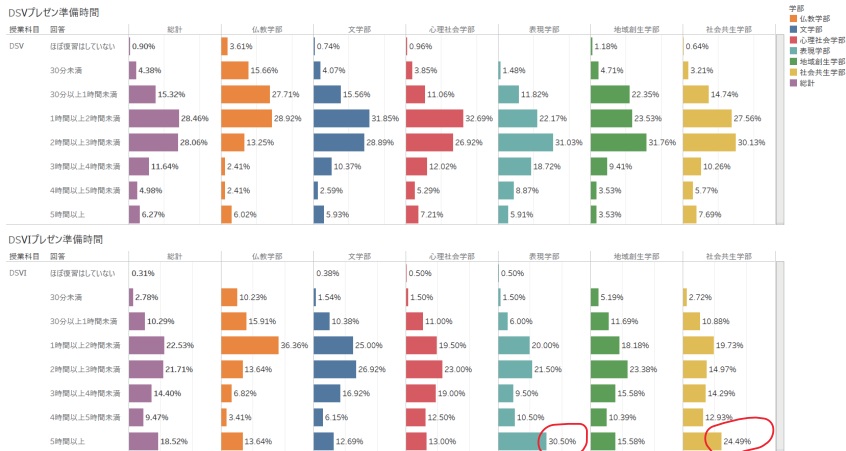


R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り

①主体的学修態度 (プレゼン準備学修時間)



プレゼン準備時間（授業外学修時間）では全体的に社会創造系の学生のほうが、時間をかけていることが分かる。DSVとVIを比較すると5時間以上と回答している学生が6%から19%の約3倍に増えていることが分かる。特に表現学部と社会共生物学部の5時間以上は極めて高い。

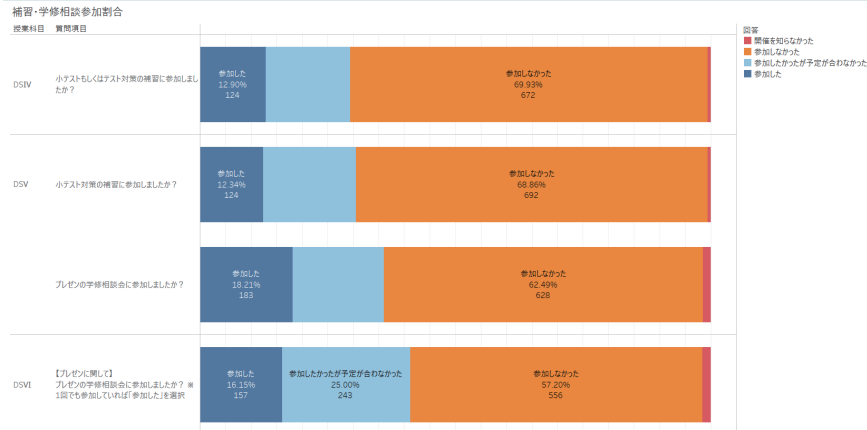


R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り

①主体的学修態度 (補習・学修相談参加割合)



テストに向けた補習は約13%の学生が参加、プレゼンのための学修相談会は約16～18%の学生が参加した。昨年のプレゼンのための学修相談会参加学生の割合が約23%であったため、比較すると割合が減少しているが、昨年よりグループワークの時間を多めに割いていることと、SAによる授業中の学修支援も新たに開始したことなどが要因として考えられる



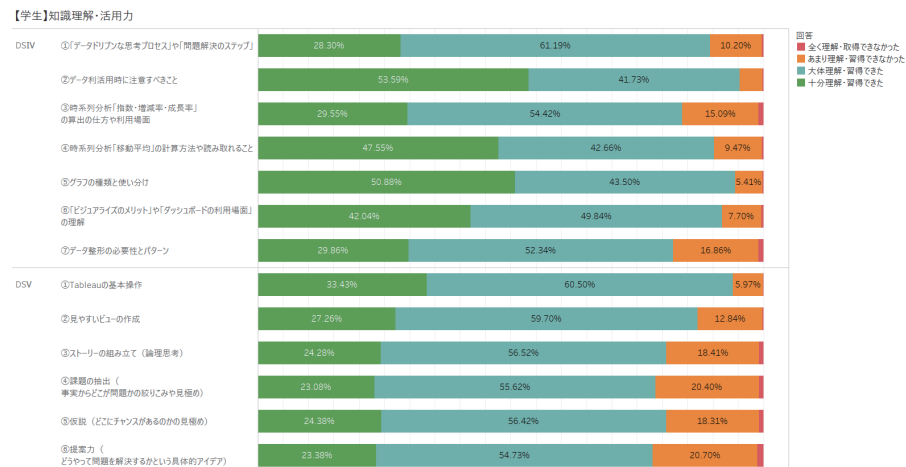
60

R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り

②知識理解・活用力 (全体)



DSIVとDSVを比較すると、DSIVの方が理解度が高く出ているが、DSVは難易度が高まっているため、想定内の結果である。



61

R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り

②知識理解・活用力 (令和3年度との比較)



DSVの知識理解度・活用力を令和3年度と比較すると概ね理解度や習熟度は高まっている。Tableauの基本操作の自己評価は令和3年度を下回っているが、教員の感覚では令和3年度よりも基本操作力は高いという評価。課題抽出から提案力に関しては令和3年度より向上している。

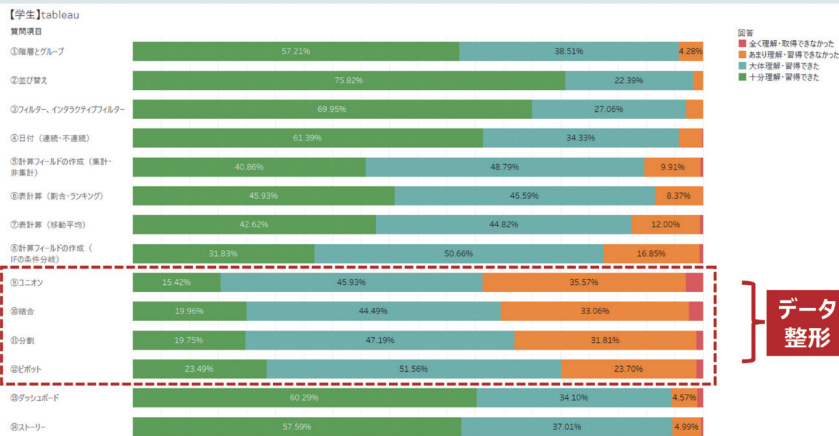


R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り

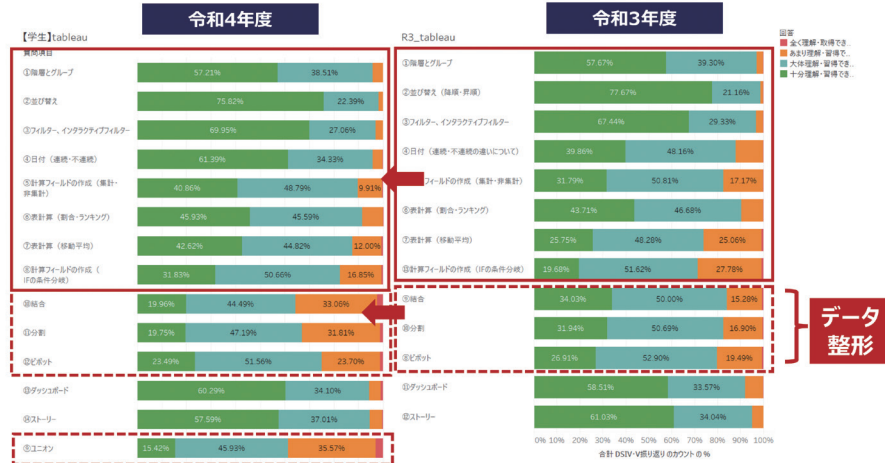
⑤情報・データ活用力 (tableauの習熟度)



令和3年度と傾向は似ているものの、教材と反復回数を見直した、日付や計算フィールド、移動平均については十分理解できた割合が高くなっている。一方で、内容を軽く見直したデータ整形については、理解度が下がっている。



データ整形などは知識としては必要であるが、いまず必要なスキル（技術）ではないため、授業時間配分を大幅に減らし、逆に日付、計算フィールドなどに時間を割いた結果が以下の通り。問題ないと評価している。



2年生_学生の振り返り (定性)

学生自己評価

【学生のコメント】DSⅣの授業

● 身に付いたスキルや知識

- ✓ 私はほんとにパソコンが苦手で一年の頃から必死でした。だから二年も憂鬱だったんですが、頑張って練習していたら、大体できるようになりました！タブローに関しては、全般的にできるようになったので嬉しいです。
- ✓ データを可視化し、分かりやすく伝えることを考えてグラフやデータを整理、作成すること。ダッシュボードなど、いままでのデータサイエンスで学んだことよりもさらにパワーアップした将来使えそうな実践的な作業の方法を知ることが出来た。
- ✓ 身についたスキルは、まずは特にデータに基づく思考判断を大切に行動していくという価値観だと思う。DSで学んでいなかったら、このように社会でデータが重んじられて行っていることが体感できなかったと思うからだ。また、Tableauの演習では様々なデータの現し方や整理の仕方を知ることができたので、「このような形のを参考に課題を見つけていくのか」と少しイメージができるようになった気がする。
- ✓ 整理されていないデータを、使用する目的に応じて整理してみやすくすることによって、そのデータの説得力が大きくなるということが理解できた。また、どれを使えば最も効果的にデータを整理することができるのかという知識も身についた。
- ✓ 商売やビジネスといったデータを本業に扱う先生が解説をしてくれたので社会人になったときのデータの扱い方が去年よりだいぶイメージできた。

● 向上しなかった点や課題点

- ✓ データ整形のスキルがあまり理解することができませんでした。データの結合は新しいデータが表の横に増えていく特徴があることについては理解できましたが、データの結合の実際にtableauを操作する部分の理解が少し不十分だと感じました。
- ✓ 一番難しかったのは、利益率や割合をだすための計算式がなかなか覚えられなかったことです。
- ✓ 集計・非集計が何度やっても理解が深まらなかったと感じた。知識系の説明が難しく感じた。

【学生のコメント】DSⅤの授業

● 身に付いたスキルや知識

- ✓ DSⅤではプレゼン資料作りを通して、作ったグラフを実際どのように活用するのかということや、データを読み取る際にどこに着目すればいいのかという視点を身につけることができた。
- ✓ 授業の度、小テストの度に頭がパンクしそうでしたが、プレゼンを作って感じてしたのは、パンクするまで理解しようとしたからこそ、このような実践の場で習ったことが活かされたのではないかと感じています。
- ✓ 「今までやってきたDSの中で最も成長できた回だったのではないかと成長を感じるほど自分のためになったと感じている。特に初めの方は、テストでの成績の悪さ故先生に名前を覚えられていたことがあったほどtableauが扱えず落ち込み、そして自分はtableauに嫌われているのだと感じていた。しかし必死に練習をした成果もあってなのか、まさか自分でプレゼンを作る所まで持って行けたことは自分でも驚いている。
- ✓ データ分析の考え方（何を明らかにしたいか、どこを追求すべきか）が身についた。それに伴って、この部分を追求するには、どのようなグラフが適切かということも、グラフを作っていく中で、身についたスキルである。
- ✓ 物事を分析するときに、多角的に分析してみるスキルが身についたと感じました。また、一つの事象を集中して分析するスキルが身についたと感じました。

● 向上しなかった点や課題点

- ✓ 今回の発表ではSAさんやチューターさんに頼る場面が多かったのもっと自分の力でできるようになりたい。
- ✓ データの読み込みが甘くあまり根拠としては弱いところがあったり、分析の余地があったりするなど代表者の発表を聞いて思った。
- ✓ 今後は、プレゼンで得た「聞く側の立場になって考えてみる」という経験のもと、正しく、説得力のある分かりやすい資料作りに取り組んでいきたい。
- ✓ 一貫してストーリーを作ることが出来ていなくて、あちこちに論点を置いてしまった。何も知らない人に伝えるという意識をもって分析しようと思う。

【学生のコメント】DSⅥの授業

● 身に付いたスキルや知識

- ✓ 授業を通して、1番大事だと感じた「ひとつの事実を言いたい時に多角的な部分から見る事ができる」という知識とスキルが身につきました。
- ✓ 分析やデータに即した提案をすることの重要性です。なぜならば、いままでは思いついたアイデアをそのまま提案にしておき、そこに根拠がなかったからです。
- ✓ 身についたスキルは説得力のある資料を作ることです。自分本位の意見になっていないか、他の人が初めて聞いてもすぐに理解できるようになっているかなどを意識して考える癖ができました。実際の店舗のデータを利用して1からデータ分析を行なって提案することなんてできないし困難だと思っていたが、実際にやってみたらこれまでの授業でしっかりスキルが培われていて、自分で思っていたよりも分析ができるようになっていたことがわかった。さらに、論理的思考が高まっていると感じた。
- ✓ グループのメンバーと協力してわかりやすいプレゼンを作り上げる力・データを分析して自分の意見の根拠にする力

● 向上しなかった点や課題点

- ✓ データを正確に分析する力・分析のために最適なデータを選択する力・具体的に課題設定する力等を十分には習得できていないように感じるので、DSに限らず他の科目でもこれらのスキルを身につけることができるように努めていきたいです。
- ✓ 分析した後の言語化に関してはまだまだ経験を積み重ねて行く必要があると感じた。
- ✓ 取得できなかった点として、「比較資料の調達・根拠の質」が挙げられます。これは、実際に三鷹市の職員様からのご指摘で頂いたことですので、重く受け止めました。
- ✓ 出来なかったこととしては、オープンデータの取り扱いについてである。自分達のデータと比較し、関連づけさせる考え方が上手く出来なかったように感じる。

【学生のコメント】DSⅣ～Ⅵを終えて今後に向けて

この授業で身についた力を使って、地域の社会福祉課題を見つけ出したいと思いました。三鷹市に触れたことで、自分の地域ではどういった課題・特性があるのかも気になったので調べたいです。私は文系だったこともあり、パソコンに苦手意識を持っていました。ですが、SAさんが分からない箇所を丁寧に教えてくれたこともあり、何とか乗り切ることができました。

卒業研究や、分析発表等様々な発表機会を通して、これらのスキルを活かしていきたいと考えています。発表の際は、先に分析があるのでその時にどのグラフを用いることが適切か、配色はどれが見やすくなるのか、どのデータを整理すれば根拠につながるのか等をしっかりと考え、今後もスキルを活かしていきたいです。

おかげでExcel、tableauの使い方が入学前に比べて飛躍的に上がりました。夏休み中にExcel、tableauの2つの資格を取ることが出来ました。今では自分を支えている自信の源になっています。私の所属している人間科学科はデータを扱い、社会を調べ、結果を還元していくことが目標となっているので、そのための手段として活用していきたいです。

DSは、やり方を覚えたり先生のやっていることを真似したりすれば、授業やテストを乗り越えることは簡単だとは思いますが、大切なことはその先であり、学んだことを活かして自分なりにどのように分析して課題を見つけ提案していくかということを考えることが難しいのだと、この二年間学習してきたと感じたことでした。

数学が苦手なため、全然できないのではないかと心配していたが、論理的思考と数学の公式を覚えて計算することなどは別物であることに気づいた。データサイエンスで重要となるのは、計算することではなく論理的思考から分析を進めることである。

私はマーケティングのようなデータ分析が必要な職のインターンに行こうと考えているので、授業で培ったスキルを活かして行ってきたいです。データサイエンスは私にとってかなり難しい授業でした。しかし、データを見て分析してプレゼンをするというのは思っていたよりも楽しさがありました。授業でなければ絶対にすることのない経験をできて、自分の知らなかった自分の考えを知ることができたのでよかったです。

入学直後文系なのに数学を扱う授業があるんだと驚いたと同時に絶望したのを覚えています。数学は苦手だったので授業について行けるか不安だったのですが、Excelから始まりタブローに変わり、気づいたら楽しんで授業を受けている自分になりました。成績はそれに比例しませんでした。技術だけでなく色々なことを気づかせてくれた授業でした。

DSVプレゼンの学修相談について満足度が低かったこともあり、開催時間帯やマンパワーを見直した結果、DSVIでは評価が改善している。課題あり。

補習・学修相談満足度



70

● 評価できる点

- ✓ 先生ができていて常に気にかけてくれたこと、その分野以外の質問にも答えてくれたのでとても助かったし、わかりやすかったです。
- ✓ 一回目のテストでは、補習や復習をせずに臨んでしまい、散々な結果になりました。なので、補習に参加しました。本当に分かりやすく丁寧に教えて下さり、授業に対する意欲も格段に上がったと実感しています。先生方も気軽に話し掛けてくださり、とても温かったです。
- ✓ テスト前に補習があったおかげで、できない所を重点的に教わることができたので良かったです。分からないところだけを聞けるので、時間が無い時にも参加することができました。
- ✓ 小テスト前に行った際、その講義の範囲外であったとしても分からないところも教えてくれた

● 改善してもらいたい点

- ✓ 初歩的などころから少し進んだレベルの内容もしてほしい。
- ✓ 強いて言うのであれば、苦手意識の高い人向けの学習相談を用意してもらえると、さらに改善できると思う。
- ✓ わからないから来ているのに説明なしに「いきなりやってください」と言われたところ
- ✓ 少し語気が強くてもう行きたくないと思ってしまう。
- ✓ できれば、お昼の時間帯はオンラインにしていきたい / 補習時間内に終わってもらえると助かります
- ✓ テスト前日とかに補習に参加すると復習が間に合わないから、もう少し早めに補習を行ってほしいです。
- ✓ 昼休みに補習があるのは厳しい印象がありました。昼休みではなく、4限や5限、または以降の時間帯に補習や学習支援があったら良いと思いました。

71

【学生のコメント】プレゼン学修相談に関して

● 評価できる点

- ✓ 自分がグラフで明確にしたいことを悩んでいたが相談に乗ってもらうことで明確にしたいデータを新たに作成することで解決する手がかりになってよかった。
- ✓ プレゼンのオープンデータ活用方法について参加したが、わかりやすく教えてくれた。そのあとアドバイスをしてくれたのでプレゼンの資料がよりよくなった。
- ✓ 自分たちだけではなかなかイメージがついていなかったけれど学習相談に参加したことではっきりとイメージすることができ、自分たちが考えた提案を先生に見てもらうことで自信にもつながった。
- ✓ 主観で捉えていたものに対して、第三者の目、客観的にみてもらえたのでよかった
- ✓ プレゼンテーションが進んでおらず、焦ってしまった自分をバックアップしてくれた点。正確なアドバイスで平静を取り戻し、やる気を出すことができた。
- ✓ 一つの質問に対して様々な切り口から話を広げてアドバイスを貰えたので視野を広げることが出来た。
- ✓ 相談会を口実にグループメンバーで集まることができた
- ✓ 自分のグループの分析が甘かったことに気づくことができた。

● 改善してもらいたい点

- ✓ チャットで相談するだけの学習相談も設けてほしいと思った。
- ✓ みんな内容が難しいものだからこそ、一度先生がその生徒に付いてしまうと、なかなか解決するまでに時間がかかってしまって、聞きたい時にすぐにきけなかったりすることがあったから、そのような場面も考慮していただけると助かります。
- ✓ 質問対応してくださる方が1人しかいなかったため、対応できる人の人数を増やしてほしいです。



2年生_育成すべき資質と能力振り返り

専任教員・コア評価

R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り
 育成すべき能力・資質の教員＆コア評価



データサイエンス教育チーム（専任教員＆コアチューター）としての自己評価は以下の通り
 1年次と比較すると飛躍的に伸びたのが主体的学修態度と課題探究・解決力である。この点はチュートリアル教育の成果と考えられる。昨年の2年生と比較すると知識理解・活用力、情報・データ活用力が向上しているが、この点は教育内容や教材の見直しによるものもあると考えられる。

	R3年 1年次	R4年 2年次	1年次 との差	昨年の2年生 との差	(参考) 2021年 入学2年次
①主体的学修態度	75%	86%	+11%	+1%	85%
②知識理解・活用力	85%	88%	+3%	+8%	80%
③表現力	対象外	86%	-	+1%	85%
④課題探究・解決力	80%	89%	+9%	+1%	90%
⑤情報・データ活用力	85%	91%	+6%	+6%	85%
⑥対人力	対象外	83%	-	+2%	85%
⑧チャレンジ精神	90%	91%	+1%	+1%	90%
トータル	83%	87.8%	+4.8%	+1.8%	86%

R4_データサイエンスⅣ～Ⅵ振り返り **2年生**
 育成すべき能力・資質の専任教員・コア評価



【R4_DSⅣ～Ⅵ振り返り】 **①主体的学修態度**

● **評価できる点**

- ✓ 年初は、ただTableauを操作する、という意識だった学生が、最後には目的をもって提案までこぎつけていた。得手不得手（Tableau全然ダメ～好き）や意識（単位を取る～いい提案をしたい）の差はあるものの、何かしらの領域で力を発揮したいという学生がほとんどであった（尾白）
- ✓ 1年生時に比べ、課題等の提出物については、おおむね自主的に行えるようになってきている。未提出者への働きかけも、ごく一部を除き不要であり、演習時の質問も、自分のイメージを実現するための技法など、主体的に取り組んでいる様子がうかがえる（田島）
- ✓ 1年生、2年生で学んだことを総合して、最終課題の成果物を作成することができた（佐藤）
- ✓ 与えられたテーマに対する取り組みの姿勢が積極的だった。特にグループワークで発揮された（宮脇）
- ✓ プレゼン相談会において、「良い分析をしたい」と考えて質問を持ってくる学生が多かった（酒井）

● **評価できない点（問題点）**

- ✓ 単位さえ取れば、という安易な学生も存在し、やらされ感をぬぐえない学生の存在があった（矢野）
- ✓ 仏教学部は取り組みの姿勢が二極化した。単位を取りたいという意欲が高い学生が多いものの、うまく乗り切りたいという気持ち強い学生と、彼らを鼓舞しながらも必死に取り組む学生の間に大きな開きができてしまった（前田）

【R4_DSⅣ～Ⅵ振り返り】 **②知識理解・活用力**

● **評価できる点**

- ✓ 注意点を具体的に指摘した場合は、観点を持ちデータや知識の整合性を吟味することができた（佐藤）
- ✓ データとミッションを渡し、最後にプレゼンまでこぎつけている点は、本当によくがんばったと思う（尾白）
- ✓ 連携先のデータを利用したの演習により、与えられた作業をするだけでなく、今までの知識の活用が行われるようになってきている。また、特にⅥのオープンデータ収集を通して、実践的な力が身についた学生が多い（田島）
- ✓ プレゼンに向けて過去の授業のスライド、講義内容、データ定義書を何度も確認しながら、どうすれば学んだことを活用できるか、自分たちの伝えたいことはどのようにすれば伝わるのか考え、取り組んでいる学生が一定数いたことが評価できる点（前田）

● **評価できない点（問題点）**

- ✓ 創造的な発想はできていたが、根拠となる知識・情報の習得が弱かった。課題解決において前提となる情報を参考情報として教員側からも情報発信を行っていたが、視聴者が少なく前提が不成立な発表が目立った（佐藤）

【R4_DSⅣ～Ⅵ振り返り】 **③表現力**

● **評価できる点**

- ✓ 連携先へのプレゼンで、聴衆のイメージが明確であったので、それを意識した表現を行えるようになった学生が多い（田島）
- ✓ 場面場面に応じてわかりやすくすることの必要性や技術を習得した（佐藤）
- ✓ プレゼンで「相手に伝わるにはどうするか」を常に考えていた（宮脇）
- ✓ 連携先企業へのプレゼンに向け、見やすく、伝わりやすいという意識はDSⅤ～Ⅵ向上したと思われる（矢野）
- ✓ Tableauを何とか駆使して、データによって、伝えたいことに繋げて行くことができるようになった（尾白）
- ✓ 自分たちの伝えたいことをどうすれば的確に伝えられるかという点に拘っていたグループが多いと感じた。改善しようという意欲も強く感じられた。またエグゼクティブサマリーや提案のシートにも工夫が随所に見られた（前田）

● **評価できない点（問題点）**

- ✓ 最終発表において、学んだことが実践されていないものが多かった（佐藤）
- ✓ 表題の提示や、凡例の表現など、ひと手間かけることで、伝わりやすさの改善につながる部分で、そのひと手間を進んでかけようとする学生は一部に限られている（田島）

【R4_DSⅣ～Ⅵ振り返り】 **④課題探究・解決力**

● **評価できる点**

- ✓ 最初の課題提示を振り下げて課題を特定し、解決方針を提示できている発表があった（DSⅥ）（佐藤）
- ✓ 全員というわけではないが実データを使っての解析により課題の探求能力は向上したと思われる（矢野）
- ✓ グループワークでいろいろな意味で苦しみながら、頑張ったことは評価できる（尾白）
- ✓ 多くの学生が、三鷹市民の生活満足度・幸福度を上げるため、その項目と関連する項目をデータから探り、複数の項目の関連を見出すことで、複数の課題に関連した解決策を模索するようになった。（田島）
- ✓ 問題を深堀してこうという姿勢を感じる場面が多くあった。またグループで取り組むことで多面的なものごとの見方ができるということを身をもって体験している学生も多く存在していた。共通科目でありながら連携先には説得力の高いプレゼンが実施できたと思う（前田）

● **評価できない点（問題点）**

- ✓ ディスカッションの総数が総じて少なかったことから、探究活動が満足に行われなかった。（DSⅤ/Ⅵ）（佐藤）
- ✓ 分析により課題解決をしていくという意味では、チームワーク、コミュニケーション、役割分担、スケジュール管理等の総合的な力はもう少し持っていてほしいと感じた（尾白）
- ✓ 一部には、多面的視点からの分析にいたらない学生もいた（田島）

【R4_DSⅣ～Ⅵ振り返り】 **⑤情報・データ活用力**

● **評価できる点**

- ✓ 具体的に授業で実施した内容について、それを反復する中で知識や技術を定着させることはおおむねできていた（佐藤）
- ✓ オープンデータを集める際、三鷹市のサイトを使うなど、「信頼性の高いデータ」を使っているチームが多かった（酒井）
- ✓ 情報リテラシー・データリテラシーについては、十分習得され、連携先のデータを適切に扱うことができた（田島）

● **評価できない点（問題点）**

- ✓ 最終課題のような、それまでに学んだことすべてを活かすことが求められる状況下での実践は課題が残る（佐藤）
- ✓ 初めての本格的な分析を、頑張ったことは評価できる。一方で、3回のグループワークならびに、1か月という与えられた時間の中で、もう1段の分析での踏み込みが欲しかった（尾白）
- ✓ 2学科ともオープンデータの活用はなかなか着手できなかった点が残念なところである。同時に提供された複数のデータの分析上での位置づけや使い分けについても、こちらの指導も不十分であったと反省する面もあり、データ活用力向上を図る仕掛けについては改善の余地があると思われる（前田）

【R4_DSⅣ～Ⅵ振り返り】 **⑥対人力**

● **評価できる点**

- ✓ 一部の学生がリーダー的存在の人に頼りっぱなしという場面もあったが、多くの学生は、協働でコトを成し遂げる姿勢が素晴らしかった。またお互いの得手不得手を把握してのリーディングをするリーダー的存在も複数いて頼もしかった。またリーダーシップⅠで自ら再構築したリーダーシップ像に取り組む学生も複数いて学びの繋がりがや発展を感じることができた（前田）
- ✓ グループワークに出席者全員が参加し、最終的にグループ発表までこぎつけることができた（佐藤）

● **評価できない点（問題点）**

- ✓ 特にⅥのグループワークを通して磨かれる部分が大いだが、一部の学生の努力に依存し、最低限の作業ですませる学生もいた。またリーダーシップを発揮しようとした学生も、協働的な雰囲気を作るに至らず、困難を感じる例や協働をあきらめてしまう例もあった。グループ作成方法など対人力を伸ばすことに効果がありそうな方法を検討する必要がある（田島）
- ✓ 2QTの個人プレゼンに比べて、4QTでのグループプレゼンの方が進捗スピードや質が低下することは課題だと感じる（昨年と同様）。1年生の探求科目でのグループワークや、リーダーシップでの学びを、活かす実践の場にもっていけるといいなと感じた（尾白）
- ✓ グループ内での貢献度にばらつきが多く、全員が主体的にグループ活動へ貢献したかは疑問（佐藤）

【R4_DSⅣ～Ⅵ振り返り】 **⑧チャレンジ精神**

● **評価できる点**

- ✓ 新しい価値を創造する為に、など公開されているオープンデータなど自ら取りに行くことができるようになった（佐藤）
- ✓ DSが得意な学生は自分なりにデータと真摯に向き合い&突き詰めて、苦手な学生は授業で習った基礎的なことを何とか使おうと、頑張っていた様子が、提出課題からよくわかった。特に、DSが苦手な学生が、GWにおいて「自分アイデアを出すことを頑張ろうと思う・頑張った」としていた点は、1年生の時に比べて成長を感じた（尾白）
- ✓ この通りのことをすればよいという教材から、最終成果物が一様ではない実データによる教材と代わったことで、正解が明確ではない課題に挑戦し、何とか新しい発見・提案に結び付けようと努力した学生が多く見られた。DSⅢ終了時の主体的学修態度とも関係しており、その力が十分ではない学生は、新しい課題へのチャレンジ精神も発揮していくように見受けられた（田島）
- ✓ 全員ではないが、答のない課題に取り組む中でやってみようという意識は醸成できたのではと思うため（矢野）
- ✓ 「オープンデータが必要だからオープンデータを集めよう」ではなく、「～についてこのデータが必要だからオープンデータをなんとか形にしよう」という姿勢が見られた（酒井）
- ✓ 最初はつらそうであったが、取り組むうちに楽しみながらチャレンジしている学生が多かったように思う。達成感を感じたことで、また異なる学修の場面でのチャレンジにもつながってくればと期待する（前田）

● **評価できない点（問題点） 特になし**

次年度の改善点



2年生_振り返りまとめから次年度に向けて

【R4_DSⅣ～Ⅵ振り返りと次年度に向けた改善点】

● 評価できる点

- ✓ 全体的なアウトプット（最終プレゼン）の質は令和3年度よりも連携先も向上している。1年次からの学修をプレゼンでの成果につなげていくことを意識した内容にブラッシュアップしたことが要因のひとつだと考えらえる。結果的に産官学連携先の連携意識レベルも昨年より高まっている印象。（期待してくれている）

● 次年度にむけた改善点

- ✓ 主体的学修態度は格差が開いてしまった。格差是正の取組が必要。
 - ✦ 学生同士の相互評価を導入し、主体的な組織貢献力を高める（授業冒頭に丁寧に説明）
- ✓ 対人力強化については様々な視点で見直していく必要がある。
 - ✦ 学部学科別の最適なグループメンバーの再検討（成績別ではない方法も検討する）
 - ✦ 文学部に関しては想定外のグループ活動意欲が低かったため対策を講じていく（尾白検討）
 - ✦ Teamsのチーム別の投稿欄に活動履歴を残すことをマストにする（活動していないと判断）
 - ✦ 役割分担方法についても見直しをする（決まった役割しかなかった学生がいるため）
- ✓ 情報・データ活用力においては①複数データのデータ、オープンデータの使い方ガイドラインを出す
②プレゼン作成前半での論理思考強化を行う ✦ シナシオシートの提出を導入する

【R4_DSⅣ～Ⅴ振り返りと次年度に向けた改善点】

● 評価できる点

- ✓ データ整形のところの時間を分析に必要な優先順位が高い時系列分析や割合、集計非集計などに回せたことで結果学生の可視化のスキルは向上したと評価できる。データ整形のところは学生の習熟度は令和3年度より下がっているものの、これはこれで良しと判断する（将来学ぶ機会があるはずだし、Ⅲ類科目のところでも取扱いの科目あり）
- ✓ 必ず習得させたい項目についてはテスト時に「絶対出る問題」として学生に提示したことで習得率が高まったと評価できる。（難しいorわからないこの問題は解かずに捨てるという行為が大きく減少した）それと合わせて補習の参加目的も明確になっていた学生が多くみられた。

● 次年度にむけた改善点

- ✓ 産学連携で理解度や習熟度が微妙だと感じた場合は追加（補足）説明資料を非常勤の先生方にも用意していただくように依頼する。消化不良を放置しない。ただし簡単なものでOKとする

【R4_DSV・Ⅵの振り返りと次年度に向けた改善点】

● 評価できる点

- ✓ 各産学連携先からの評価は昨年並みもしくはそれ以上に高い結果となった。
- ✓ 連携先ごとのチーム運営も比較的うまくいった。連携先ごとのレクチャーも概ね効果的であった。
- ✓ 昨年より授業回が1回増えたことで（元通り）授業中に個人ワークの時間が十分とれた。
- ✓ DSVIは仏教は文学部と比較すると難易度を下げて行ったがその点は良かった。
- ✓ R4から2年生のクラスにSAが入ったが学修支援という点で大きく貢献してくれた。

● 次年度にむけた改善点

- ✓ R5年度のDSVの予選会の名前については変更する → プレゼン大会①②へ変更済
- ✓ データが難しかった。データ項目の絞りこみとデータ定義書の確認をしていく必要あり。また進め方も改善の余地あり。またガモールの意向も取り入れていく。（ガモール）
- ✓ R5年度はメインデータとサブデータの使い分けの指導を的確に行う。（キリン）
- ✓ VとⅥのデータの難易度は再検討すると同時に新しいデータに関する市との意見交換（三鷹市）
- ✓ 昨年と比較して分析のガイドを行ったため、スタート時点で躓く学生は減らせた反面、分析や提案の幅が広がらなかった。ガイドのレベル感は再度検討する必要あり（特にサイゼリヤ）
- ✓ DSVはサラダ以外のデータをもたらしたほうがより分析しやすい可能性あり（サイゼリヤ）

【R4_1QT～4QT振り返りと次年度に向けた改善点】

● 評価できる点

- ✓ 補習を月～水のみにした点など補習の仕組みが構築されつつある点は評価できる。
- ✓ DSVの学修相談は昨年は1対1であったが、学修相談会としたため参加した学生が増えた。
- ✓ DSVIの学修相談は時間帯やマンパワーを見直したこともあり、学生の満足度が向上した。早め早めの計画が重要

● 次年度にむけた改善点

- ✓ 学修相談会に参加する学生が想定以上となり対応できる教員チューターが限られており対応できないケースや支援が不十分なケース発生した。
- ✓ 補習計画も早めに発信できるようになってきたが、教室の案内や広さなどは課題あり
- ✓ 開催時刻や教室の間違いが目立った。**ダブルチェックがコア同士の読み合わせを必須としたい。**
- ✓ 学部によって参加度に差があった。特に文学部への声掛け（協働の重要性）とグループメンバー構成の工夫を行う

次年度の改善点



全体_マネジメント体制他の振り返り

1年生・2年生共通

R4_データサイエンス_1QT～4QT振り返り
教員 & チューター間連携に関して



【R4_1QT～4QT振り返り次年度に向けた改善点】

● 評価できる点

- ✓ チューターの経験値もあがってきて、連携がスムーズになってきている。
- ✓ チューター1年目へのOJTがうまく進んだ。
- ✓ 第1QTのプチ面談は授業へのキャッチアップという面でも、主体性を生み出す側面でも一定の効果があった。
- ✓ 非常勤クラスの出席管理を非常勤に4Qtから依頼したことは結果的によかった

● 次年度にむけた改善点

- ✓ 授業当日の再テスト実施の負荷軽減のために欠席者の受験方法のルールを策定したが、逆に出席や再テストの管理が煩雑になった。第4Qt見直しをして修正できた点もあるが、特に授業直後の再試方法は検討の余地あり（再試担当チューターは各クラスを12時20分に抜けて準備するなど）
- ✓ 再試受験者の出欠は取らない方向にする（チューターのやるが多すぎるため）
- ✓ 一部のクラスで教員間の連携に課題があった。専任と非常勤との授業外のコミュニケーションを強化する必要がある。また教員の組み合わせも検討する必要がある。
- ✓ 1限目の終わりの呼び出しは積極的に実施、ただし工夫しておこなう（2年の授業に支障をきたさないように）
- ✓ 探究実証系の学生のみとなるが第3QTの面談を入れることも検討したい（単位未取得学生などを対象）
- ✓ 要配慮の学生についての対応がより難しくなっている（総合学修支援部とも相談していく）

88

R4_データサイエンス_1QT～4QT振り返り
SAの育成と活用について



【R4_1QT～4QT振り返り次年度に向けた改善点】

● 評価できる点

- ✓ 3年生、4年生が2年生へOJTできる体制が整ってきた。
- ✓ 特に3年生はデータサイエンスI～VIを受講した学生ということもあり、2年生の産学連携に関しても積極的にグループに入って学生たちの相談にのってくれていた。随時教員にも相談や報告してくれる点も評価できる
- ✓ SAの積極的な活動により「あんな先輩になりたい」という学生が多く出てきた。結果的には令和5年度の新規のSA募集では40名（継続SA含めると70名）の申込があり、よい流れができつつある。
- ✓ 多くのSAが自身のスキルアップにつながったことをあげており、当初の狙い通りとなっている。
- ✓ 意欲の高いSAを外部のコンテスト出場に声をかけて実績を残せたこと。学修してきたことを成果として出せた点は非常によかった。Ⅲ類につなげていきたい。

● 次年度にむけた改善点

- ✓ 一部、SAの活用を教員チューターが十分にできていないクラスもあったため、教員、チューター側へのSA活用指導も見直していく
- ✓ 授業を聞いていなくてもあとでSAに聞けば教えてくれるというような不真面目でSAを都合のよい使い方をする学生も一部いたため、そういった場面では教員、チューターが学生に厳しく指導するような体制にしておく。

89



全体_正課外の取り組み

① 令和6年度の目標の確認（データサイエンス教育関連のみ）

検証内容 Ⅰ類：データサイエンス コンピュータスキル 数理的理解

参考基準 検定取得率（80%） / 資格取得率（80%）

② 令和2年度実施状況報告書での年度別目標割合

	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
検定取得率	0%	30%	50%	80%
資格取得率	0%	30%	50%	80%

③ 検定・資格取得に向けた対策講座開催について（正課外）

No	検定・資格名称	検定資格	開始時期	開催回数	主な受講想定学生	完結までの回数
1	統計検定4級	検定	R3年度 春休み～	年2回 春・夏休み	DSⅠ～Ⅲ 修了学生	オンデマンド：5回 対面：1回 模試：複数回
2	統計検定3級（未開講）	検定	R5年度 夏休み～	年2回 春・夏休み	統計4級取得 学生	これから準備
3	Microsoft Office Specialist Excel 一般レベル	資格	R3年度 春休み～	年2回 春・夏休み	DSⅠ～Ⅲ 修了学生	オンデマンド：5回 対面：1回 模試：複数回
4	Microsoft Office Specialist Excel 上級レベル（未開講）	資格	R5年度 夏休み～	年2回 春・夏休み	MOS Excel 一般レベル 取得学生	これから準備
5	Tableau Desktop Specialist※	資格	R3年度 春休み～	年2回 春・夏休み	DSⅠ～Ⅵ 修了学生 現地域創生3年	対面 4回 模試：複数回

R4_データサイエンス I ~ III 振り返り

令和4年度_データサイエンス特別プログラム_夏期結果



④ 令和4年度夏期の受講者数と受験結果

講座(講義)	受講人数	資格試験 受験者数	受講者の 受験率	合格者数	受講者数に 対する合格率	受験者数に 対する合格率
Tableau Desktop Specialist	18	10	56%	10	56%	100%
MOS Excel 一般	93	58	62%	56	60%	97%
統計検定4級	44	22	50%	17	39%	77%
合計	155	90	58%	83	54%	92%

⑤ 学部別合格者数

結果	学部学科	MOS				統計4級				tableau				合計
		1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	
合格	文学部	6	8	14	3	3	6	9	3	23				
	商学部	6	5	11	1	3	4	1	2	17				
	心理社会学部 人間科学科	9	2	11	1	1	2	2	15					
	社会共学学部 公共政策学科	4	4	8	2	1	3	2	12					
	心理社会学部 臨床心理学科	6	1	7	1	1	2	1	10					
	地域観光学部	2	1	3				1	4					
	社会共学学部 社会福祉学科	1	1	2					2					
	合計	31	18	49	7	7	17	7	3	82				
	不合格	文学部	1	1	2	1	1	1	1	4				
		商学部	1	1	2	1	1	1	1	5				
心理社会学部 人間科学科		1	1	2	1	1	1	1	5					
合計		3	3	6	3	3	3	3	12					
総計	34	21	55	10	10	20	10	15	94					

⑥ 2つ以上の資格を取得した学生

名前	学部学科	学年	MOS	tableau	統計4級
大槻 実希	文学部	2	1	1	1
山崎 真成	文学部	2	1	1	1
鈴木 祐希	表現学部	2	1	1	1
福土 裕太	文学部	1	1	1	1
長野 凜	心理社会学部	3	1	1	1
大里 一恵	心理社会学部	2	1	1	1
杉山 和久	文学部	2	1	1	1
水越 大空	社会共学学部	1	1	1	1
新澤 真奈	社会共学学部	3	1	1	1
新井 友次	文学部	1	1	1	1
近藤 咲希	表現学部	1	1	1	1
角 朋樹	心理社会学部	2	1	1	1

- ✓ 夏の講座では受講者数に対する合格率は54%となり、現時点では目標ラインを越えている。
- ✓ 1年生のMOS・統計4級の合格者数が多い点も評価できる
- ✓ 受験者数に対する合格率は92%となっており、今後は受講者の受験率を如何に上げるかが課題
- ✓ また統計4級の合格率が低めで講座内容の見直しと対策が必要 🗨️ **春のプログラムから模試の強化を実施**

R4_データサイエンス I ~ III 振り返り

令和4年度_学外コンテストへのチャレンジ



**2年生公共政策学科有志で
ミタカ・ミライ研究アワード2022で
「優秀賞」受賞**

**3年生SA有志で
Tableau 企業分析AWARD 2022
に2チーム参加。1チームが優勝！**



2021年度はアリサカズが市長賞を受賞。テーマは「三鷹市の高齢者における情報格差に改善」。今回は市長賞は逃したが優秀賞は受賞し、三鷹市長にむけてプレゼンを行った。



発表タイトルは「人々の生活時間に注目して日本を元気にしたい！」
見事賞金の30万円もGET！
<https://techplay.jp/column/1661>

データサイエンス科目 特別プログラム（検定・資格対策）



目次

résumé

- ✓ R4年度夏（R4夏）の特別プログラム実施報告と振り返り
- ✓ R4年度春（R4春）の特別プログラム（日程等）

以降のスライドでは検定・資格名を略して表記する場合があります

「Tableau Desktop Specialist」 → 「Tableau」
「MOS Excel 一般」 → 「MOS一般レベル」「MOS」
「統計検定4級」 → 「統計4級」「統計」

2022年8月～10月



データサイエンス科目
R4夏の特別プログラム
実施報告と振り返り

2

データサイエンス科目_春の特別プログラム
R4夏の特別プログラム実施内容

● 実施プログラムの種類と内容

NO	名称	対象の資格・試験	対象者 (推奨)	資格・試験の 主催
1	Tableau Desktop Specialist 対策講座	Tableau Desktop Specialist 	データサイエンス I～VI 修了 学生 または 地域創生学部 3・4年生	Tableau Software
2	MOS Excel 一般レベル 対策講座	マイクロソフト オフィス スペシャリスト Excel 一般レベル 	特に指定なし	Microsoft
3	統計検定4級 対策講座	統計検定 4級 	特に指定なし	一般財団法人 統計質保証 推進協会

3

データサイエンス科目_夏の特別プログラム
R4夏の特別プログラム_目標設定



夏の特別プログラムの受講生の目標値は当初の予定より高く1.6倍の180人と設定。合格率は当初の目標通り受講生の32%とおき、春のプログラムにプラスの施策を実施

検定・資格名称	R4夏_目標			R4夏_修正目標		
	受講者数	合格者数	合格率	受講者数	合格者数	合格率
Tableau	30	10	33%	30	10	33%
MOS一般レベル	50	15	30%	100	30	30%
統計4級	30	10	33%	50	17	34%
3プログラム計	110	35	32%	180	57	32%

4

データサイエンス科目_夏の特別プログラム
R4夏 プラスした施策



2021年春の特別プログラムの振り返りから「募集」「申込」「講義」「資格試験受験」の各段階で抽出された課題を解決するための施策を実施

課題

- 【募集と申込】
申込が少ない
 - 資格取得のメリットが伝わっていないのでは？
 - 1年生、2年生以外には伝わっていない（T-Poのみ）
- 【講義】
授業後アンケートから「内容が難しい」声
 - 「内容が難しい」と感じ脱落した可能性
 - 授業で習っていない部分があるからか
 - 動画をすべて視聴しないで受講
- 【資格試験受験】
①受験料が高額（アンケートから）
②受験情報が少ない
③Macでは受験できない（表現学生は受験できない）

施策

- 告知ルート工夫
 - T-Po、Teamsでの連絡に加え、各学科との連携、教員・チューターからの声かけ
- ガイダンスの開催
 - 対面、オンデマンドで実施
- オンデマンド視聴の促し
 - 講義前に視聴、不明点をチェック、まともをTeams「課題」として提出
- 授業内容・教材の工夫
 - 授業内容の順序入替
 - 授業動画の配信
- サポート
 - 頻繁な声かけ
 - 申込サポート
- 受験料補助
 - 受験半額補助（2回まで）、合格後に残りの半額補助
- 模擬試験の実施
 - 学修計画の作成と提出
- PC貸し出し

5

プログラム告知から申し込みまでの実施内容は以下の通り

- ✓ 告知後のガイダンスには93名が参加。ガイダンスでは、日程と内容の説明に加え、「学修支援を行うこと」「受験料の補助」についても説明
- ✓ プログラム（講座）には155名（実質学生数109名）が申し込み

イベント	期間	内容
告知	7/21~8/3	2QT最終授業で告知（1年、2年生） / T-Poで配信（全学年） / 学科のラインでも学生へ周知依頼 / 教員・チューターから学生へ声がけ
ガイダンスの実施 (新規実施)	8/4、8/5、 8/15、8/17	対面とオンラインで計4回開催（8/15はオンラインのみ） / 講座ごとにガイダンスを実施 / 計93名が参加
申込〆切り	8/17	Formsで集約 / 155名（実質学生数109名）が申し込み

6

【申し込みのきっかけとなった告知は？】

- ✓ プログラム（講座）申し込みのきっかけは、63%以上が授業の告知、T-poの掲示（含、お知らせメール）12.1%と続く。学科からの案内、割合は少ないが、教員、チューターからの声がけ同様に一定の効果が認められた

【課題など】

- ✓ R4春に関しても同様の告知方法、告知ルートを踏襲する予定。「予定の合わなかった」学生もいたため、ガイダンスのタイミングを早め、予定を立てやすいようにする。

プログラムに申し込んだきっかけ N=91

	人数	割合 (%)
データサイエンスの授業における告知	58	63.7
所属する学科からの案内	11	12.1
T-po掲示 (もしくはTpoのお知らせメール)	11	12.1
友人からの誘い	6	6.6
教員、チューターからの声がけ	4	4.4
その他	1	1.1

7

【ガイダンス】(新規実施)

- ✓ ガイダンスには93名が参加した
- ✓ 1年生が多く、心理社会学部、文学部、表現学部からの参加が多かったが、出席数の少ない学科もあった
- ✓ ガイダンス前後で学生の検定・資格試験受験への意向が変化した。ガイダンス前には、資格試験を受けるが「検討中」の学生数が、ガイダンス後には減少し、「受ける」に変化した。ガイダンス参加により学生の意思が固まったようだ

【課題など】

- ✓ R4夏には学科への連携が遅れたこともあり、連携タイミングに余裕を持たせる

学部別ガイダンス出席者 (MOSと統計は同時開催)

講座	学部	1年生	2年生	3年生	4年生	総計
Tableau	文学部	1	2			2
	表現学部	1	1			2
	心理社会学部	2	3		1	6
	社会共生学部	1	2	2		5
	地域創生学部	1	1			2
総計		4	9	2	1	16

講座	学部	1年生	2年生	3年生	4年生	総計
MOSと統計	文学部	13	9	1	1	23
	表現学部	9	6	1	1	17
	心理社会学部	15	4	1	1	21
	社会共生学部	6	1	4		11
	地域創生学部	3	1			4
	仏教学部	1				1
総計		47	21	6	3	77

各講座 ガイダンス前後での受験の意向の変化

Tableau資格試験	ガイダンス前	ガイダンス後
受ける	2	6
検討中	13	8
受けない	1	2

MOS資格試験	ガイダンス前	ガイダンス後
受ける	17	39
検討中	55	32
受けない	5	6

統計4級試験	ガイダンス前	ガイダンス後
受ける	14	26
検討中	38	26
受けない	25	25

学部別各講座申し込み状況

学部	2年生	3年生	総計
Tableau			
文学部	4		4
表現学部	1	3	4
心理社会学部	2		2
社会共生学部	1	4	5
地域創生学部	2	1	3
総計	10	8	18

学部	1年生	2年生	3年生	4年生	総計
MOS					
文学部	13	14		1	28
表現学部	10	6	2	1	19
心理社会学部	17	4	2	2	25
社会共生学部	4	4			8
地域創生学部	3		2		5
仏教学部	1				1
総計	48	28	13	4	93

学部	1年生	2年生	3年生	4年生	総計
統計					
文学部	9	9			18
表現学部	3	3	1		7
心理社会学部	4	3	2	1	10
社会共生学部	3	1	3		7
地域創生学部	1	1			2
総計	19	17	7	1	44

【申し込み】

- ✓ 109名、計155の講座申し込みがあった。ガイダンス同様、MOSは1年生が多く、心理社会学部、文学部、表現学部からの参加が多かったが、出席数の少ない学科もあった
- ✓ Tableauの申込者18名のうち、ガイダンス参加者は7名、MOSは申込者93名申込者のうち、63名がガイダンス出席者、統計も同様に44名の申し込みのうち、28名がガイダンス参加者であった。
- ✓ MOS、統計の申し込みの3割程度の学生はガイダンスに出席していない

【課題など】

- ✓ ガイダンスに出席しなくても、途中離脱が発生しないよう、告知資料で十分な情報をする

R4夏 講義・模試・本試験・補助金 (実施内容)

講義から補助金申請までの実施内容は以下の通り

イベント	期間	内容
オンデマンド事前動画 配信	8/9 - 9/30	MOSと統計のみオンデマンド動画視聴有 / 動画 視聴を事前課題として、視聴の促しをはかった
対面授業と学習支援	8/18~9/8	授業の録画を行い、希望者が動画を視聴し。復 習ができるようにした
模擬試験 (新規実施)	9/6~9/22	Tableau計4回、MOS計9回、統計4級計5回 の模試を開催した
学生受験期間	9/9~10/31	模擬試験で一定のスコアを取得した学生は本試 験を受験
受験料補助申請	10/3 ~11/9	8/31に詳細を案内。講義受講、模擬試験受験 の条件を満たした学生が受験料の補助金を申請

R4夏 講義・模試・本試験 (振り返り)

【講義】

- ✓ 離脱の割合は15%となった
- ✓ 各講座では以下の工夫を行い、申込から受講終了までに「離脱」の防止をはかった

【各講座共通】

- ✓ 授業後のアンケートで講義内容について「やや難しかった」「難しかった」と回答した学生に対して、こまめに連絡し、様子を確認。必要に応じて学修支援を行なった

【Tableau】

- ✓ 2回目の授業では、DSの授業では詳しく触れていない内容をもってくるなど
- ✓ 講義録画を全員に公開

【MOS】【統計検定4級】

- ✓ MacユーザーへのPCの貸し出し (模試、自習も含めのべ20回)

【課題など】

- ✓ MOSと統計では、オンラインは第4回のみで、残りは対面のみとした。授業の満足度をあげるためであったが、オンライン回での参加人数も多く、「予定が合わない」といった学生がいたことから、R4春ではハイフレックスとする

◆◆講義受講状況◆◆

講座(講義)	受講人数	離脱人数	離脱割合	第1回	第2回	第3回	第4回	トータル	受講率
Tableau Desktop Specialist	18	5	28%	14	13	16	16	16	89%
MOS Excel 一般	93	12	13%	9	15	48	18	90	97%
統計検定4級	44	7	16%	6	8	18	11	43	98%
合計	155	24	15%	29	36	82	45	149	96%

※Tableauのみ4回コース、他は1回完結

※のべ参加回数に対する受講率です

データサイエンス科目_夏の特別プログラム
R4夏 講義・模試・本試験（振り返り）



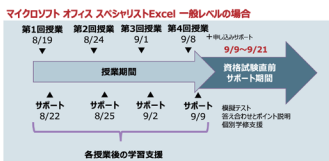
【講義後の学修支援】

- ✓ 各授業の翌日の同じ時間帯に学修支援の時間を設けたが、この時間帯での授業内容、試験問題、申込に関する問い合わせは10件程度に終わった

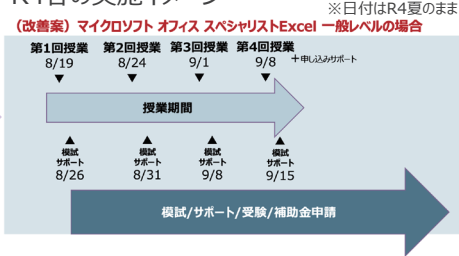
【課題など】

- ✓ R4夏は多めのサポート時間を想定していたが、サポート時間枠内での問い合わせ件数が少なかったため、次回の春のプログラムでは、翌週の同じ時間帯に模試を行い、残りの時間で申し込みサポートなどを行う予定。これにより、第1回講義参加者が模試期間まで待つ時間を短縮し、準備ができた学生から受験ができるようにする

R4夏



R4春の実施イメージ



データサイエンス科目_夏の特別プログラム
R4夏 講義・模試・本試験（振り返り）



【模擬試験】（新規実施）

- ✓ 模擬試験受験は、補助金申請資格のひとつのため、112人の学生が受験した
- ✓ 模擬試験受験後は、間違えた箇所を自身で確認し、本試験までの学修計画を提出した
- ✓ 模擬試験の点数が悪い場合は、再度模試を受けさせたりし、一定のレベルで本試験を受けられるようにした
- ✓ アンケート結果からは、学修計画の作成と模擬試験の受験は、本試験にむけての練習機会となり、最終チェックの良くなったと考えられる

【課題など】

- ✓ 模試の受験が補助金申請の条件となるため、希望する学生が多くが受験できるよう、回数を多めに設定した
- ✓ ガイダンス時に、模試の日程公開が遅くなった。R4春からは、ガイダンス時に日程の公開を行い、学生が予定しやすくなるようにする

◆◆模試受講状況◆◆

講座（模試）	受講人数	模試開講数	模試参加人数	模試参加/講義申し込み数	模試参加回数（のべ計）	1人当たり参加回数
Tableau Desktop Specialist	18	5	12	67%	27	2.3
MOS Excel 一般	93	9	72	77%	92	1.3
統計検定4級	44	5	28	64%	38	1.4
合計	155	19	112	72%	157	1.4

Q:「模擬試験直後に作成した学修計画は効果があったと思う」

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
Tableau	4	4		1	
MOS	14	24	10	5	1
統計	7	6	7		

Q:「模擬試験は本番試験にむけてのよい練習となった」

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
Tableau	9	1			
MOS	36	15	1	1	1
統計	13	6		1	

※アンケートの回答者は、各検定資格試験を受験した学生

R4夏 本試験 (まとめ)

【本試験】

- ✓ 夏の講座では受講者数に対する合格率は54%となり、現時点では目標ラインを越えている
- ✓ 1年生のMOS・統計4級の合格者数が多い点も評価できる

【課題など】

- ✓ 受験者数に対する合格率は92%となっており、今後は受講者の受験率が必要
- ✓ 統計4級の合格率が低めで講座内容の見直しを検討する

(1) 令和4年度夏期の受講者数と受験結果

講座(講義)	受講人数	資格試験 受験者数	合格者数	受講者数に 対する合格率	受験者数に 対する合格率
Tableau Desktop Specialist	18	10	10	55.6%	100%
MOS Excel 一般	93	60	58	62.4%	97%
統計検定4級	44	22	17	38.6%	77%
合計	155	92	85	54.8%	92%

(2) 学部別合格者数

結果	学部学科	MOS				合計	統計4級			Tableau			総計	
		1年	2年	3年	4年		1年	2年	3年	合計	2年生	3年生		
合格	文学部	6	8			14	3	3		6	3	3	23	
	表現学部	7	5			12	1	3		4	1	1	18	
	心理社会学部 人間科学科	8	3	1		12	1	1	2	2	2	2	16	
	社会共生学部 公共政策学科	4		4		8	2		1	3		2	13	
	心理社会学部 臨床心理学科	5	1	1	1	8	1		1	2			10	
	地域創生学部	2		1		3					1		4	
	社会共生学部 社会福祉学科		1			1							1	
	合計	32	18	7	1	58	7	7	3	17	7	3	10	
	文学部		1			1	3			3				4
	表現学部	1				1	1			1				2
不合格	心理社会学部 人間科学科							1		1			1	
	合計	1	1			2	4	1	5				7	
総計		33	19	7	1	60	11	8	3	22	7	3	10	

本試験結果 (得点分布)

【Tableau】

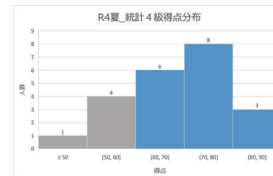
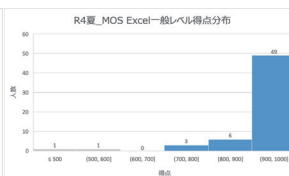
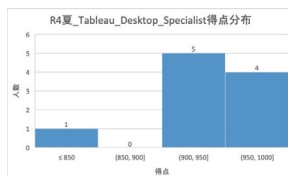
- ✓ 受験したすべての学生が合格ライン700点を超え、合格者した
- ✓ 10人のうち9人が900点以上の高得点をおさめた

【MOS】

- ✓ 60人受験のうち、58人が合格。49人が900点以上
- ✓ 12人が1000点満点であった

【統計】

- ✓ 60点が合格ラインの本検定では、50点台のあと少して合格できる学生が4人いた
- ✓ この4人はすべて1年生で、今後合格の可能性はある



データサイエンス科目_夏の特別プログラム
R4夏 受験料補助 (内容)



【受験料補助の内容】

補助対象者

- ✓ データサイエンス特別プログラム検定・資格対策講座受講者
- ✓ 対象要件: 該当講座の全回受講+模擬試験受験

No	検定・資格名称	検定資格	主な受講想定学生	受験・検定料	受験料補助金額		受験時の補助率
					受験時	合格后	
1	Tableau Desktop Specialist	資格	DS I～VI 修了学生 地域創生4年生	学割 11,880円	7,128円	4,752円	60%
2	Microsoft Office Specialist (MOS) Excel 一般レベル	資格	DS I～III 修了学生	学割 8,580円	4,290円	4,290円	50%
3	統計検定4級	検定	DS I～III 修了学生	学割 3,500円	1,750円	1,750円	50%

※ Tableau の学割は、通常 100 ドル (税抜) の 80%、1 ドル 135 円で算出 (補助金額はレート固定)

- ✓ ガイダンス時には詳細未決定のため予告のみを行なった
- ✓ 8/31に詳細の説明資料配布
- ✓ 10/3から11/9を申請期間とした (申請遅れなし)

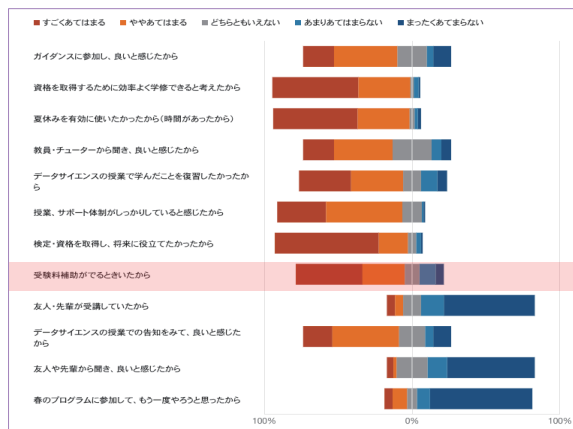
データサイエンス科目_春の特別プログラム
R4夏 受験料補助 (振り返り)



【受験料補助 (新規実施)、プログラム申し込み時への効果】

- ✓ プログラムに参加した理由で、「効率のよい学修」「夏休みの有効利用」「将来に役立てる」などに続き、「受験料補助」が位置しており、受講、受験の気持ちを後押しする効果があったと考えられる (学生からの声もあり)

プログラムに参加した理由は？
(プログラム終了後アンケートから N=91)



【プラスの施策】

- ✓ R3春で抽出された課題より、R4夏では、解決に向けたプラスの施策を行なった
- ✓ 「告知ルートの工夫」「ガイダンスの実施」「オンデマンド動画視聴の促し」「模擬試験の実施」「講義やサポートの工夫」「受験料補助金」効果が認められたので、R4春でも継続する

【告知から申し込み】

- ✓ 「告知」からガイダンス、申し込みへの誘導は、DS授業最後の授業での告知が大きな影響があるが、DS授業のない、3、4年生への到達も含め、T-po、学科連携、学科への依頼、教員からの声かけは今後も重要である
- ✓ 特にガイダンスは、資格試験受験の意思を固め、プログラムに申し込みを行なった学生もおり、その役目を果たしたと考えられる

【講座の工夫について】

- ✓ Tableau、MOS、統計の3講座への申し込み者155名のうち24名（15%）の離脱者であった。授業内容の工夫、頻繁な声かけに効果があったと考える
- ✓ 事前学修用動画、授業動画の配信も学修意欲の維持に貢献したおみられる

【本試験について】

- ✓ 模擬試験実施後に、間違った箇所を確認、本試験までの学習計画を立てたことは、本試験前の良いチェックとなった
- ✓ 受講者全員（のべ155人）に対する合格率は3講座合わせて54%、受験者全員（のべ92人）に対しての合格率は92%となった

【受験料補助について】

- ✓ 受験料の補助は、受講、受験の動機づけのひとつとなっていることがわかり、71人の学生からの申請があった。
- ✓ 受験回数は合格率が高かったこともあり、平均1回に近い値となった。



R4年度 春のデータサイエンス 特別プログラム(検定・資格対策)



この春休みに、今後の大学生活、社会に出て必要とされる、基本的なITスキルを身につけ、その能力を証明する資格の取得を目指しましょう。

本プログラムで対象とする資格・検定は、いずれも基礎的な理解を試すものです。**しっかり準備して合格を目指しましょう。**

データサイエンス科目の教員とチューターも、皆さんの資格取得にむけて支援します！

本プログラムは、
資格・検定試験を受験することが前提です。

本プログラム受講後は、指定期間内に**資格・検定試験を受験し、成果を出しましょう。**

受験する皆さんが合格するように全力でサポートします。

- **試験対策を徹底的にサポート**
 - ✓ DSの講義内容に合わせた試験対策
※別途講座ごとに試験範囲を説明します
 - ✓ 山崎由愛先生による講義
マイクロソフト株式会社（現 日本マイクロソフト株式会社）にて、国際資格「Microsoft Office Specialist（MOS）」の創設を日本で主導。
現在は、株式会社Excellence代表、大正大学特命准教授
 - ✓ 充実した学修支援
※別途講座ごとに説明します
- **受講料は無料！**
※テキスト代は自己負担。必要なテキストは講座別に案内します
- **大学が受験料を補助**



- 実施期間：講義録画視聴可能期間（2/1-4/30）
 対面（またはオンライン）（2/6-2/27、各講座の授業回数は4回）
 試験対策：模試（2/13-3/14）、学修支援（2/13-4/30）
- プログラム（対策講座）の種類と資格

NO	名称	対象の資格・試験	対象者（推奨）	資格・試験の主催
1	Tableau Desktop Specialist 対策講座	Tableau Desktop Specialist 	データサイエンス I ~VI修了	Tableau Software
2	MOS Excel 一般レベル 対策講座	マイクロソフト オフィス スペシャリスト Excel 一般レベル 	特に指定なし	Microsoft
3	統計検定4級 対策講座	統計検定 4級 	特に指定なし	一般財団法人 統計質保証 推進協会

受験料は大学が補助します。

※4年生は3/16までに受験、申請が必要

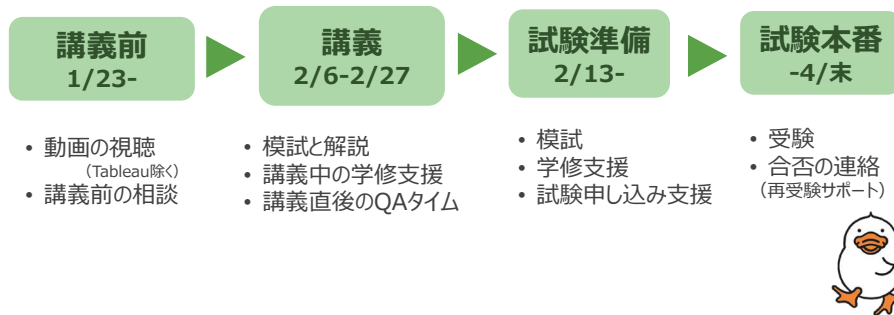
【補助の内容】

- ✓ 1科目につき2回まで
 - ①Tableau ⇨ 60%を補助
 - ②MOS ⇨ 50%を補助
 - ③統計検定4級 ⇨ 50%を補助
- ✓ 合格したら、残りの負担分も返金
 - ・ 1回目で合格⇨全額補助
 - ・ 2回目に合格⇨1回目半額補助、2回目全額補助



動画、講義、学修支援をフルに活用して、不安な箇所、苦手な箇所を解消していき、試験前の模試で最終チェック、準備万端で試験にのぞみましょう！

※詳細な日程等は各講座の説明で確認してください

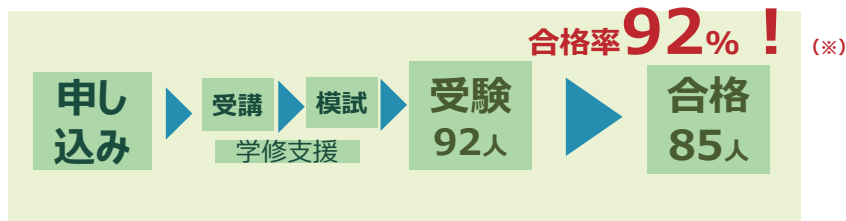


昨年夏の本プログラムでは、受講と模
擬試験後、**本試験を受験した学生の
9割以上が合格** (※) しました！

申し込み目標・目的

- 長い休みを活かしたい
- これまでの復習を通してスキルアップ
- 就活に活用する
- 社会に出た時に役立てる

※ 3講座合わせての「合格者数÷受験者数」



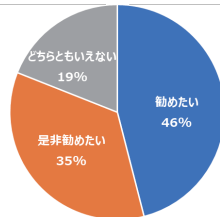
👉 講座ごとの合格率は次ページで



データサイエンス科目 特別プログラム
昨年夏に参加した学生の受験結果



あなたはこの講座を誰かに勧めたいと思いますか？



合格率はどの講座も高い水準です！

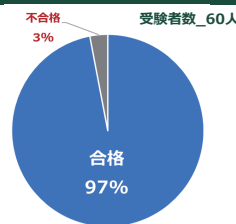
ちなみに
3つの資格を全て取得した学生2名（2年生）
うち2つの資格を取得した学生が10名います！

みなさんぜひチャレンジを！

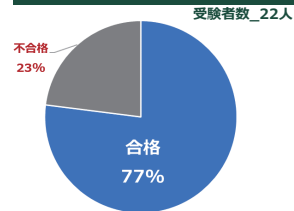
Tableau_合格率



MOS Excel一般_合格率



統計検定4級_合格率



8

データサイエンス科目 特別プログラム
昨年夏のプログラムの様子（学生の声）



次の2枚のスライドは、昨夏のプログラムに参加した学生の声をまとめたものです。

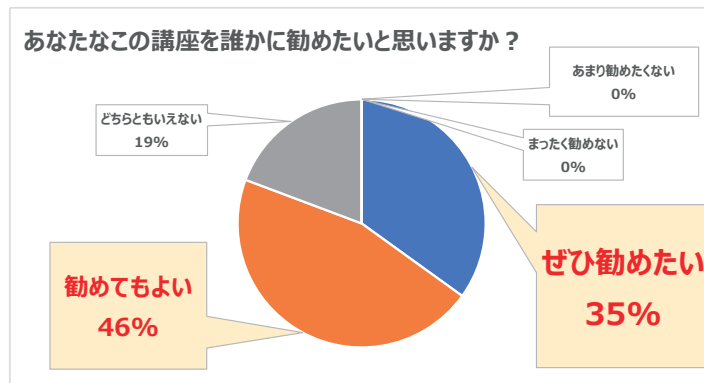
講義の様子や、やり遂げた感想を見てみましょう。

これらを参考に、目標設定し、プログラムに申し込みましょう！



9

本プログラムを完了した学生の80%以上が、他の人に受講を勧めています。



講義とサポートが良かった

- 先生方の指導通りに勉強をしたら、全ての検定に合格した
- 実際にExcelを使用しながら説明されたので、とても分かりやすく、苦手な問題も理解できた
- 対面授業では、間違えやすいところをまとめて教えてもらったのがいい復習になった
- 授業で学んだ内容より一層、知識を深められ、さらに資格取得ができたのがとても良かった

模擬試験が良かった

- 模擬試験で実際の練習ができて良かった
- 模試で自分の弱点だけでなく、強みもはっきりわかって、自信がついた

教材が良かった

- 動画での説明は要点がわかりやすく、役にたった
- Excelの事前動画は、学習ペースや理解度に合わせて繰り返し復習できたのが良かった
- 本番の試験の内容は、事前に学んだものに近かった

勉強の習慣、環境が作れた

- 授業形式だったので、計画などがたてやすかった
- 夏休みの時間を有効的に活用できた
- 事前動画を自主的に見るなど、自分のスケジュールに合った勉強ができ、モチベーションを保てた
- このプログラムがなかったら、むずかしくて諦めていただろう





Tableau Desktop Specialist

ガイダンス

12

Tableauの資格を取得するメリット



- 履歴書に記載できる
Tableauの資格について問われた時に、授業で学んだことを伝えられる。（例として、実在する企業のデータを分析・可視化し、提案した経験など）
- 社会人になってからBIツールを利用できる
Tableauは世界各国の業種・企業で採用されている代表的な Business Intelligence (BI) ツール。Tableauを使えれば、他のBIツールも活用しやすい

13

Tableauの主な資格

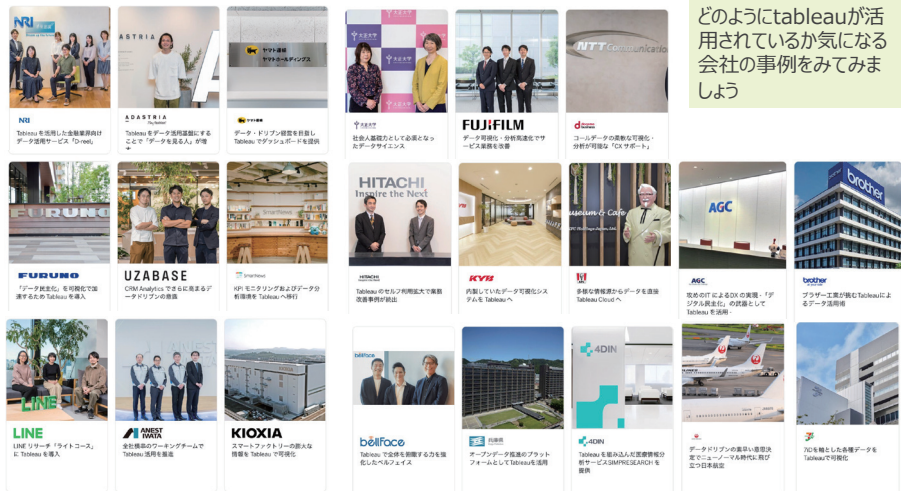
データサイエンスで学んだことを今後に活かす第1歩として最適な資格です。

資格名	内容	推奨される製品使用期間	資格の有効期間
Tableau Desktop Specialist	基本的なスキルと製品知識を証明する	3か月以上	有効期限なし
Tableau Certified Data Analyst	ビジネス上の意思決定を支援するため、ビジネスでの問題を理解し、分析のために探索するデータを特定し、実用的な分析内容を提供できる	6か月以上	2年
Tableau Server Certified Associate	システムの管理能力とプラットフォームに関する知識を証明する	6か月以上	2年



様々な業種・企業で活用されているTableau

<https://www.tableau.com/ja-jp/solutions/customers>



どのようにtableauが活用されているか気になる会社の事例をみてみましょう

データサイエンス科目 特別プログラム
行政での活用例（兵庫県）



月別の人口推移（推計人口）

市町別の直近の人口、社会増減・自然増減の推移



(外部サイトヘリンク)

将来推計人口

2015～65年の人口推計（市町別・年齢5歳区分別）



(外部サイトヘリンク)

健康データ

市町別の主な死因、健康寿命・平均寿命、特定健診・生活習慣など



交通事故発生状況

交通事故の発生場所、年齢・時間・天候別の状況など



「県勢ダッシュボードの公開」

<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk26/dashboard.html>



<https://www.tableau.com/ja-jp/solutions/customer/tableau-as-platform-for-promoting-open-data> 16

データサイエンス科目 特別プログラム

Tableau Desktop Specialistと対象者



- 実施期間：講義録画視聴可能期間（2/1-4/30）
対面（またはオンライン）（2/6-2/27、各講座の授業回数は4回）
試験対策：模試（2/13-3/14）、学修支援（2/13-4/30）
- プログラム（対策講座）の種類と資格

NO	名称	対象の資格・試験	対象者（推奨）	資格・試験の主催
1	Tableau Desktop Specialist 対策講座	Tableau Desktop Specialist	データサイエンス I ~VI修了	Tableau Software
2	MOS Excel 一般レベル 対策講座	マイクロソフト オフィス スペシャリスト Excel	特に指定なし	Microsoft
3	統計検定4級 対策講座	統計検定4級	特に指定なし	一般財団法人 統計質保証推進協会

Tableau Desktop
の基本的なスキルと知識があり、3ヶ月以上の使用経験者

17

Tableau Desktop Specialist 概要



- 「Tableau Desktop Specialist」は、Tableauの基本的なスキルと製品知識を証明する認定資格

- ✓ Tableauを導入する企業が多いが、資格取得者が少ない注目度の高い資格
- ✓ 試験は、選択式の知識問題45問(60分、実技試験なし)

- 試験範囲

データへの接続 保存形式 ディメンションとメジャー 不連続と連続 集計の概念 棒グラフ 折れ線グラフ 円グラフ ツリーマップ ヒストグラム 箱ひげ図	散布図 地図 クロス集計表 合計・小計 ハイライト表 二重軸 共有軸 複合グラフ マークカード 並べ替え フィルター	日付 階層 グループ 計算フィールド 集計と非集計 表計算 ダッシュボードとアクション ストーリー 結合 ユニオン	ライブと抽出 .tds アニメーション 関数 パラメーター リレーションシップ
--	--	--	--

データサイエンスⅠ～Ⅵで学修済み
学修内容よりやや高度な問題が出題される

未学修

- 受験料 一般:100米ドル 学生:80米ドル ★補助あり(4年生は3/16まで受験、申請)

1. Tableau Desktop Specialist 対策講座



プログラム名	Tableau Desktop Specialist 対策講座
到達目標	Tableau Desktop Specialist の合格を目指す
参加資格	データサイエンスⅠ～Ⅵ修了学生
授業形式	対面またはオンライン 100分×4回
テキスト	特に指定なし
開講日	1回目：2月6日(月) 2限目 2回目：2月14日(火) 2限目 3回目：2月20日(月) 2限目 4回目：2月27日(月) 2限目
【講義】 プログラム内容	試験範囲のTableauの機能について、問題を解きながら修得していきます。
模擬試験	模擬試験 を以下の日程で実施します。いずれも2限目(全4回) 1回目：3月1日(水) 2回目：3月7日(火) 3回目：3月16日(木) 4回目：3月20日(月)

不安な箇所、苦手な箇所を解消していき、準備万端で試験にのぞみましょう！


	期間・実施日程	備考 (サポート内容など)
講義前	【講義前の相談】 1/23～講義開始まで	受講に関して不明点があれば質問する
講義 ※対面/オンライン	1回目：2月 6日 (月) 2限目 2回目：2月14日 (火) 2限目 3回目：2月20日 (月) 2限目 4回目：2月27日 (月) 2限目 ※全ての回に参加する必要あり	・講義では試験範囲のTableauの機能について、問題を解く ・間違えた箇所、理解できない箇所のメモをとる ・講義直後のQAタイムを活用する
模擬試験 ※対面/オンライン	※全て2限の時間帯で開催 1回目：3月1日 (水) 2回目：3月7日 (火) 3回目：3月16日 (木) 4回目：3月20日 (月)	・第1回、第2回目はよく出る問題、第3回は間違いの多い問題を中心に出題 ・試験申し込みサポート
試験	【受験・試験後連絡】 ～4/30	・申し込みについて不明点があれば質問する ・受験日が決まったら報告する ・受験する ・合否を連絡する (・再受験のための学習相談、申し込み)
学修支援 ※対面/オンライン	講義前、講義、講義後、模試、試験でわからないことがあれば相談を	全期間通して学修相談します！
補助金申請	(後日アナウンス)	申請書の記入方法について不明点があれば問い合わせる



MOS Excel一般レベル & 統計検定4級

ガイダンス

- 実施期間：講義録画視聴可能期間（2/1-4/30）
対面（またはオンライン）（2/6-2/27、各講座の授業回数は4回）
試験対策：模試（2/13-3/14）、学修支援（2/13-4/30）
- プログラム（対策講座）の種類と資格

NO	名称	対象の資格・試験	対象者（推奨）	資格・試験の主催
1	Tableau Desktop Specialist 対策講座	Tableau Desktop Specialist 	データサイエンス I ~VI修了	Tableau Software
2	MOS Excel 一般レベル 対策講座	マイクロソフト オフィス スペシャリスト Excel 一般レベル 	特に指定なし	Microsoft
3	統計検定4級 対策講座	統計検定 4級 	特に指定なし	一般財団法人 統計質保証 推進協会

どちらの資格・検定試験も、出題範囲は、データサイエンス I・II の学修内容と重なります。これまで学んだことを振り返りながら、効率的に資格取得の準備をしましょう。

「MOS Excel一般レベル」と「統計検定4級」は、どちらも基礎的な理解を問う試験です。





MOS Excel一般レベル

MOSについて

【MOS】

Microsoft Office Specialist (MOS) は、Officeの利用能力を証明する**世界的な資格試験制度**。

マイクロソフト オフィス製品（Word、Excel、PowerPoint、Access、Outlook）のバージョンごとにMOSがある。さらにWord、Excelには二つのレベルがある

	一般レベル	上級レベル
Excel	数式や基本的な関数の作成、セルの書式設定、グラフ作成など、Excelでの基本的な操作を理解している	ピボットテーブルなどのデータ分析、条件付き書式や入力規則の設定、マクロの作成・編集など、Excelでの高度な機能を理解している

Excelのバージョン： **365&2019**、Excel 2016、Excel 2013



「MOS Excel一般レベル」は、Excelの基本的な操作を理解している人のための資格です。セルやセル範囲への書式設定、数式の作成、テーブル機能、グラフの作成・編集などを理解しておきましょう。



- 「マイクロソフト オフィス スペシャリスト(MOS)」は、ExcelやWordなどのOffice製品の利用スキルを証明できる資格
 - ✓ キャリアアップや就活に役立つほか、MOS取得者だけの国際的なパソコン大会に参加できる
 - ✓ 試験はパソコンを使用した実技形式
 - ✓ 「プロジェクト」という課題の中で、複数の設問に解答する(50分)

● 試験範囲

数式や基本的な関数の作成、セルの書式設定、グラフ作成など、Excelでの基本的な操作

- ・ ワークシートやブックの管理
- ・ セルやセルの範囲のデータの管理
- ・ テーブルとテーブルのデータの管理
- ・ 数式や関数を利用した演算の実行
- ・ グラフの管理

データサイエンス I～IIを履修した学生はほぼ学修済



2,310円 (税込)

- 「対面の講義」では模擬問題の他、受験時の注意点や間違えやすい問題のポイントなども解説
- 受験料 一般:10,780円(税込) 学生:8,580円(税込) ★補助あり(4年生は3/16まで受験、申請)

2. MOS Excel 一般レベル 対策講座

プログラム名	MOS Excel 一般レベル 対策講座
到達目標	マイクロソフト オフィス スペシャリストExcel 一般レベルの合格を目指す
参加資格	特に指定なし ※講義は1度でも複数回でも受講可能
授業形式	【動画】約50分の講義 5本 ※2月1日(水)～4月30日(日) 【対面またはオンライン】100分 1回 ※同じ内容で4回開催します
テキスト	必須テキスト： よくわかるマスター Microsoft Office Specialist Excel 365&2019 対策テキスト&問題集 https://www.fom.fujitsu.com/goods/officespecialist/fpt1912.html
開講日	下記のいずれかに1回以上参加 (いずれも 3限目 で同様の内容です) 2月7日(火) / 2月14日(火) / 2月21日(火) / 2月27日(月)
【動画】 プログラム内容	必須テキストの内容を、試験に出るポイントを交えながら動画で解説。視聴後、テキスト付属の模擬問題プログラムを解いて、各自習熟度を確認します。
【講義】 プログラム内容	間違えがちな問題やよく出題される内容を集めた模擬問題を解きながら、受験のテクニックを解説します。試験範囲内で不安な部分は自由に質問ができます。
【模擬試験】	模擬試験を以下の日程で実施します。いずれも3限目(全8回) 1回目: 2月13日(月) 2回目: 2月16日(木) 3回目: 2月20日(月) 4回目: 2月24日(木) 5回目: 2月28日(火) 6回目: 3月1日(水) 7回目: 3月3日(金) 8回目: 3月7日(火)

28



統計検定 4 級

29

【統計検定】

データに基づいて客観的に判断し、科学的に問題を解決する能力が21世紀型スキルとして国際社会で求められています。

検定は、統計に関する知識や活用力を評価する全国統一試験です。

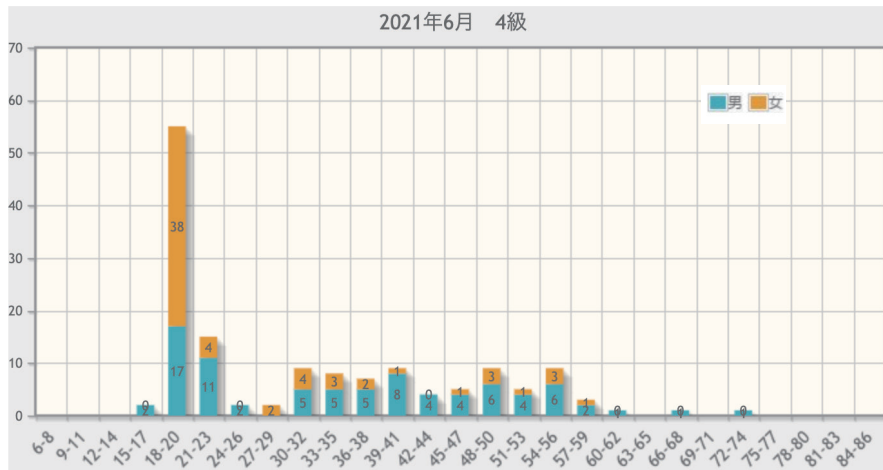


4級「資料の活用」→3級「データの分析と活用」ができるようにステップアップしていきましょう！

検定種別	試験内容
4級	データの活用や図表の見方に関する知識と能力を問い、「資料の活用」が十分に行える
3級	4級検定の内容に加えて、基礎的な「データの分析」に関する知識やその活用能力を問う。高等学校卒業までに修得する統計の知識を身近な問題解決に活かせることを求めている
2級	大学における統計の基礎の修得の成果を問う。社会での統計の役割を理解し、統計データおよび、統計学の知識に基づいた統計解析手法の適切な利用と問題解決の能力を求めている
1級、準1級	種々の統計手法を数理的側面から正しく理解することに加えて、現実の課題に的確に活用し、結果を解釈する能力を求めている



みなさんと同年代の受験が多い！



https://www.toukei-kentei.jp/info/past/age_dist/

32

プログラム名	統計検定4級 対策講座
到達目標	統計検定4級の合格を目指す
参加資格	特に指定なし ※講義は1度でも複数回でも受講可能
授業形式	【動画】約45分の講義 5本 ※2月1日(水)～4月30日(日) 【対面またはオンライン】100分 1回 ※同じ内容で4回開催します
テキスト	必須テキスト：日本統計学会公式認定 統計検定 3級・4級 公式問題集 https://itsumu.hondana.jp/book/b590885.html 参考テキスト：改訂版日本統計学会公式認定 統計検定4級対応 データの活用 http://www.tokyo-tosho.co.jp/books/978-4-489-02325-5/
対面 ※内容は同じ	下記のいずれかに1回以上参加 (いずれも4限目で同様の内容です) 2月7日(火) / 2月14日(火) / 2月21日(火) / 2月27日(月)
【動画】 プログラム内容	主にデータサイエンスⅠ～Ⅱの授業スライドを使用して内容を復習後、練習問題と解説を繰り返します。データサイエンスでは触れなかった「確率の基本」は基礎から解説します。
【講義】 プログラム内容	過去に出題された問題とオリジナルで作成した問題をミックスした模擬問題と共に、受験のテクニックをお伝えします。試験範囲内で不安な部分は自由に質問できます。
【模擬試験】	模擬試験を以下の日程で実施します。いずれも4限目(全6回) 1回目：2月13日(月) 2回目：2月16日(木) 3回目：2月20日(月) 4回目：2月24日(木) 5回目：2月28日(火) 6回目：3月3日(金)

33

大正大学 「データサイエンス教育プログラム」 の概要について

résumé

- ✓ データサイエンス教育プログラム実施の目的
- ✓ データサイエンス教育プログラムについて
- ✓ 特色ある取り組み ~授業内容と学修支援~
- ✓ データサイエンス教育のマネジメント体制他
- ✓ 現状と今後の課題

データサイエンス教育プログラム実施の目的

令和2年度

文部科学省 知識集約型社会を支える人材育成事業に大正大学の

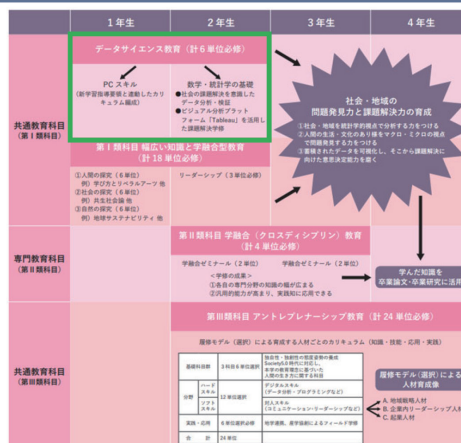
「新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業」が採択されました。

地域戦略人材育成のための具体的な取り組み

Point 1
超スマート社会の中で地域を支え、
活躍する人材(地域戦略人材)を
育成する教育プログラムの構築

Point 2
全学横断的な教育改革の実現に向け
た組織改革、教職協働体制の確立

Point 3
目指す人材の育成に向けた
地域・社会とのインタラクション強化



データサイエンス教育プログラムについて

4

【データサイエンス教育プログラムの位置づけ】

- ✓ **全学必修のI類科目(共通教育科目)**である
- ✓ R2年度は3学部のみで先行実施、**R3度入学生から全学での展開**となる
- ✓ **2年間で6単位取得**(1年次3単位 2年次3単位)

【データサイエンス教育プログラムの考え方】

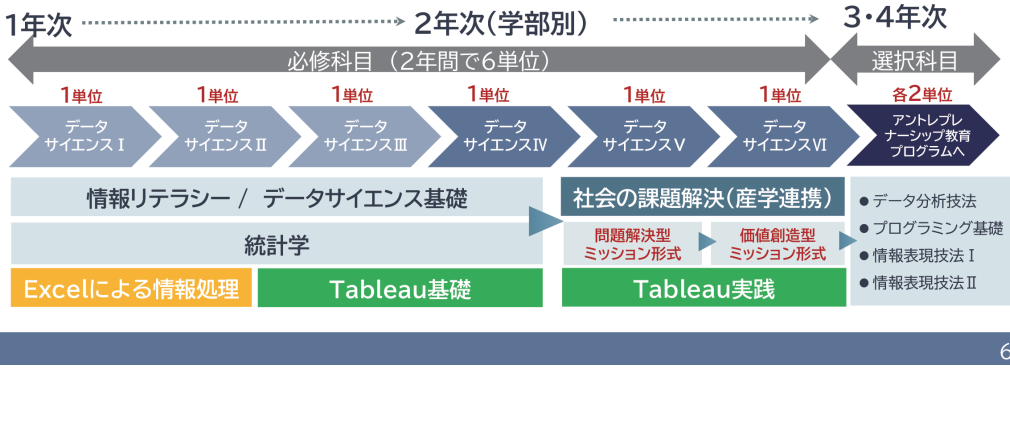
- ✓ 超スマート社会の中で地域を支え、活躍する人材(地域戦略人材)を育成するために、文科系大学における数理教育を研究し、**社会に欠かせないスキルを身に付けたデータに強い文系学生を育てる**
- ✓ 最終的には**社会・地域の問題発見力と課題解決力の育成を目指す**

【学生の状況】 ※入学時基礎学力テストとアンケート結果より

- ✓ 毎年共通して全体的に国語英語と比較して**数学の成績は低くめで、ばらつきも大きい**
- ✓ ただしR4年の入学時アンケートでも**数学苦手と回答する学生は69%**だが一方で**数学の必要性を感じる割合は全体で73%**

5

【データサイエンス教育プログラムでの教育目標】
主観的な判断ではなく、データをもとに意思決定を行うデータドリブンな思考を高め
社会の課題を解決し、価値を創造していく人材となる



年次	学期	科目名	単位数	担当	授業テーマ	補足説明
1年次	1	統計	1	○	統計の基礎①	統計学について、動向
	1	統計	1	○	統計の基礎②	単体統計表とクロス集計表
	2	統計	1	○	統計の基礎③	統計の発展と平均
	2	統計	1	○	統計の基礎④	基本統計量
	2	統計	1	○	統計の基礎⑤	4つの尺度
	2	統計	1	○	統計の基礎⑥	グラフの基本
	2	統計	1	○	統計の基礎⑦	分散・偏分散
	2	統計	1	○	統計の基礎⑧	「代理」とTableauのメタデータとディメンション
	2	統計	1	○	統計の基礎⑨	
	2	統計	1	○	統計の基礎⑩	
2年次	1	統計	1	○	Excel基礎①	表計算ソフト概論とExcelの特徴 / Excelの基本
	1	統計	1	○	Excel基礎②	数式(関数)を使った計算 / データ、数値の入力 / 印刷設定
	1	統計	1	○	Excel基礎③	数式(関数)を使った計算 / 数値の挿入と削除 / 罫線 / 塗りつぶし
	1	統計	1	○	Excel基礎④	数式(関数)を使った計算 / 数値の挿入と削除 / 罫線 / 塗りつぶし
	1	統計	1	○	Excel基礎⑤	数式(関数)を使った計算 / 数値の挿入と削除 / 罫線 / 塗りつぶし
	1	統計	1	○	Excel基礎⑥	数式(関数)を使った計算 / 数値の挿入と削除 / 罫線 / 塗りつぶし
	1	統計	1	○	Excel基礎⑦	数式(関数)を使った計算 / 数値の挿入と削除 / 罫線 / 塗りつぶし
	1	統計	1	○	Excel基礎⑧	数式(関数)を使った計算 / 数値の挿入と削除 / 罫線 / 塗りつぶし
	1	統計	1	○	Excel基礎⑨	数式(関数)を使った計算 / 数値の挿入と削除 / 罫線 / 塗りつぶし
	1	統計	1	○	Excel基礎⑩	数式(関数)を使った計算 / 数値の挿入と削除 / 罫線 / 塗りつぶし
3・4年次	1	Tableau	1	○	Tableau基礎①	目録の概要とTableauの特徴
	1	Tableau	1	○	Tableau基礎②	データベースへの接続とファイルの保存形式
	1	Tableau	1	○	Tableau基礎③	分析前の下準備
	1	Tableau	1	○	Tableau基礎④	データのビジュアル化の基礎
	1	Tableau	1	○	Tableau基礎⑤	さまざまなビジュアライズ① ● 関数の使用、非連続を使ったグラフ、二重軸を使った集計グラフ ● 目録・目録部分のフィールドの扱い方を習得する
	1	Tableau	1	○	Tableau基礎⑥	さまざまなビジュアライズ② ● クロス集計表の作成方法を習得する ● 合計、小計の挿入 / ハイライト表の作成方法を習得する
	1	Tableau	1	○	Tableau基礎⑦	TableauQへの応用 / 応へ対応と条件の絞り込み
	1	Tableau	1	○	Tableau基礎⑧	新たな切り口の作成とデータのドリルダウン、ドリルダウン
	1	Tableau	1	○	Tableau応用①	計算の基本(集計・非集計)
	1	Tableau	1	○	Tableau応用②	計算の基本(合計に対する割合、移動平均、ランキング)
Excel基礎・応用	1	Excel	1	○	Excel応用①	グラフ作成の基本
	1	Excel	1	○	Excel応用②	データの整形と複数のデータの扱い方①(結合、ユニオン)
	1	Excel	1	○	Excel応用③	データの整形と複数のデータの扱い方②(ブランク・ブリアー・ピボット・検索)
	1	Excel	1	○	Excel応用④	計算の応用(IF、ISBLANK) / 表計算の応用(仕入値の集計、レポート)
	1	Excel	1	○	Excel応用⑤	計算の応用(IF、ISBLANK) / 表計算の応用(仕入値の集計、レポート)
	1	Excel	1	○	Excel応用⑥	計算の応用(IF、ISBLANK) / 表計算の応用(仕入値の集計、レポート)
	1	Excel	1	○	Excel応用⑦	計算の応用(IF、ISBLANK) / 表計算の応用(仕入値の集計、レポート)
	1	Excel	1	○	Excel応用⑧	計算の応用(IF、ISBLANK) / 表計算の応用(仕入値の集計、レポート)
	1	Excel	1	○	Excel応用⑨	計算の応用(IF、ISBLANK) / 表計算の応用(仕入値の集計、レポート)
	1	Excel	1	○	Excel応用⑩	計算の応用(IF、ISBLANK) / 表計算の応用(仕入値の集計、レポート)

特色ある取り組み ～授業内容と学修支援～

8

教員、チューター、SAのチーム・ティーチングと授業前後の学修支援で、学生の主体的学びを推進する体制を構築し、文科系学生を念頭に学修者の苦手意識の克服・リテラシー向上を重視したデータサイエンス教育を推進している。

1クラスあたりの人数
学生：約100名
教員：2名
チューター：1～2名
SA：3～4名

学生の主体的学び

Learning



チームティーチングによる教育
Teaching



学修者中心



チューター、SAによる学修支援
Support

9

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)
習熟度や専門性を踏まえた学修内容とクラス編成について



データサイエンスⅠ～Ⅲは習熟度を踏まえたクラス編成となっており、学生の状況に応じた授業運営を行っている。特に習熟度や理解度が低い学生に対しては基礎的内容の反復や個別学修支援の強化などに取り組んでいる。またデータサイエンスⅣ～Ⅵは学科別クラスとなっており、産官学連携先や扱うデータや課題解決ができるだけ専門の学問につながるよう工夫している。

R4 1年生 (学部混成12クラス)

木曜日クラス 1限目 探究実証系学部群の学生	金曜日クラス 1限目 社会創造系学部群の学生
A:混成クラス	A:混成クラス
B:混成クラス	B:混成クラス
C:混成クラス	C:混成クラス
D:混成クラス	D:混成クラス
E:混成クラス	E:混成クラス
F:混成クラス	
G:混成クラス	

R4 2年生 (学部学科別11クラス)

学部学科	クラス数	産学連携先
心理社会学部	2クラス	キリンホールディングス ヘルスサイエンス事業
表現学部	2クラス	ガモールマルシェ ソフトバンク株式会社
地域創生学部 社会共生学部	3クラス	三鷹市企画部企画経営課
文学部 仏教学部	4クラス	株式会社サイゼリヤ

10

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)
チームティーチング体制と実務家教員による教材開発について



DS科目は、新卒の入社時でも基本的なデータ分析作法を心得ている学生を輩出するため、実践的な知識やスキルの習得を前提としている。非常勤講師の大半は大手企業でITやデータを扱う第一戦の部門で働いている社会人や経営者などであり、彼らの意見も取り入れながら、時代に即応した実践的スキルが高まる教材開発を行っている。

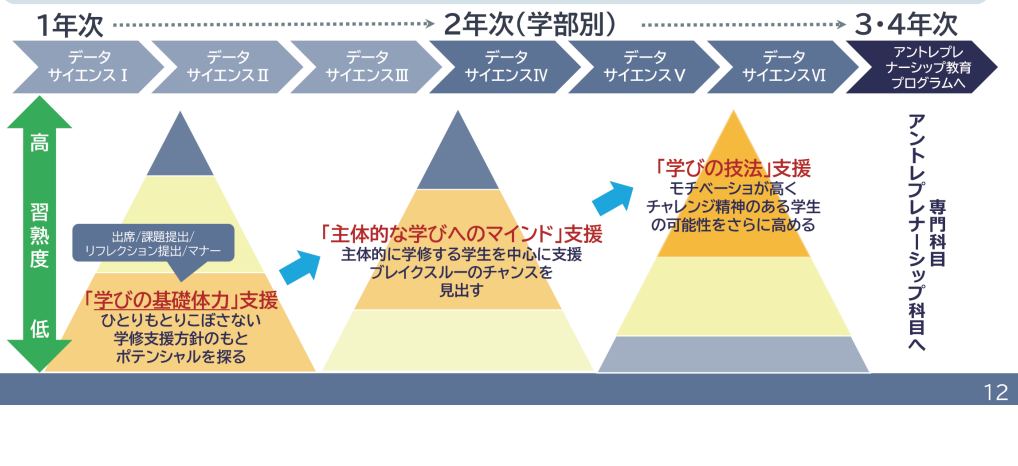
	役職	人数	役割
教員	専任教員 ※内4名実務家教員	6名	主に、教材開発、授業運営方法、学修支援体制の検討と実行 産学連携のチームリーダーと連携先との定期ミーティング(2年生) サイゼリヤチーム/三鷹市チーム/キリンチーム/ガモール(Softbank)チーム
	非常勤講師 ※全員実務家教員	11名	授業運営、学生の習熟度把握 教材開発における実践的教育内容へのアドバイス (社会で通用する実践的なスキル習得方法についてなど) 産学連携チームMTでの教育内容の検討
チューター SA	コアチューター ※専任職員	2名	教職員と連携して学修支援(補習含む)、正課外科目の企画運営とリーディング およびチューターとSAのマネジメント / 学科連携 / 個別学生面談
	クラスチューター ※パート	10名	教員・コアチューターの指示および連携により、 授業中・前後の学修支援 / 個別学生面談
	SA ※2～4年の在学生	35名	教員・コア&クラスチューターの指示により、授業中の学修支援

11

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)
【参考】大正大学のチュートリアル教育－学修支援の考えかた



I 類の教育を II 類(専門科目)と III 類(アントレプレナーシップ科目)の学びへスムーズに移行させることを意図し、時期によってグラデーションを付けた学修支援を行っている。また学生の状況は常に変化していくため、クラスや学生の状況や状態をチームで見極め、「今はどのような支援が最適なのか」をチームで考え実行している。



数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)
分かりやすさと反復学修について



学生が自分事として学修できることを目指し、社会での様々な分野での身近なテーマを教材として扱っている。数学の苦手な学生のために講義と合わせてExcelやTableauでも学んだ統計を繰り返し復習できる教材を開発し、さらには復習用の演習(ワークブック)の提供なども行い、学生が常に反復学修ができるように工夫している。

(1) 「頭で理解する」と「手を動かす」のセットで学修の流れ

(2) 復習用ワークブック(tableau)

例:分散・標準偏差

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)
実データ・実課題を活用したリアリティのある学修について



産官学連携先からは連携先が直面するリアルな課題の提示を受け、その課題解決のために活用できる実データの提供を受けている。実データを用いて実課題を解決する実践型の演習を段階的に充実させていくことによりデータサイエンスを学修する意義を実感させ、学修意欲を高めている。またデータサイエンスV、VIの最終回では産官学連携先が授業に参加し、プレゼンの講評やフィードバックを行うなど、リアリティのある学びの場となっている。

学部学科	R4 産学連携先	DSV「問題解決型」ミッション内容	提供いただいたデータ
心理社会学部	キリンホールディングス ヘルスサイエンス事業	サプリメントの「iMUSE」をオンラインで拡売していくためには何処にチャンスがあるかを見極めて提案	✓ 顧客ごとのLTVデータ
表現学部	ガモールマルシェ ソフトバンク株式会社	大正大学ガモールマルシェにおける販売データと陳列場所を分析し、売上を伸ばす提案	✓ 販売POSデータ ✓ 店舗の陳列棚情報
地域創生学部 社会共生物学部	三鷹市企画部企画経営課	高齢者の生活満足度と関連する要因を分析した上で、高齢者の満足度を高める課題解決策を提案	✓ 高齢者の生活と福祉実態調査(アンケートデータ)
文学部 仏教学部	株式会社サイゼリヤ	東西のサラダメニューの売れ方を分析し、もっとサラダを食べていただくためのアイデアを提案	✓ サラダのPOSデータ ✓ 客数・組数データ ✓ 販売価格マスタ

14

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)
【参考】DSV(産学連携)の授業の流れ



実データを使って企業や自治体への課題解決提案を行う上で必要な項目を同時並行に学んでいく
①統計の基本に基づき ②データを使った課題解決の基本的なステップ
③定量分析手法(連携先のデータ特性に応じて) ④情報リテラシーと情報倫理(守秘義務契約)を学んでいく

授業回	テスト・プレゼン	データサイエンスV 主な講義	Tableau演習・プレゼン準備
第1回		オリエンテーション 連携先からのミッション提示(オンライン) 連携先からのデータ確認 / 誓約書作成	tableau応用⑤ 「データの整形と複数データの扱い方②」
第2回	連携先のデータ 特性に応じて レクチャー 小テスト	分析に必要な知識とテクニック基礎①	tableau応用⑥「計算の応用」 tableau応用⑦「表計算の応用」 プレゼン準備 データ接続、分析下準備
第3回		分析に必要な知識とテクニック基礎②	プレゼン準備 個人ワーク①
第4回		分析に必要な知識とテクニック基礎③	プレゼン準備 個人ワーク②
第5回		分析に必要な知識とテクニック基礎④	tableau応用⑧「ストーリー」 プレゼン準備 個人ワーク③
第6回	プレゼン予選会	プレゼン予選大会	
第7回	代表者プレゼン	代表者によるプレゼン ※産学連携先も出席し、質疑応答とプレゼンフィードバック DSVのふり返し	

15

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)
教育の質保証のためのFDと学修支援向上のための研修会



教育の質保証のために教員チューター合同の年2回のFD(研修会)の他、授業開講期間は週1回のFD(講師会)を年21回実施している。前週の授業内容や教材、学修支援を振り返り、継続的な改善・向上を図ると同時に、当該週の授業運営方法や教材について意見交換を行い、ブラッシュアップを図り準備を進める。またチューター、SAの教育と育成のために研修会や勉強会を実施し、学修支援の質の向上を図っている。

1年間スケジュール

教員・チューター合同

- 教員、チューター合同の全体FD(研修会) 3月・11月
- 新任教員、新人チューターのFD(研修会) 3月(4日間×2H) ※新任のみ

教員

- 教員のFD(講師会) 授業開講期間の毎週月曜日 年間21回
- 教員のtableauスキル向上のためのFD(研修会) 10月末～11月頭(2日間×2H)

チューター

- チューターのtableauスキル向上のためのFD(研修会) 10月末～11月頭(2日間×2H)

Student Assistant

- 授業開始前 研修会 3月・11月
- 産学連携 勉強会 6月・11月

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)
補完的な教育の実施について(正課)



テスト対策の補習/プレゼン対策の学修相談実施

授業前後の日常的な学修支援とは別に、テスト対策としての補習とプレゼンにむけた学修相談会を定期的の実施している。いずれも対面、オンラインの受講形式を選択でき、受講生が反復学習やプレゼン準備の学修支援ができる仕組みを構築している(コアチューターが企画運営、教員も協力)

データサイエンス科目では正課・正課外でもTeamsを多様なコミュニケーションツールとしてフル活用しています



【令和3年度実績】※対面、オンライン

- ◆テスト対策補習(DS I～VI)
補習講座数:25講座 ※アラカルト方式
時間:20分～30分
トータル開催数:約100回
延べ参加学生数:699名

- ◆産学連携学修相談
DSV:個人で参加 118名
DSVI:グループで参加 15チーム

補習用Teamsの運用

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)
補完的な教育の実施について(正課外①)



資格取得対策講座の定期開講

春休みと夏休みを活用し、授業で学んだことを資格取得につなげていく正課外の科目「データサイエンス科目特別プログラム」を令和3年度3月から開始した。春夏の年2回の開催を継続していく。

NO	名称	対象の資格・試験	令和3年度春 受講者	令和4年度夏 受講者	令和4年度夏 合格率目標
1	Tableau Desktop Specialist 対策講座	Tableau Desktop Specialist	8	18	50%
2	MOS Excel 一般レベル 対策講座	マイクロソフト オフィス スペシャリスト Excel 一般レベル	72	93	60%
3	統計検定4級 対策講座	統計検定 4級	35	44	50%
4	MOS Excel 上級レベル 対策講座	マイクロソフト オフィス スペシャリスト Excel 上級レベル	2023年度 開講予定		
5	統計検定3級 対策講座	統計検定 3級			
受講者合計			115	155	56%

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)
補完的な教育の実施について(正課外②)



学外コンテストへの参加支援

学生の学外コンテストへの参加支援も行っている。令和3年度は公共政策学科の2年生の有志学生が三鷹市の「学生によるミタカ・ミライ研究アワード2021」へ参加し、「優秀賞・市長賞」を獲得した。




三鷹市 河村市長

データサイエンス教育のマネジメント体制他

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)

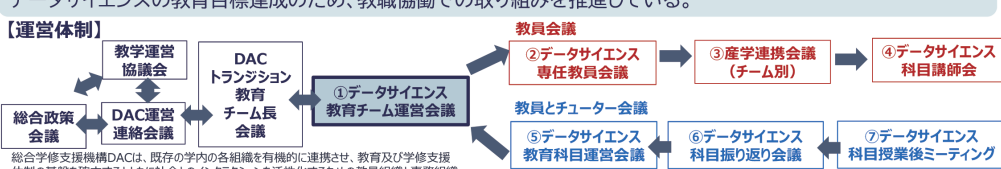
データサイエンス教育のマネジメント体制



スガモで育む日本の未来。

データサイエンス教育のマネジメント体制は以下の通り。
データサイエンスの教育目標達成のため、教職協働での取り組みを推進している。

【運営体制】



総合学修支援機構DACは、既存の学内の各組織を有機的に連携させ、教育及び学修支援体制の基盤を確立するとともに社会とのインタラクションを活性化するための教員組織と事務組織を統合する第三の組織である。

会議名	審議・検討・連絡事項	実施時期	出席者
① データサイエンス教育チーム運営会議	DS科目の教育内容と習熟度把握、学科連携の具体的運営	週1～2回	DSチーム専任教員3名
② データサイエンス担当専任会議	DS科目の教育内容と習熟度把握	毎週木曜日 16:00～	専任教員6名
③ 産学連携ミーティング (チーム別)	DS科目(2年)で実施する産学連携に関する教育内容の検討と連携先との定期ミーティング	随時 ※1週に1回以上	専任教員が中心になって開催
④ データサイエンス科目講師会	DS科目の運営、学修状況の確認と対応周知 ※FD中心(教育内容、方法の改善を図るための研修)	毎週月曜 1年18:00～2年18:30～	専任・非常勤 コアチューター
⑤ データサイエンス教育科目運営会議	DS科目の授業運営・学修支援	毎週月曜 10:00～	専任3名・コアチューター
⑥ データサイエンス科目振り返り会議	DS科目の運営、学修状況の確認と対応の検討	毎週木・金 授業後15:00～	専任・コア・クラスチューター
⑦ データサイエンスクラス別ミーティング	各クラスの運営についての振り返りと対応確認	各クラス 授業終了後	教員・チューター

※上記以外にもQTごとに学生アンケートをもとに専任教員とコアチューター中心に振り返りMTを実施

21

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベルプラス)
学修支援システムの構築と学修成果の可視化



受講生の履修管理、出欠管理、課題提出、小テスト・テスト、振り返り、授業アンケートなどをeポートフォリオとTeams上で一括して管理している。これらのシステムを活用し、教員とチューターが受講生の理解度・習熟度をタイムリーに且つ的確に把握することにより、それぞれの受講生に応じた適切な指導が可能となっている。

eポートフォリオでの個別学生の課題提出状況把握

学生アンケートでの学修時間の把握

教員のTeamsのチームサイトでの全学生の出欠状況把握

学生アンケートでの授業テーマごとの理解度把握と前年との比較

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)



現状と今後の課題について

- ✓ 引き続き、授業内容、教授法、教材の改善を図るとともに、学生の理解度と社会的ニーズの双方を踏まえた上での難易度についての検証と見直し
- ✓ 今後のキャリア支援に向けて、企業が求める能力・資質と本プログラムが実施する内容が一致するかについての適切な評価
- ✓ 一部の意欲の低い学生への対応と、学修支援から自立学修へと誘導する支援方法の検討
- ✓ 授業外の学修支援に多くの時間を割いているため、授業内容・学修支援の適切性の向上
- ✓ 修了学生の進路等活躍状況を踏まえて、BIツール「tableau」を導入の評価と検証
- ✓ 新学習指導要領世代の入学を見越してのカリキュラムの内容・水準の見直し
- ✓ 検定・資格取得等外部指標による学修成果の可視化の促進
- ✓ 教育と学修支援の質の維持向上のための教員とチューターの採用

(3) クロスディシプリン (学融合) 教育



学長補佐・教務部長
小林 伸二

クロスディシプリン教育として、「学融合ゼミナールⅠ」が令和4年度から全2年生を対象として始まりました。文部科学省の「知識集約型社会を支える人材育成事業」によると、「学術研究や産業社会においては、分野を超えた専門知の組合せが必要とされる時代であり、一般教育・共通教育においても従来の学部・研究科等の組織の枠を超えた幅広い分野からなる文理横断的な Society5.0 時代等に向けて、狭い範囲の専門分野の学修にとどまるのではなく、今後の社会や学術の新たな変化や展開に対して柔軟に対応しうる能力を有する幅広い教養と深い専門性を持った人材育成を実現すること」とあります。本事業においては、地域戦略人材の育成に向けて、第Ⅰ類科目において学際的学修を実施した後に、学融合ゼミナールにおいて、学融合的学修を実施します。それにより、複数のディシプリンを、融合・統合する資質・能力を身に着けた上で、第Ⅲ類科目アントレプレナーシップ養成教育を履修するという学びのプロセスを設計しています。

そして、本学のクロスディシプリン教育については、「自らの専門分野の学問領域と他学科の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑で多様な現代社会の課題に応えることができる」ことを目標とし、最終的には「多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダーの育成」を目指しています。知識の繋がりを見出し、融合させる人材となり、社会では、自分の専門性に根ざし自らの経験や知識を、スキルに基づいて生み出す人材になることを期待しています。

教育プログラムの開発の視点として、学融合ゼミナールにおいては、領域の統合を、社会共生学部・地域創生学部・表現学部の3学部からなる「社会創造系学部群」と、心理社会学部・文学部・仏教学部の3学部からなる「探究実証系学部群」の2領域の統合とし、それぞれの学群の学科ごとの組み合わせで教育活動を推進することとしています。

探究実証系学部群は、学科専門領域と社会創造系学科の地域学、社会創造系学部群は、学科専門領域と探究実証系学科の人文科学というように教育内容を組み合わせています。異なる専攻の学生が1つの授業に集まるのではなく、異なる専攻の教員が交互に授業を行うこととしています。工夫としては、5つの工夫を設けています。第1に、各学科にⅡ類コーディネーターという役職者を設置し、授業担当者の他に同席していただきます。そして、Ⅱ類コーディネーターとクロスディシプリン教育チームによる円滑な授業運営支援と学修支援体制を設けています。各学科の現状報告、意見交換、プレゼンテーションルーブリック、アカデミック・エッセイルーブリックの提示等を実施しました。第2に、全学科において同じ曜日・時限に開講するようにしました。それにより、各学科の教員が授業を行うことを円滑にすることとしています。第3に、プレゼンテーションやディスカッションの機会を設けるように依頼し、学生の専門領域の学びから多面的・重層的な思考に向けた教育方法を実施し、複眼的な視野を養うことができる取組みとするようにしています。第4に、卒業論文テーマについて多様な視点を修得するためアカデミック・エッセーの提出を義務付けています。アカデミック・エッセーの作成により、卒業

論文のテーマにおいて多様な視点を修得する等の効果が見込まれます。第5に、「学融合ゼミナールⅠ」と「学融合ゼミナールⅡ」の学びの連続と専門科目との関係性に対する設計です。「学融合ゼミナールⅠ」は2年次に実施し、「学融合ゼミナールⅡ」は3年次に実施するため、各学科の第Ⅱ類科目である専門科目においては、基礎的学修からより専門的な学修に進んでいきます。

2年次は領域横断的学修とし、3年次は、地域戦略人材を育成するための学修としています。「学融合ゼミナールⅡ」は、探究実証系学部群においては、学科専門領域と現代社会、社会創造系学部群においては、学科専門領域と人間学をテーマとします。

最後に、クロスディシプリン教育ラボラトリーにおける研究開発として、学融合教育推進のための研究活動も実施しています。持続可能なプログラムとして、教育内容・教育方法・学修効果等を検証する必要があります。『大正大学クロスディシプリン教育紀要』として、令和4年度「学融合ゼミナールⅠ」の開講を受けた「研究開発」の現状報告、本学のクロスディシプリン教育の理念と方法、各学科の融合成果報告等の内容を刊行したいと考えています。

各学科の「学融合ゼミナールⅠ」のテーマ・目的

学科	テーマ	授業の目的
仏教学科	学際的学修から学融合学修 学科の研究領域「縦の学び」と学科を超えた領域横断的「横の学び」	複数のディシプリン（分野・領域）の連携や交流、融合により、異なる分野の専門知を横断的にとらえ、新たな知として形にする力の育成を目指し、クロスディシプリン（複数の分野・領域の連携と融合）の実現を目的とする。 「仏教学の融合」では、多面的な性質をもつ地域の課題解決のため、仏教学における地域との結びつきの視点から、各宗派や仏教芸能の専門分野を通じて、多面的・重層的な思考を修得する。
公共政策学科	学際的学修から学融合学修 学科の研究領域「縦の学び」と学科を超えた領域横断的「横の学び」	公共政策学科の「学融合」では、人文学の研究の視点・方法を学ぶことによって、各自が今後研究の対象とする地域の「公共」に関する課題解決のために必要となる多面的・重層的な思考を修得する。
社会福祉学科	貧困や多文化共生の現実をどう考え、貧困のない社会、多文化共生をどう構想するか	本授業では、貧困や多文化共生をテーマとし、社会福祉学と日本語教育学・日本文学の複合的な視点から、これらの社会的な課題を解決するための多面的・重層的な思考を修得する。 そのためのテキストとして、貧困や社会福祉に関わる小説（日本文学）やドキュメンタリーを出来る限り取り上げる。
人間科学科	社会学×公共政策の視点からみる地域	現代日本における地域で生じている諸事象および諸課題を学融合的な観点から理解していきます。各回の講義は社会学を専門とする人間科学科の教員と公共政策学科の教員が担当します。社会学の観点からは、地域をみるうえで重要なキーワードを実際の地域の事例とともに学びます。公共政策の観点からは、観光による地域活性化と現代日本における地域の課題（医療政策・地方自治・人口の変化）について学んでいきます。
臨床心理学科	学際的学修から学融合学修 学科の研究領域「縦の学び」と学科を超えた領域横断的「横の学び」	「地域創生学と臨床心理学の融合」では、多面的な性質をもつ地域の課題解決のため、地域創生学ならびに臨床心理学それぞれの立場からの地域支援の理論と実践の学修を通じて、多面的・重層的な思考を修得する。 また、意見文の執筆を通して、論理的な文章表現やアカデミックライティングを学ぶ。
人文学科	人文学のダイナミズムと公共政策の視点	自らの専門分野の学問領域と他学科の学問領域を統合的に学び、多面的・多重的な思考をすることで、複雑で多様な地域の課題に応えることができる人材の育成を目的とする。 人文学がもとより備えている学際性を活かし、公共政策の研究方法を多彩な方向から導入することによって、さらに広いパースペクティブを獲得する。
日本文学科	貧困や多文化共生の現実をどう考え、貧困のない社会、多文化共生社会をどう構想するか	本授業では、貧困や多文化共生をテーマとし、日本語教育と社会福祉の複合的な視点から、これらの地域の課題を解決するための多面的・重層的な思考を修得する。
歴史学科	学際的学修から学融合学修 学科の研究領域「縦の学び」と学科を超えた領域横断的「横の学び」	学科の専門領域では、歴史学における地域の「記録」（データ）という視点から、日本史、東洋史、文化財・考古学の各分野を関連させ、対象とする地域において、歴史的に生成された豊かな地域性や多様な課題についての理解を深める。また横断的領域については、現在の地域社会における観光・環境・災害などの実態とともに、それぞれの分野で直面している課題を認識する。それらを通して、それぞれの専門知を「融合」させた多面的・重層的な思考を修得し、地域が直面する課題に対して、どのように歴史学の成果を還元し、より良い地域社会の実現に貢献していくかを考える。
地域創生学科	学際的学修から学融合学修 学科の研究領域「縦の学び」と学科を超えた領域横断的「横の学び」	「地域創生学の融合」では、多面的な性質をもつ地域の課題解決ため、地域創生における人文科学の「人間」の視点から、歴史学と臨床心理学を中心とした専門分野を通じて、多面的・重層的な思考を修得する。
表現文化学科	学科の研究領域「縦の学び」と学科を超えた領域横断的「横の学び」	複数のディシプリン（分野・領域）の連携や交流、融合により、異なる分野の専門知を横断的にとらえ、新たな知として形にする力の育成を目指し、クロスディシプリン（複数の分野・領域の連携と融合）の実現を目的とする。 「街文化の融合」では、街から生まれる文化を多角的に分析する。著名人と街の関わりという視点から街と文化を表出し、多様な方面から事象を捉える方法を習得する。

クロスディシプリン教育の意義

クロスディシプリン教育の
定義と目標

クロスディシプリン教育

「自らの専門分野の学問領域と他学科の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑で多様な現代社会の課題に応えることができる」

目標

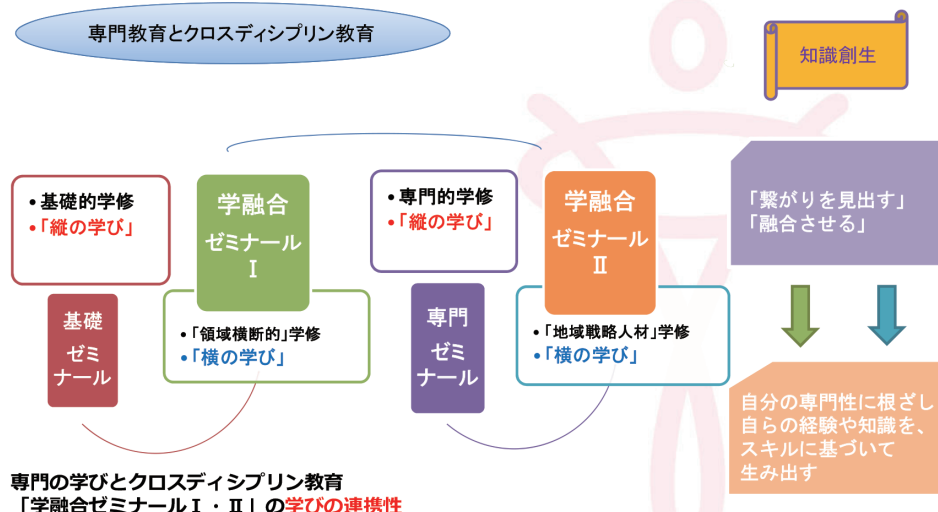
「多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダーの育成」

1



クロスディシプリン教育の学部における位置付け

専門教育とクロスディシプリン教育

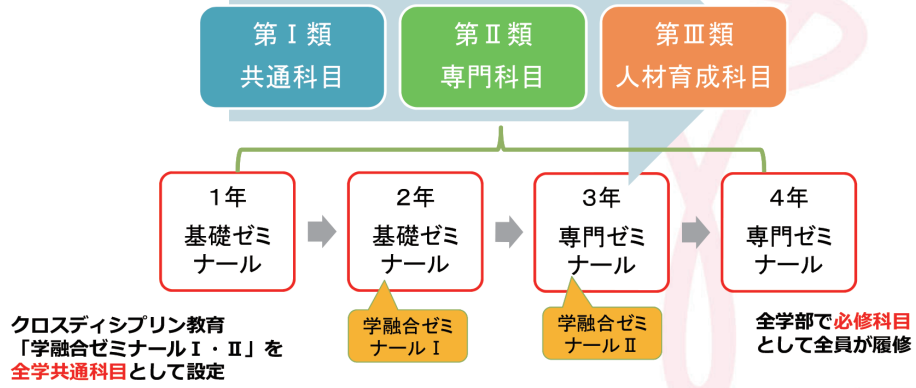


2



クロスディシプリン教育の参加度

分野横断的な性質を持つ学部以外の学生も全員参加



クロスディシプリン教育・学科cross

学科の専門領域をcrossすることで学部を超えた専門の学びを可能としている

【開講形態】

- ・ 多人数の講義型クラス
- ・ 各学科1クラス
- ・ ICTを活用したアクティブラーニングの実施

歴史学科	cross	地域創生学科
人文学科	cross	公共政策学科
日本文学科	cross	社会福祉学科
仏教学科	cross	表現文化学科
臨床心理学科	cross	地域創生学科
人間科学科	cross	公共政策学科

【運営】

各学科Ⅱ類コーディネーターによる円滑な運営と学修支援体制



学融合ゼミナール I 2年次

●定義

学科カリキュラムの履修「縦の学び」と学科を超えた領域横断的「横の学び」による専門教育

●目的

自専攻とは異なる専門領域の学びから多面的・重層的な思考を獲得し、複眼的な視野を養う。

5



●評価

卒業論文テーマについて多様な視点を修得するために、アカデミック・エッセー(1600字)を提出

●運営

各学科にⅡ類コーディネーターを設置し、「学融合ゼミナール」の円滑な運営と学修支援体制の構築

6



●開講内容

地域学cross 人文科学cross

■探究実証系学部群

学融合ゼミナールⅠ⇒学科専門領域と地域学

- ・ cross社会創造系学科の地域学

■社会創造系学部群

学融合ゼミナールⅠ⇒学科専門領域と人文科学

- ・ cross探究実証系学科の人文科学



学融合ゼミナールⅡ 3年次

●定義

複雑で多様な現代社会に応えることのできる
「地域戦略人材」教育

●目的

複数のディシプリン(分野、領域)の連携と交流、
相互理解を通して現代社会の課題を解決する力を養う



●評価

卒業論文テーマについて多様な視点を修得のため、
プレゼンテーション、アカデミック・エッセー(1600字)を実施

●運営

各学科にⅡ類コーディネーターを設置し、
「学融合ゼミナール」の円滑な運営と学修支援体制の構築

9



●開講内容

現代社会cross 人間学cross

■探究実証系学部群

学融合ゼミナールⅡ ⇒ 学科専門領域と現代社会

- ・ cross社会創造系学科の現代社会

■社会創造系学部群

学融合ゼミナールⅡ ⇒ 学科専門領域と人間学

- ・ cross探究実証系学科の人間学

10



●学融合ゼミナールⅡ 学科cross案

学融合ゼミナールⅠと同様のcross

歴史学科	cross	地域創生学科
人文学科	cross	公共政策学科
日本文学科	cross	社会福祉学科
仏教学科	cross	表現文化学科
臨床心理学科	cross	地域創生学科
人間科学科	cross	公共政策学科

学融合ゼミナールⅠ・Ⅱの連続性を重視

11



●Ⅱ 類コーディネーター

コーディネータ			コーディネータ		
歴史学科	三浦龍昭	cross	地域創生学科	大橋重子	
人文学科	天木勇樹	cross	公共政策学科	本田裕子	
日本文学科	中川祐治	cross	社会福祉学科	松本一郎	
仏教学科	長澤昌幸	cross	表現文化学科	ヨシムラヒロム	
臨床心理学科	石川亮太郎	cross	地域創生学科	大橋重子	
人間科学科	澤口恵一	cross	公共政策学科	本田裕子	

12



学融合プログラム 実施方法

【実施方法】 学科複数教員cross他学科教員（ゲスト講師） 学科パートcross横断パート

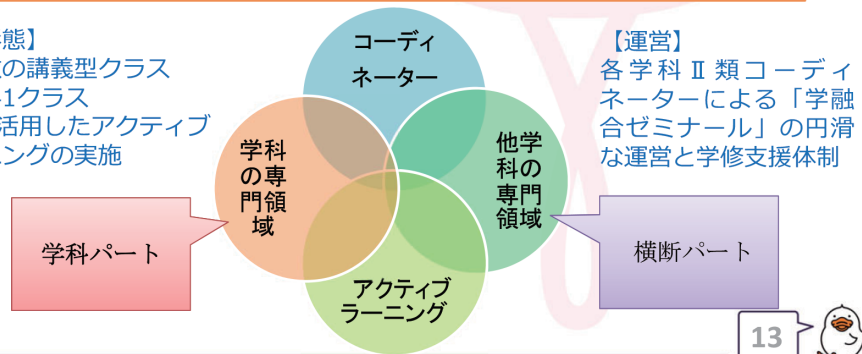
- 【実施内容】 ●学融合ゼミナールⅠ （2年次春学期）
 探究実証系学部群 ⇒ 学科専門領域と地域学
 社会創造系学部群 ⇒ 学科専門領域と人文科学
 ●学融合ゼミナールⅡ （3年次春学期）
 探究実証系学部群 ⇒ 学科専門領域と現代社会
 社会創造系学部群 ⇒ 学科専門領域と人間学

【開講形態】

- ・ 多人数の講義型クラス
- ・ 各学科1クラス
- ・ ICTを活用したアクティブラーニングの実施

【運営】

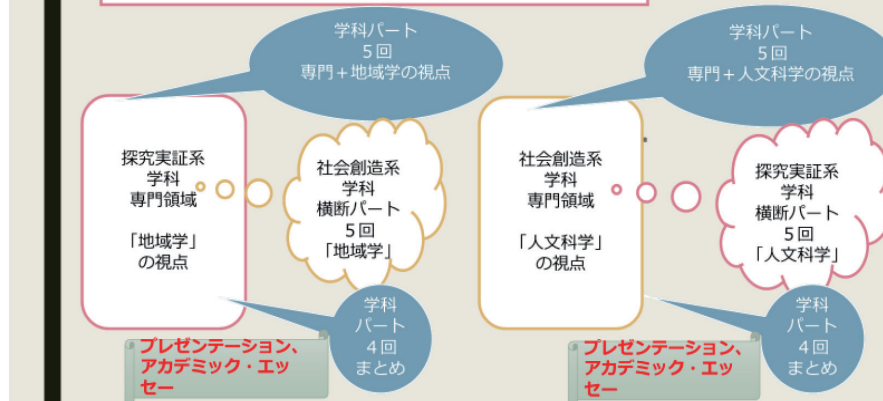
各学科Ⅱ類コーディネーターによる「学融合ゼミナール」の円滑な運営と学修支援体制



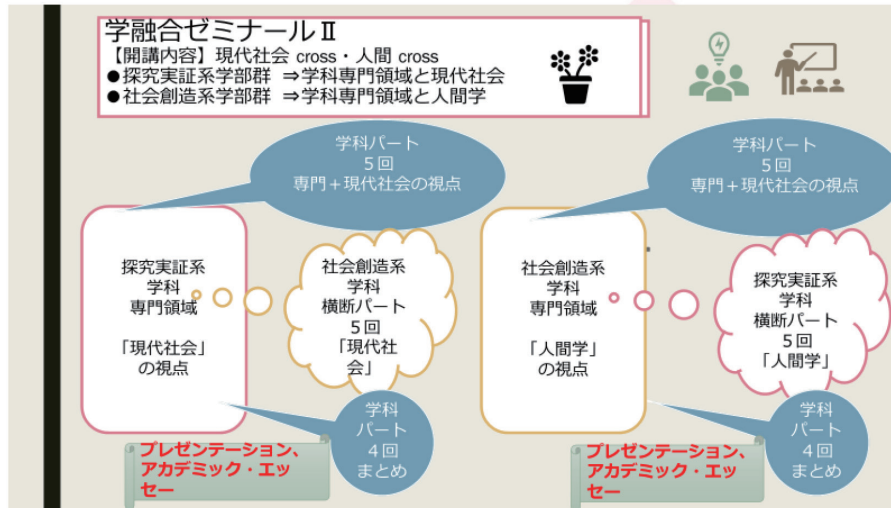
学融合プログラム 学融合ゼミナールⅠ 開講内容

学融合ゼミナールⅠ

- 【開講内容】 地域学 cross 人文科学 cross
 ●探究実証系学部群 ⇒ 学科専門領域と地域学
 ●社会創造系学部群 ⇒ 学科専門領域と人文科学



学融合プログラム 学融合ゼミナールⅡ 開講内容



15



学融合ゼミナールⅠ 時間割

時間割

水曜日2限 歴史学科 (160) 地域創生学科 (100×2=200) 人文学科 (65)
 公共政策学科 (130×2=260) 日本文学科 (70) 社会福祉学科 (65×2=130) 885
 水曜日3限 仏教学科 (100) 表現文化学科 (205×2=410) 臨床心理学科 (110)
 人間科学科 (120) 740

水曜日2限

- 歴史・地域創生・人文
- 公共政策・日本文学
- 社会福祉

水曜日3限

- 仏教・表現文化
- 臨床心理
- 人間科学

16



学融合ゼミナールⅡ 時間割

水曜日2限 仏教学科 (100) 表現文化学科 (205×2=410) 臨床心理学科 (110)
人間科学科 (120) 740
水曜日3限 歴史学科 (160) 地域創生学科 (100×2=200) 人文学科 (65)
公共政策学科 (130×2=260) 日本文学科 (70) 社会福祉学科 (65×2=130) 885

水曜日2限

- ・ 仏教・表現文化
- ・ 臨床心理
- ・ 人間科学

水曜日3限

- ・ 歴史・地域創生・人文
- ・ 公共政策・日本文学
- ・ 社会福祉

17



【開講事例】 歴史学科cross地域創生学科

歴史
地域学
現代社会

●学融合ゼミナールⅠ 歴史学と地域 〔学科パート〕

- 第1回 歴史における地域
- 第2回 地域の日本史—東日本
- 第3回 地域の日本史—西日本
- 第4回 地域の東洋史—中国
- 第5回 地域の文化財・考古—関東
〔横断パート〕
- 第6回 地域の政治—組織と運営
- 第7回 地域の政治—公共と支援
- 第8回 地域の経済—観光と交流
- 第9回 地域の経済—流通とサービス
- 第10回 地域のきまり—伝統と社会
〔学科パート〕
- 第11回 歴史と地域経済
- 第12回 歴史と伝統社会
- 第13回 アカデミック・エッセーに向けて
- 第14回 まとめ—学融合・プレゼンテーション

歴史
学科
担当

地域
創生
学科
担当

歴史
学科
担当

●学融合ゼミナールⅡ 歴史学と現代社会 〔学科パート〕

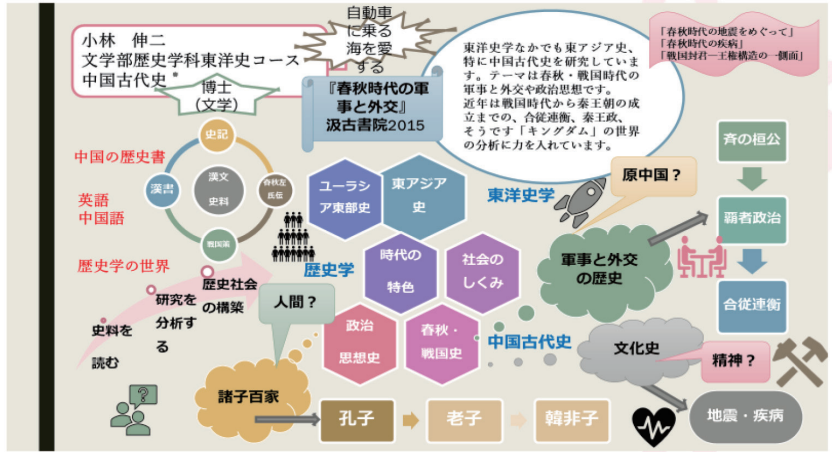
- 第1回 歴史における社会
- 第2回 社会の日本史1
- 第3回 社会の日本史2
- 第4回 社会の東洋史
- 第5回 社会の文化財・考古
〔横断パート〕
- 第6回 社会と都市
- 第7回 社会と人口
- 第8回 社会と家族
- 第9回 社会と技術
- 第10回 社会と民族
〔学科パート〕
- 第11回 歴史から見る都市と人口
- 第12回 歴史から見る国家と民族
- 第13回 アカデミック・エッセーに向けて
- 第14回 まとめ—学融合・プレゼンテーション



18



学融合ゼミナール用・教員自己紹介スライド (サンプル)



研究分野の周知

19

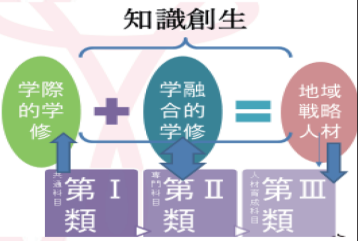
クロスディシプリン教育ラボ

研究開発

- ・『大正大学クロスディシプリン教育紀要』（仮題）の刊行
- ⇒ 令和4年度「学融合ゼミナールⅠ」の開講を受けた「研究開発」の現状報告
- ⇒ 「本学のクロスディシプリン教育の理念と方法」（クロスディシプリン教育チーム）
- ⇒ 「学科クロスの報告」（複数学科に依頼）
- ・ 公表予定=令和5年5月

クロスディシプリン教育
「自らの専門分野の学問領域と他学科の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑で多様な現代社会の課題に応えることができる」

目標
「多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダーの育成」



20

(4)アントレプレナーシップ育成教育



広報部長
高橋 慈海

第Ⅲ類科目アントレプレナーシップ育成教育についてご報告いたします。第Ⅰ類共通教育科目においては、チュートリアル教育やデータサイエンス教育等を通して、社会に必要な基本的な学習スキルを学びますが、第Ⅲ類科目では後期共通教育として、社会で活躍するために必要な能力であるアントレプレナーシップ等を身につけます。学生は、第Ⅱ類科目として、各学問分野の専門科目を学びつつ、アントレプレナーシップ育成教育等を通して、幅広い文理横断の知識や創造力、変化に対応する力、新しいものに挑戦する力、異なる分野のネットワークを繋ぐためのコミュニケーション能力を身につけます。そして、Society5.0社会で活躍する人材になることを目指しています。

令和3年度においては、アントレプレナーシップ教育のプレ講座として、「Pepperを活用しよう！プロジェクト」、「ショートドラマ制作プロジェクト」、「食のYou tuberになろう！プロジェクト」、「AR謎解きプロジェクト」等を行いました。これらの成果を踏まえて、令和4年度では、「AI謎解きイベントを活用した地域活性化プロジェクト」、「商店街×地域実践・地域フェアプロジェクト」、「就活チャレンジ」、「インターンシップ（ビジネス実践）」というプロジェクトを実施し、プロジェクト研究として単位も認定しています。

そして、令和4年度から「超スマート社会論」等の基礎科目4科目をオンデマンドにて開講しました。この4科目中の2科目4単位が、全学生の選択必修科目となります。第Ⅲ類科目は卒業要件24単位と位置づけられており、残りの20単位を令和5年度から履修モデルに沿って選択履修していきます。学生は、2年次から基礎科目を履修し、3年次からはスキル科目や実践科目から構成される授業科目を各コースのモデルに従って履修していくことになります。

各コースは、起業人材（アントレプレナーコース）、企業内リーダーシップ人材（イントレプレナーコース）、地域戦略人材（公務員コース）の3つのコースとし、それぞれ人材像が異なります。アントレプレナーコースについては、起業に向けて何か新しい価値を創造することに取り組んでいきたい人材向けのコース、イントレプレナーコースについては、企業内リーダーシップ人材として、企業において新しいことへのチャレンジを積極的にしていきたいという人材向けのコース、そして公務員コースというのは、地域創生の戦略思考とビジネスマインドを持った公務員を養成するコースとしています。

3つのコースについては、いずれも、知識と実践の融合により取得する科目とし、演習を中心とした教育方法としています。実践的な学びを通して、新しいことにチャレンジするアントレプレナーシップを培っていくプログラムとしています。そして、各コースで共通して育成する11の資質と能力は以下の通りです。

①汎用的知識

Society5.0社会で活躍する、活動するにあたって必要となる基礎知識を身につけます。

②データドリブン

数値に基づいて、また根拠に基づいてしっかり価値を創造していく能力をさらに発展させる形で力をつけます。自ら明確な根拠に基づき、自ら意思決定を行い、判断、アクションができる力をつけていきます。

③人的ネットワーク構築力

社会では様々なコミュニティにおいて、良質な人間関係を構築していく力が必要となります。5年後、10年後に、仕事の領域を広げていく際、様々な人とつながり、協力し助け合える関係を構築する力となります。

④強いリーダーシップとマネジメント能力

社会に出ると、様々な立場の方と一緒に協働していくことになります。その中でお互いに多様性を理解しながら、合意形成して目標に向かってしっかり前進していくそんな能力が求められます。

⑤未来をイメージできる力

成し遂げたい目標をしっかり定めて具体化し、行動計画を立てて実行する力です。アントレプレナーシップ育成教育を通して、未来をイメージしていく力を高めていくことを目指しています。

⑥創造性とイノベーション

既存の枠組みに捕らわれず、新しい価値を生み出す力や、それをつけていくためのトレーニングを実施します。

⑦社会の課題解決力

解決したい社会課題を自ら解決していく力、もしくは解決しようとする力です。例えば、就職活動をしていくと、あなたはこの会社に入って何を成し遂げたいのかということ聞かれることがあります。その際に、この会社でこのような社会課題を解決していきたい、こんな問題に取り組んでみたい等の説得力ある回答を自身の言葉でしていく必要があります。授業を通じて、解決したい社会課題について、自身でしっかり模索していき、そしてそれを解決していく力を培っていきます。

⑧探究心と意思決定能力

物事の本質を見抜き、問題の根源を突きとめ、その上で判断や意思決定をする能力です。この問題のボトルネックは何なんだろうとか、この事柄の本質は何なんだろうということをしっかり見抜く力を付け、その上で判断や意思決定をしていく力を身につけてほしいと考えています。

⑨ポジティブシンキングとチャレンジ精神

どんな場面においてもリスクを恐れず、果敢に挑戦する、挑む力です。リスクを想定し回避することも考えながら、一步を踏み出せる力というのが非常に重要になってきます。

⑩機会の追求

限られた資源を最大限に生かし、チャンスを追って挑戦する力です。社会では様々な制限や障害があり、おかれている状況でどのように目標達成をしていくのかとか、最高のアウトプットをこのメンバーでどうやって出していけばいいのかなど、困難に打ち勝ちながらチャンスをものにしていける力を身につけます。

⑪コミットメント

どんな困難があっても、目標に向けて最後まで諦めずにやり遂げる力です。

これらの能力・資質を学生が身につけられるように、アントレプレナーシップ育成教育プログラムを展開していくことになります。そして、各コースについて、次の通り説明いたします。

(1) 起業人材 (アントレプレナーコース)

～地域に新しい価値を創造するビジネスを起業する人材～

アントレプレナーコースは、地域に新しい価値を創出する起業にチャレンジを目指したい学生を対象としています。ただし、必ずしも起業を目指す学生のみコースとはしていません。社会の課題を解決し、貢献するための一つ的手段として、起業という方法もあるということはこのコースを通して認識して欲しいと考えています。新しいビジネスを創造する方法、アイデアを出す方法等の起業に必要なスキルを学ぶことは、今後のキャリアに有益なものとなります。また、自分の強みや課題を把握した上で、将来の夢や目標を明確化し、短期的なビジョンだけでなく、長期的なビジョンを持ちたいと考える学生を対象としています。

このアントレプレナーコースでは、前述した11の資質・能力を身につけることに加えて、イノベーション思考と実行力がつくと考えています。時代の変化を先取りして、新たなビジネスや新しい価値をどのように見つけていくか、顧客価値を発見し、創り出していくかという思考と実行力を養うことができます。

また、アントレプレナーコースのポイントは実践科目のワークショップです。ワークショップは会社を運営している方や団体を運営している方が担当し、学生は1年間または1.5年間の長期にわたって教員とともに起業に関係する必要な様々な知識や手法を吸収しながら、実際の現場での実践をして身につけていきます。

履修にあたっては、将来のキャリアを意識して、そのために必要な学びは何か、どのような能力を身に付ける必要があるのか、をよく考えて計画を立てるようにワークショップに結びつく履修モデルを示しています。

スキル科目は、コミュニケーション、ロジカルシンキング、ファシリテーション、プレゼンテーション、マネジメント、財務会計の基礎、ファイナンスの基礎、マーケティングの基礎、情報表現技術、言語表現技術、キャリアデザインA・Bの12科目になります。

ワークショップは、実践することで身につけていきます。学生は失敗を恐れずチャレンジすることを期待しています。社会に出ると、様々なことに取り組んでいかなければなりません、そこで失敗はできません。学生時代に新たなことに取り組むことは、たとえ成果が出なかったとしてもそれが糧になります。そして、失敗したとしてもその反省を次に生かすということができ、貴重な経験となります。

(2) 企業内リーダーシップ人材 (イントレプレナーコース)

～地域企業や組織内においてイノベーションによって活性化と業績向上に貢献する人材～

イントレプレナーコースは、起業家精神を養い、卒業後にはビジネスリーダーとして社会に貢献しようと志す学生を対象としています。そして、自分のためだけでなく、社会のため、世の中の人々のために貢献できる人、社会貢献ができるような人材になりたいと思う人材を求めています。

そのため、自分自身のことをしっかり自己分析し、長所や短所等を把握して、将来の夢や目標を明確にして、中長期的な10年後、20年後、30年後のビジョンを持ちたいと考えている学生を対象としています。そして、知的好奇心が旺盛であり、主体的に学習計画を立てて、様々な課題に積極的に取り組む意欲があり、一定の基礎学力を有していることが条件になります。

スキル科目は、コミュニケーション、ロジカルシンキング、プレゼンテーション、ファシリテーション、リーダーシップ、マーケティングの基礎、プログラミングの基礎、データ分析法、ビジネス英語、キャリアデザインA・Bを設けています。

ビジネスを円滑に進め成果を出すために必要なスキルであるコミュニケーション、ロジカルシンキング、プレゼンテーション、ファシリテーションなどでは具体的な手法を学ぶと共にワークによる実践により身につけます。

リーダーシップは、社会課題に挑戦するリーダー像をイメージしたプログラムで、グローバルな視点を含めた

リーダーシップの開発を学んでいきます。そして、マーケティングの基礎、データ分析法などでは、現代ビジネスに必須であるデータに基づく課題解決に必要な能力を体験的に学びます。

実践科目は、業界・業種・分野等の各ワークショップやインターンシップを設けています。ワークショップは、業界に共通する課題解決型営業、財務分析、組織での多様性促進、人材育成をテーマとするもの、業界別ではメディア業界、金融・保険業界、サービス業界、そしてコンサルティングやブランディングをテーマとするものを設けています。職場実践であるインターンシップにも参画しながら、学生のキャリア志向によりこれらのワークショップやインターンシップを組み合わせて履修することで、ビジネスリーダーとして活躍できる人材を育成していきます。

(3) 地域戦略人材（公務員コース）

～地域創生戦略志向とビジネスマインドを持つ公務員を目指す～

地域戦略人材とは、多面的な性質を持つ地域の課題、様々な地域課題に対して異なる専門分野の多様な得意分野を持っている人達、多様な人材を統合し集めて、それらを調整する新しいリーダーを意味します。様々な得意分野を持つ人々を束ねて、課題解決に導くことができる。そして、まとめあげていくための発想を持つというマインドのある人材を作りたいと考えています。

公務員については、ただ単に決められた事務仕事を正確に間違いなくこなしていくだけではなく、地域の行政を担う役割があるため、地域を活性化するための様々な施策や新たな創発をしていく力が求められています。様々な人々を巻き込み、新しい課題に取り組む人というアントレプレナーシップをもった地域戦略人材のマインドと、公務員に求められている地域創生戦略思考やビジネスマインドについては共通するところがあります。決められたことをただ守るだけではなく、新たなことを創発していくビジネスマインドを持った公務員になることを目的としたのが公務員コースです。

そして、公務員というフィールドで活躍してもらうために、アントレプレナーシップを育てる基礎科目の上に、スキル科目や実践科目という部分で、実践的な学びをしていきます。実践科目では、自治体の方にお話を聞く機会等も設けます。

公務員コースではスキル科目を18単位とし、全体で30単位を取得するプログラムとし、公務員に必要な基本的な学びに加えて、地域創生戦略思考とビジネスマインドが身につく内容になっています。

地域創生戦略という新しく地域を活性化するための様々な取り組みを創発する力や、実際にそれらを考えていくことがこのプログラムの中に含まれています。スキル科目の授業については、コミュニケーション、ロジカルシンキング、ファシリテーション、プレゼンテーション、マネジメント、リーダーシップ、財務会計基礎、キャリア探究A・Bを設けています。実践科目におけるワークショップについては、行政経験や自治体職員経験のある実務家を交えた自治体研究等の実践的ワークを行います。あわせて学修のペースメイクや公務員として活躍するモチベーションの向上も意図しています。

アントレプレナーシップ育成教育プログラム

アントレプレナーシップ育成教育プログラム



アントレプレナーシップ育成教育プログラム

地域戦略人材とは

大正大学が育成する
新時代の地域リーダー像



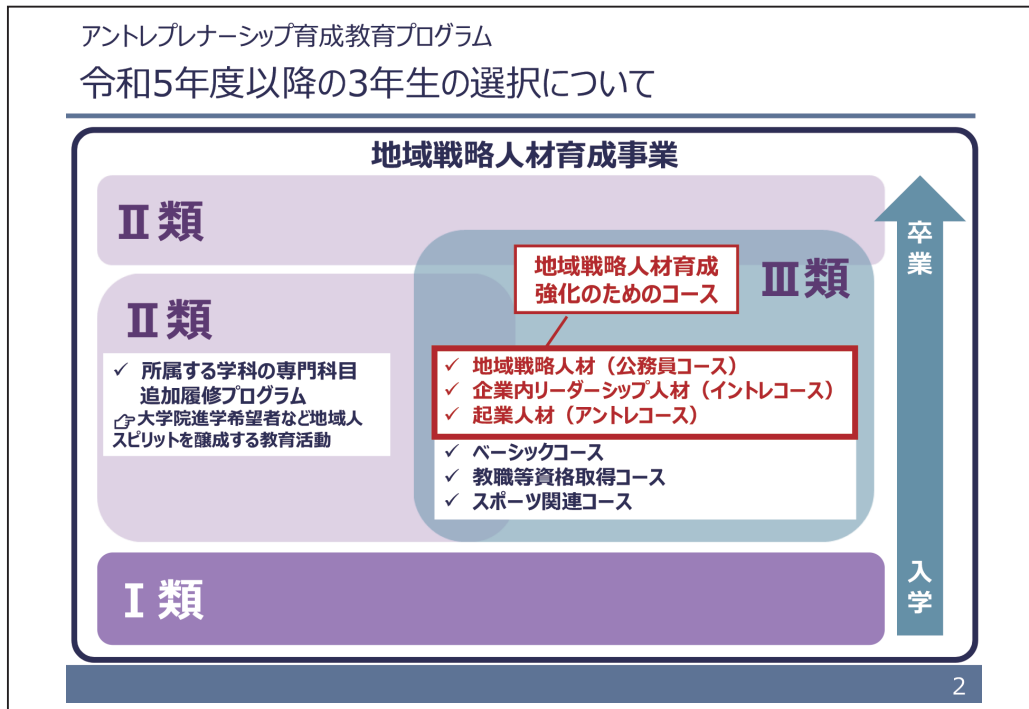
地域戦略人材

地域戦略人材とは

**多面的な性質をもつ地域課題解決に向けて、
異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダー**

<4つの要素>

- ✓ 学融合からの視点、多様な視点からの課題アプローチ
- ✓ 具体的課題に対する的確な事実認識、解決のための知恵を生み出す知識・技能
- ✓ 主体的に解決策を提起する態度・意識
- ✓ 複数分野のネットワークの結節点となるためのコミュニケーション能力



アントレプレナーシップ育成教育の3つのコース

A. 地域戦略人材

地域創生戦略志向とビジネスマインドを持つ公務員

☞ **公務員コース**

B. 企業内リーダーシップ人材

地域企業や組織内においてイノベーションによって活性化と業績向上に貢献する人材

☞ **イントレプレナーコース**

C. 起業人材

地域に新しい価値を創造するビジネスを起業する人材

☞ **アントレプレナーコース**

アントレプレナーシップ育成教育プログラムに関する科目

アントレプレナーシップ育成教育プログラムに関する科目

新ビジネス開拓、既存の仕事や事業の改革、人やコミュニティづくりなど新しいことに一歩を踏み出し、**社会に貢献できる能力を「知識」と「実践」の融合により修得する科目**である。

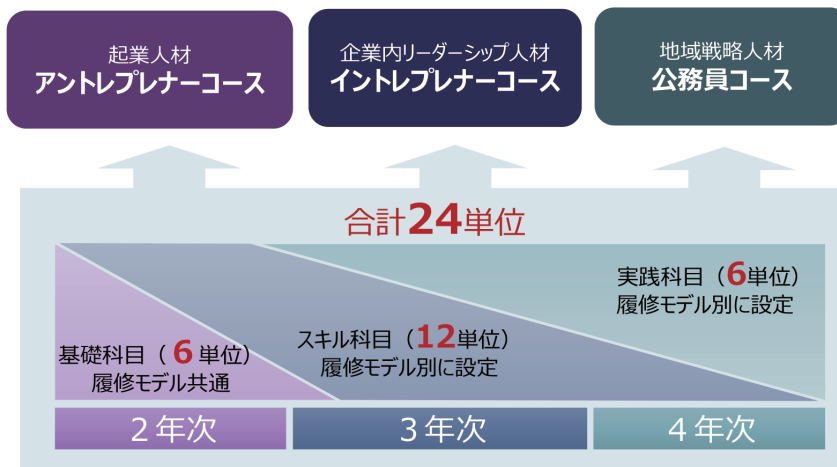
講義では、様々な分野で活躍する方々から話を聞き、地域を題材とした学びと活動を一体化したワークショップやインターンシップなどの**実践的な学びを通して、新しいことにチャレンジするアントレプレナーシップの修得を目指す。**

プログラムは、基礎科目・スキル科目・実践科目から構成され、これらの科目を24単位以上修得することにより、修了証を授与する。

なお、基礎科目「超スマート社会論」「新共生社会論」「地域人イズム論」「アントレプレナーシップ論」の4科目のうち2科目4単位は全学生が必ず履修・修得しなければならない。

アントレプログラムの単位取得について

■ アントレプレナーシップ育成教育の履修モデル



アントレプレナーシップ育成教育プログラム

アントレプレナーシップ
令和5年度_開講科目一覧

6

アントレプレナーシップ育成教育プログラム



地域戦略人材
公務員コース

～地域創生戦略志向とビジネスマインドを
持つ公務員を目指す～

7

アントレプレナーシップ育成教育プログラム

公務員コース_開講科目一覧 (スキル科目・実践科目)

「スキル科目」18単位
(9科目)



「実践科目」6単位

全科目 必修

大分類	中分類	対象コース	科目	開講クラス 見込み数	単位数	必修
スキル科目	スキル科目	公務員	コミュニケーション (公務員・基礎C)	1	2	
スキル科目	スキル科目	公務員	ロジカルシンキング (公務員・基礎A)	1	2	
スキル科目	スキル科目	公務員	ファシリテーション (公務員・専門D)	1	2	
スキル科目	スキル科目	公務員	プレゼンテーション (公務員・基礎B)	1	2	
スキル科目	スキル科目	公務員	マネジメント (公務員・専門A)	1	2	
スキル科目	スキル科目	公務員	リーダーシップ (公務員・専門B)	1	2	
スキル科目	スキル科目	公務員	財務会計の基礎 (公務員・専門C)	1	2	
スキル科目	スキル科目	公務員	キャリア探究A (公務員)	1	2	
スキル科目	スキル科目	公務員	キャリア探究B (公務員)		2	
実践科目	ワークショップ	公務員	ワークショップ (公務員)		6	

正課外の補助学習



- ① オンライン学習：「単元確認演習」等 ② 模試、直前対策（春休み以降の補習）

8

アントレプレナーシップ育成教育プログラム



企業内リーダーシップ人材
イントレプレナーコース

～地域企業や組織内においてイノベーションによって活性化と業績向上に貢献する人材～

9

アントレプレナーシップ育成教育プログラム

イントレコース_開講科目一覧 (スキル科目・実践科目)

「スキル科目」12単位
(6科目選択)



「実践科目」6単位
(3分野選択)

大分類	中分類	対象コース	科目	開講クラス 見込み数	単位数	必修
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	コミュニケーション (イントレ)	3	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	ロジカルシンキング (イントレ)	3	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	プレゼンテーション (イントレ)	3	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	プレゼンテーション (イントレ)	3	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	ファシリテーション (イントレ)	3	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	リーダーシップ (イントレ)	2	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	マーケティングの基礎 (イントレ)	3	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	データ分析技法 (イントレ)	3	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	プログラミングの基礎 (イントレ)	3	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	ビジネス英語 (イントレ)	2	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	キャリアデザインA (イントレ) ① ※A/Bいずれかひとつのみ履修可能	2	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	キャリアデザインA (イントレ) ② ※A/Bいずれかひとつのみ履修可能	2	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	キャリアデザインB (イントレ) ① ※A/Bいずれかひとつのみ履修可能	2	2	
スキル科目	スキル科目	イントレプナー	キャリアデザインB (イントレ) ② ※A/Bいずれかひとつのみ履修可能	2	2	
実践科目	ワークショップ	イントレプナー	ワークショップ (ブランディング)	2	2	
実践科目	ワークショップ	イントレプナー	ワークショップ (サービス業界)	2	2	
実践科目	ワークショップ	イントレプナー	ワークショップ (企業態共通 財務分析)	2	2	
実践科目	ワークショップ	イントレプナー	ワークショップ (HR/人材関連業界)	2	2	
実践科目	ワークショップ	イントレプナー	ワークショップ (企業態共通 多様性推進)	2	2	
実践科目	ワークショップ	イントレプナー	ワークショップ (メディア業界)	2	2	
実践科目	ワークショップ	イントレプナー	ワークショップ (コンサルティング)	1	2	
実践科目	ワークショップ	イントレプナー	ワークショップ (企業態共通 課題解決型営業)	2	2	
実践科目	ワークショップ	イントレプナー	ワークショップ (金融、保険業界)	1	2	
実践科目	インターンシップ	イントレプナー	インターンシップ (イントレ)	-	2	

アントレプレナーシップ育成教育プログラム

【参考】イントレコース_履修モデル

- ✓ 希望業界ごとの履修モデルですが、自身の興味関心の高いものや希望職種を踏まえて強化したいスキル向上を目指し自由に選択可能です。
- ✓ キャリアデザインAとBはいずれか1科目のみ履修可能です。
- ✓ 実践科目はワークショップ3科目でもワークショップ2科目 + インターンシップでも可能です。

科目分類	履修科目	選択必須	単位数	希望業界										
				金融 保険	IT 情報通信	メーカー	メディア	マーケティング 広告	HR/人材	コンサル	サービス	小売		
基礎 科目	超スマート社会論	6	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	新共生社会論		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	地域人イズム論		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	アントレプレナーシップ論		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
				6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
スキル 科目	コミュニケーション	12	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ロジカルシンキング		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	プレゼンテーション		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ファシリテーション		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	マーケティングの基礎		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	データ分析技法		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	プログラミングの基礎		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	キャリアデザインA (AorBいずれか)		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	キャリアデザインB (AorBいずれか)		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
					12	12	12	12	12	12	12	12	12	
実践 科目	ワークショップ (企業態共通: 組織での多様性推進)	6	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ワークショップ (企業態共通: 企業の財務分析)		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ワークショップ (企業態共通: 課題解決型営業)		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ワークショップ (コンサルティング)		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ワークショップ (HR・人材関連業界)		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ワークショップ (メディア業界)		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ワークショップ (サービス業界)		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ワークショップ (ブランディング)		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ワークショップ (金融、保険業界)		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	インターンシップ		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
				6	6	6	6	6	6	6	6	6		

アントレプレナーシップ育成教育プログラム



起業人材 アントレプレナーコース

～地域に新しい価値を創出する
起業チャレンジを目指す～

12

アントレプレナーシップ育成教育プログラム

アントレコース_開講科目一覧（スキル科目・実践科目）

「スキル科目」12単位
(6科目選択)



「実践科目」6単位
(1科目選択)

大分類	中分類	対象コース	科目	開講クラス 見込み数	単位数	必修
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	コミュニケーション (アントレ)	2	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	ロジカルシンキング (アントレ)	2	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	プレゼンテーション (アントレ)	2	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	ファシリテーション (アントレ)	2	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	マネジメント (アントレ)	2	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	財務会計の基礎 (アントレ)	2	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	ファイナンスの基礎 (アントレ)	2	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	マーケティングの基礎 (アントレ)	1	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	情報表現技術 (アントレ)	1	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	言語表現技術 (アントレ)	2	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	キャリアデザインA (アントレ) ①	1	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	キャリアデザインA (アントレ) ②	1	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	キャリアデザインB (アントレ) ①	1	2	
スキル科目	スキル科目	アントレプレナー	キャリアデザインB (アントレ) ②	1	2	
実践科目	ワークショップ	アントレプレナー	ワークショップ (起業実践～6名のプロが0から指導～)	1	6	
実践科目	ワークショップ	アントレプレナー	ワークショップ (起業というキャリアデザイン)	1	6	
実践科目	ワークショップ	アントレプレナー	ワークショップ (チェンジメーカーズ・コミュニティ)	1	6	
実践科目	ワークショップ	アントレプレナー	ワークショップ (地域共生コミュニティづくり実践)	1	6	
実践科目	ワークショップ	アントレプレナー	ワークショップ (ビジネス実践)	1	6	
実践科目	ワークショップ	アントレプレナー	ワークショップ (起業・企業再生事例研究)	1	6	

13

アントレプレナーシップ育成教育プログラム
アントレプレナーコースのワークショップ

【科目名】 マイスターワークショップ 【単位数】 6単位

【対象期間】 令和5年度中（1・2・4QT）もしくは令和6年度（1・2QTまで）
 期間中に 100分 × 42回を確保すること
 ※第3QT（9下～11中）は地域実習のため、配慮すること

- 【対象学生】
- ✓ 起業チャレンジを目指したい学生
 - ✓ 新しいことにチャレンジして社会に変化を産み出したい学生
 - ✓ チャレンジはしてみたいが、きっかけがない学生

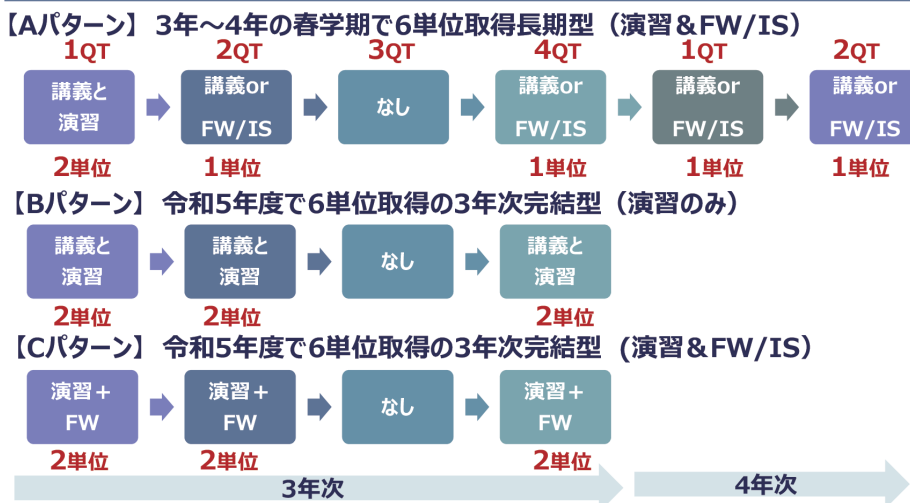
【コースの目的】
 様々な社会や地域の課題を解決するため、リアルな現場での実践を通じて必要なスキルを身につける。その成果として、新しいことにチャレンジしたり、新たな価値を創造するきっかけとする

- 課題となるテーマはなぜ設定され、どのような成果をアウトプットするのかを明示
- 全体のスケジュール（42回分の要素）を明示
- 学生にはどのような能力を、どのように身につけさせるのかを明示
- 評価基準・方法を明示

【授業時限】
 基本は平日5限（17:00～18:40）だが夏休みなどを活用しての集中講義なども可とする

アントレプレナーシップ育成教育プログラム
ワークショップの展開方法（パターン別）

担当教員ごとに組み立ては異なりますが最大一年半で6単位を取得します



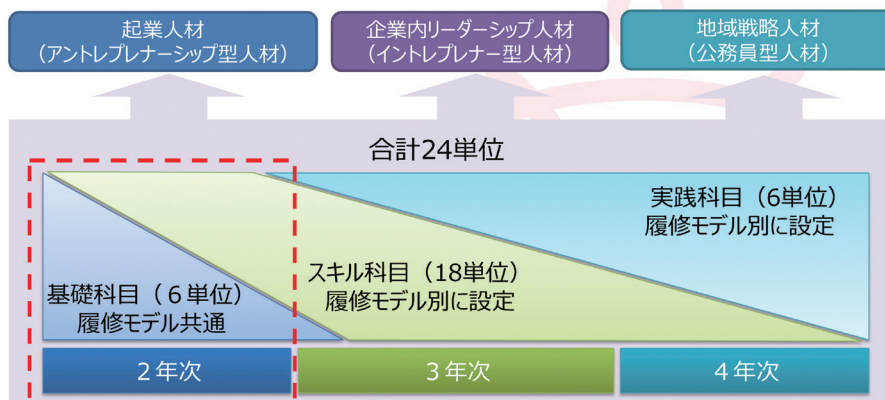
第Ⅲ類科目 アントレプレナーシップ育成教育



TAISHO UNIVERSITY

第Ⅲ類科目アントレプレナーシップ育成教育について

■ アントレプレナーシップ育成教育の履修モデル



- 令和3年度 実践科目の展開に向けてプレプロジェクトを試行実施
- 令和4年度 基礎科目の実施とプレプロジェクトの継続実施
- 令和5年度 基礎科目・スキル科目・実践科目の全体実施

2



アントレプレナーシップ育成教育の実施状況【令和3年度】

- ▶ 令和3年度 実践科目の展開に向けてプレプロジェクトを試行実施
実務家教員を中心に様々な企業との協働により「巣鴨」を実践の場として、地域活性化のための
コンテンツの企画・制作やイベントの企画・実施などを行った。

①Pepperプロジェクト 参加学生：16名

連携協定を締結しているソフトバンク（株）Pepperを活用し、地域物産を販売する
ガモールマルシェでのマーケティングや販売促進を展開するプロジェクト
【協働】ソフトバンクロボティクス（株）、（一社）コンソーシアムすがも花街道



②ショートドラマ制作プロジェクト 参加学生：17名

フジテレビの監督である平野真氏の脚本・演出により、地元巣鴨の商店街と大学を
舞台にしたショートドラマを学生と共に制作し、上映することにより新たな巣鴨を発信
するプロジェクト

【協働】（株）フジテレビジョン、（株）ドンクルー、巣鴨地藏通り商店街



③食のYouTuberプロジェクト 参加学生：3名

ガモールマルシェで販売する商品をYouTubeを利用し発信すること
により、地域と消費者を繋ぎ、地域活性化を行うプロジェクト
【協働】ガモールマルシェ、（株）ヒストロババ

3



アントレプレナーシップ育成教育の実施状況【令和3年度】

④AR謎解きプロジェクト 参加学生：27名

最新のデジタルテクノロジーであるARのアプリを活用した謎解きを制作し、地元商店街や豊島区
との協働イベントを実施して地域活性化につなげるプロジェクト
【協働】巣鴨駅前商店街、巣鴨地藏通り商店街、庚申塚商栄会、豊島区、
（株）クリエイターズネクスト、（株）謎組、VROOM

⑤朗読劇プロジェクト 参加学生：16名

東日本大震災から10年、防災への取組の一環として豊島区が作家・脚本家である森浩美
先生と共に公演する「家族草子」を映像コンテンツ化するプロジェクト
【協働】家族草子、豊島区、としまテレビ



⑥ガモール堂プロジェクト 参加学生：21名

地域創生学部の授業として実施され、巣鴨の商店街の空き店舗を活用して、店舗の企画・メニュー開発・販売運営を
展開し、地域に新しい価値を創り出す
プロジェクト

【協働】（一社）コンソーシアムすがも花街道、豊島市場

4



アントレプレナーシップ育成教育の実施状況【令和3年度】

▶ 参加学生からのコメント

- ✓ 大学生活の最初の1年間を虚無なものにしてしまった焦燥感から、何かをしたいと思い参加した。このプロジェクトを通して、協同する力を身につけるための一助になると期待していた。(ペッパーPJ)
- ✓ 自分の能力について気付きがあったのがとても大きかった。出来ること、出来ないこと、他人の能力を見て、自分でやってみて、色々なものが見えてきた期間だった。(謎解きPJ)
- ✓ 行動力が増えた。今まではやろうと思ったけど実際には動かなかったものが多くありましたが、プロジェクトを通してとりあえず動くことが多くなりました。実際に行動してみないとどうなるかは分からないということも学びました。(謎解きPJ)
- ✓ 相手の心を動かすためには何をすれば良いのかを常に考え続けたプロジェクトだった。何事も協力してもらうためには自分しかできないことを、自分だからできることを常に模索しながら、今後の学生生活にも活かしていきたいです。(謎解きPJ)
- ✓ 役職がなかったため、個人で取り組んだことは自分で考えて行動すること。難しく悔しい思いもたくさんしましたが、難しさの再認識と視野の広がりや脳の働きを感じることができたので、役職がないことが良い経験となった。(ショートドラマPJ)
- ✓ 今回一緒に行動する人や話す人に偏りがあったので、全員とは行わないまでもより多くの人と会話できるように話しかけられるのを待つのではなく、自分から行動する。情報共有を怠らない。今回学んだ様々なことを日常生活にも活かしたい。(ショートドラマPJ)
- ✓ 今回ガモール堂の運営に関してこのプロジェクトに参加させてもらい客観的に見渡すことの重要性に気づくことができた。シフト作成の人事管理の精査の上で、現状を動画で撮影したことにより客観的に判断し、メンバーに提案を行うことができた。(ガモール堂PJ)
- ✓ 自分たちの強みであり、他のお店と差別化できる部分は、フードロスの食材を使用していることである。在庫として抱える会社のコストを解消するとともに、お店の利益率を上げて持続的な店舗を運営することで双方にとってメリットとなる新しいビジネスが生み出れた。また、メディアに取り上げてもらうことで社会問題を認知してもらい、学生の活動を注目してもらえた。(ガモール堂PJ)

5



アントレプレナーシップ育成教育の実施状況【令和4年度】

▶ 令和4年度 基礎科目の実施とプレプロジェクトの継続実施

基礎科目 2 科目を春学期に実施。秋学期にも 3 科目を実施予定。
実践科目のプレプロジェクトについても継続して実施した。

1. 基礎科目

①春学期

科目名
アントレプレナーシップ論
超スマート社会論

②秋学期

科目名
アントレプレナーシップ論
地域人イズム論
新共生社会論

6



アントレプレナーシップ育成教育の実施状況【令和4年度】

2. 実践科目（プレプロジェクト）

①起業人材（アントレプレナーシップ人材）

- AI謎解きイベントを活用した地域活性化プロジェクト 履修者29名

昨年のAR謎解きの第2弾として、今年度はAIを活用した謎解きを企画して実施。

【協働】巣鴨駅前商店街、巣鴨地蔵通り商店街、庚申塚商栄会、豊島区、（株）謎組、VROOM、（株）クリエイターズネクスト



AIチャットボットによる商店街紹介



商店とのコラボ商品の販売



各種メディアにも多数取り上げられる



制作したエンディングソングを巣鴨駅前商店街で放送



学生自らPRし、ラジオに出演



母校でのPR



アントレプレナーシップ育成教育の実施状況【令和4年度】

- 商店街×地域実践・地域フェアプロジェクト 履修者18名

巣鴨地蔵通り商店街で運営しているアンテナショップ「ガモールマルシェ」を活用して、学生による自治体のPRイベント「地域フェア（静岡市フェア）」を企画運営し、マーチャンダイジング、ビジネスの仕組み、マーケティングを実践的に学んだ。POPによる店舗内での訴求、SNSによる情報発信による集客、Youtubeを活用したライブキッチンの実施など、静岡市と事業者と連携して地域資源の首都圏販路拡大を実践した。

【協働】ソフトバンク（株）、静岡市産業政策課、（株）ヒストロパ、（一社）コンソーシアムすかも花街道



YouTubeでの発信によるPR



マルシェで静岡市フェアの実施



各種メディアへのPR・取材



アントレプレナーシップ育成教育の実施状況【令和4年度】

②企業内リーダーシップ人材（イントレプレナー）

将来のキャリアビジョンを描き、実現するためのはじめの一步。
自己理解を深め、自分らしいキャリア構築を実現するために具体的なアクションプランを策定すると同時に、目標達成にむけて必要なスキルを習得を通し社会で求められる資質・能力を培う。

- 就活チャレンジA（大手企業選考、採用）コース 履修者 12名
より大きな舞台で活躍できる力をつけたい学生のためのプログラム
- 就活チャレンジB（早期選考）コース 履修者 27名
自己実現につながる就職先を早期に見つけたい学生のためのプログラム

- 現役ビジネスパーソンをゲスト講師に招き、実践的スキル向上のトレーニングを実施し、即戦力を修得
- トレーナーによる学修支援も行い、教員・トレーナー・学生によるチーム学修を実施

プログラム名	就活チャレンジクラスA 大手有名企業選考、採用にむけたコース より大きな舞台で活躍できる力をつけたい学生のための実践プログラム
第1回 6月11日	目標設定の大切さ、大企業・中小企業への違い、入社10周年時代の働き方 自己理解 / 意識化と自己認知の向上
第2回 6月25日	目標設定：キャリアプラン、アクションプラン 自己理解 / アクションプランの作成 企業内での活躍のイメージ / 企業内での活躍イメージ / 企業内での活躍イメージ
第3回 7月9日	実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート 実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート 実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート
第4回 7月23日	実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート 実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート 実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート
第5回 9月24日	実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート 実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート 実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート
第6回 10月8日	実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート 実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート 実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート
第7回 10月22日	実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート 実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート 実践的スキル向上のためのトレーニング / エントリーシート



アントレプレナーシップ育成教育【令和5年度】に向けて

- ガイドンスの実施（学内への周知徹底）
 - ① 2年生対象ガイダンス
12月5日（月）～10日（土） 学科毎に実施予定
→希望調査12月17日（土）締切
 - ② 教員対象ガイダンス
11月24日（木）17時
12月2日（金）17時
- 動画による発信（学内外への情報発信）
アントレプレナーシップ育成教育を含めて「地域戦略人材育成事業」の取り組みを理解してもらうため、動画を作成しHPやYouTubeにより広く発信する。（11月～12月に順次公開予定）
- 学修成果の可視化に向けて
第I類科目で活用しているeポートフォリオによる学修状況把握や支援の方法を基盤にして、令和5年度に新たに導入するLMSに実装し、スキル科目の成績（定量データ）と実践科目の学修活動の記録（定性データ）を組み合わせることなどにより、学生自らがその成果を可視化し、振り返ることのできる仕組みを構築する。



第Ⅲ類科目
「アントレプレナーシップ育成教育」
について

アントレプレナーシップ育成教育について  **大正大学**
スガモで育む日本の未来。

▶ 大正大学の目指す人材育成像

「地域戦略人材」

地域戦略人材に必要な4つの要素

- ◆ 学融合からの視点、多様な視点からの課題アプローチ
- ◆ 具体的課題に対する的確な事実認識、解決のための知恵を生み出す
知識・技能
- ◆ 主体的に解決策を提起する態度・意識
- ◆ 複数分野のネットワークの結節点となるコミュニケーション能力

アントレプレナーシップ育成教育について



➤ 「地域戦略人材」を育成するために

1. チュートリアル教育（第Ⅰ類科目）

学生の教育・学修支援を、教員だけでなくチューターと共にチームで実施

2. データサイエンス教育（第Ⅰ類科目）

的確な事実認識に必要となるデータを取り扱うスキルを身につける

3. 学融合【クロスディシプリン】教育（第Ⅱ類科目）

多様な視点からのアプローチを可能にする学融合プログラム

4. アントレプレナーシップ教育（第Ⅲ類科目）

実践の場で主体的に課題の解決に取り組む

3

アントレプレナーシップ育成教育について



➤ アントレプレナーシップ育成教育の具体的人材像

A. 地域人材 → 公務員・NPOなど

① 地域創生戦略志向とビジネスマインドを持つ公務員

② 地域のオーガナイザーとしてメンバーを巻き込み

事業計画をまとめあげる人材

B. 企業内リーダーシップ人材 → イントレプレナー

地域企業や組織内においてイノベーションによって

活性化と業績向上に貢献する人材

C. 起業人材 → アントレプレナー

地域に新しい価値を創造するビジネスを起業する人材

理論

+

実践

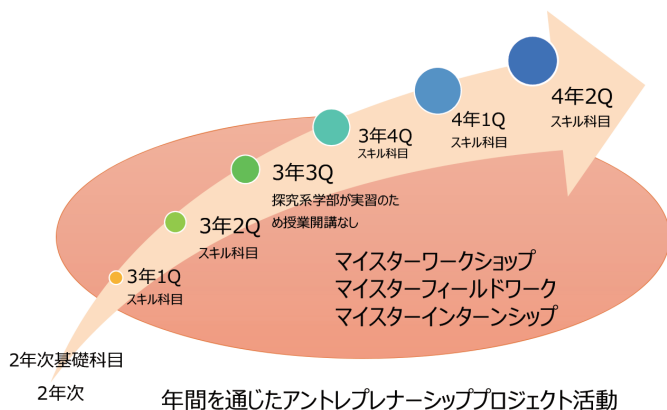
4

アントレプレナーシップ育成教育について



▶ カリキュラム

テーマを設定したマイスターワークショップなどの実践科目を中心にして、理論（スキル科目）と実践（実践科目）を融合させたプログラム



アントレプレナーシップ育成教育について



▶ カリキュラム

合計24単位を履修することにより
「アントレプレナーシップ教育プログラム」修了証を授与

科目分類	群	授業科目の名称	履修年次	単位	備考
K群 (アントレプレナーシップ 育成教育プログラム)		超スマート社会論	2:3:4	2	4単位選択必修(全学)
		新共生社会論	2:3:4	2	
		地域人イノベーション論	2:3:4	2	
		アントレプレナーシップ論	2:3:4	2	
		ロジカルシンキング	2:3:4	2	◆3科目6単位選択必修
		データ分析技法	2:3:4	2	
		プログラミングの基礎	2:3:4	2	
		ファイナンスの基礎	2:3:4	2	
		財務会計の基礎	2:3:4	2	◆12単位選択
		マーケティングの基礎	2:3:4	2	
		言語表現技術Ⅰ	2:3:4	2	
		言語表現技術Ⅱ	2:3:4	2	
		情報表現技術Ⅰ	2:3:4	2	◆6単位選択必修
		情報表現技術Ⅱ	2:3:4	2	
		コミュニケーション	2:3:4	2	
		リーダーシップ	2:3:4	2	
		ファシリテーション	2:3:4	2	
		プレゼンテーション	2:3:4	2	
		マネジメント	2:3:4	2	
		ビジネス英語	2:3:4	2	
ビジネス中国語	2:3:4	2			
マイスターワークショップ	2:3:4	1~6	◆6単位選択必修		
マイスターフィールドワーク	2:3:4	1~6			
マイスターインターンシップ	2:3:4	1~6			
短期留学	2:3:4	1~6			
海外インターンシップ	2:3:4	1~6			

【基礎科目：オンデマンド】
アントレプレナーシップの基礎
を知る科目（6単位）
うち全学必修 4単位

【スキル科目：対面】
アントレプレナーシップに必要な
理論・スキル科目（12単位）

【実践科目：対面】
巣鴨を中心としたフィールドで
の実践的なPBL科目（6単位）

アントレプレナーシップ育成教育について



▶ 実践の場としての「すがも」

新しい知識の誕生に繋げる「理論」×「実践」のハイブリッドな学びを実現するため、すがもオールキャンパス構想を推進しています。

巣鴨の街全体をキャンパスとして、学生たちの「学びの場」、そして様々な地域の方々が交流する「集いの場」となることを目指しています。

巣鴨の商店街にサテライト教室（プロダクトスタジオ）を開設するとともに、アンテナショップ（ガモールマルシェ）やカフェ（ガモール志學亭）などの多彩な施設を展開しています。

大学と地域そして企業が連携して、学生が中心となって地域活性化に取り組みアントレプレナーシップを持った地域戦略人材を育成します。



7

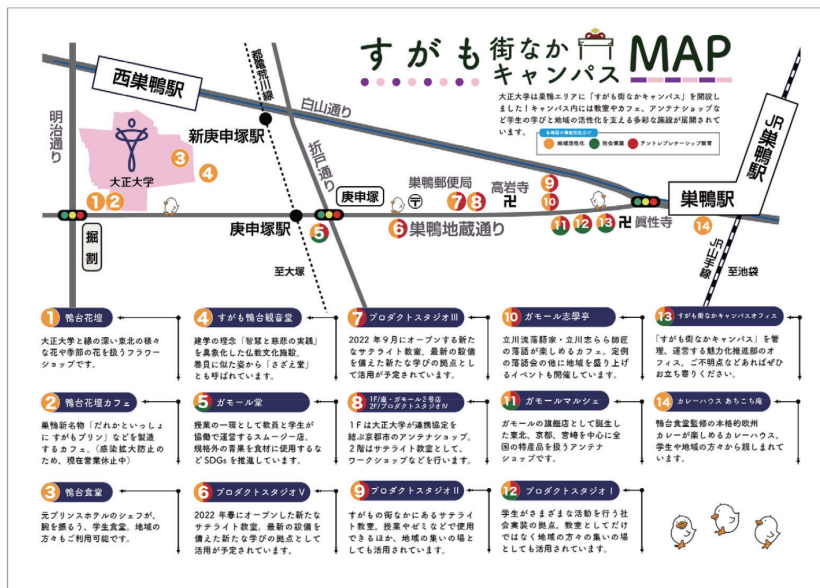


～～ Appendix ～～

すがも街なかキャンパス
と
プレプロジェクトのご紹介

8

すがも街なかキャンパスについて



プレプロジェクトの実施について

▶ プレプロジェクトの実績（R3年度）

- **Pepperプロジェクト** 参加学生：春13名、秋8名
連携協定を締結しているソフトバンク（株）のPepperを活用し、地域物産を販売するガモールマルシェでのマーケティングや販売促進を展開するプロジェクト
【協働】ソフトバンクロボティクス（株）、（一社）コンソーシアムすがも花街道
- **食のYouTuberプロジェクト** 参加学生：3名
ガモールマルシェから地域の食材の魅力を発信することを通して、動画での表現技術を学び、地域との連携やコミュニティの強化を図るプロジェクト
【協働】（株）ピストロパバ、（一社）コンソーシアムすがも花街道
- **AR謎解きプロジェクト** 参加学生：25名
最新のデジタルテクノロジーであるARのアプリを活用した謎解きを制作し、地元商店街や豊島区との協働によりイベントを実施して、地域活性化につなげるプロジェクト
【協働】菓鴨駅前商店街、菓鴨地蔵通り商店街、庚申塚商栄会、豊島区（株）クリエイターズネクスト、（株）謎組、VROOM
- **ガモール堂プロジェクト** 参加学生：21名
地域の資源を活用し、フードロスの改善や実践をテーマとして店舗運営を行い、産学連携により地域貢献・活性化に取り組むプロジェクト
【協働】地域創生学部地域実習自治体、豊島市場【（株）やまかね】、（一社）コンソーシアムすがも花街道
- **ショートドラマ制作プロジェクト** 参加学生：20名
フジテレビの監督である平野真氏の脚本・演出により、地元菓鴨の商店街と大学を舞台にしたショートドラマを学生と共に制作し、上映することにより新たな菓鴨を発信するプロジェクト
【協働】（株）フジテレビジョン、（株）ドンクルー、菓鴨地蔵通り商店街、庚申塚商栄会

プレプロジェクトの実施について

▶ プレプロジェクトの実績（R4年度）

- **AI謎解きプロジェクト**（R3年度に続いて第2弾） 参加学生：29名
最新のデジタルテクノロジーであるAIを利用した謎解きアプリを制作し、地元商店街や豊島区との協働によりイベントを実施して、地域活性化につなげるプロジェクト
【協働】 巣鴨駅前商店街、巣鴨地蔵通り商店街、豊島区、（株）クリエイターズネクスト、（株）謎組、VROOM、（一社）コンソーシアムすがも花街道
- **実践地域フェアプロジェクト** 参加学生：18名
ガモールマルシェから地域の食材の魅力を発信することを通して、地域との連携やコミュニティの強化を図る。フェアの企画から実施、そのプロモーションなど店舗運営を通して地域をPRし、地域活性化に繋げるプロジェクト
【協働】（一社）コンソーシアムすがも花街道、（株）静鉄リテイリング、（株）ホテイフーズコーポレーション、（株）ソフトバンク、（株）ピストロババ
- **ガモール堂プロジェクト**（R3年度から継続） 参加学生：17名
地域の資源を活用し、フードロスの改善や実践をテーマとして店舗運営を行い、産学連携により地域貢献・活性化に取り組むプロジェクト
【協働】 地域創生学部地域実習自治体、豊島市場（株）やまかね、（一社）コンソーシアムすがも花街道
- **巣鴨のまちをもっと元気にするプロジェクト** 参加学生：8名
「まちコイン」という仕組みを通じて、地域の資源を活用し、地域貢献・活性化に取り組むプロジェクト
【協働】 巣鴨地蔵通り商店街、（株）カヤック、（一社）コンソーシアムすがも花街道

11

ガモール堂プロジェクト

地域創生学科の学生、旧「座ガモール 1 号店」跡地にスムージー店（店名：「ガモール堂」）を店舗運営するプロジェクト。「ガモール堂」では、学生が店舗コンセプトとして、SDGs の目標にも含まれるフードロスの改善・実践を行うことをテーマに設定し、少しの傷や痛みで捨てられていく果物や野菜を活用したスムージーや、地域創生学科にかかわりのある物産品を販売しています。



2020年10月にグランドオープン



表現学部長 榎本了吉教授
デザインの「ガモール堂」
ロゴ



定番のバナナスムージー

12

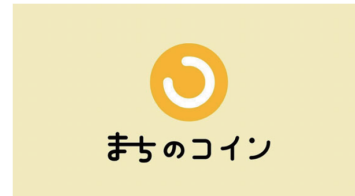
巣鴨の商店街をもっと元気にするPJ

学生と地域の方々が協働で、巣鴨の商店街をさらに盛り上げるための新たなツールの導入やイベントの実施を目指す、産学民連携プロジェクト。現在はその第一弾として、地域通貨「まちのコイン」の導入による地域活性化の可能性を、巣鴨地藏通り商店街の方々とともに探求しています。



商店街の方々とともに
ディスカッションを行う

▲
導入に向けたメリットや課題
点の洗い出し。



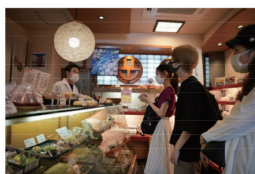
株式会社カヤックが開発した「ひと・まち・地球にうれしい体験で地域をつなげるコミュニティ通貨（電子地域通貨）」サービス。

コインのやり取りを通して、地域のつながりを増やし、日々の暮らしを豊かにするとともに、新たなまちの魅力を発掘・発信を目指す。

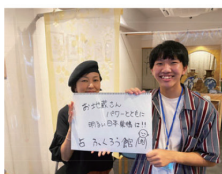
<https://coin.machino.co/>

AR謎解きプロジェクト

産官学と地域が連携し、AR謎解きイベント「2026スガモ消滅」を実施。巣鴨に来街者を呼び込みその魅力を発信することで、地域活性化を目指す。学生がイベントの企画・制作、運営に携わり、実践的にアントレプレナーシップを育みました。



商店街の店舗をフィールドワーク



商店街の人々から夢を聞く



学生主導で謎解きドラマを制作

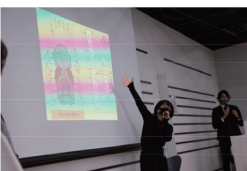
AR謎解きイベント 「2026 スガモ消滅」



【ストーリー】
隕石落下まで、あと2時間。
巣鴨の地に建つ大正大学が、
創立100周年を迎える2026年、
街に絶体絶命の危機が迫っていた。
近未来から届くSOS。果たして
あなたは、スガモ消滅の危機を
回避出来るだろうか？



豊島区、商店街の方々と交えたプレゼン大会



取材依頼が数々のメディアから

ショートドラマ制作プロジェクト



フジテレビ系ドラマ「HERO」「監察医朝顔」で演出を手掛けた平野眞監督（本学招聘教授）らと学生が協働で、本学や巣鴨の街を舞台としたショートドラマを制作する特別プロジェクト。学生はドラマ制作を通して、チームビルディングや制限のある中での創意工夫などアントレプレナーシップに大切な素養を実践的に学びました。巣鴨を舞台としたショートドラマ制作で、学生の学びと地域活性化に取り組みました。



学生がスタッフとして活動



巣鴨の商店街で撮影を実施！



大学の校内も舞台に！

ショートドラマ：
「僕は君にガーベラを贈る」

<https://www.youtube.com/watch?v=wZwkAQyFzUQ>



大学卒業後、10年ぶりに巣鴨の街に集まったかつての仲間たち。
近況報告や思い出話で盛り上がるが……

15



ご清聴ありがとうございました

16



令和4年度 就活チャレンジプログラムについて

アントレプレナーシップ科目 就活チャレンジクラス

はじめに

就職先は人生の大きな選択です。

自分自身の夢が実現できる就職先に出会い、
また就職を目指す学生を支援するプログラムです。

ただし、就職だけをゴールにしたプログラムでは
ありません。この先社会で活かせるスキルも身に付け

社会で即戦力となる力をつける

支援をしていきます。

アントレプレナーシップ科目 就活チャレンジクラス
就活チャレンジクラスAとBについて

	就活チャレンジクラスA	就活チャレンジクラスB
プログラム内容	大手有名企業選考、採用にむけたコース	早期選考、採用にむけたコース
各プログラムの受講学生イメージ	より大きな舞台で活躍できる力をつけた学生のための就活プログラム	自己実現につながる就職先を早期に見つけたい学生のための就活プログラム
対象学生	3年生	
担当教員	総合学修支援機構DAC 前田 長子	
応募人数	20名 ※エントリーシート提出必須。 面談にて最終選考	30~40名 ※エントリーシート提出必須。 応募人数超過の場合はエントリーシートにて選考
開講学期	春学期~秋学期 6月中旬スタート予定 隔週 土曜日 3・4限 全7日間(14回授業)	
単位数	2単位(正課科目となります) ※プログラム終了後、秋学期に単位認定となります(履修登録はありません。制限単位対象外となります)	
その他	Aの選考に通らなかった場合、Bのクラスに申し込むことは可能です。	

3

アントレプレナーシップ科目 就活チャレンジクラス

【2クラス共通】の授業目的と到達目標

就活チャレンジクラスAとクラスBの共通目的と目標	
授業の目的	将来のキャリアビジョンを描き、実現するためのはじめの一歩 自己理解を深め、自分らしいキャリア構築を実現するために具体的なアクションプランを策定すると同時に、目標達成にむけて必要なスキルの習得を通し社会で求められる資質・能力を培っていく。
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 10年後、20年後、自身が何を成し遂げたいかを明確にし、逆算のキャリアプランを策定できる(キャリアプラン) 興味関心のある企業研究を通して、業界・職種理解を深め、求められる資質や能力を明確に把握することができる。(仕事理解) ビジネスマナーを身につけ、短時間で相手と関係構築ができる力を身に付ける(関係構築力) 自己理解を深め、自分自身や自分の考えを言語化し、さらに他に伝達できる力を身に付ける(自己理解・伝達力) ファシリテーションスキルを高め、グループワークで他の力を引き出す力を身につける(協働力・リーダーシップ) 質問に対する意図を見極めて、相手が理解、納得する自身の考えや意見を端的にわかりやすく述べる力を身に付ける(洞察力・論理性・説得力)
個別面談	授業とは別に面談、就職相談を実施。1人あたり20分~30分程度 また夏休み期間は個別相談実施(エントリーシート、面接練習他)
スキルアップ支援	ゲスト講師によるファシリテーションスキル、対人関係スキル向上トレーニングあり。 また毎回の授業には各クラスに1~3名のトレーナーが入ります

4

アントレプレナーシップ科目 就活チャレンジクラス

【2クラスの違い】プログラム内容の違い

【就活チャレンジクラスA】

- ✓ 大舞台で戦えるスキル習得、スキル強化を目指します。(トレーニングの繰り返し)
- ✓ 就職先やインターンシップ先は自分で探すことが前提です。

【就活チャレンジクラスB】

- ✓ 就活のみならず、社会でも必要となるスキル強化を目指します。
- ✓ 自己実現につながる就職先を探す支援も行うプログラムです。
- ✓ 中小企業の社長一日密着 インターンシップなども実施します。

	就活チャレンジ クラスA	就活チャレンジ クラスB
自己理解・自己分析	◎	◎
企業理解	○	◎
プレゼンテーション	◎	○
質問対応力	◎	○
ファシリテーション	○	○
エントリーシート	◎	◎
インターンシップ	✕自分で探す	◎紹介あり

5

アントレプレナーシップ科目 就活チャレンジクラス

1. 就活チャレンジクラスAについて

プログラム名	就活チャレンジクラスA 大手有名企業選考、採用にむけたコース より大きな舞台で活躍できる力をつけたい学生のための就活プログラム
第1回 6月11日	就職すること、大企業と中小企業の違い、人生100年時代の働き方 自己理解 / 言語化とプレゼンリハーサル
第2回 6月25日	目標設定、キャリアビジョン、プラン確認 面接対策1_プレゼン力向上トレーニング ①相手の関心を高める自己紹介 ②説得力の高いトーク (プレゼンを録画⇄各自振り返り)
第3回 7月9日	就職先を選ぶのに大事なこと、キャリアの考え方 面接対策2_ファシリテーションスキルトレーニング (ゲストトレーナー兼講師) ①場の雰囲気をつくる ②参加者の意見を引き出す、議論の方向を見極める ③洞察力を高めて、チームの状態を把握して対応する ④意見をまとめる
第4回 7月23日	企業のビジョン、ミッションについて 面接対策3_質疑対応力向上トレーニング (プレゼンを録画⇄各自振り返り) ①意図を汲み取る ②端的に自分の考えを述べる
夏休み	インターンシップ期間 個別面談と就活個別相談実施 (対面orオンライン) / エントリーシートの個別相談実施
第5回 9月24日	面接対策4_対人力向上トレーニング (ゲストトレーナー兼講師) ①第一印象をあげるトレーニング ②洞察力を高め、対応する力をあげるトレーニング
第6回 10月8日	面接対策5_実践面談トレーニング (プレゼンを録画⇄各自振り返り)
第7回 10月22日	総仕上げ、最終プレゼン予定

6

アントレプレナーシップ科目 就活チャレンジクラス

2. 就活チャレンジクラスBについて

プログラム名	就活チャレンジクラスB 早期選考、採用にむけた挑戦コース 企業規模よりも、自己実現につながる就職先を早期に見つける就活プログラム
第1回 6月18日	就職すること、大企業と中小企業の違い、人生100年時代の働き方 自己PRとガクチカ / 言語化とプレゼンカトレーニング
第2回 7月2日	夢と自分の強みを活かせる仕事とは / 言語化とプレゼンカトレーニング
第3回 7月16日	中小企業社長交流会 ～企業が学生を選ぶ視点～ 株式会社ESSPRIDE（エスプライド）による中小企業社長との交流会 中小企業の社長8～10名の講義とディスカッション 社長が学生を選ぶときの視点、就活アドバイス
第4回 7月30日	インターンシップ計画と実行 ～私が企業を選ぶ視点～ ① 社長一日密着インターンシップの申し込み先検討と準備 ② 個別インターンシップの検討と準備
夏休み	インターンシップ期間 個別面談と就活個別相談実施（対面orオンライン）/ エントリーシートの個別相談実施
第5回 10月1日	面接対策1_対人力向上トレーニング （ゲストトレーナー兼講師） ① 第一印象をあげるトレーニング ② 洞察力を高め、対応する力をあげるトレーニング
第6回 10月15日	面接対策2_ファシリテーションスキルトレーニング （ゲストトレーナー兼講師） ① 場の雰囲気をつくる ② 参加者の意見を引き出す、議論の方向を見極める ③ 洞察力を高めて、チームの状態を把握して対応する ④ 意見をまとめる
第7回 10月29日	総仕上げ、最終プレゼン予定

(5) 学修支援・学びのコミュニティ



図書館情報メディア部長
附属図書館長
稲井 達也

図書館は令和2年8月に新設以来、学修支援機能をもつ新図書館として、総合学修支援部と融合・学際的な知を集積すると共に、授業時間外の自律的な学びの支援などアクティブラーニングやプロジェクト型学修の「場」となり学修をサポートする活動を展開しています。

令和2年度からは図書館情報メディア部、総合学修支援部と連携で「学びのコミュニティ」という講座を開講しています。この講座は学修支援、また知識集約型社会に資する人材育成のため学問の横断的な学びの講座を中心に開講しています。

令和4年度については、新型コロナウイルスの影響も続く中、大学の授業も対面中心となりましたが、「学びのコミュニティ」の実施にあたっては、対面及びオンラインで開催しました。講座では機器を使用し、講座実施会場にいるような状態をオンラインで提供し、また高品質の講座データを残すことができました。図書館情報メディア部では「学びのコミュニティ」として17講座(内5講座は総合学修支援部との連携開催)を開講しました。総合学修支援部が主催した講座も合わせると、全体で25の講座を開講し、その中で受講した学生の講座参加満足度の平均値は4.49(5が最大値)でした。なお、参加満足度は総合学修支援部開催の講座も含めた事後アンケートより算出しています。

そして、「学びのコミュニティ」以外にも、広く学生の学修支援につながる催しを企画しています。特に豊島区立図書館との連携による『にぎやかな図書館祭^{フェス}』、『萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち前橋文学館』との連携による萩原朔太郎没後80年記念『萩原朔太郎大全2022』の特別イベントを開催しました。この催しも当日のオンライン配信や、録画の公開を行いました。どちらも学生のほか地域住民も多く参加し、図書館を融合・学際的な知の集積の「場」、自律的な学びの「場」として提供しました。

また、図書館総合展のウェブ開催に参画し、社会の諸問題の解決のため、横断的・総合的な視点で知識を活用するとともに、学問と関わる資質・能力を養うための場としての図書館のこれまでの取組みを集約・整理し、広く社会に発信・公開しました。

令和4年度学びのコミュニティ実施内容

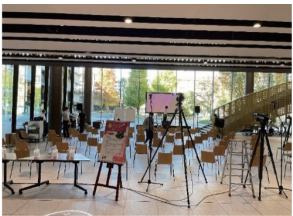
実施月日	講座名	知識集約型に資する講座の内容	担当
4月21日	図書館スタッフ、学修支援チューターとの新入生座談会	所属学部学科を問わず、これから始まる大学生活について意見交換をする機会となった。	図書館職員・チューター
4月22日	図書館スタッフ、学修支援チューターとの新入生座談会	所属学部学科を問わず、これから始まる大学生活について意見交換をする機会となった。	図書館職員・チューター
4月28日	ポストコロナ社会と支え合い・助け合い ― 宮沢賢治に学ぶ「利他」―	宮沢賢治、利他を題材に、新型コロナウイルス感染症拡大からウィズコロナの生活へ転換していく状況を踏まえ様々な視点から考えるきっかけになった。	図書館長 (教育人間学科教員)
5月18日	本の力を引き出そう～閃きから答えを導こう～	図書館蔵書資料から様々なテーマの資料を探すことができるようになるために開講し、普段調べることのない分野であっても複数の視点から調べる方法を学んだ。	図書館職員・チューター
6月29日	日本人にとって「みたま」「魂」「霊」とは？	「盆踊り」を題材に「風習」「宗教的な考え方」等、複数視点から考える機会を設けた。	仏教学科教員
6月30日	ZENKOJI History	宗教施設をテーマに「宗教的視点」「文化財的視点」「歴史的視点」等、複数視点から考える機会を設けた。	歴史学科教員
7月19日	ジャニーズから考えるエンターテインメント	エンターテインメントをテーマに「経済効果」「魅力」等、複数視点から考える機会を設けた。	表現文化学科教員
7月21日	夜の図書館講座 近世怪異文学の系譜 ～ “恐怖”はどこからやってくる？～	文学作品について「恐怖という感覚」をテーマに「文学的視点」「歴史的視点」等、複数視点から考える機会を設けた。	日本文学科教員
10月19日	Google Earthで行こう！巨大古墳と戦国城下町	デジタルとアナログを合わせ、日本の史跡をテーマに「歴史的視点」「地域に眠る観光資源」について考える機会を設けた。	歴史学科教員
11月3-5日	大正大学附属図書館×豊島区立図書館にぎやかな図書館祭(フェス)	学内外問わず参加可能なイベントや講演会を開催し、楽しんでもらうとともに学びを深めた。また本学の学生が運営に携わり、イベントを通じた世代間交流で新たな経験をすることができた。また講演の様子はアーカイブ化し、いつでも学び考える環境を整えた。	公益社団法人全国学校図書館協議会 理事長 株式会社河出書房新社 常務取締役、 Y A 出版会・相談役 豊島区中央図書館 館長 附属図書館・館長、 人間学部教育人間学科教員
11月11日	萩原朔太郎のオノマトペ	オノマトペをテーマに「人の感じ方」「表現」等を考える機会を設けた。	客員准教授
11月16日	「萩原朔太郎大全 2022 in 大正大学」特別展～周囲の人々を通して～	学内外問わず参加可能なイベントや講演会を開催し、楽しんでもらうとともに学びを深めた。講演の様子はアーカイブ化して多くの方が学びを深められる環境を整えた。	詩人 前橋文学館館長 表現学部長 附属図書館・館長、 人間学部教育人間学科教員
11月25日	大河ドラマからみる権力闘争の歴史-鎌倉殿の13人を題材に-	歴史ドラマを入口に、歴史上の権力闘争について「歴史的背景」「人の思惑」等、複数視点から考える機会を設けた。	歴史学科教員
11月29日	児童虐待防止「オレンジリボン運動」を考える	「オレンジリボン」をテーマに「児童虐待」「虐待に気が付いた時に何ができるか」を考える機会を設けた。	社会福祉学科教員・ オレンジリボン運動推進隊学生
12月21日	古典的映画に対する想い	映画について「国、時代による表現の違い」等、複数視点から考える機会を設けた。	仏教学科教員
1月24日	古典的映画に対する想い パートII	1回目引き続き、映画について「国、時代による表現の違い」等、複数視点から考える機会を設けた。	仏教学科教員



大学の知の拠点である、図書館内を有効活用し、学部学科学年を問わず、先生方の専門分野を活かした講座を提供できた。



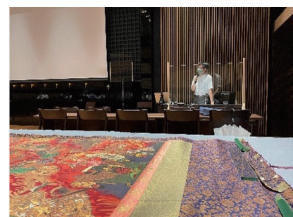
社会問題でもある「児童虐待」をテーマにオレンジリボン活動に関する講座も開講した。社会問題について考えるきっかけになった。



講座の中では、「学生同士のグループワーク」や「オンライン配信」「アーカイブ化」も実施し、様々な受講形態を提供した。



学内外問わず参加できる講演会も開催した。機材を使用してのオンライン配信、アーカイブ化にも取り組んだ。



講座内では実物の資料も活用することで、理解を深めることができた。

「学びのコミュニティ」について

<経緯>

2020年11月に総合学修支援施設として新8号館がオープン

・総合学修支援施設として学内・学外にアピールする必要性

⇒図書館情報メディア部・総合学修支援機構DAC（総合学修支援部）共同でイベント企画・検討、発信・準備、実施を行うこととした

※共同で実施する工夫

月1回のミーティング（互いの企画の情報交換、アンケート事項の打合せ、実施後の振り返りなど。Teamsも活用）。チラシは共同で作成し、T-po発信を月ごとに分担

<企画にあたって>

・中期マスタープラン「学び続ける人を育てる」を目指した体制づくりを意識した

・ただ共同で企画・実施するというのではなく、それぞれの役割を整理したうえで、その役割に沿ったイベントとした

・コロナ禍での学修支援の仕方として、オンラインまたはハイブリッドの実施、自己紹介・他己紹介など職員含む参加者の交流を意識したプログラム構成とした

【実施したイベントの例】

主催	イベント名	ねらいに基づいた内容 (図書館：図書館の活用、総合学修支援機構DAC：チュートリアル教育の実践)
総合学修支援機構DAC	レポート相談	I 類科目のレポート課題提出に運動して実施。チューターがレポートライティングの支援を行う。
図書館情報メディア部	古典籍の取り扱い方 掛け軸編	掛け軸の取り扱い方の解説と実践。解説と実践の指導は歴史学科教員が担当。
図書館情報メディア部・総合学修支援機構DAC	「ググる」で終わってない？プレゼン・レポートに使える検索テクニック	DACチューターと図書館職員で実施。データベース等での検索・情報収集を実際に試しながらプレゼンやレポートに役立つ情報検索のポイントを理解する。



総合学修支援施設（8号館）「学びのコミュニティ」イベント案内

※情報では図書館職員・チューター・教員によるさまざまなイベントを開催します。11月のスケジュールは下記のとおりです。ぜひご参加ください！※開催変更の可能性がございます

日時	イベント内容	形式	担当/会場
11/11(木) 13:30-15:00	チューター向け勉強会「3Dモデルの制作力UP」 3Dプリンターを使った3Dモデルの制作。3Dプリンターの仕組みや3Dデータの作成方法、3Dデータの加工方法、3Dデータの印刷方法、3Dデータの保存方法などを学びます。	対面	DACチューター 演習室
11/11(木) 10:30-11:30	読書の楽しみ方（対面） 読書の楽しみ方について、読書の楽しさや読書のメリット、読書の楽しみ方などを学びます。	対面	DACチューター 講義室
11/11(木) 13:30-15:00	読書の楽しみ方（対面） 読書の楽しみ方について、読書の楽しさや読書のメリット、読書の楽しみ方などを学びます。	ZOOM/対面	DACチューター 大講義室
11/11(金) 17:00-18:00	読書の楽しみ方（対面） 読書の楽しみ方について、読書の楽しさや読書のメリット、読書の楽しみ方などを学びます。	ZOOM/対面	図書館職員 演習室

(6) 日経地方創生フォーラム報告

令和4年10月11日(火)、日本経済新聞社が主催する「日経 地方創生フォーラム アフターコロナの地方創生」が日経ホールで開催されました。

大正大学が参画したテーマはセッション1「デジタル時代における実践的アントレプレナーシップ教育の成果と課題」です。最初に、高橋秀裕学長があいさつに立ち、新時代の地域をけん引するアントレプレナーシップ(起業家精神)を身につけた地域戦略人材の育成を全学的に展開していることや、教育DX(デジタルトランスフォーメーション)の推進等、本学の取組みを紹介しました。

また、学生プレゼン/有識者対話セッションのコーディネーターとして前田長子教授、パネルディスカッションのコーディネーターとして外川智恵教授が登壇しました。

【イベント概要】

- 開催日時：令和4年10月11日(火)
- 参加費：無料
- 当日のプログラム：

(セッション1) デジタル時代における実践的アントレプレナーシップ教育の成果と課題
〈ご挨拶〉

高橋 秀裕氏 (大正大学 学長)

〈基調講演〉

長尾 成浩氏 (ディー・サイン 代表取締役社長)

〈学生プレゼン/有識者対話セッション〉

表現学部表現文化学科 目々澤 実佳氏、松浦 歩美氏、三戸 愛梨氏

地域創生学部地域創生学科 浅井 樹氏、石井 大智氏

社会共生物学部公共政策学科 橘 俊幸氏、島田 真理氏、宮原 咲也佳氏

長尾 成浩氏 (ディー・サイン 代表取締役社長)

桜井 勇人氏 (SoftBank 常務執行役員)

黒田 佳奈子氏 (WOMAN COLLEGE 代表取締役)

- コーディネーター：前田 長子氏 (大正大学 地域創生学部 地域創生学科 教授/総合学修支援機構 DAC トラジション教育チーム 副チーム長)

〈パネルディスカッション〉

- パネリスト

長尾 成浩氏

桜井 勇人氏

黒田 佳奈子氏

- コーディネーター

外川 智恵氏 (大正大学 表現学部 表現文化学科 教授)

(1) ご挨拶



大正大学 学長
高橋 秀裕

わが国を取り巻く状況は急速に変化し、大きな価値転換が起きています。地域創生の取組みはより重要となり、大学と地域の緊密な連携体制の構築が必要です。

本学は仏教精神に基づく「智慧と慈悲の実践」を建学の理念としており、東日本大震災での被災地支援活動がその場となりました。その後、地域構想研究所を設立し、地域創生学部を設置しました。全国 100 超の地域・自治体と連携し、演習やフィールドワークを重ねています。

理論と実践の融合をテーマに、実際に学生が様々な地域で現地滞在し、肌で学ぶ。こうした地域連携型教育を評価いただき、令和 2 年度には文部科学省の知識集約型社会を支える人材育成事業に採択されました。現在、新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業を推進するべく、地域をけん引するアントレプレナーシップを身につけた地域戦略人材を育成するための教育プログラムを全学的に展開しています。

データをもとに考え、行動する力を育むデータサイエンス教育プログラムにも力を入れています。教育 DX を推進し、業務や組織を変化させて新たな付加価値を生み出す考えです。100 周年を迎えるにあたり、知識集約型社会を支える人材育成事業を基盤に大学教育改革を推進していきます。

(2) 基調講演

基調講演ではディー・サイン代表取締役社長の長尾成浩氏が、コロナ禍で進んだ企業や学校のデジタルシフトとその課題を解説しました。「環境が行動を変え、行動が意識を変える」ことを強調し、「学校、自宅、地域実習先など、どこにいても同じように学ぶことができ、それぞれの場の学びが関連しあうデジタル空間づくりが急務」と語りました。



ディー・サイン
代表取締役社長
長尾 成浩氏

(3) 学生によるプレゼンコーナーでは、3組の大正大学生が研究結果を発表

大正大学の学生が登壇した学生プレゼンコーナーでは、まず表現学部表現文化学科の目々澤実佳さん、松浦歩美さん、三戸愛梨さんがアフターコロナを見据え、訪日外国人の再訪率アップに向けたPR方法の研究を発表しました。「コロナ禍で急速に変化する社会に合わせて、常にデータをアップデートし、検証を重ねて立案することの重要性を学んだ」と話しました。



左から 松浦さん、三戸さん、目々澤さん

次に、地域創生学部地域創生学科の浅井樹さんは小中学生の農業留学について発表しました。農家の協力を得るために、多くの農家が集まるマルシェに何度も足を運び、説明を繰り返しました。「成し遂げたいことがあるなら覚悟を決めることが重要と感じた」と力強く語りました。この日、浅井さんは、地域実習で訪れている帯広からオンラインで参加しました。

石井大智さんは、新潟県南魚沼市の交流人口増加を目標にした観光事業の取組み「雪恋」について発表しました。コロナ禍における新しい地域の関わり方として、東京と南魚沼をつなげるということを強く意識した三つの取組みについて報告を行いました。一つ目は、YouTubeによる事業紹介のプロモーション動画、二つ目は、公式アカウントとアンバサダー、個人のSNSによる広報活動、三つ目は、YouTubeによる生配信企画等の取組みです。



左から 浅井さん、石井さん

社会共生学部公共政策学科の島田真理さんからは、三鷹市の「学生によるミタカ・ミライ研究アワード2021」で優秀賞・市長賞を受賞した提案「三鷹市ソーシャルバリアフリー化計画～高齢者が社会と共生していくために」の発表やデータ分析の手法などを説明しました。三鷹市から与えられたテーマは、未来の三鷹市または三鷹市を中心とした広域的な地域のまちづくりに関する提案であり、解決しようと考えた課題は、分析を経て浮き出た高齢者の地域活動参加率の低さと、参加意欲が高いというギャップがあることであり、この課題に対して、高齢者が近くの公園で遊んでいる子どもたちを見守りながら清掃活動を行うことを提案しました。また、使用したデータは、三鷹市の高齢者に関する調査結果という説明がありました。

橘俊幸さんからは、長期インターンシップについての報告があり社内活性化度向上に向けた第一歩を踏み出す企画の立案と実行についての報告がありました。

宮原咲也佳さんからは、「すがもプロジェクト」の取組みについての報告があり、銭湯コミュニティ一班における銭湯再生プロジェクトに取り組む一般社団法人「せんとうとまち」と共同した地元銭湯で地域コミュニティ

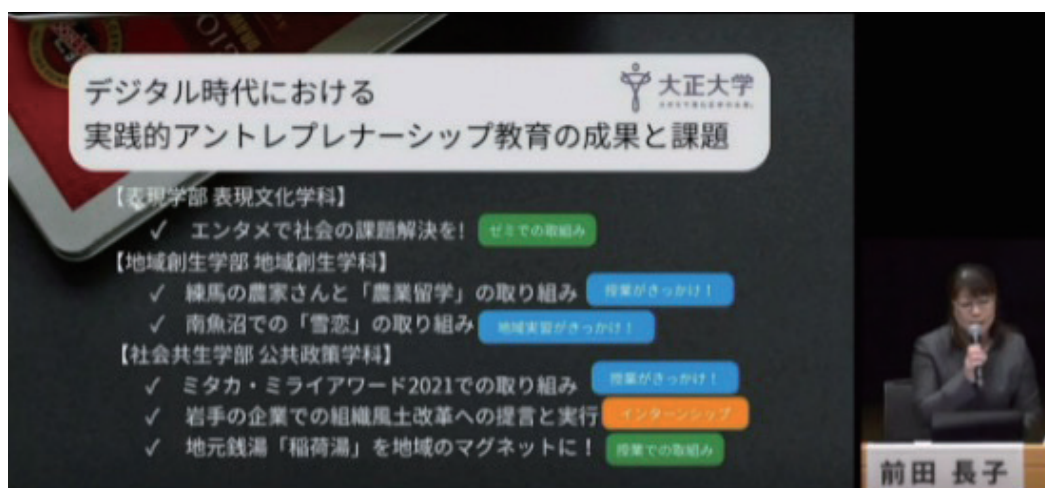
の拠点づくり、周辺地域の活性化についての報告がありました。



左から 宮原さん、橘さん、島田さん

(4) パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、外川教授をコーディネーターとし、長尾成浩氏、桜井勇人氏、黒田佳奈子氏の方々から、学生の取組みに関する所感、社会や企業で求められるアントレプレナーシップについての知見等をいただきました。学生のプレゼンテーションの中のキーワードとして「自分ごと化」があり、仕事を楽しむことが自分ごと化となる。そして、主体的に情報を取りに行くこと、世代や地域を超えて様々な方と接していくことが大学教育や学生に求められる等のご意見をいただきました。





一日観
アフターコロナの地方創生
具体的事例から考える持続可能な経済循環

セッション1 デジタル時代における実践的アントレプレナーシップ教育の成果と課題

パネルディスカッション

デジタル時代における実践的アントレプレナーシップ教育の成果と課題

<パネリスト>

ディー・サイン 代表取締役社長	長尾 成浩 氏
SoftBank 常務執行役員	桜井 勇人 氏
WOMAN COLLEGE 代表取締役	黒田 佳奈子 氏

<コーディネーター>

大正大学 表現学部 表現文化学科 教授	外川 智恵 氏
---------------------	---------



終わりに



学校法人大正大学
専務理事

柏木 正博

本学はここ数年、キャンパスを大きく整備し、教育改革を実行することで文部科学省や関係機関から大きな評価を得ていると実感しています。本学が全力で取り組んだことに対する評価であり、成果といえます。そして、本学は形を変えたブランディング活動ともいべき「魅力化」推進のプロジェクトをこれまで実施してきました。特に、産学連携・地学連携などによる様々な教育活動は、どの中規模大学にもありません。今後は、こうした基盤の上に、次の時代を担う人材育成を確実に行之、他大学に類似しないオンリーワンの取組みを次々に実施していきたいと考えております。

知識集約型社会を支える人材育成事業「新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業」については、3年目となりました。後期共通教育におけるアントレプレナーシップ育成教育が本格実施となり、24単位を学生に提供することとなっています。本事業採択にあたり、第Ⅱ類の各学科の専門科目の取得を70単位までの履修で卒業できるようになりました。今後、第Ⅲ類科目において、社会に出るにあたってのコーチャー、トレーナー等も雇用し、サポートしていきたいと考えています。また、就職率だけでなく、学生の満足度や就職先についても評価される時代となっています。アントレプレナーシップ育成教育を通じて、社会に通じる即戦力の育成等を充実していきます。

また、教職員自身もどのような人材にならないといけないのか考える必要があります。「地域戦略人材」として、例えば、オーガナイザー、アーリーアダプター、コーディネーター等の役割を自覚し、全員が何らかのミッションをもって大学の運営に関わっていくことが必要です。運営に関わっていくにあたり、適材適所で人材を配置しながら、働き方改革を推進していくことができればと思います。さらに、本学の教育ビジョン「4つの人となる」という大乘仏教精神を、教職員の働き方に活かすことも考えています。

教職員においても、大きく変化する時代において、自ら変化することが求められており、建学の理念「智慧と慈悲の実践」をどのように捉えるかが課題です。大学の経営については、科学的なもの人間そのものを考えて、理論と行動が一体となって実施されます。そして、その結果としてのキーワードは「幸せ」です。幸せが価値となり、組織を作ることが求められています。ドリブンという言葉が流行していますが、事務局や教員組織の存在意義の確立が必要です。我々は理念があるから実践でき、突き動かされます。そのため、教育ビジョン「4つの人となる」の理念が活かせるのではないかと考えています。

「4つの人となる」について解説しますと、「自灯明」については、知識・能力を、自走のための主体性を持ったそれぞれのメンバーが、上司も含めて構成されることを意味します。「共生」については、インタラクションが基盤となって、働く人々が幸せとなることです。誰も置き去りにしないというSDGsの理念であり、浄土宗にも「誰もがひとりのこらず救われる」とあります。近年、「サーバントリーダーシップ」という考えがありますが、人と人をつなげていき、誰も置き去りにしていかないということを意味しています。「サーバント」は召使い

という意味ではなく、トップリーダーとしてそのような精神をもって部下と接することで、チームを動かすことが求められます。近年、心理的安全性の確保が社会の課題となっています。安心して物を言える、安心して話し合うことにより、組織的に動きができる、このようなことが、「共生」を意味します。「中道」については、お釈迦様の中道と異なる解釈ですが、対話によって課題を解決することにより、独りよがりから脱却することができます。そして、コーチングによって円滑な行動をしていくこと等です。これらにより、極端に偏らない組織、持続可能な組織となります。教職員版の「4つの人となる」として、しっかりとした理念に基づき、心の目標が生まれていく。理念や目標を構築することにより、働き方を構築する。これらが必要となってくると考えます。

令和4年度は、社会とのインタラクションとして、「日経地方創生フォーラム」に学生が登壇し、学生プレゼンとして研究結果・教育成果を発表しました。外部有識者の方々も招聘し、学生の発表に対し、質問やアドバイスをいただきました。また、第Ⅲ類科目アントレプレナーシップ育成教育の説明や本事業の趣旨や内容についての動画を作成して公開しました。本学の実践内容を社会に発信するというミッションのもとに取り組みました。本学学生に対しても社会に対してもわかりやすく説明しています。文部科学省やマスメディアからの取材や意見聴取もあり、本事業に関する情報公開も積極的に推進してきました。

さらに、巣鴨を舞台とした本学の地域連携活動でもあるアントレプレナーシップ育成教育については、各種の新聞紙にも取り組みが掲載されました。その取り組み等のために、巣鴨地域において、教室をいくつか増設しており、「すがもオールキャンパス構想」が実現しつつあります。令和5年度からのアントレプレナーシップ育成教育の3つのコースを修了した本学学生が、社会や全国各地で活躍することを期待しています。



大正大学